

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(28)

国分上野原テクノパーク第3工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(Ⅱ)

# 上野原遺跡

(第10地点)

所在地 鹿児島県国分市大字上之段字水ヶ迫ほか

第4分冊

縄文早期土器編1(早期中葉編)



2001年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

## 序 文

本報告書は、国分上野原テクノパーク造成工事に先立って、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施しました上野原遺跡第10地点における埋蔵文化財発掘調査の記録です。

近年、鹿児島県を含む南九州では、旧石器時代や縄文時代草創期をはじめ縄文時代早期の遺跡が相次いで発見されています。

特に、その内容の特異性は全国から注目され、昨年10月に開催された日本考古学協会2000年度鹿児島大会においても、当該期の様相についてのシンポジウムがあり、上野原遺跡の成果に関心が集まりました。

さて上野原遺跡第10地点の調査につきましては、昨年度に縄文時代前期までの遺構・遺物と縄文時代早期の遺構について報告書を刊行したところですが、今年度は「遺物編」として縄文時代早期の遺物について刊行をすることになりました。

上野原遺跡第10地点においては約15万点の遺物が出土しましたが、これらの遺物は南九州において、約7,500年前の縄文早期後葉の時期に高度な文化が花開いていたことを裏付けるものとして高く評価されました。そのうち 767点については、平成10年6月30日に重要文化財（考古資料）として指定を受けております。

本報告書が今後、埋蔵文化財保護と学術研究のために広く活用されることを願っております。

最後に、発刊にあたり御協力をいただきました関係各位の皆様をはじめ、発掘調査に参加されました地元の皆様方に対して、感謝申し上げます。

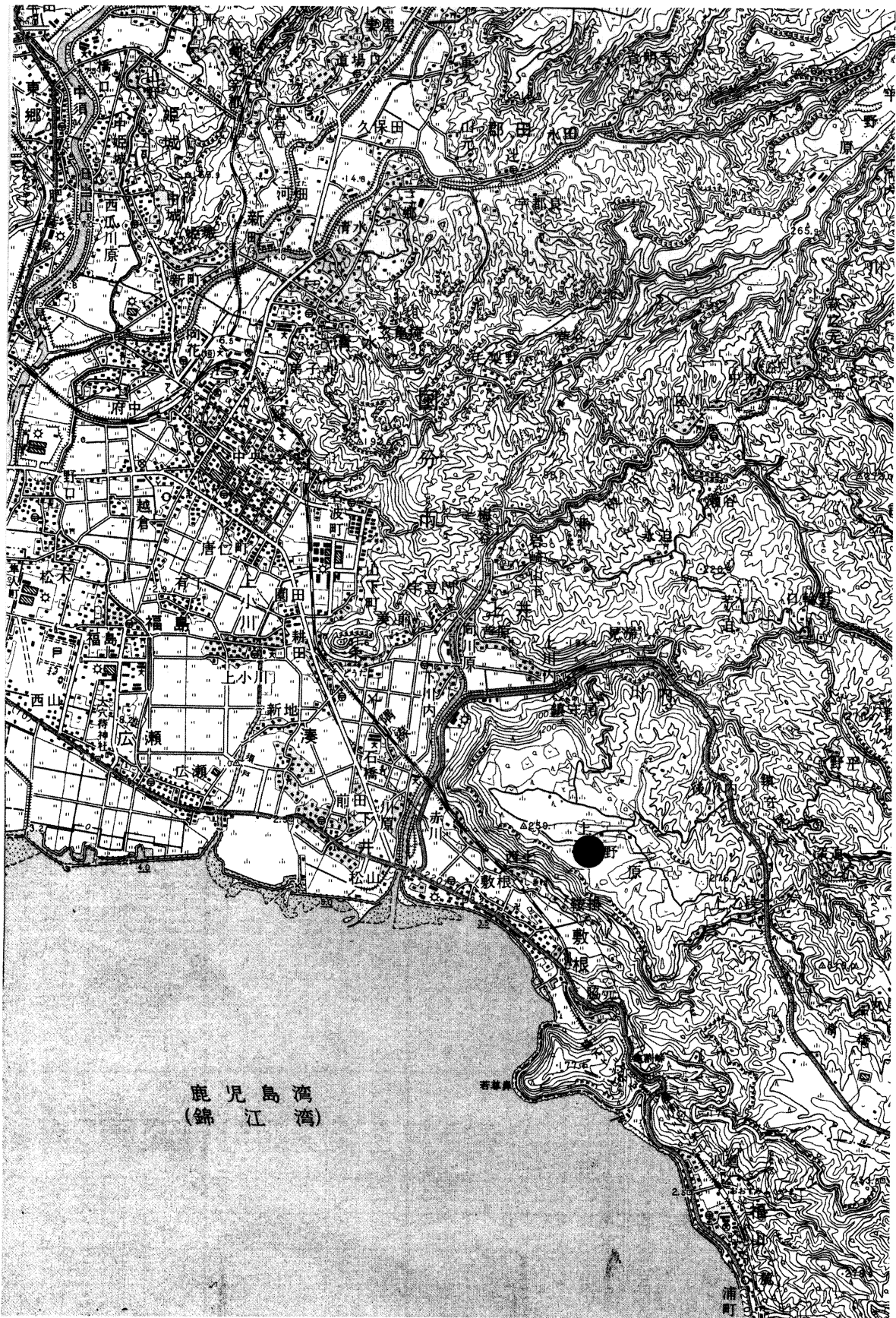
平成13年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 井 上 明 文

## 報告書妙録

ふりがな	うえのはらいせき							
書名	上野原遺跡							
副書名	国分上野原テクノパーク第3工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	第2集							
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	28							
編著者名	中村耕治・井ノ上秀文・富田逸郎・八木澤一郎							
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒899-5652 鹿児島県始良郡始良町平松6252番地 TEL0995-65-8787							
発行年月日	2001年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うえのはらいせき 上野原遺跡 (第3工区)	かごしまけんこくぶし 鹿児島県国分市 おおあぎうえのだんあぎみずがきこ 大字上之段字水ヶ迫 他	462128	10-76	31度 42分 20秒	130度 47分 30秒	19940624 ) 19950328	90,000㎡	国分市上野原 テクノパーク 第3工区造成 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
うえのはらいせき 上野原遺跡 (第3工区)		縄文時代早期 縄文時代前期 縄文時代後期 弥生時代中期 古墳時代 中世 近代	縄文早期土器埋納土坑 縄文早期石斧埋納遺構 縄文早期磨石集積遺構 縄文後期陥し穴 縄文後期掘り込み 弥生中期竪穴住居跡 古墳時代竪穴住居跡 中世掘立柱建物跡 近代探照灯	12基 6基 3基 79基 369基 1基 1基 8棟 2基	平椀式土器 (深鉢形土器・壺 形土器) 土偶・耳飾り・土 製品・石製品・石 斧・石鏃・石皿 塞ノ神式土器 山ノ口式土器 成川式土器 青磁			



遺跡位置図 (50,000分の1)

## 例 言

- 1 この報告書は、国分上野原テクノパーク第3工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書のうちの第2集である。
- 2 発掘調査は、鹿児島県開発公社（現 鹿児島県地域振興公社）の委託を受けて、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 上野原テクノパーク第3工区造成工事に伴う発掘調査の調査報告書刊行においては、資料数が多いため年度を分けて刊行することとし、平成11年度に近代から縄文時代前期までの遺物・遺構、および縄文時代早期の遺構については、『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(27) 国分上野原テクノパーク第3工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(I) 上野原遺跡（第10地点）』として報告を行った。本報告書は、縄文時代早期の「遺物編」で、土器・土製品および石器・石製品について報告を行う。
- 4 発掘調査における測量・実測・写真撮影は平成3・4・5・6年度の調査担当者が分担して行った。
- 5 本書掲載の測量・実測図の製図、出土遺物の実測および製図は、担当者が分担して行った。なお、執筆責任者名は『国分上野原テクノパーク第3工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 上野原遺跡（第10地点）』の各分冊構成欄に掲載した。
- 6 出土遺物の写真撮影およびプリント等は、牛嶋茂氏（奈良国立文化財研究所）の指導を得て、鶴田静彦、横手浩二郎、福永修一（鹿児島県立埋蔵文化財センター）が行った。
- 7 遺物番号は本文および挿図・図版の番号と一致する。
- 8 本書に用いたレベル数値は、全て海拔絶対高である。
- 9 本書の編集は、主に中村耕治、富田逸郎、八木澤一郎が行った。
- 10 平成3年度から平成8年度まで、本発掘調査現場及び整理作業に携わった方々の名を以下に記し、感謝申し上げます。

【発掘作業】

赤塚政彦, 阿多石幸雄, 阿多石ヨリ子, 有園義治, 有馬スミエ, 有村章, 有村アツ子,  
有村サチ, 有村純彦, 有村ツヤ, 有村テル, 有村文子, 有村ミチ, 飯山カスミ, 碓山スミ,  
碓山ツル, 池田包弘, 池田ノリ子, 池田ヒサ子, 池田洋子, 池田義光, 石野ヨシ子,  
磯脇ハルエ, 揖宿藤郎, 祝園綱, 岩切頭三, 岩崎幸夫, 岩本淑江, 潤 親義, 大西利武,  
大庭ノリ子, 大庭春代, 大東嘉利, 大人トシ子, 岡留紀佐子, 岡留秀男, 小原良治,  
勝山敏子, 樺元實, 上村叶, 神村久美子, 唐鎌虎男, 川越恵子, 川越勉, 川畑エツ子,  
神崎スミ, 神崎タミ, 神崎直秋, 神田昌子, 魏希榮, 清山薫, 楠元ミチ子, 久保チヨ,  
木場ミエ, 木場實, 是枝逸男, 是枝キミ子, 坂口シズエ, 阪本一志, 猿渡ヒロ, 下大迫政雄,  
下深迫豊, 笑喜ミチ子, 末永タミエ, 末満政身, 末満レイ子, 銭瓶登美子, 造田マサ子,  
園田袈裟八, 園田ミフ子, 高野義徳, 田上益夫, 宅間美穂子, 田中章, 谷村志乃恵,  
多持ミエ, 反田千代子, 寺園ヒサ子, 徳田照子, 徳満ミチエ, 長迫ツナ, 長迫フミ子,  
永里ツギエ, 永里ツル子, 中深迫スミエ, 野崎ミエ, 野間口實男, 野村秀雄, 橋口イトエ,  
橋口京子, 橋元みどり, 濱田エミ子, 濱田一則, 浜田一美, 濱田竹彦, 東芦谷恵美子,  
東恵子, 東中園虎雄, 東中園ヒサエ, 久永直美, 平川廣安, 福重登, 福重育子, 福德トシ,  
福元セツ子, 藤田静雄, 藤田義雄, 藤元早苗, 藤山国弘, 藤山フジエ, 藤山ミネ, 藤山義盛,  
朴木辰二, 朴木トシ子, 朴木虎雄, 古川正文, 堀切萩子, 堀切ミチ子, 堀切ユキエ,  
堀切リツ子, 堀ノ内東湖, 堀ノ内芳子, 前田ツマ, 前田止, 前平達夫, 牧之瀬喜内,  
牧元和子, 増田アキ子, 松枝貞子, 松崎涼子, 松元瑞枝, 松元喜憲, 真辺美義, 満田千枝子,  
湊トキ, 南美千代, 宮永シヅ子, 宮永勝, 宮原親盛, 村山重雄, 杳田智明, 本川イマ,  
山内和子, 山口ヒサ子, 山口ミヨ, 山下キクエ, 山下シヅ子, 山下俊美, 山下博, 山下義澄,  
山中スワ, 山之上ミネ, 山元クサ子, 四元清敏, 四元誠, 四元康秋, 六反博久, 和田まり子

【整理作業】

有村明子, 池田成子, 石川奈緒美, 伊集院香代子, 岩城カヨ子, 白井綾子, 岡部安代,  
槐島孝子, 熊川節子, 川田美津子, 川野高子, 川畑明子, 川畑裕美子, 木田安枝, 小山君子,  
齊藤千鶴, 梶原香代子, 四丸久美子, 清水由理美, 下畠節子, 志和池和恵, 高倉晴美,  
竹下マリ子, 竹ノ内礼子, 月野ひとみ, 徳永郁代, 徳永美喜子, 富満由美, 永田よしえ,  
中名主和子, 西清子, 沼時子, 野入満喜子, 野口成美, 橋口まゆみ, 早川孝子, 春山まり子,  
堀口由美子, 本多直子, 前田秀子, 前原順子, 松元雅子, 宮岡雪子, 森岡幸子, 山元順子,  
行船順子, 脇田美津江

『国分上野原テクノパーク第3工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書上野原遺跡(第10地点)』の各分冊構成

口 絵

序 文

例 言

第I章 調査の経過

第1節 調査に至るまでの経過

第2節 調査の組織

第3節 調査の経過

第II章 遺跡の位置

第1節 遺跡の位置

第2節 周辺遺跡

第III章 層位

第IV章 発掘調査

第1節 調査の概要

第2節 近代の調査

第3節 歴史時代の調査

第4節 古墳時代の調査

第5節 弥生時代の調査

第6節 縄文時代後期の調査

第7節 縄文時代前期の調査

(以上, 第1分冊)

第8節 縄文時代早期の調査

1. 遺構

付 篇 壺形土器内の土の分析

(以上, 第2分冊)

図版編

(以上, 第3分冊)

序文

例言

2. 遺物

(1) 土 器

**A. 縄文時代早期中葉の土器**

(以上, 第4分冊一本分冊)

B. 縄文時代早期後葉の土器

(以上, 第5分冊)

B. 縄文時代早期後葉の土器

(2) 土製品

(以上, 第6分冊)

(3) 石 器・石製品

A. 本文・一覧表編

(以上, 第7分冊)

B. 挿図編

(以上, 第8分冊)

図版編1 (モノクロ編)

(以上, 第9分冊)

図版編2 (カラー編)

(以上, 第10分冊)

なお第1・2・3分冊については, 第1集として平成12(2000)年3月に刊行した。今年度, 第4・5・6・7・8・9・10分冊を第2集として平成13(2001)年3月に刊行する。

また, 第4分冊以降の各項の執筆責任者は次のとおりである。

第8節 2. (1) 八木澤一郎

2. (2) 中村耕治

2. (3) 富田逸郎

#### 第4分冊凡例

- 1 本分冊は、縄文時代早期中葉の時期に属する土器を報告した部分である。他の時期に属する遺物については、『各分冊構成』を参照の上、該当する分冊にあたられたい。
- 2 土器については、各型式ごとに「～式土器出土状況全体図」、「～式土器出土状況図」、「～式土器実測図」の3種類の挿図を作成した。また、土器型式内において細別が可能であると判断した場合は、細別型式ごとに3種類の挿図を掲載した。

土器観察表はできうるかぎり「実測図」の下端に掲載するようにした。
- 3 上野原遺跡第10地点の発掘調査は、40m四方のグリッドを設定し、原則としてグリッド単位で行った。また遺物取上では、遺物番号を各グリッドごとに1番から通し番号を付けて取り上げることとした。さらに遺物取上図面は、原則として1/50で作成することとし、調査担当者がそれぞれ分担し作成した。
- 4 本報告書掲載の「～式土器出土状況全体図」は、各グリッドごとに遺物取上図面を50%縮小した図面を元図として、各土器型式ごとに拾い出した図面を下図として作成した。

この下図を10%縮小のうえトレースし、版下とした。それを50%縮小して掲載したので、各図は1/2000の仕上がり図面である。

またこの図で使用した地形測量図は、アカホヤ火山灰直下のVI層上面で作成した図を1mコンターで掲載した図である。
- 5 本報告書掲載の「～式土器出土状況図」は、4で作成した下図を、37%縮小のうえ、原則として6グリッドを1枚の挿図としてトレースし、版下とした。それを50%縮小して掲載した。

またこの図に掲載した土器の番号は、「実測図」の番号と一致する。
- 6 上記の「～式土器出土状況全体図」と「～式土器出土状況図」とに示した土器出土地点を示すドットは、1ドット1点の土器片が出土したことを示したものである。したがって、当該土器型式に属する全ての土器を提示したものである。

7 本報告書掲載の「～式土器実測図」は、土器実測図を67%縮小のうえトレースし、版下とした。それを50%縮小して掲載した。したがって、各図は1/3の仕上がり図面である。

なお報告番号は、各土器型式ごとに1番から通し番号をふった。この番号は該当する「～式土器出土状況図」や土器観察表の報告番号と一致する。

8 本報告書掲載の「土器観察表」は、実測図として資料化した土器片のみを対象とした表であることをお詫びする。

9 さて「土器観察表」中の記号などについては次のとおりである。

1) 胎土中の鉱物欄での記号は、

◎…含有量が特に多いと思われる鉱物。

○…含有量が多いと思われる鉱物。

△…含まれはするものの含有量が少ないと思われる鉱物。

を示しているが、「多い」「少ない」は全くの主観に基づく判断である。

2) 器面調整については概ね最終調整に近い段階の調整を示す。内容は次のとおりである。

「ハケ」…

木製と思われる工具によるハケ目調整を行っていることを示す。方向が判明するときには方向を明示。多方向の調整が観察できるときには単に「ハケ」と記載した。

「ナデ」…

指および工具によるナデ調整を行っていることを示す。「丁寧なナデ」はほとんどそれ以前の調整が観察できないほど丁寧にナデ調整を行っているが、「ミガキ」調整ほど光沢ができるまで調整を続けていないことを示している。

3) 「色調」については全くの主観である。



## 第4分冊目次

序文	
報告書抄録	
例言	
第IV章 発掘調査	
第8節 縄文時代早期の調査	
2. 遺物	14
(1) 土器	14
1) 縄文時代早期中葉	14
① 第1群 石坂式土器	15
② 第2群 下剥峯式土器	21
③ 第3群 桑ノ丸式土器	61
④ 第4群 円筒形条痕文土器	75
⑤ 第5群 微細山形押型文土器	84
⑥ 第6群 山形押型文土器	89
⑦ 第7群 楕円押型文土器	98
⑧ 第8群 条線押型文土器	112
⑨ 第9群 変形撚糸文土器	112
⑩ 第10群 手向山式土器	126
⑪ 第11群 手向山式類似土器	142
⑫ 小結	143

## 第4分冊挿図目次

第1図 上野原台地周辺地形図及び上野原テクノパーク旧地形・テクノパーク内遺跡分布図	11
第2図 霧島・桜島地形断面図	12
第3図 上野原遺跡第10地点の土層	13
第4図 石坂式土器出土状況全体図	16
第5図 石坂式土器出土状況図1(Q・R・S-9・10区)	17
第6図 石坂式土器出土状況図2(Q・R・S-11・12区)	18
第7図 石坂式土器出土状況図3(Q・R・S-13・14区)	19
第8図 石坂式土器実測図	20
第9図 下剥峯式土器出土状況全体図	23
第10図 下剥峯式土器1類出土状況全体図	24
第11図 下剥峯式土器1類出土状況図1(O・P・Q-7・8区)	25
第12図 下剥峯式土器1類出土状況図2(R・S-7・8区)	26
第13図 下剥峯式土器1類出土状況図3(O・P・Q-9・10区)	27
第14図 下剥峯式土器1類出土状況図4(R・S-9・10区)	28
第15図 下剥峯式土器1類出土状況図5(O・P・Q-11・12区)	29
第16図 下剥峯式土器1類出土状況図6(R・S-11・12区)	30
第17図 下剥峯式土器1類出土状況図7(P・Q・R-13・14区)	31
第18図 下剥峯式土器1類出土状況図8(O・P・Q-15・16区)	32
第19図 下剥峯式土器1類実測図	33
第20図 下剥峯式土器2類出土状況全体図	35
第21図 下剥峯式土器2類出土状況図1(O・P・Q-7・8区)	36
第22図 下剥峯式土器2類出土状況図2(R・S-7・8区)	37
第23図 下剥峯式土器2類出土状況図3(P・Q-9・10区)	38
第24図 下剥峯式土器2類出土状況図4(R・S-9・10区)	39
第25図 下剥峯式土器2類出土状況図5(O・P・Q-11・12区)	40
第26図 下剥峯式土器2類出土状況図6(R・S-11・12区)	41
第27図 下剥峯式土器2類出土状況図7(P・Q・R-13・14区)	42
第28図 下剥峯式土器2類出土状況図8(O・P・Q-15・16区)	43
第29図 下剥峯式土器2類実測図(1)	44
第30図 下剥峯式土器2類実測図(2)	45
第31図 下剥峯式土器2類実測図(3)	46
第32図 下剥峯式土器2類実測図(4)	47
第33図 下剥峯式土器3類出土状況全体図	49
第34図 下剥峯式土器3類出土状況図1(O・P・Q-11・12区)	50
第35図 下剥峯式土器3類出土状況図2(R・S-11・12区)	51
第36図 下剥峯式土器3類出土状況図3(P・Q・R-13・14区)	52
第37図 下剥峯式土器3類出土状況図4(O・P・Q-15・16区)	53
第38図 下剥峯式土器3類実測図(1)	54
第39図 下剥峯式土器3類実測図(2)	55

第40図	下剥峯式土器4類出土状況全体図	57	第82図	楕円押型文土器出土状況図5 (Q・R・S-11・12区)	104
第41図	下剥峯式土器4類出土状況図1 (P・Q-11・12区)	58	第83図	楕円押型文土器出土状況図6 (P・Q・R-13・14区)	105
第42図	下剥峯式土器4類出土状況図2 (P・Q・R-13・14区)	59	第84図	楕円押型文土器出土状況図7 (O・P-15・16区)	106
第43図	下剥峯式土器4類実測図	60	第85図	楕円押型文土器実測図(1)	107
第44図	桑ノ丸式土器出土状況全体図	62	第86図	楕円押型文土器実測図(2)	108
第45図	桑ノ丸式土器出土状況図1 (Q・R・S-5・6区)	63	第87図	楕円押型文土器実測図(3)	109
第46図	桑ノ丸式土器出土状況図2 (Q・R・S-7・8区)	64	第88図	楕円押型文土器実測図(4)	110
第47図	桑ノ丸式土器出土状況図3 (Q・R・S-9・10区)	65	第89図	条線押型文土器出土状況全体図	113
第48図	桑ノ丸式土器出土状況図4 (N・O・P-11・12区)	66	第90図	条線押型文土器出土状況1 (Q・R・S-8・9区)	114
第49図	桑ノ丸式土器出土状況図5 (Q・R・S-11・12区)	67	第91図	条線押型文土器出土状況2 (Q・R・S-10・11区)	115
第50図	桑ノ丸式土器出土状況図6 (N・O・P-13・14区)	68	第92図	条線押型文土器出土状況3 (O・P・Q-11・12区)	116
第51図	桑ノ丸式土器出土状況図7 (Q・R・S-13・14区)	69	第93図	条線押型文土器出土状況4 (P・Q・R-13・14区)	117
第52図	桑ノ丸式土器出土状況図8 (N・O・P-15・16区)	70	第94図	条線押型文土器実測図	118
第53図	桑ノ丸式土器実測図(1)	71	第95図	変形撚糸文土器出土状況全体図	119
第54図	桑ノ丸式土器実測図(2)	72	第96図	変形撚糸文土器出土状況1 (Q・R・S-8・9区)	120
第55図	桑ノ丸式土器実測図(3)	73	第97図	変形撚糸文土器出土状況2 (P・Q・R-10・11区)	121
第56図	桑ノ丸式土器実測図(4)	74	第98図	変形撚糸文土器出土状況3 (P・Q・R-12・13区)	122
第57図	円筒形条痕文土器出土状況全体図	76	第99図	変形撚糸文土器出土状況4 (P・Q・R-14・15区)	123
第58図	円筒形条痕文土器出土状況図1 (O・P-8・9区)	77	第100図	変形撚糸文土器出土状況5 (P-16区)	124
第59図	円筒形条痕文土器出土状況図2 (Q・R・S-8・9区)	78	第101図	変形撚糸文土器実測図	125
第60図	円筒形条痕文土器出土状況図3 (Q・R・S-11・12区)	79	第102図	手向山式土器出土状況全体図	127
第61図	円筒形条痕文土器出土状況図4 (P・Q・R-13・14区)	80	第103図	手向山式土器出土状況1 (Q・R・S-5・6区)	128
第62図	円筒形条痕文土器実測図(1)	81	第104図	手向山式土器出土状況2 (P・Q-9・10区)	129
第63図	円筒形条痕文土器実測図(2)	82	第105図	手向山式土器出土状況3 (R・S-9・10区)	130
第64図	円筒形条痕文土器実測図(3)	83	第106図	手向山式土器出土状況4 (P・Q・R-11・12区)	131
第65図	微細山形押型文土器出土状況全体図	85	第107図	手向山式土器出土状況5 (P・Q・R-13・14区)	132
第66図	微細山形押型文土器出土状況図1 (P・Q・R-12・13区)	86	第108図	手向山式土器出土状況6 (N・O・P-14・15区)	133
第67図	微細山形押型文土器出土状況図2 (P・Q・R-14・15区)	87	第109図	手向山式土器出土状況7 (O・P・Q-15・16区)	134
第68図	微細山形押型文土器実測図	88	第110図	手向山式土器実測図(1)	135
第69図	山形押型文土器出土状況全体図	90	第111図	手向山式土器実測図(2)	136
第70図	山形押型文土器出土状況図1 (Q・R・S-5・6区)	91	第112図	手向山式土器実測図(3)	137
第71図	山形押型文土器出土状況図2 (Q・R・S-8・9区)	92	第113図	手向山式類似土器出土状況全体図	139
第72図	山形押型文土器出土状況図3 (Q・R・S-10・11区)	93	第114図	手向山式類似土器出土状況図1 (Q・R-12・13区)	140
第73図	山形押型文土器出土状況図4 (Q・R・S-12・13区)	94	第115図	手向山式類似土器出土状況図2 (P・Q・R-14・15区)	141
第74図	山形押型文土器実測図(1)	95	第116図	手向山式類似土器実測図	142
第75図	山形押型文土器実測図(2)	96	第117図	上野原遺跡第10地点縄文早期中葉土器編年案(1)	146
第76図	山形押型文土器実測図(3)	97	第118図	上野原遺跡第10地点縄文早期中葉土器編年案(2)	147
第77図	楕円押型文土器出土状況全体図	99			
第78図	楕円押型文土器出土状況図1 (R・S-5・6区)	100			
第79図	楕円押型文土器出土状況図2 (R・S-7・8区)	101			
第80図	楕円押型文土器出土状況図3 (Q・R・S-9・10区)	102			
第81図	楕円押型文土器出土状況図4 (O・P-11・12区)	103			

### 上野原遺跡周辺の環境と土層

上野原遺跡の立地する上野原台地は、始良カルデラの外輪山に相当する。外輪山は第2図のように想定されるが、天降川・別府川・検校川等によって開析されている沖積平野部分は定かでない。カルデラから霧島山麓へかけては、入戸火砕流で形成されている、ゆるやかな傾斜の台地になっている。その台地全体が天降川や新川、検校川などで開析され、樹枝状の谷が複雑に入り組む。これらの様相は、第2図の霧島・桜島地形断面図に示すとおりである。上野原台地の標高は海側の最高所が263m、霧島に面する所でおよそ240mであり、北側に向かってゆるやかな傾斜をもっている。台地の基盤は安山岩の岩盤であり、海側でカルデラ壁の断崖を形成している。その直上には亀割角礫層が堆積し、さらに始良カルデラ噴出物やサツマ火山灰などの桜島噴出物が堆積して台地を形成している。

台地の東側はカルデラ壁頂部が続くが、それ以外の三方は断崖もしくは急峻な谷になっており、周辺と隔絶している。台地東側のカルデラ壁頂部には海側への浅い開析谷があり、その開口部、断崖近くには湧水がみられる。また、台地の北側にも湧水があり、台地上ではあるものの、現在も一定の水量は確保されるようである。

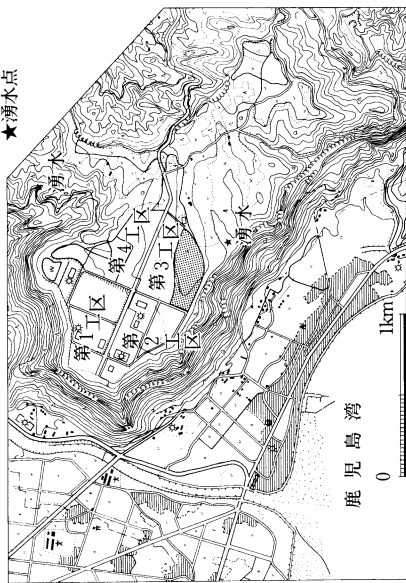
この始良カルデラ周辺には南九州の主要な縄文遺跡が数多い。中でも、上野原台地と検校川を挟んで向き合う位置にある平椀貝塚は、本遺跡第10地点の主体的な土器の一つである平椀式土器の標識遺跡である。また、カルデラ南西部外側を流れる稲荷川流域に立地する加栗山遺跡は、本遺跡第2地点と同じく早期前葉前平式土器様式期の集落が検出された。同じ立地条件の加治屋園遺跡では草創期の微隆起突帯文土器が出土した。別府川の沖積地には、縄文後期中葉から後葉にかけての南九州のほとんどすべての型式の土器が膨大な量出土した干迫遺跡がある。検校川の上流に位置する城ヶ尾遺跡では、埋納された塞ノ神式土器様式の壺が3個体出土している。この遺跡は、縄文時代早期後葉の埋納された壺形土器という共通項もあるため本遺跡との関連が注目される。

上野原台地内の遺跡分布を概観しておきたい。第

1工区と第2工区のほとんどの区域については不明であるが、第1工区内の第1地点で弥生時代中期後葉の集落が検出されている。また第1地点は、ほぼ完全に復元された塞ノ神式土器の深鉢形土器1点と石鏃1点だけからなる特異なありようを示す早期後葉の遺跡でもある。第3工区と第4工区は全域が調査されている。旧石器時代から縄文時代草創期の包含層は1ヶ所も確認されていない。縄文時代早期前葉に第2地点で前平式土器様式期の集落が出現し、同中葉になると、第2・3・4・10地点と広がりを見せ、同後葉になると、第7・9・10地点に分布を変える。第7地点の出土状況は第1地点とよく似ているようであり、この二者と第9・10地点との関連は今後究明されねばならない課題となるであろう。なお、第9地点は、工業用水道タンクの建設予定地であったが、確認調査の結果遺構・遺物の出土が多量に上ることが予想されたため、全面調査を実施せず、工業用水道タンクは現在地に建設された。縄文時代前期になると、第10地点の西側にごくわずかに分布するだけで、早期後葉との較差が大きい。同中期になると台地上からほとんど姿を消し、同後期になって陥し穴列が出現し、ごくわずかの土器が残される。同晩期になって再びにぎやかになり、第4・5地点で遺構・遺物とも多量に出土している。

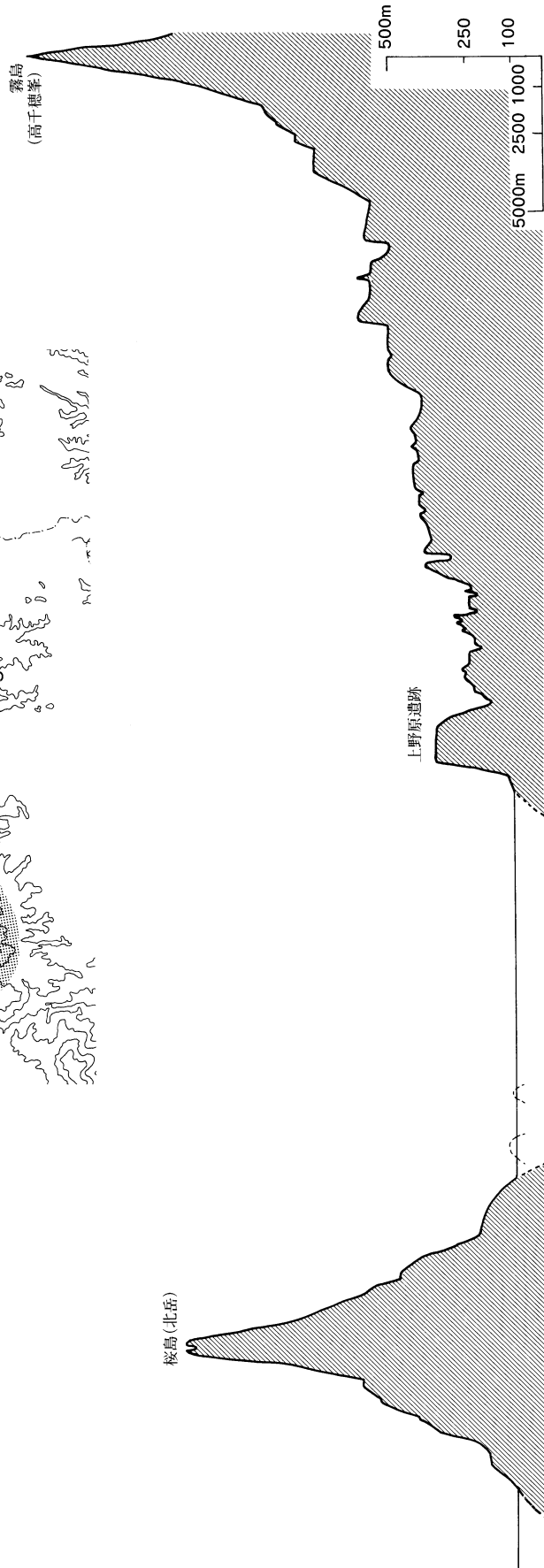
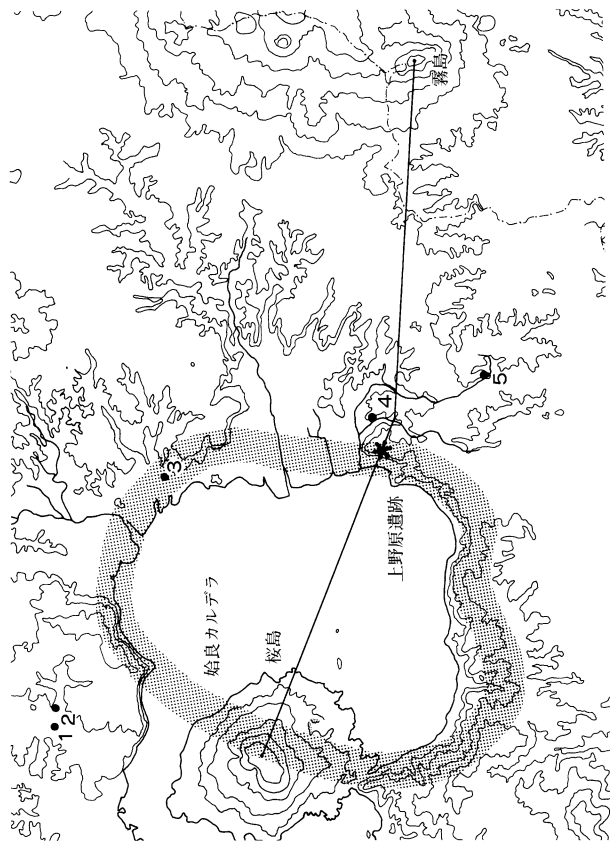
次に、土層について概略述べる。I層は表土。II層黒色土は、中世以降の包含層である。III層は暗茶褐色を呈するII層とIV層の漸移層で、縄文時代晩期から弥生時代の包含層である。IV層は黄褐色土と黄白色の火山灰に二分され、黄褐色土は縄文時代後期の包含層で、陥し穴の掘込み面でもある。V層は上部に縄文前期の遺物を包含するが、下部は無遺物層であるアカホヤ火山灰層である。VI層及びVII層が縄文早期の包含層であり、第10地点の主体となる層である。VI層は白色の軽石を多く含む暗茶褐色土で、VII層は軽石が少なく、黒褐色を呈する。VIII層はサツマ火山灰層で明黄褐色を呈し、第10地点でもブロック状の堆積を見せず、全面に堆積している。IX層は黒褐色ロームであり、本遺跡では遺構・遺物は出土していない。以下、入戸火砕流まで何枚かの桜島パミスを紹介しながらロームが堆積している。

★湧水点

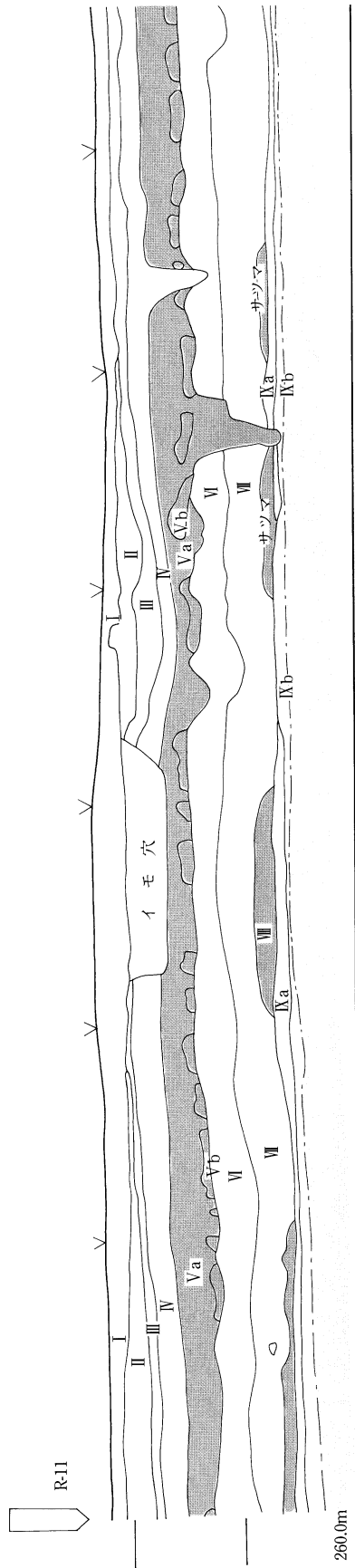


第1図 上野原台地周辺地形図及び上野原テクノパーク旧地形・テクノパーク内遺跡分布図

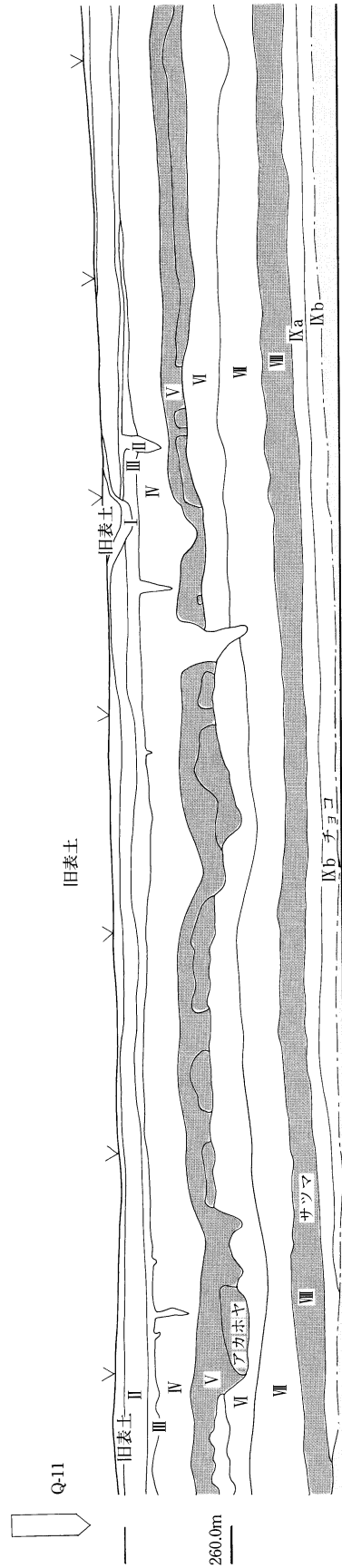
- 1 加栗山遺跡
- 2 加治屋園遺跡
- 3 干迫遺跡
- 4 平桁遺跡
- 5 城ヶ尾遺跡



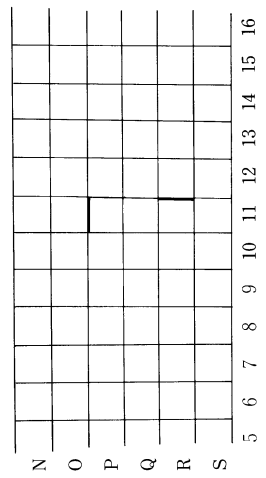
第2図 霧島・桜島地形断面図



R-11区 東壁土層断面図



Q-11区 北壁土層断面図



第3図 上野原遺跡第10地点の土層

## 第IV章 発掘調査

### 第8節 縄文時代早期の調査

VI層およびVII層が遺物包含層であった縄文時代早期の時期の発掘調査は、各グリッドごとの進捗状況に応じて適宜行った。

上野原遺跡第10地点の発掘調査を行った結果は、約15万点にのぼる多量で、しかも多種多様な遺物が出土したこと、多様な遺構が検出されたことであった。これらことは、南九州では縄文時代早期の段階において、すでに全国に先駆けて多彩な縄文文化が開花していたことを示すものとして、発掘調査期間中から注目された。

その成果として、平成10年6月30日には767点の上野原遺跡出土品が重要文化財として指定された（一覽表参照）。

なお、第2分冊では縄文時代早期の時期に属する遺構として検出した、集石遺構・石核母岩集積遺構・磨石集積遺構・石斧埋納遺構・土器埋納遺構についてすでに報告を行った。

そこで、第4・5分冊と第6分冊前半部分とは出土した土器について、第6分冊後半部分では土製品について、第7・8分冊では石器・石製品についての報告を行うこととする。

したがって、遺構検出状況などに関わる部分について必要がある場合は適宜ふれるが、詳細については第2分冊を併せて参照されたい。

### 2. 遺物

上野原遺跡第10地点で、縄文時代早期の時期の包含層であるVI層およびVII層からは、約15万点に達する遺物が出土した。VI層およびVII層から出土したこれらの遺物が属する時期は、南九州の土器編年に照らせば、縄文時代早期中葉の時期に編年されている下剥峯式土器や桑ノ丸式土器などの土器群と、早期後葉の時期に編年されている平椀式土器・塞ノ神式土器などの土器群とが出土している。しかしながら、その出土量の比率は、早期後葉の時期の土器群が出土土器全体の9割以上を占める状況にあった。

以上の状況から上野原遺跡第10地点では、縄文時代早期中葉の時期から早期後葉の時期に人々の生活が行われ、遺跡が形成されたと考えられる。

さて遺物の分類では、壺形土器などを含む土器や耳栓などの土製品、多種多様な石器そして垂飾品などの石製品に分かれることが明らかとなった。

そこで、土器・土製品・石器・石製品の順に順次報告していくこととする。

では、まず土器について報告を行う。

### (1) 土器

先に述べたように上野原遺跡第10地点で出土した土器は、現在示されている南九州の縄文土器編年に照らせば、縄文時代早期中葉の時期に編年されている下剥峯式土器や桑ノ丸式土器などの土器群と、早期後葉の時期に編年されている平椀式土器や塞ノ神式土器などの土器群とに属することが明らかになった。では、まず縄文時代早期中葉に属する土器群から報告を行うことにする。

#### A) 縄文時代早期中葉の土器群

上野原遺跡第10地点で出土した縄文時代早期中葉の時期に属する土器は、下記のように11型式に分類することができた。

- 第1群 石坂式土器
- 第2群 下剥峯式土器
- 第3群 桑ノ丸式土器
- 第4群 円筒形条痕文土器
- 第5群 微細山形押型文土器
- 第6群 山形押型文土器
- 第7群 楕円押型文土器
- 第8群 条線押型文土器
- 第9群 変形燃糸文土器
- 第10群 手向山式土器
- 第11群 手向山式類似土器

以上分類した第1群から第11群までの11型式の土器のうち、第1群（石坂式土器）、第2群（下剥峯式土器）、第3群（桑ノ丸式土器）に属する土器は、縄文早期前葉の時期以降に南九州地域で広く見られる、主に貝殻を使用して施文・調整を行う、貝殻文系円筒形土器様式に属する土器型式である。

一方、第4群（円筒形条痕文土器）は縄文早期前葉以降の時期に中九州西部地域を中心に広く見られる土器型式である。

これに対して、第5群（微細山形押型文土器）、第6群（山形押型文土器）、第7群（楕円押型文土器）、第8群（条線押型文土器）、第9群（変形撚糸文土器）および第10群（手向山式土器）に属する土器は、回転押捺技法で施文を行う土器型式である。

このうち、第5群、第6群、第7群、第8群および第10群に属する土器は、押型文土器様式に属する土器型式である。このうち、第5群と第6群とは同じ山形押型文土器に属する土器であり、本来は同じ分類の下に記述すべき土器ではある。しかし、後述するように土器型式の属性や出土分布などにおいて、おのおの特徴があることから、本報告では類を分けて報告することにする。

さらに第11群（手向山式類似土器）は、手向山式土器とは施文方法は全く異なるものの、手向山式土器の文様構成のイメージが酷似する土器である。したがって本来は、第10群の亜種として取り扱うところである。しかし、第11群は押型文土器とその施文方法において一線を画する土器であり、本報告では類を分けて報告を行うことにする。

それでは、第1群土器から順次、各群の土器について報告を行うことにする。

### ① 第1群 石坂式土器（第4図～第8図）

#### i) 概要

第1群に属すると判断した土器片は、28点出土し、そのうち4個体・全点を資料化した。

第1群は、「口縁部が肥厚して大きく外反し、胴部は円筒形で底部は平底である。文様は、丸みを帯びた口唇部

には斜位の刻み目が連続して巡らされ、口縁部には貝殻刺突文を斜位や羽状に施文する。胴部には貝殻条痕文の綾杉文を縦位に丁寧に施文し、底部側面下端には刻み目を巡らす」と定義されている、河口貞徳氏により設定された土器型式である。鹿児島県川辺郡知覧町石坂上遺跡から出土した土器を標識とする土器である。

1～4の器形的特徴としては、口縁部が直線的でわずかに外反すること、口唇部が外傾する平坦面を作出すること、口縁部の瘤状突起が2箇所に見られること、胴部が直線的で、円筒形を呈すこと、が挙げられる。

さて、第1群の土器胎土中の鉱物は石英・長石・角閃石で構成されていた。クローンモを含有する土器片が1点も出土していないことは、注目できる。また、土器の調整方法は外器面がヨコ方向のハケ目調整の後にナデ調整を行うことが、内器面がナデ調整を行うことが主流である。一方、土器の色調は外器面では茶褐色が、内器面では暗茶褐色から茶褐色が主流であった。

さて、出土状況全体図から第1群は、Q-10区を中心とする標高259mから261mにかけての区域と、R-12・13・14区の標高262mを中心とする区域とに集中して出土していることが指摘できる。

#### ii) 小結

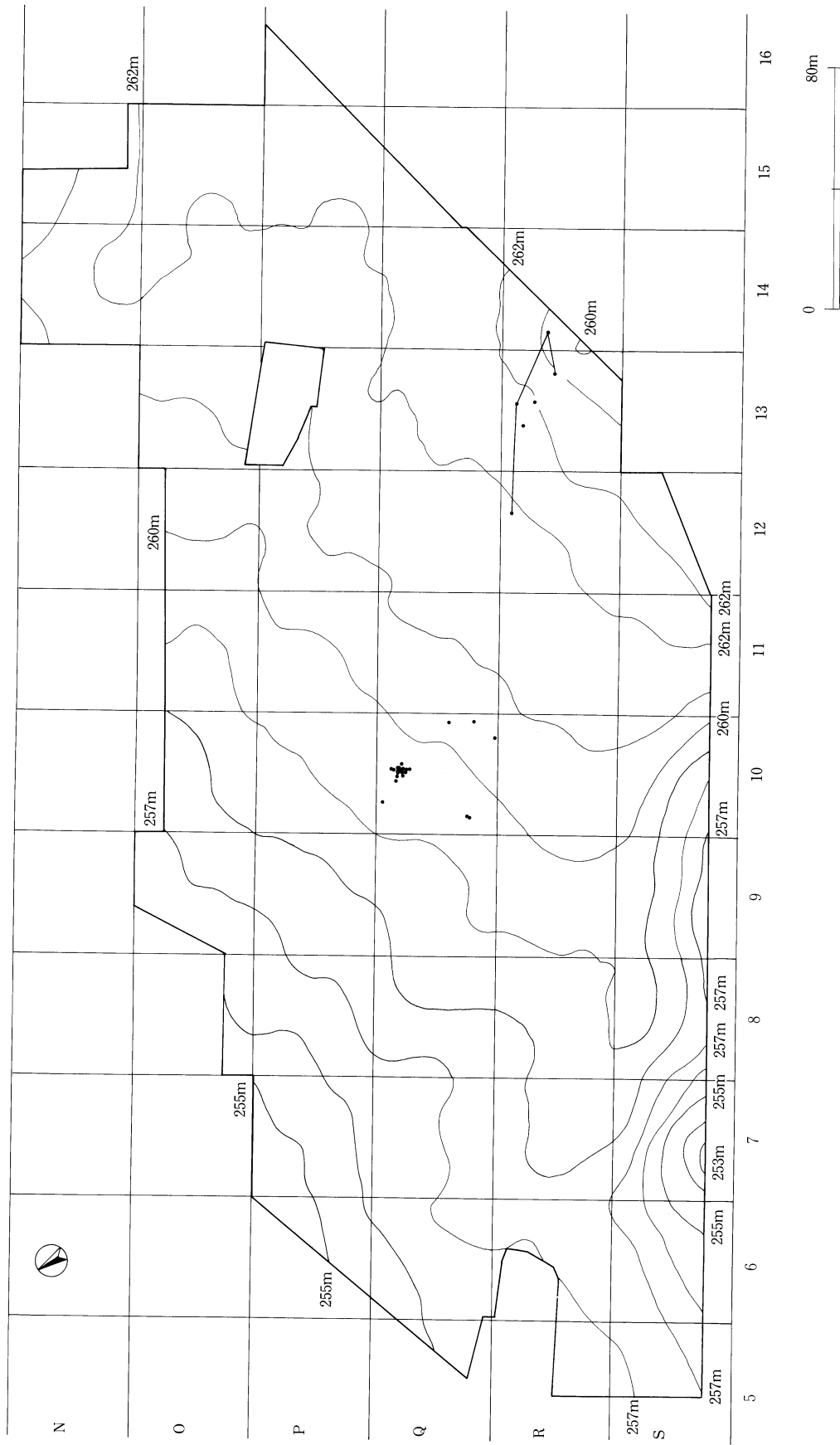
第1群に属する土器の器形的特徴は、口縁部が直線的でわずかに外反し、口縁部には瘤状突起を有することが指摘できる。

この特徴と比較すると、前迫亮一氏の言う「石坂式新段階」に該当する土器として比定できる。

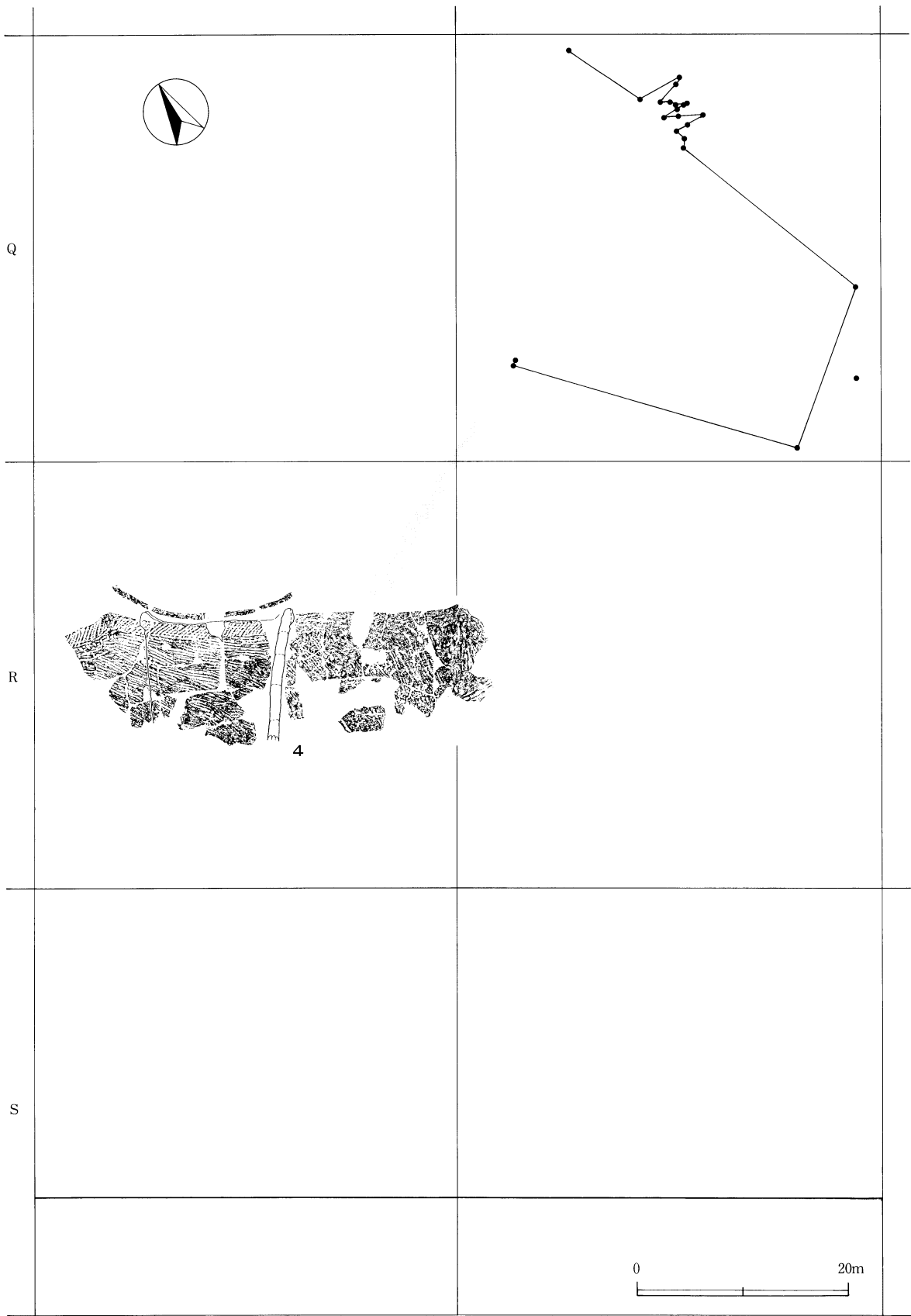
石坂式土器観察表

挿図 番号	報告 番号	出土 区	注記 番号	実測図 番号	層	器種	部位	胎 土				外器面 調整	内器面 調整	色 調		備考
								石英	長石	角閃石	クローンモ			砂礫	外器面	
第 8 図	1		Q-10	795	776	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		ナデ	左上がりハケ→ナデ	茶褐色～暗茶褐色	暗茶褐色～暗黄褐色	
			Q-10	946												
			Q-10	989												
			Q-10	2589												
			Q-10	2778												
			Q-10	2795												
			Q-10	2796												
			Q-10	3002												
			Q-10	3005												
			Q-10	3012												
			Q-10	3017												
			Q-10	3023												
			Q-10	3027												
			Q-10	3033												
			Q-10	3049												
			Q-10	5792												
			Q-10	5793												
Q-10	5969															
Q-10	5974															
Q-10	5975															
Q-10	5999															
2			R-12	464		深鉢	口縁～胴部	○	○	○		ヨコハケ→ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	
			R-13	44												
			R-13	6521												
3			R-14	1331		深鉢	口縁～胴部	○	○	○		ヨコハケ→ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	
			R-13	1001												
4			R-13	1034		深鉢	口縁～胴部	○	○	○		ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色	暗茶褐色	

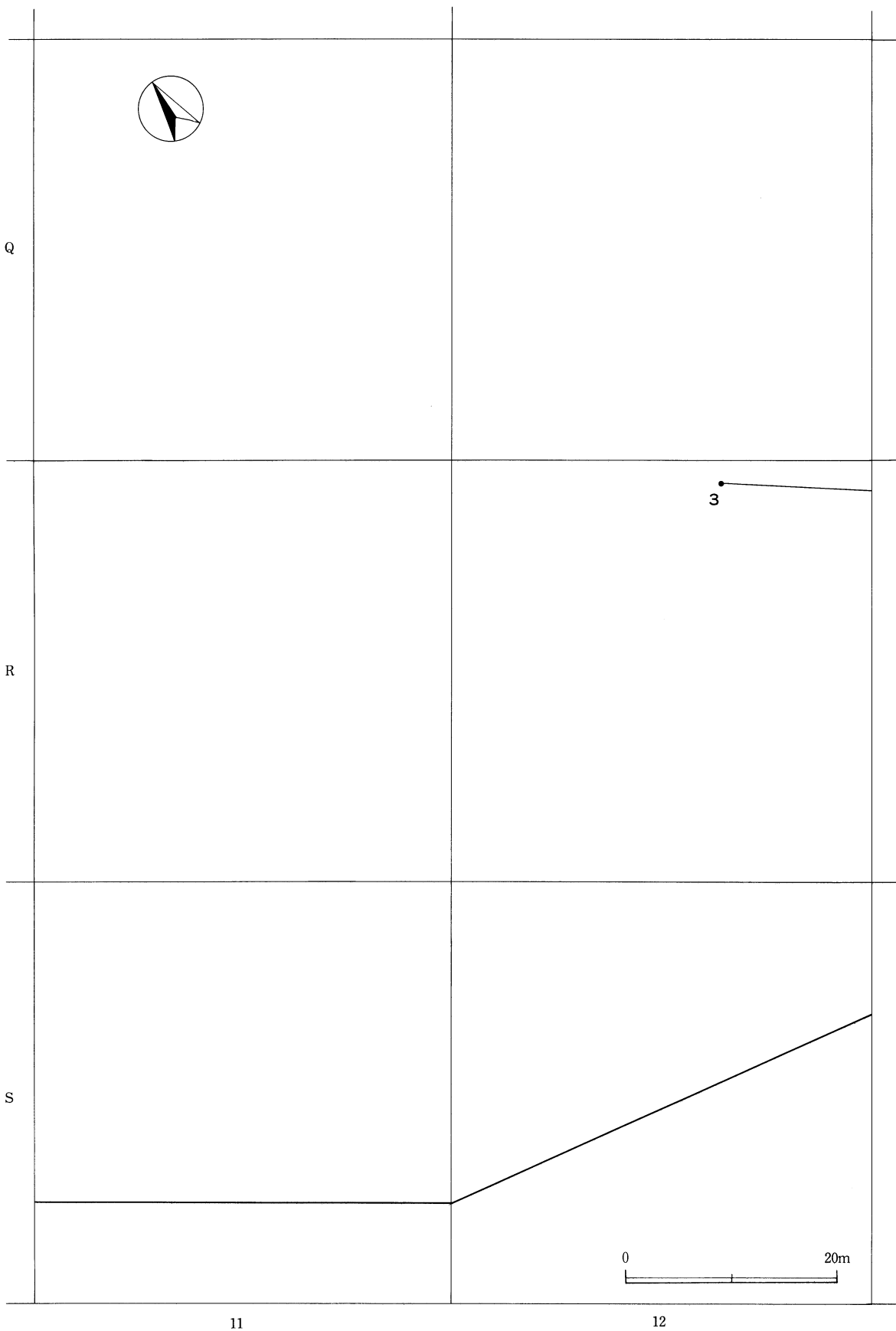




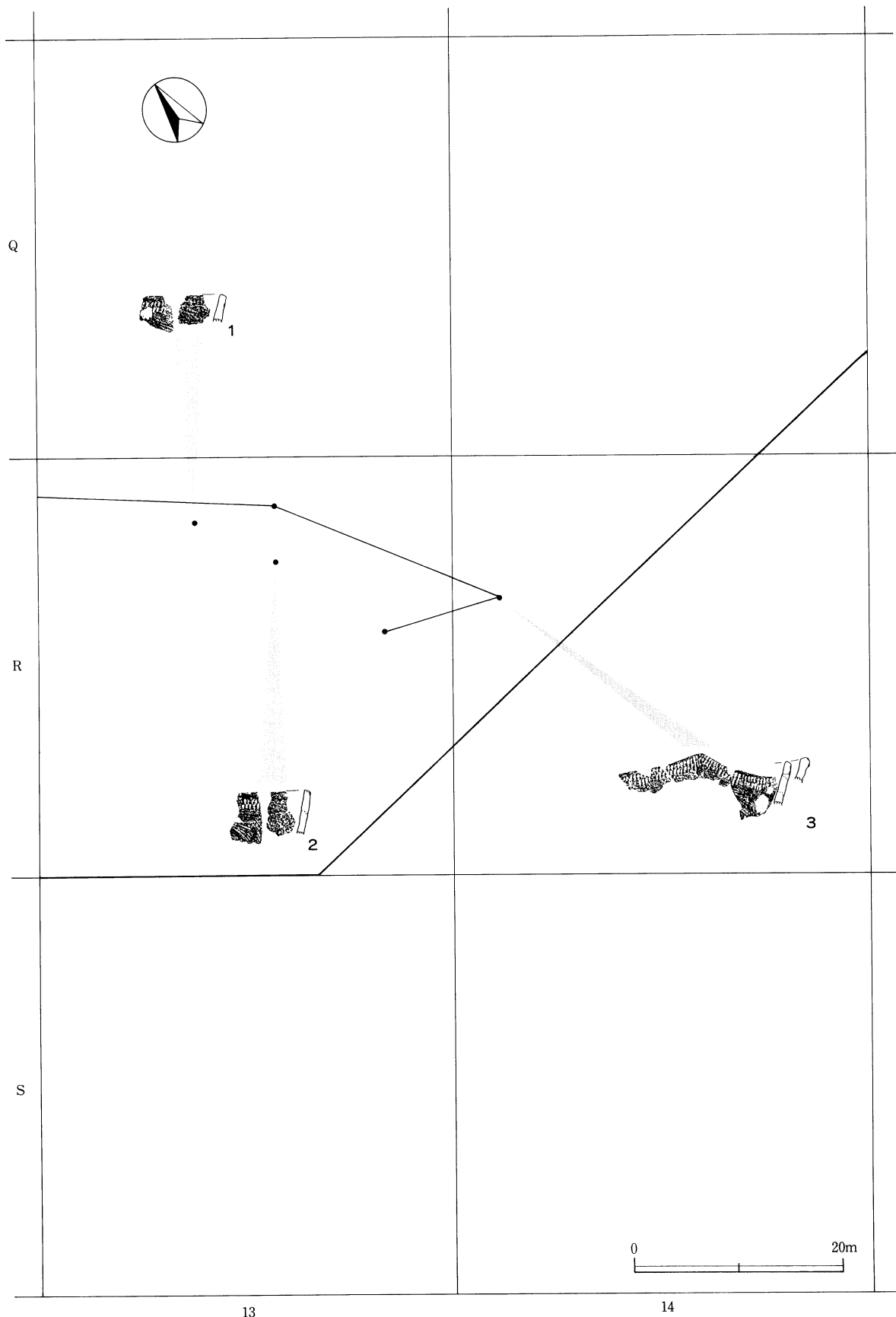
第 4 图 石坂式土器出土状況全体图



9 10  
 第5図 石坂式土器出土状況図1 (Q・R・S-9・10区)



第6図 石坂式土器出土状況図2 (Q・R・S-11・12区)



第7図 石坂式土器出土状況図3(Q・R・S-13・14区)



第 8 图 石坂式土器実測図

## ② 第2群 下剥峯式土器（第9図～第43図）

### i) 概要

第2群に属すると判断した土器片は、780点出土し、そのうち44個体・179点を資料化した。

第2群は、「土器の全体器形が円筒形で、底部は平底を呈し、口縁部は若干内湾して、口唇部は内傾する平坦面を作出する特徴を有する」と定義されている、新東晃一氏により設定された土器である。鹿児島県西之表市現和に所在する下剥峯遺跡から出土したⅡ類土器を標識とする土器である。

本報告では土器の文様構成から4分類した。その特徴を以下に記す。

第2群1類に属する土器の施文的特徴としては、貝殻を用いて連続した刺突文（貝殻刺突文線）を、口縁（上端）部には横位方向に数条巡らし、胴部全面には羽状文あるいは鋸歯文を縦位方向あるいは斜位方向に施文する点を挙げる事ができる。

類例としては、下剥峯遺跡でⅡa類に分類された土器であり、最も下剥峯式土器の基本形に近いと考えられる土器である。

第2群2類に属する土器の施文的特徴としては、口縁（上端）部にヘラ状工具を用いて、縦位方向に垂下する刺突文を横位方向に数条巡らす点と、胴部全面には貝殻を用いて連続した刺突文（貝殻刺突文線）を縦位方向に羽状文に施文する点とを、挙げる事ができる。

類例としては、下剥峯遺跡でⅡb類およびⅡc類に分類された土器である。

第2群3類に属する土器の施文的特徴としては、ヘラ状工具を用いて、横位方向に施す羽状文と横位方向に3～4条巡らした連続押し引き文とを交互に、口縁（上端）部から胴部上半にかけて施文する点を挙げる事ができる。さらに胴部下半全面には、貝殻を用いて連続した刺突文（貝殻刺突文線）で縦位方向に羽状文を施文する部分と、ヘラ状工具を用いて縦位方向に羽状文や連続押し引き文を施文する部分とを、交互に施しながら横位方向に施文している点を挙げる事ができる。

第2群4類に属する土器の施文的特徴としては、先端が尖った工具を用いて口縁（上端）部から胴部

全面にかけて、縦位方向に押し引き文を施したり、横位方向に鋸歯文を施す点を挙げる事ができる。

さて、出土状況全体図から第2群土器は、主に標高262mから260mにかけての、P・Q-12・13・14区やR-13区を中心とする発掘区画東側の区域に集中して出土している（第9図参照）。この区域は、発掘区画の境界近くであるため詳細な地形は不明であるが、第10地点のなかで標高が一番高い262m付近のデラ地から南側への緩やかな傾斜地にあたる地域である。

したがって第2群の出土分布の状況から、これらの土器を使用した人々は東側の発掘区域外にかけて生活の場を設けていたことが想定できる。

さらに重要なことは、第2群が集中して出土した地域は、第4群に分類した円筒形条痕文土器や第5群に分類した微細山形押型文土器、第9群に分類した変形撚糸文土器、第10群に分類した手向山式土器が集中して出土した地域と重なっていることである。その一方で、第3群に分類した桑ノ丸式土器や第6群に分類した山形押型文土器、そして第7群に分類した楕円押型文土器などの土器群が集中して出土した、標高262mから259mにかけての、R・S-9区からS-11区を中心とする発掘区画南側の区域とは分布域を異にしていることが指摘できる。

したがって上野原遺跡第10地点では、縄文時代早期中葉の時期の人々は、主に発掘区画東側の区域に集中して生活した時期と、主に発掘区画南側の区域に集中して生活した時期とに分かれる、と考えられる。

この分布域の問題は、縄文早期中葉の時期に人々が生活の場をいかに変遷させたか、を考える上で重要な視点になると考えられるので、注目していきたい。

それでは、第2群のうちの各類ごとに概観していくことにする。

## ②-1 下剥峯式土器1類(第10図～第19図)

### i) 概要

第2群1類の範疇に属すると判断した土器片は、220点出土し、そのうち11個体・48点を資料化した。

第2群1類は、先述したように、施文の特徴としては、貝殻を用いて連続した刺突文(貝殻刺突文線)を、口縁(上端)部には横位方向に数条巡らし、胴部全面には羽状文あるいは鋸歯文を縦位方向あるいは斜位方向に施文する土器である。

ただし土器の器形的特徴から、さらに2つに分けることが可能である。

まず、第2群1類aに属する土器の器形的特徴は、口縁形態は平口縁を呈し、口縁部は若干内弯して、口唇部は水平な平坦面あるいは内傾する平坦面を作出する。そして、胴部は直線的にすぼまり、底部は平底を呈する、下剥峯式土器の基本的器形を呈する土器である(第19図4～10)。

次に、第2群1類bに属する土器の器形的特徴は、口縁形態は平口縁を呈し、口縁上端部のみが若干内弯する以外は、口縁部はほぼ直行する。特に口縁上端部外面は、ほぼ45°の角度でまるく削られており、見かけ上、口縁部の内弯形態が強調されている(第19図1～3)。下剥峯式土器の基本的器形の定義からは、はずれる土器群である。

さて、第2群1類の土器胎土中の鉱物は石英・長石・角閃石・クrownモで構成されいた。特にクrownモの含有量が多かったのに対して、角閃石の含有量は少なかった。また、土器の調整方法は外器面、内器面共にハケ目調整の後にナデ調整を行うことが主流である。中にはケズリ調整を行う土器も観察できた。さて、土器の色調は外器面、内器面共に暗茶褐色から暗褐色が主流であった。

ところで、出土状況全体図を概観すると第2群1類は、R-13・14区を中心とする区域に集中し、その周囲に散布地域がめぐる状況である。

また特にここで指摘しておきたいことは、傾斜方向である東西方向に200m離れた地点で出土した土器が接合したことや、ほぼ同じ標高地で110m離れた地点で出土した土器が接合したことが確認できたことである(第9図参照)。これらのことが何を意味

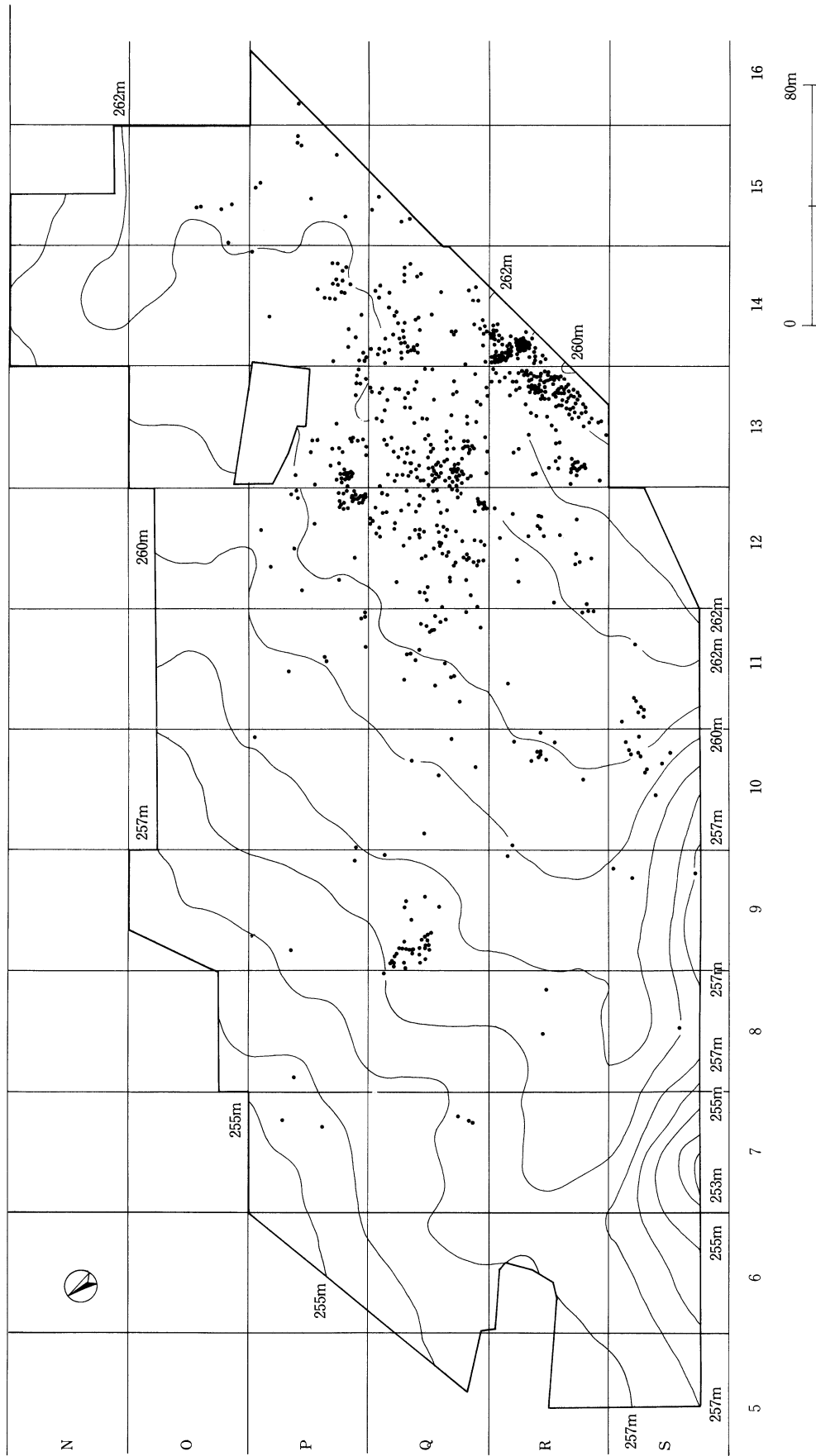
するものなのかは、現在のところ不明である。

### ii) 小結

この第2群1類の特徴から、施文の文様構成はほぼ同じでありながらも、土器の器形において以下の2種類に分けることができた。

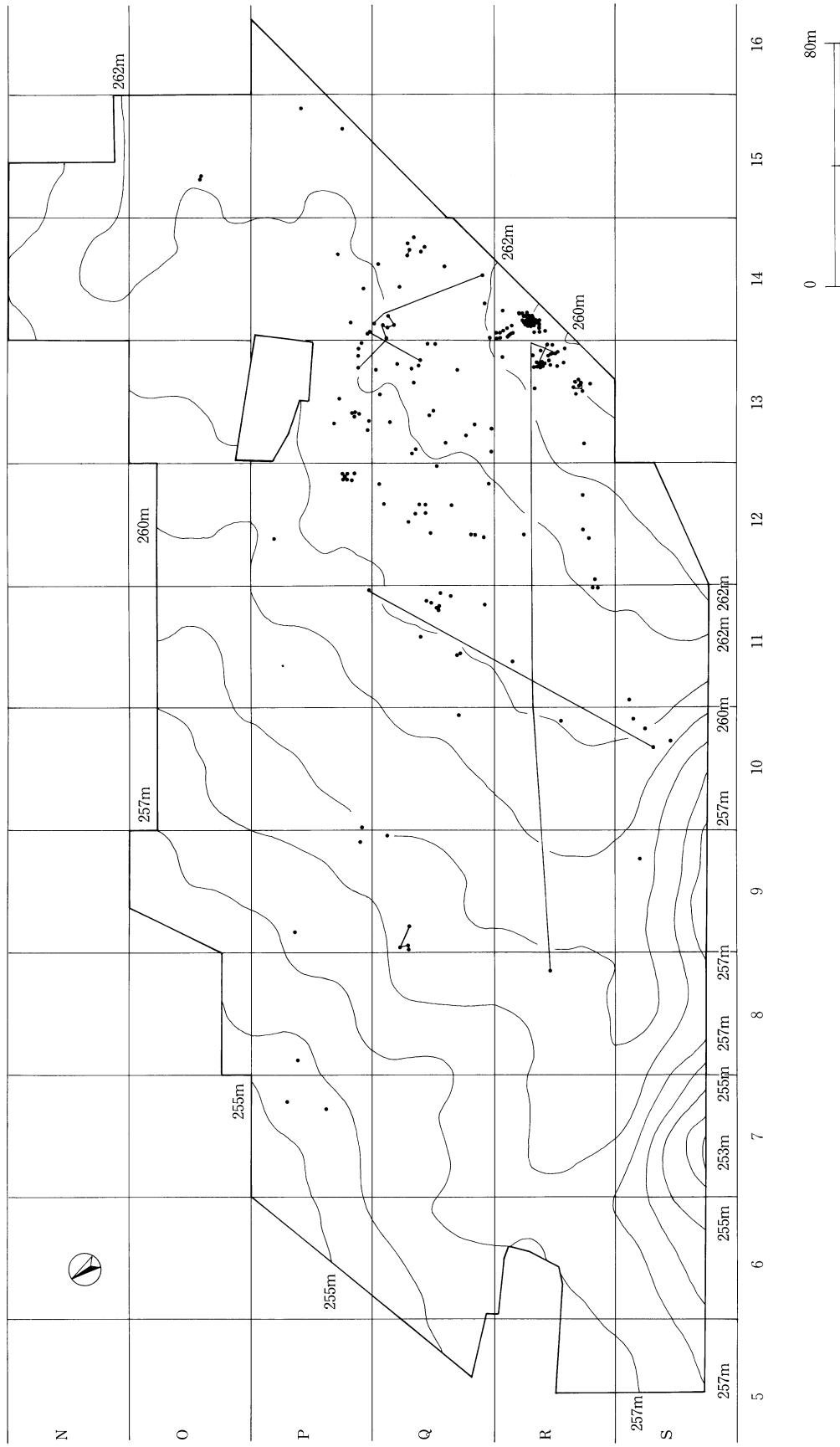
- ① 口縁形態は平口縁を呈し、口縁部は若干内弯し、口唇部は水平な平坦面あるいは内傾する平坦面を作出する、下剥峯式土器の基本的器形を呈するタイプの土器(a類土器)。
- ② 口縁形態は平口縁を呈し、口縁上端部のみが若干内弯する以外は、口縁部はほぼ直行する。特に口縁上端部外面は、ほぼ45°の角度でまるく削られており、見かけ上、口縁部の内弯形態が強調されている、下剥峯式土器の基本的器形の定義からはずれるタイプの土器(b類土器)。

の2タイプに分けることができることをこの項では指摘しておく。

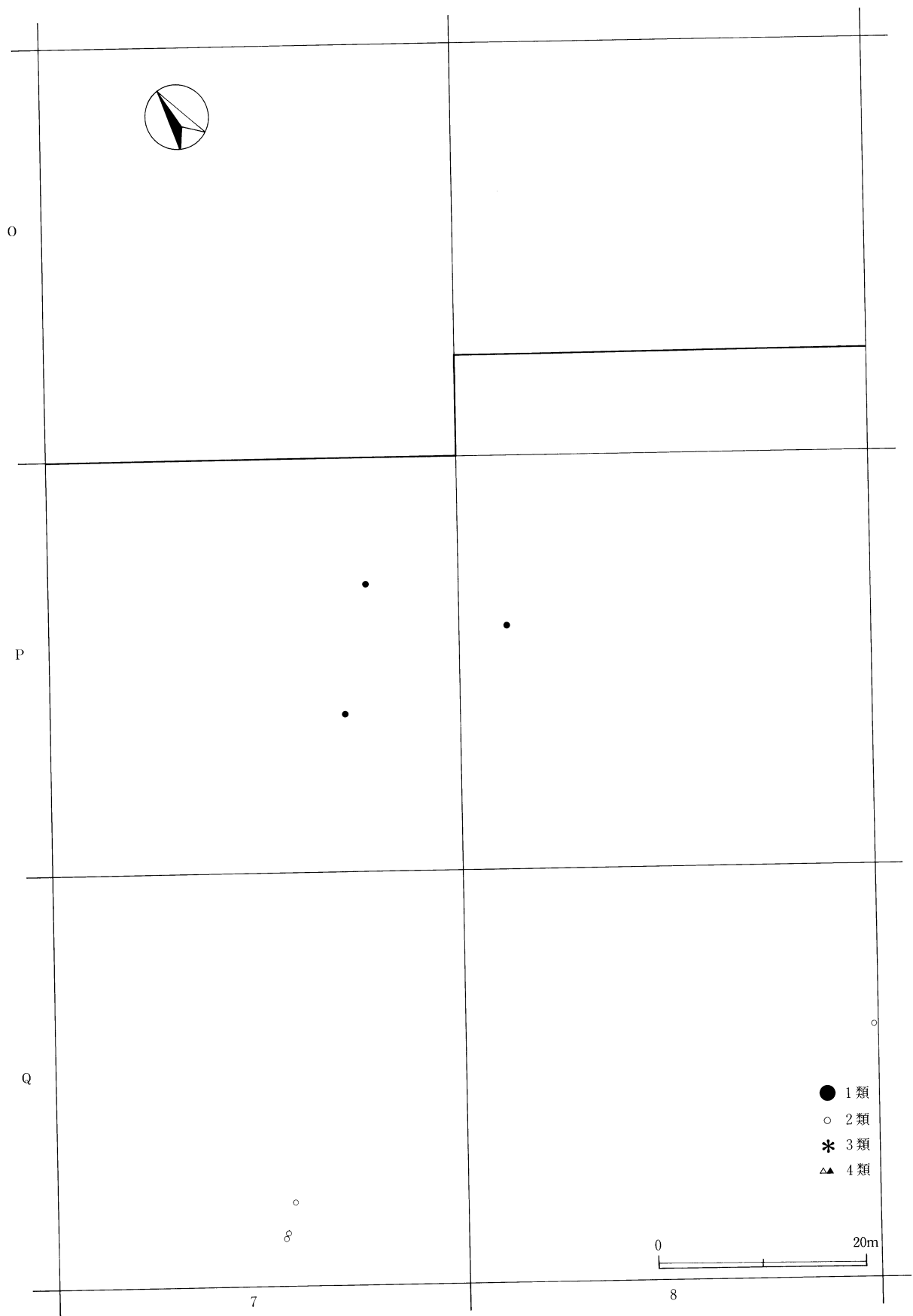


第9図 下剥峯式土器出土状況全体図

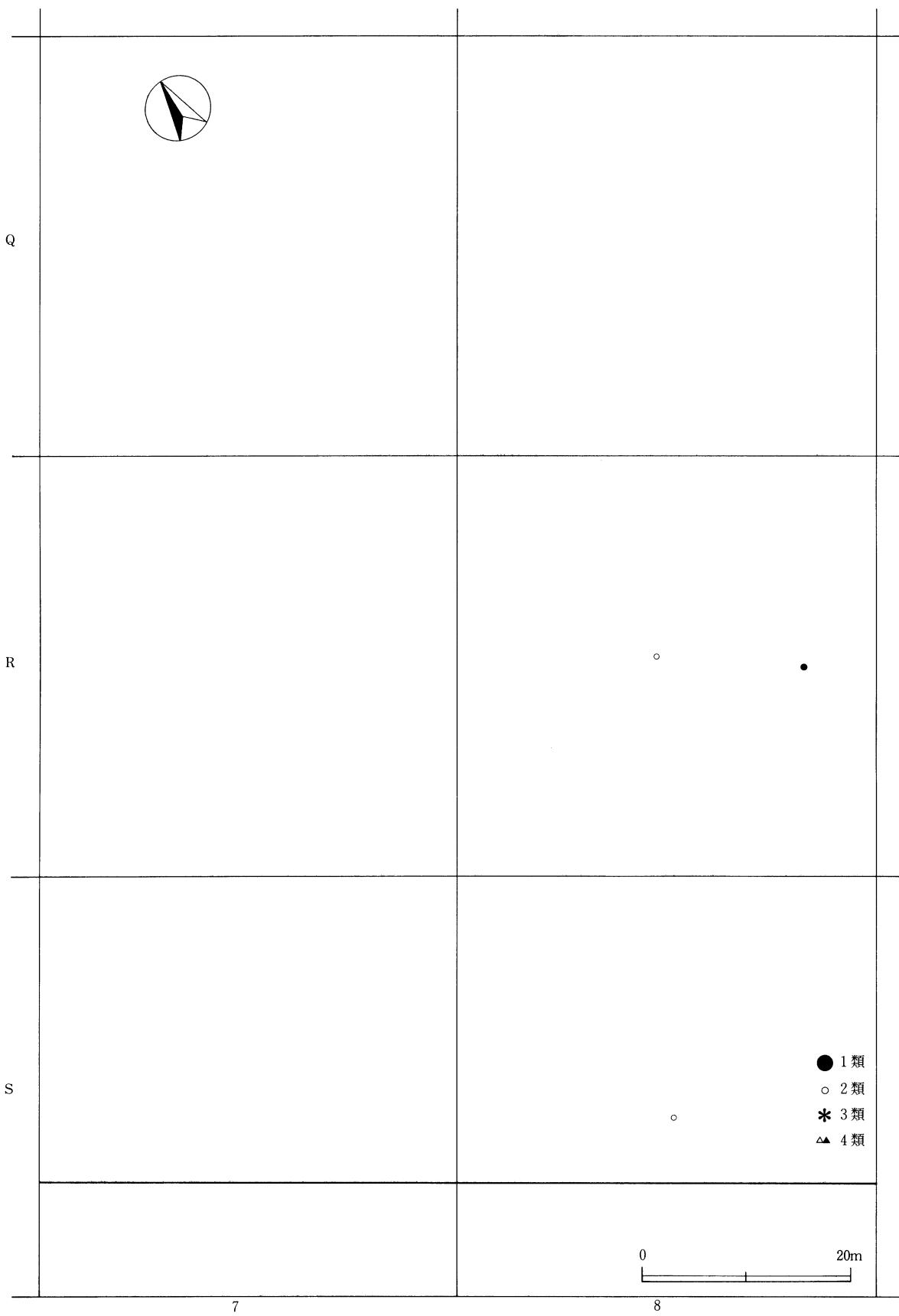




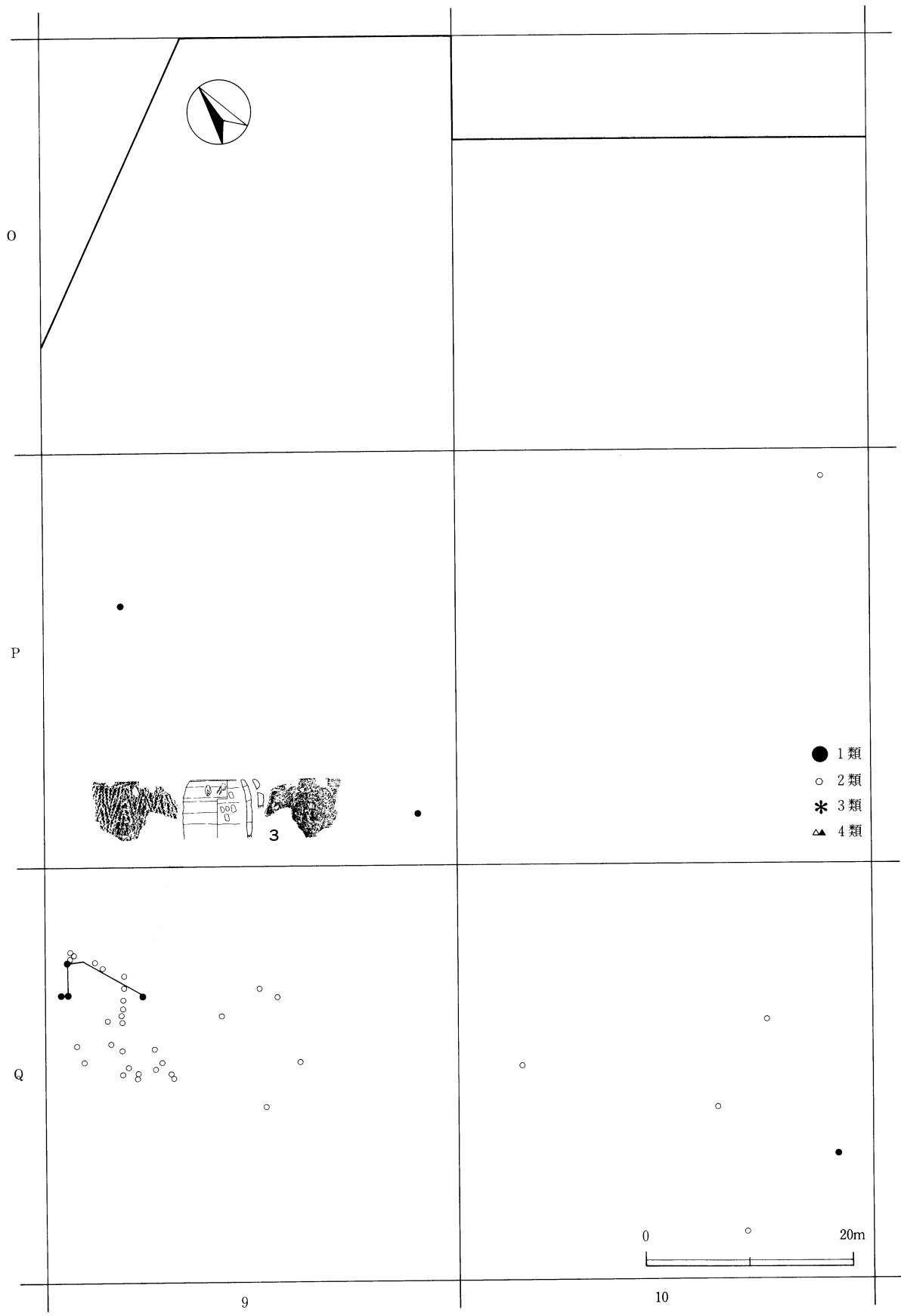
第10図 下剥峯式土器 1 類出土状況全体図



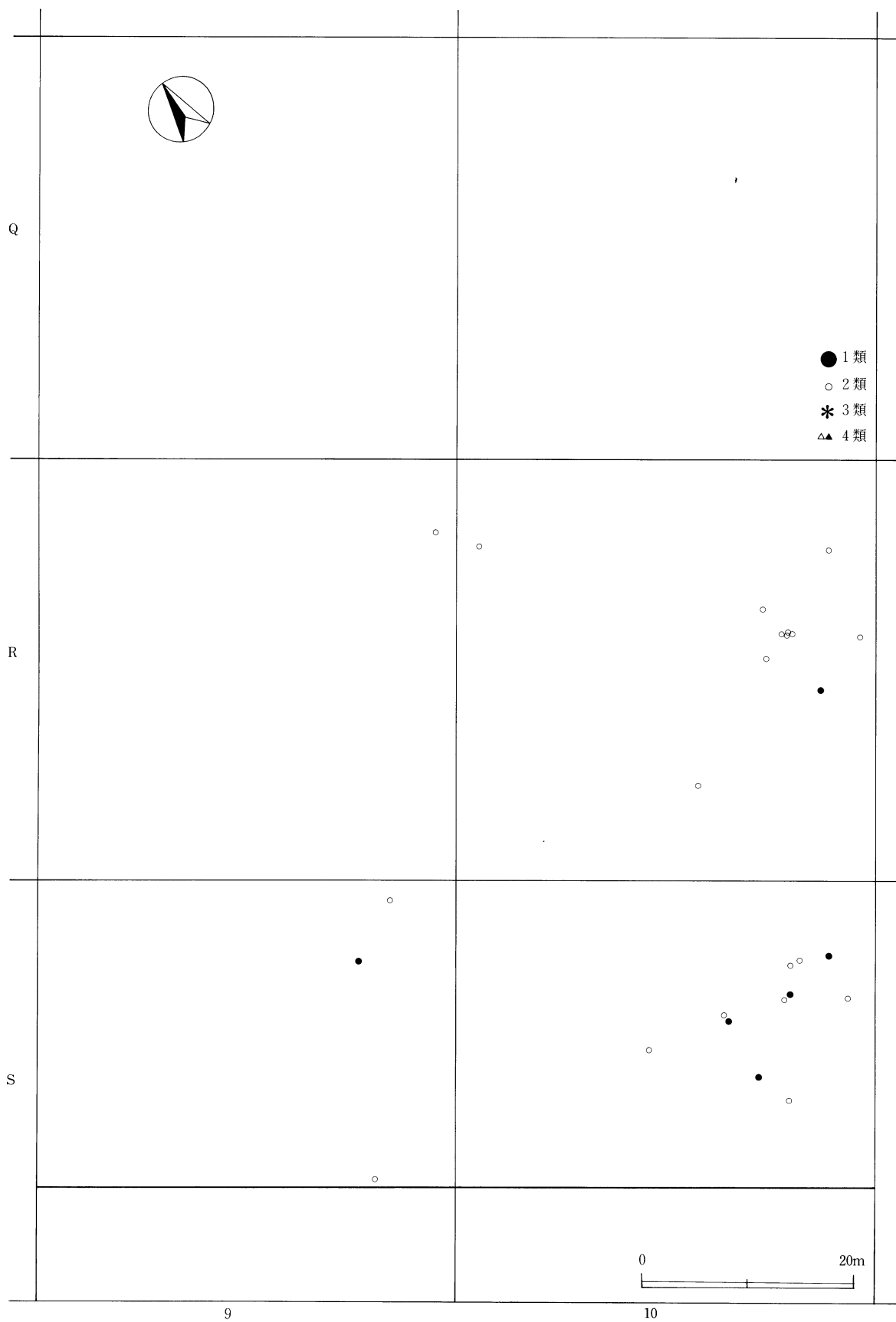
第11図 下剥峯式土器1類出土状況図1(O・P・Q-7・8区)



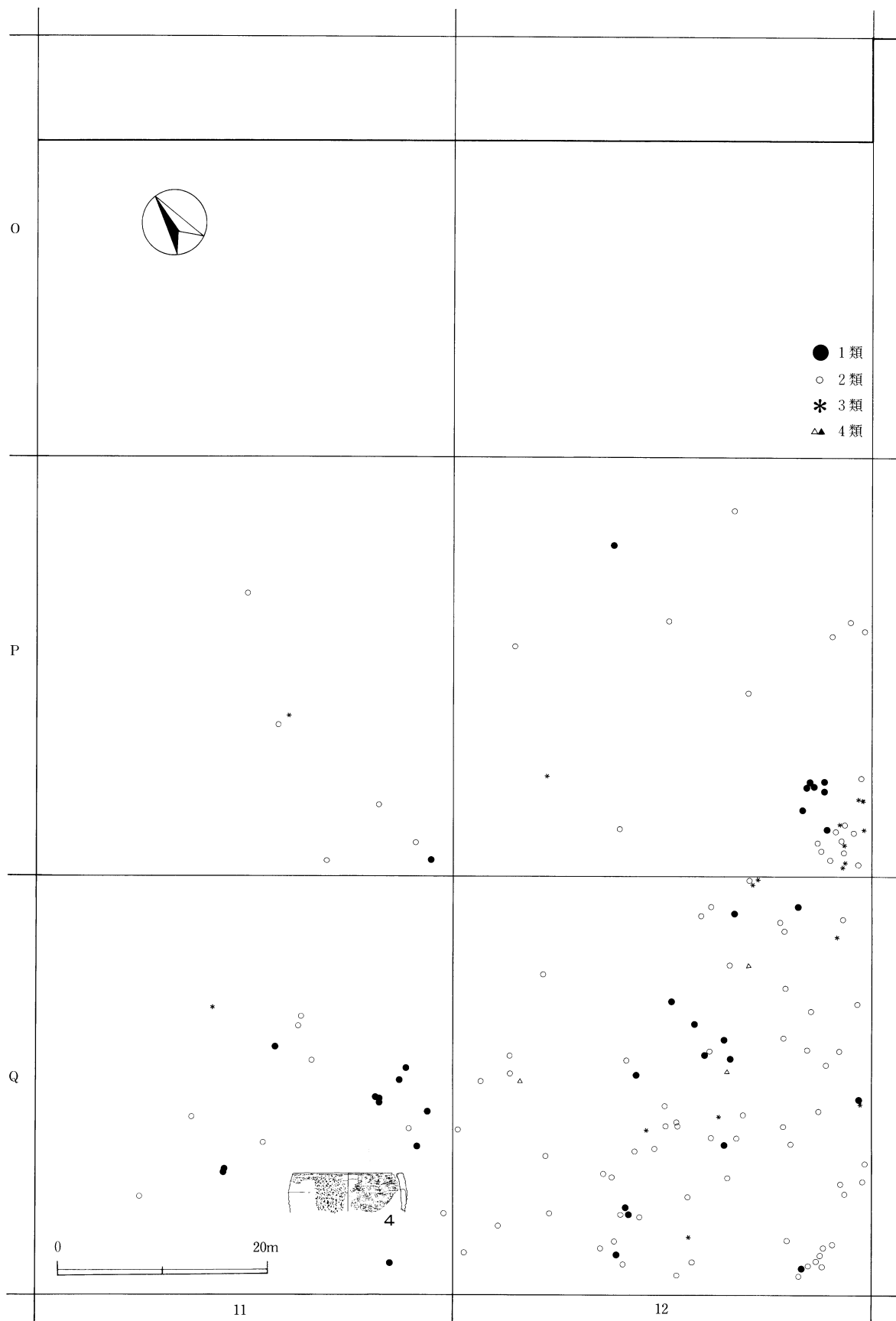
第12図 下剥峯式土器1類出土状況図2 (R・S-7・8区)



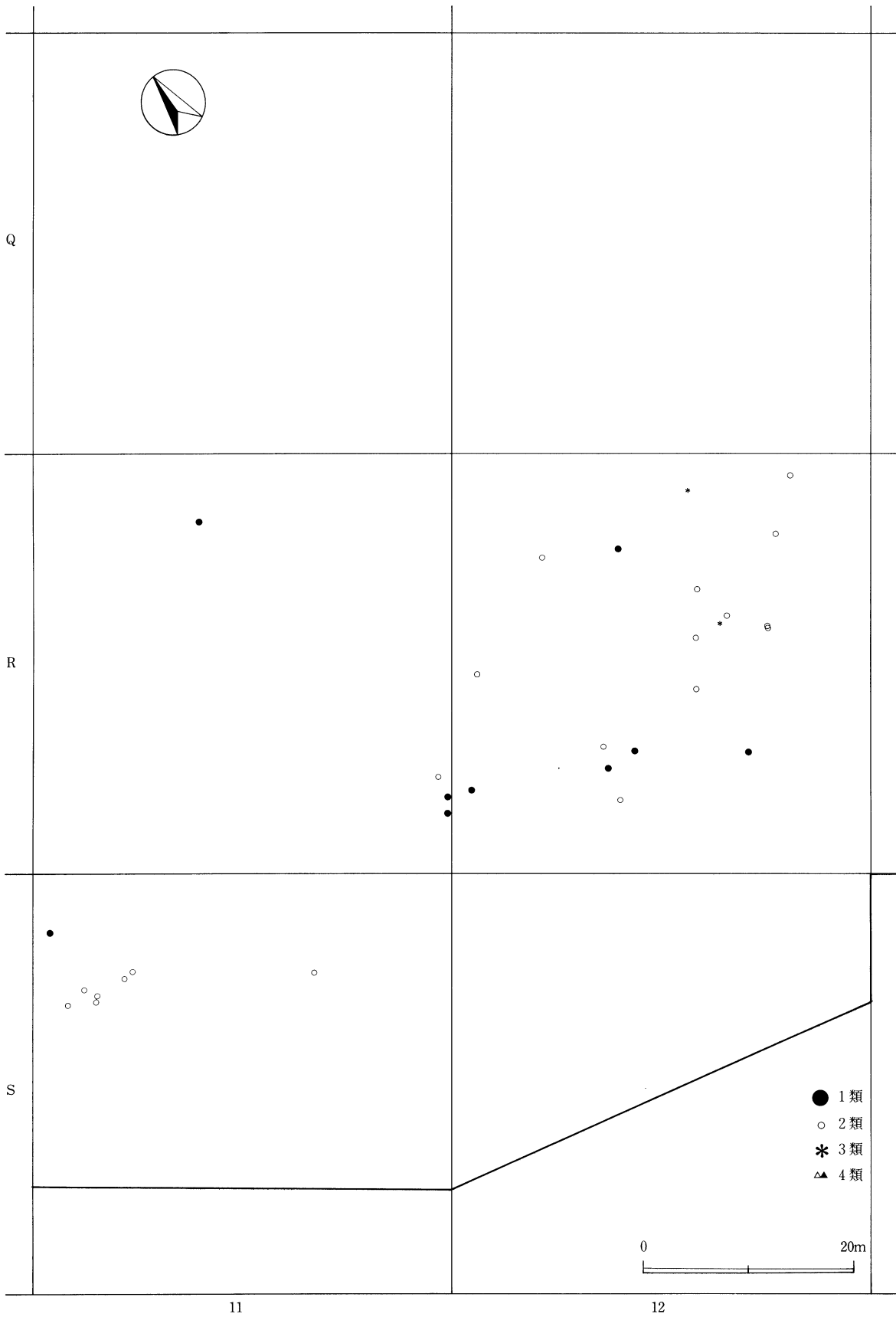
第13図 下剥峯式土器 1類出土状況図3 (O・P・Q-9・10区)



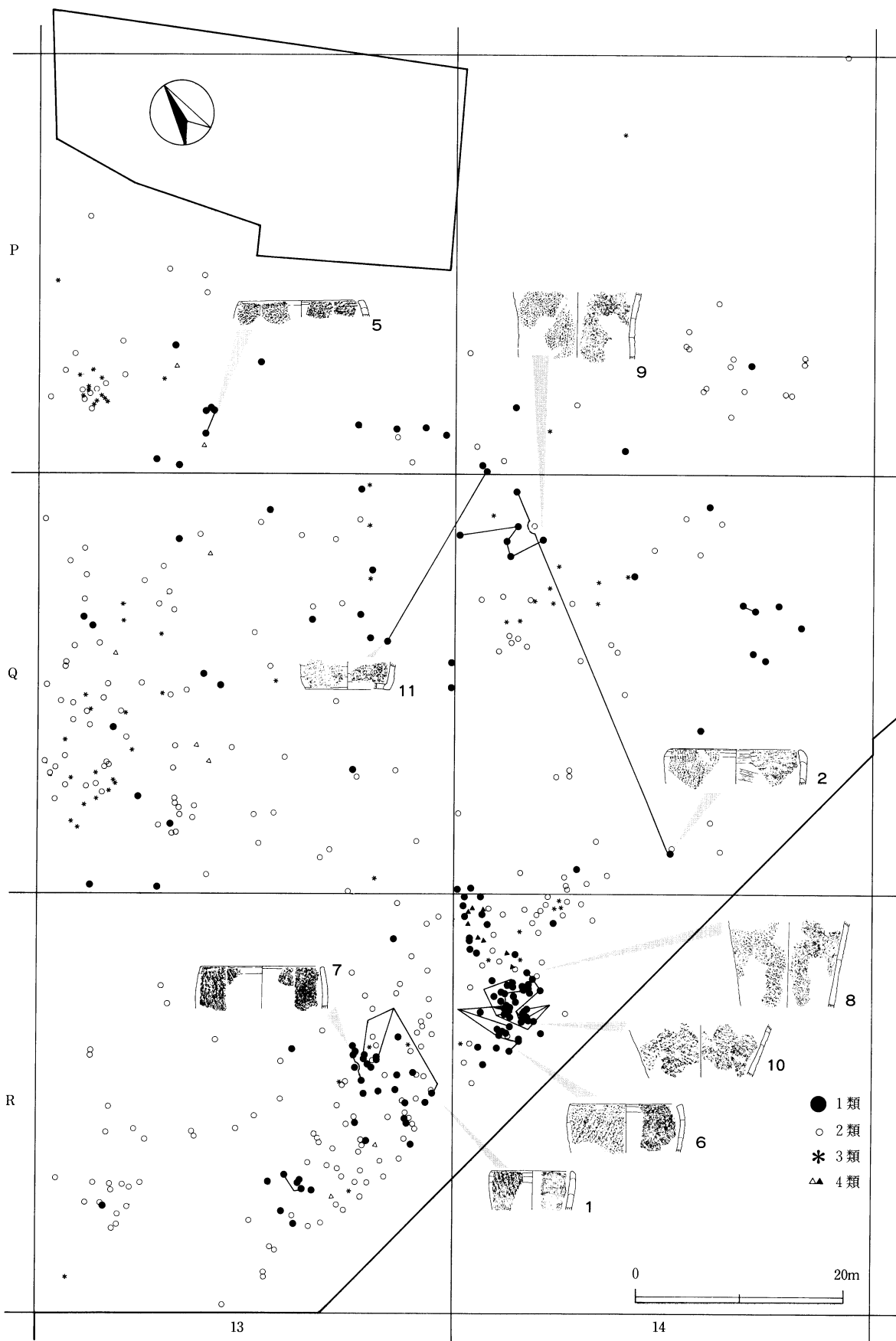
第14図 下剥峯式土器1類出土状況図4 (R・S-9・10区)



第15図 下剥峯式土器1類出土状況図5 (O・P・Q-11・12区)

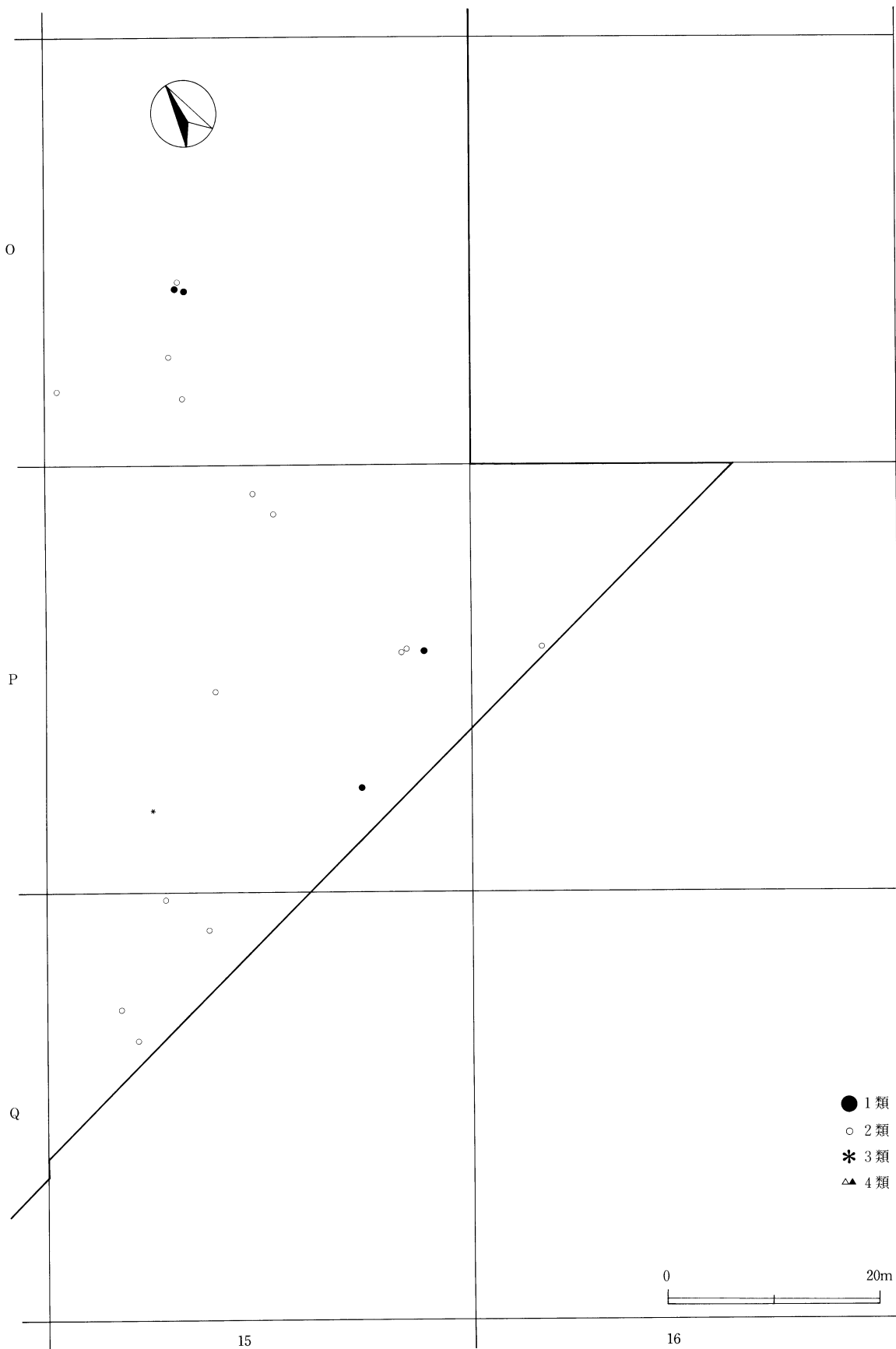


第16図 下剥峯式土器1類出土状況図6 (R・S-11・12区)

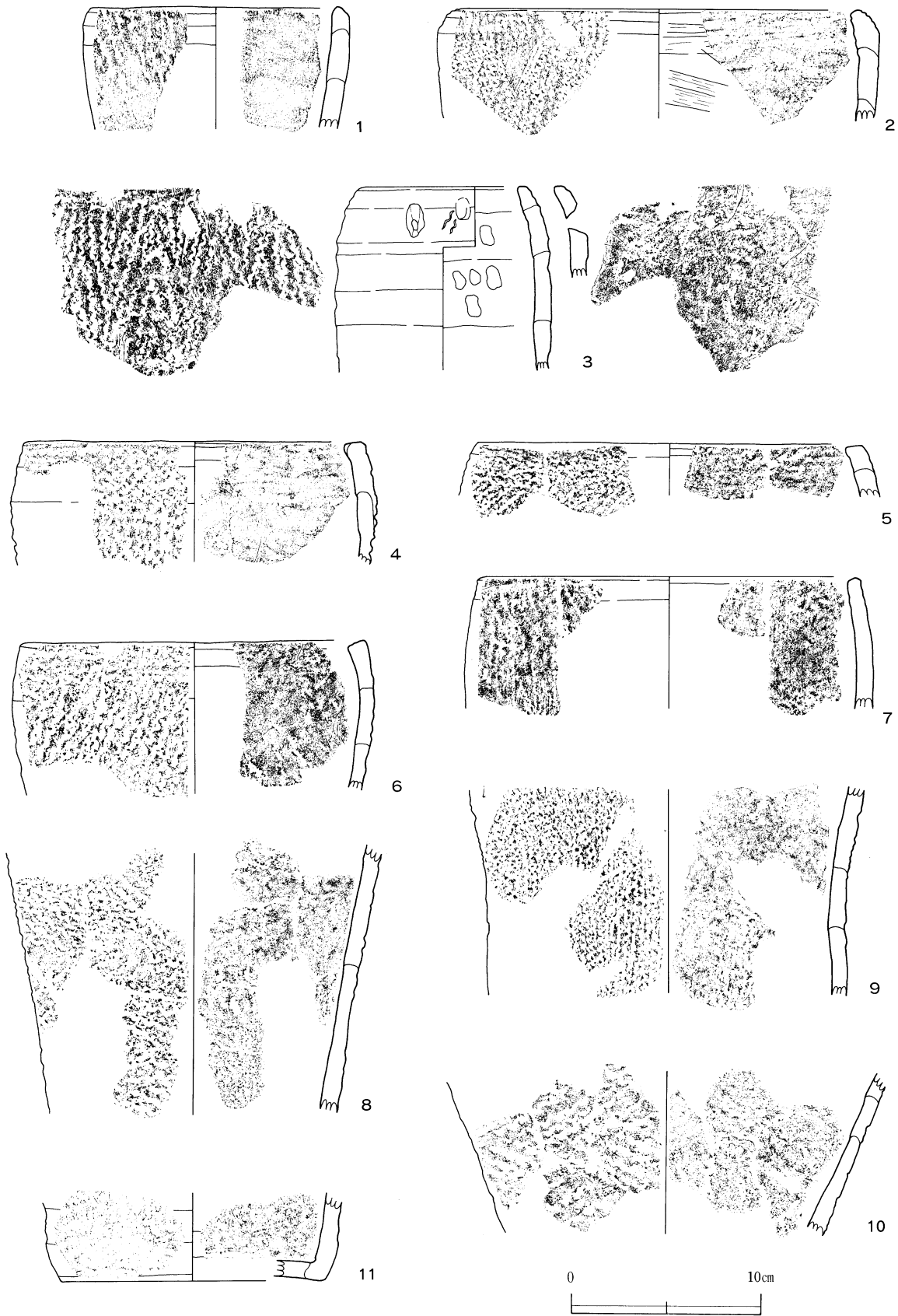


第17図 下剥峯式土器1類出土状況図7 (P・Q・R-13・14区)





第18図 下剥峯式土器1類出土状況図8 (O・P・Q-15・16区)



第19図 下剥峯式土器 1類実測図

下剥峯式土器 1 類土器観察表

採掘 番号	報告 番号	出土 区	発掘 番号	実測図 番号	層	器種	部位	胎土				調整	調整	色調		備考			
								石英	長石	角閃石	クロウモ			砂	外器面		内器面		
第 19 図	1	R-13 R-13 R-13	2929 5102 6506	129	VI	深鉢	口縁～胴部	○	○			◎	細砂・微砂	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	暗茶褐色～茶褐色	茶褐色	スス付着 口径13.5cm	
	2	Q-14 Q-14	2448 2903	127	VI	深鉢	口縁～胴部	○	○			◎	砂粒を含む	ナデ	ハケ→丁寧なナデ	暗黄褐色～暗褐色	暗黄褐色～暗褐色	口径21.2cm	
	3	Q-08 Q-08 Q-08 Q-09	200 202 1638 6075	133	VI	深鉢	口縁～胴部	○	○			◎	細砂・微砂	ナデ	指頭押圧→ナデ	暗褐色～暗茶褐色	黒褐色～暗褐色	口径8.8cm スス付着 補修孔あり	
	4	Q-11 Q-11	12140 12141	128	VI	深鉢	口縁～胴部	○	○			◎	砂粒を含む	ナデ	ケズリ→ナデ	暗茶褐色～黒褐色	暗褐色～暗茶褐色	口径17.8cm	
	5	P-13 P-13	1189 2953	136	VI	深鉢	口縁～胴部	○	○	○			◎	細砂・微砂	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色～暗褐色	茶褐色	口径20.4cm スス付着
	6	R-14 R-14 R-14 R-14 R-14 R-14 R-14 R-14 R-14	809 815 907 1243 1244 1322 1505 1517 1600	137	VI	深鉢	口縁～胴部	○	○			◎	細砂・微砂	ナデ	ハケ→ナデ	暗褐色～暗茶褐色	暗茶褐色～茶褐色	口径18.1cm スス付着	
	7	R-13 R-13	3304 3400	135	VI	深鉢	口縁～胴部	○	○	△			◎	細砂・微砂	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色～黒褐色	明茶褐色	口径19.8cm
	8	R-14 R-14 R-14 R-14 R-14 R-14 R-14	1303 1399 1510 1514 1596 1597 1640	134	VI	深鉢	胴部	○	○			◎	細砂・微砂	ナデ	ハケ→ナデ	暗褐色～暗茶褐色	暗褐色～黒褐色	胴部径20.2cm	
	9	Q-14 Q-14 Q-14 Q-14 Q-14	1883 2091 2095 2438 2453	132	VI	深鉢	胴部	○	○	△	○		◎	砂粒を多く含む	ハケ→ナデ	丁寧なナデ	茶褐色～暗黄褐色	黒褐色～暗褐色	胴部径21.8cm
	10	R-14 R-14 R-14 R-14 R-14	1249 1509 1514 1521 1637	130	VI	深鉢	胴部	○	○			◎	細砂・微砂	ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色～暗褐色	暗褐色	胴部径23.5cm	
	11	P-14 Q-13	1356 5867	131	VI	深鉢	底部～胴部	○	○	△			◎	砂粒を多く含む	ミガキ	ハケ→ナデ	暗茶褐色～茶褐色	暗茶褐色～暗黄褐色	底径13.8cm

②-2 第2群 (下剥峯式土器) 2類

(第20図～第32図)

i) 概要

第2群2類に属すると判断した土器片は、452点出土し、そのうち27個体・74点を資料化した。

第2群2類は、土器の器形的特徴および文様構成の特徴から、口縁部から胴部にかけての土器について、さらに2つに分けることが可能である。

まず、第2群2類aに属する土器器形の特徴は、第2群1類bに属する土器の器形と概ね同じである(第29図12～第31図24)。すなわち、口縁形態は平口縁を呈し、口縁上端部のみが若干内弯する以外は、口縁部はほぼ直行する。特に口縁上端部外面は、ほぼ45°の角度でまろく削られており、見かけ上、口縁部の内弯形態が強調されている。胴部は円筒形で、胴部下半で心持ちすぼまり、底部は平底を呈する土器である。この類の土器に施された文様構成の特徴としては、ヘラ状工具を用いて縦位方向に施す刺突文を、口縁(上端)部に横位方向に数条巡らし、胴部全面には貝殻を用いて連続した刺突文(貝殻刺突文線)で、縦位方向に羽状文を施文する点が挙げられる。

一方、第2群2類bに属する土器器形の特徴は、以下のとおりである(第31図25～29)。

すなわち、口縁形態は波状口縁を呈し、口縁上面観

は略方形を呈する土器である。口唇部は水平平坦面を作出している。口縁部は弯曲しながら外反するタイプの土器である。この類の土器に施された文様構成の特徴としては、ヘラ状工具を用いて、口縁上半部には横位方向に連続刺突文を数条巡らす一方で、口縁下半部には縦位方向に鋸歯文を施文する、点が挙げられる。

さて、第2群2類の土器胎土中に含まれる鉱物は、主に石英・長石・角閃石で構成される土器と、主に石英・長石・クロウモで構成される土器とがあった。しかし、土器胎土による分類と、器形および施文方法による分類との間には、相関関係は見られなかった。

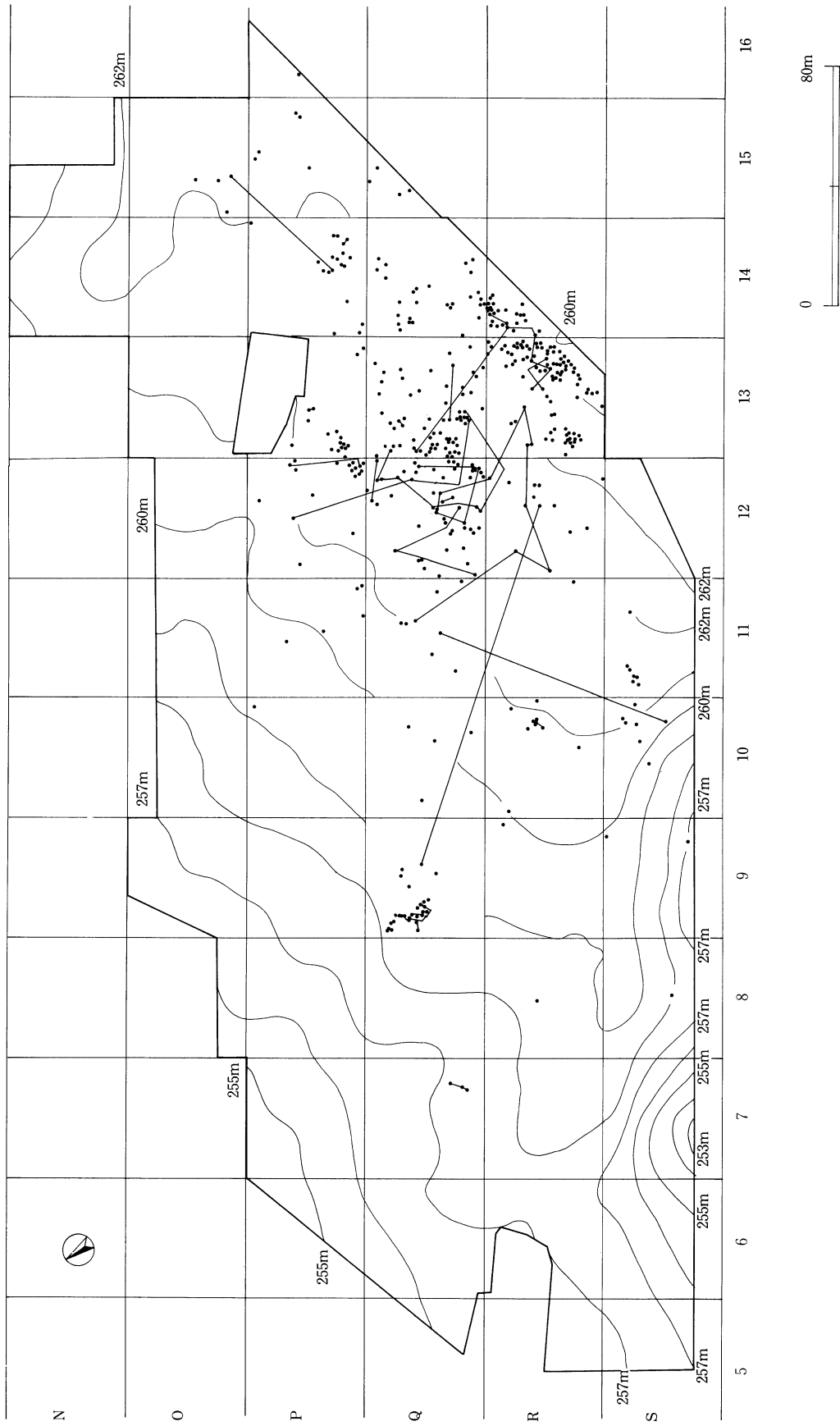
また、土器の調整方法は外器面ではナデ調整を行うことが主流であるが、中には木製工具を使用したと考えられるハケ目調整の後にナデ調整を行う土器も見られた。内器面ではミガキ調整や丁寧なナデ調整を行う土器も見られたが、ハケ目調整の後にナデ調整を行う土器が主流であった。

一方、土器の色調は外器面、内器面共に暗茶褐色から茶褐色を呈する土器が主流であった。

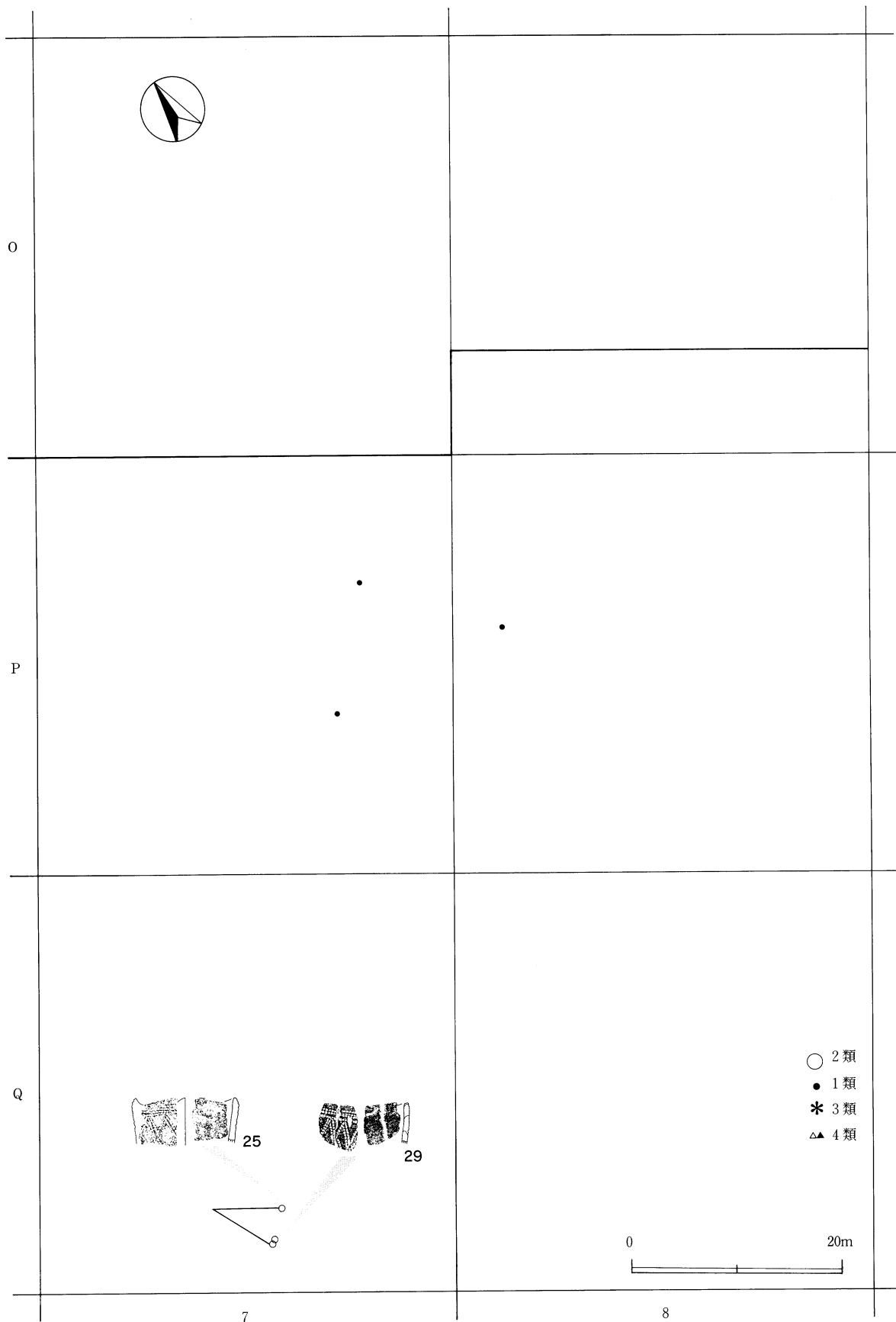
ところで、第2群2類に属する土器の出土状況全体図(第20図)を概観すると、

① R-13区からR-14区にかけての区域

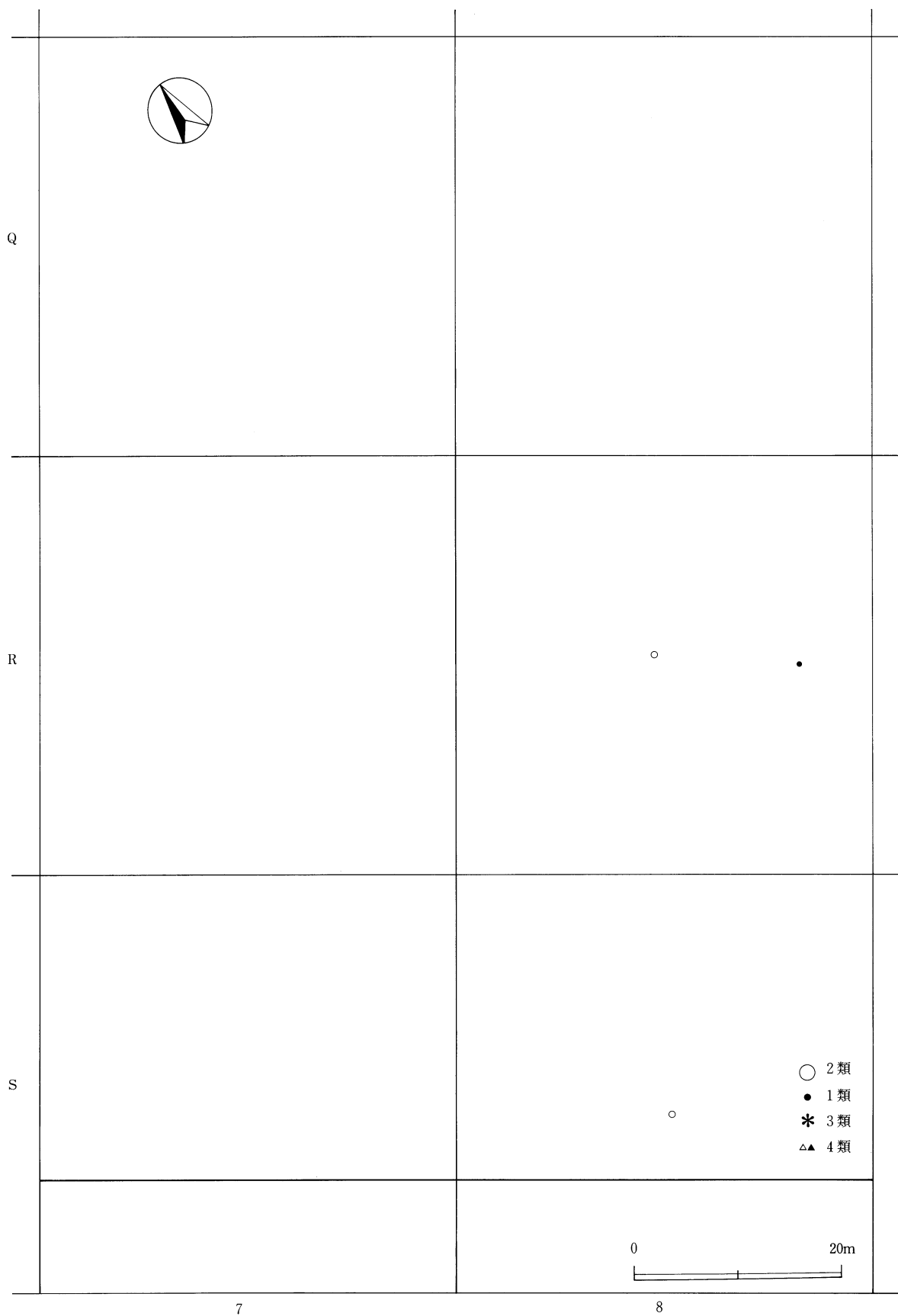
(p.45へ続く)



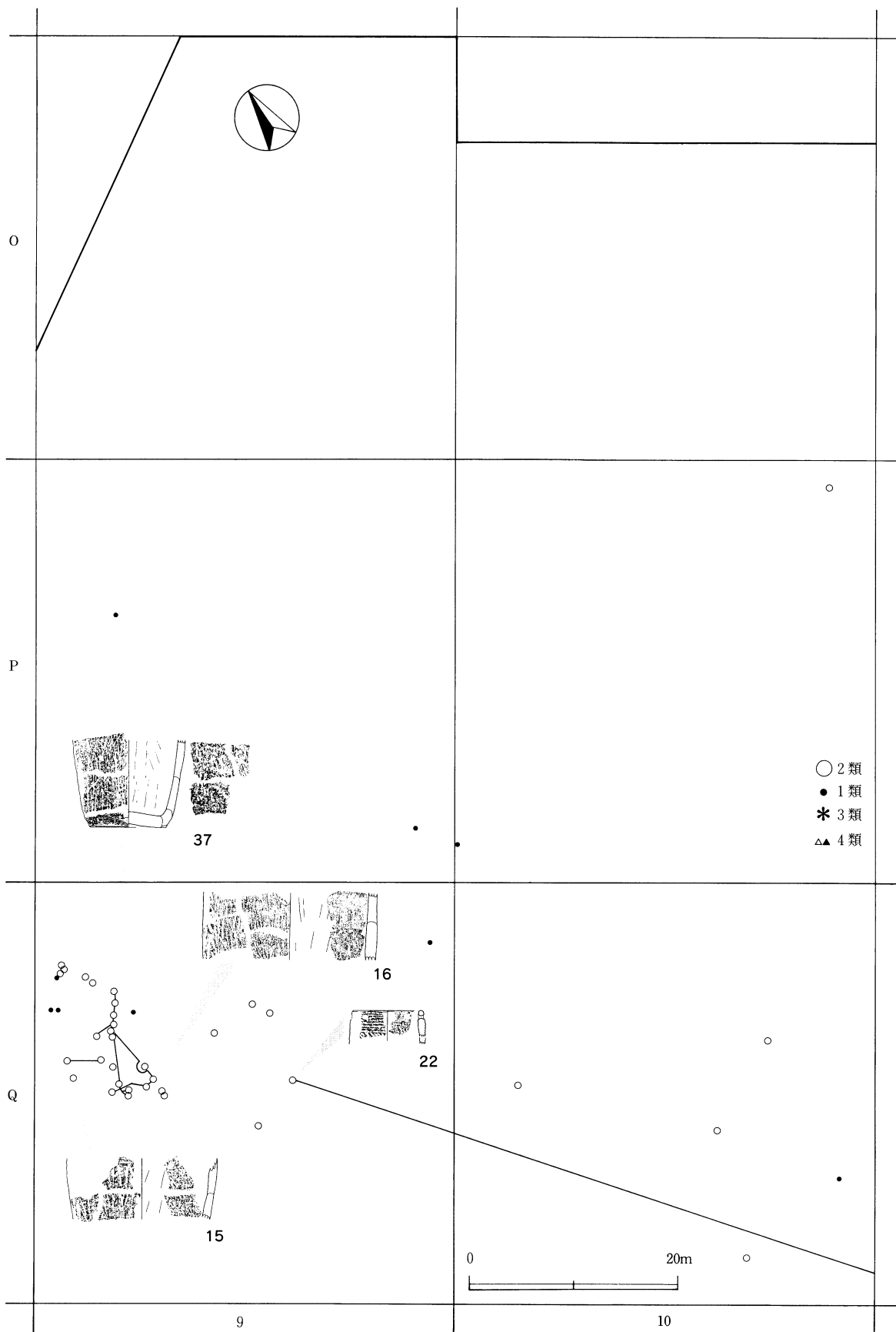
第20図 下剥峯式土器 2類出土状況全体図



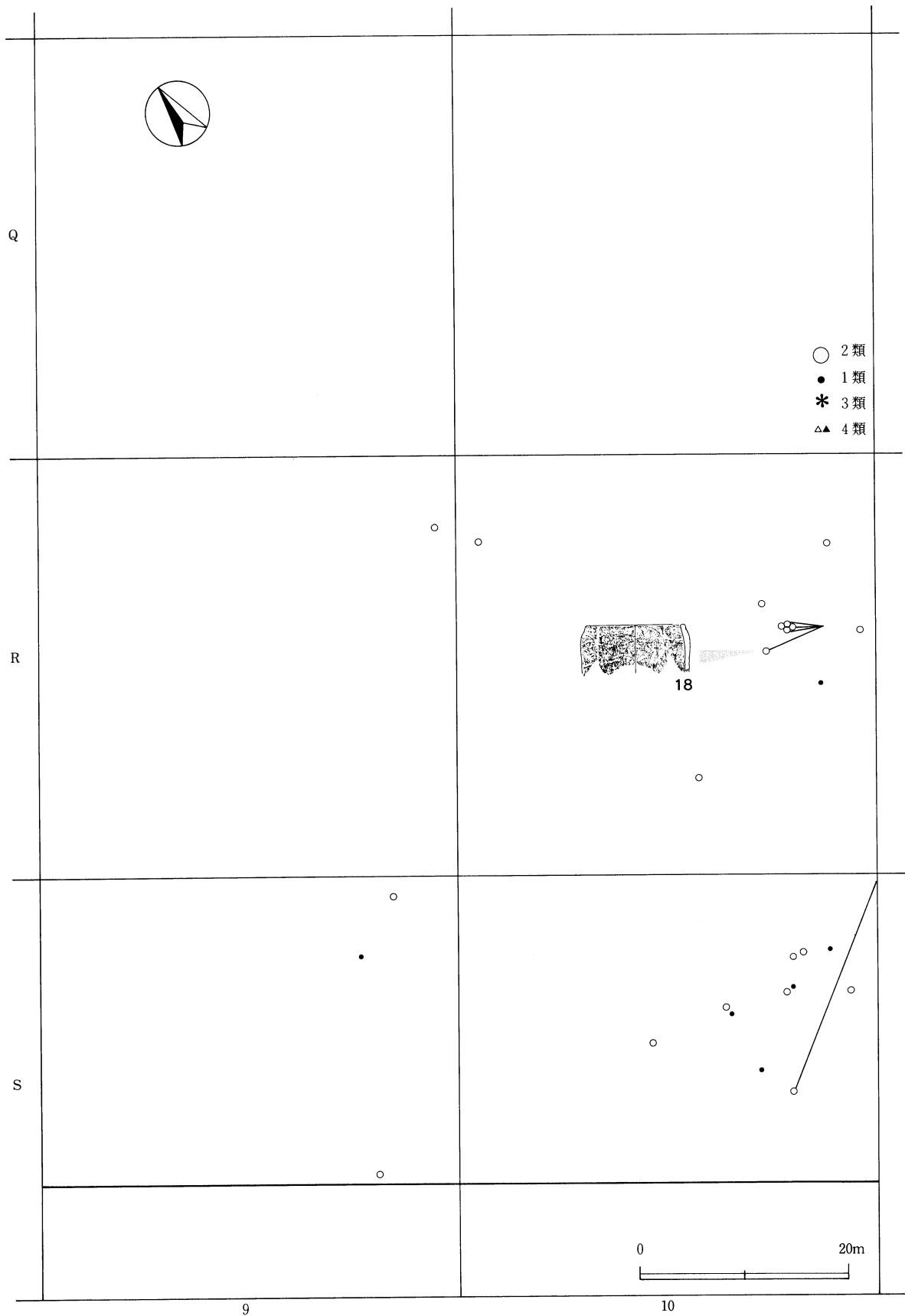
第21図 下剥峯式土器 2類出土状況図1 (O・P・Q-7・8区)



第22図 下剥峯式土器 2類出土状況図2 (R・S-7・8区)

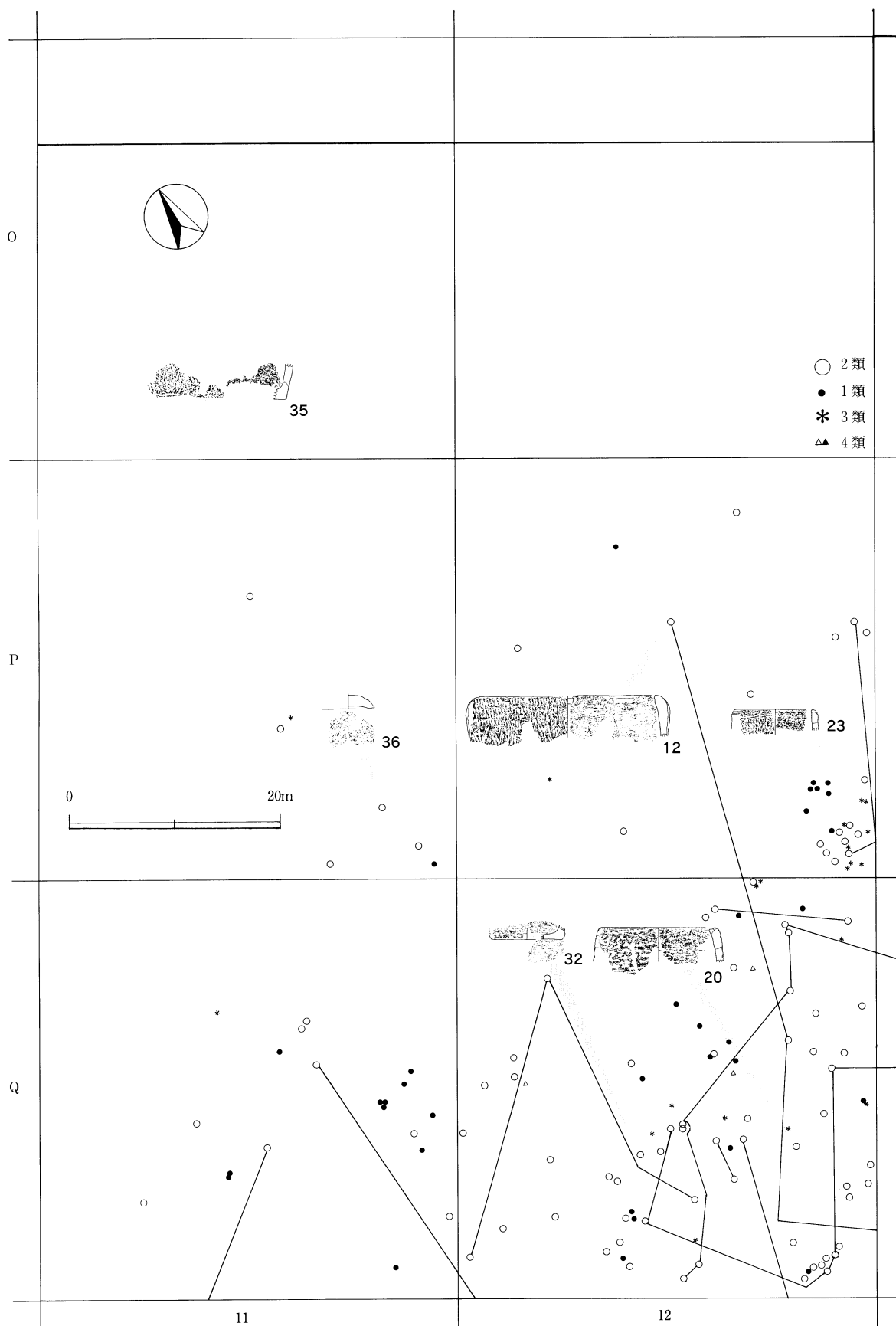


第23図 下剥峯式土器2類出土状況図3 (P・Q-9・10区)

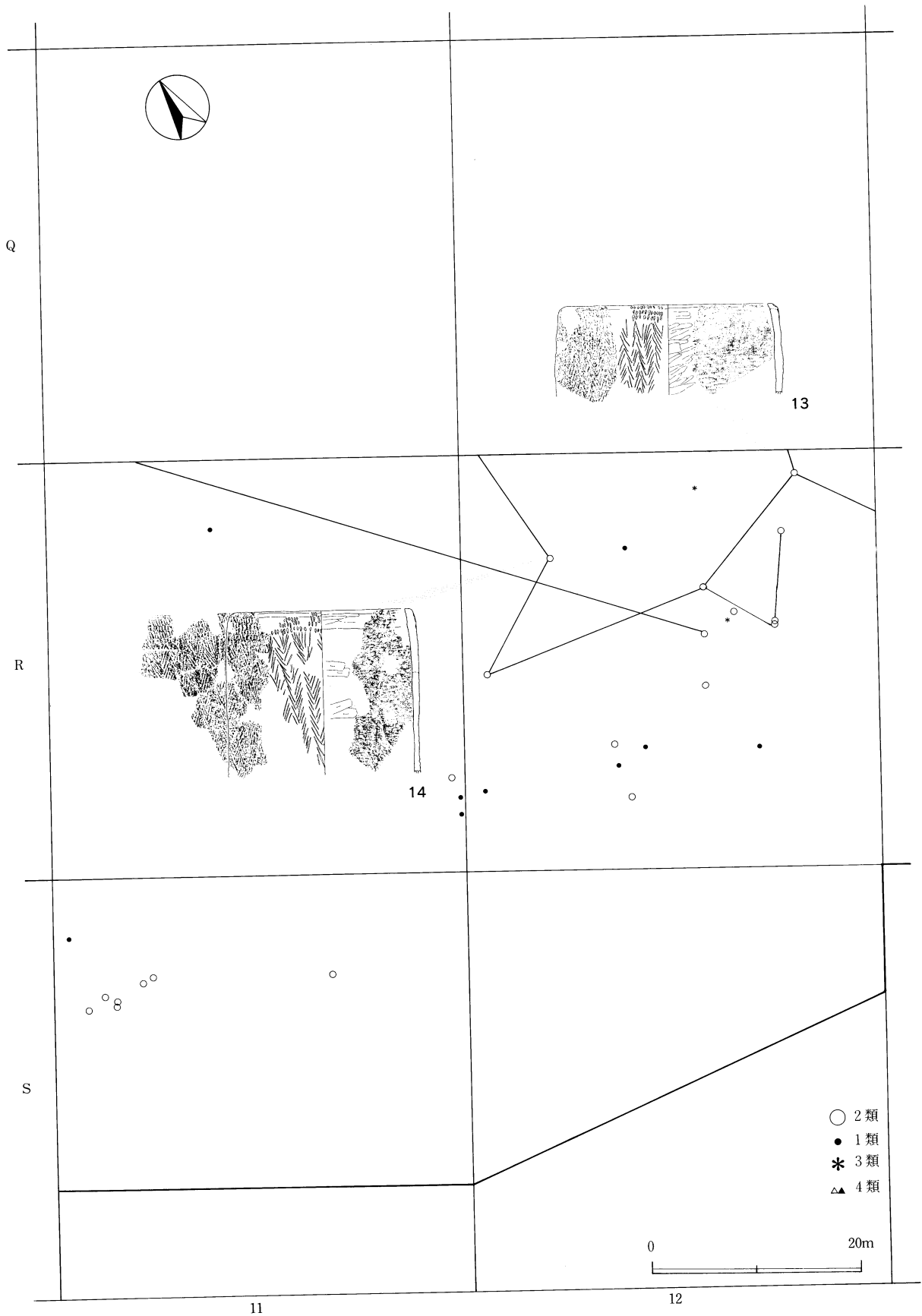


第24図 下剥峯式土器 2類出土状況図4 (R・S-9・10区)

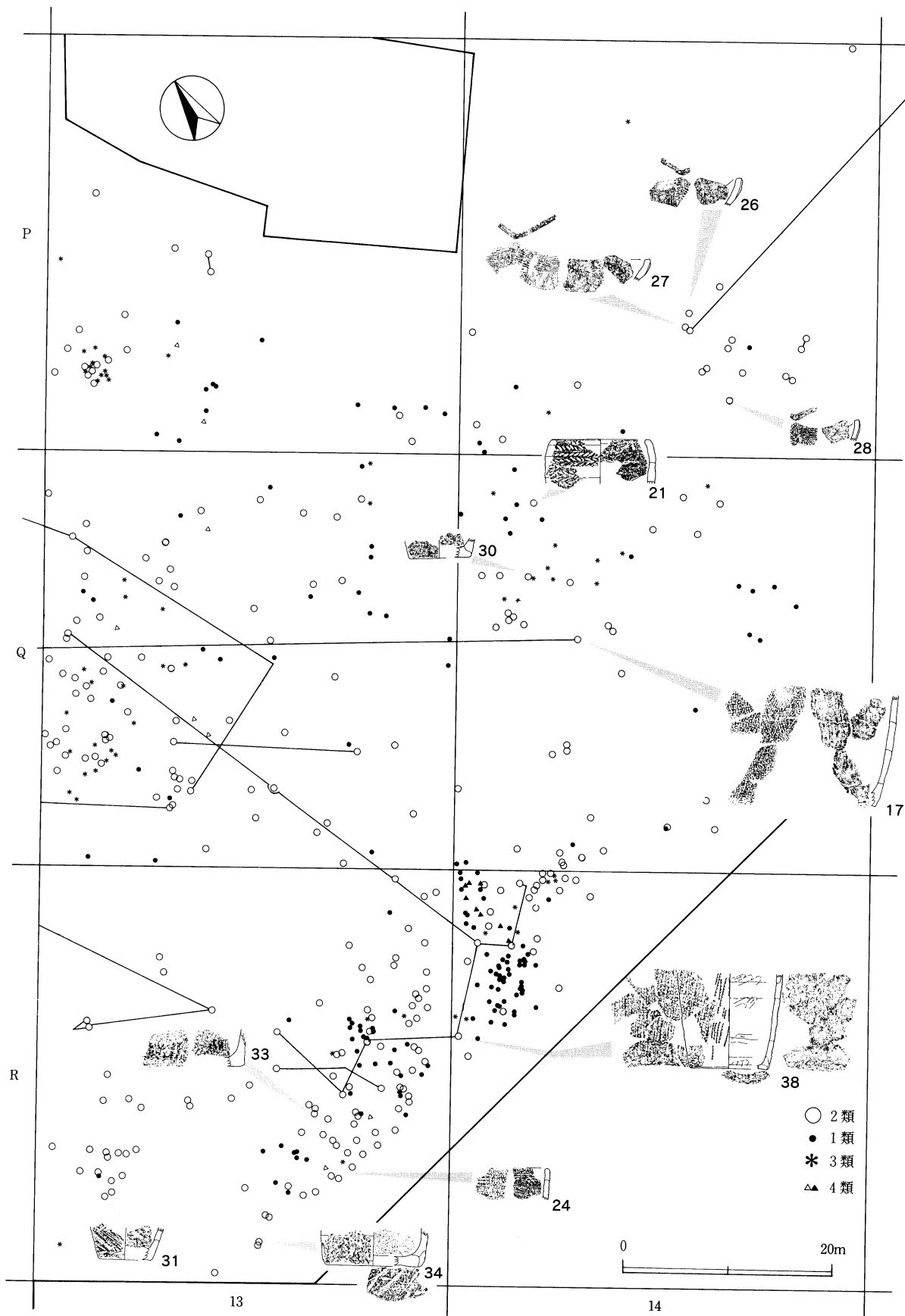




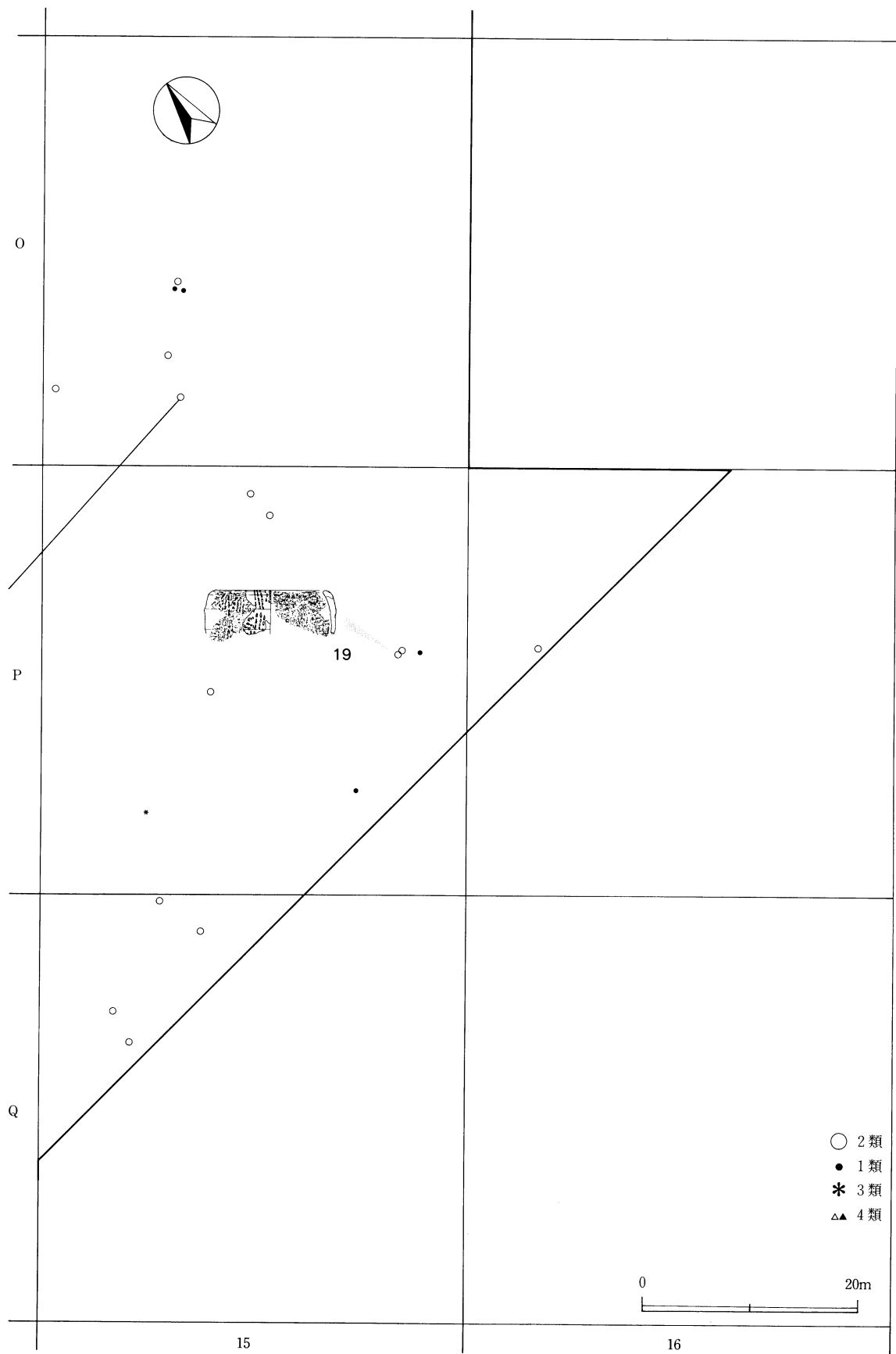
第25図 下剥峯式土器2類出土状況図5 (O・P・Q-11・12区)



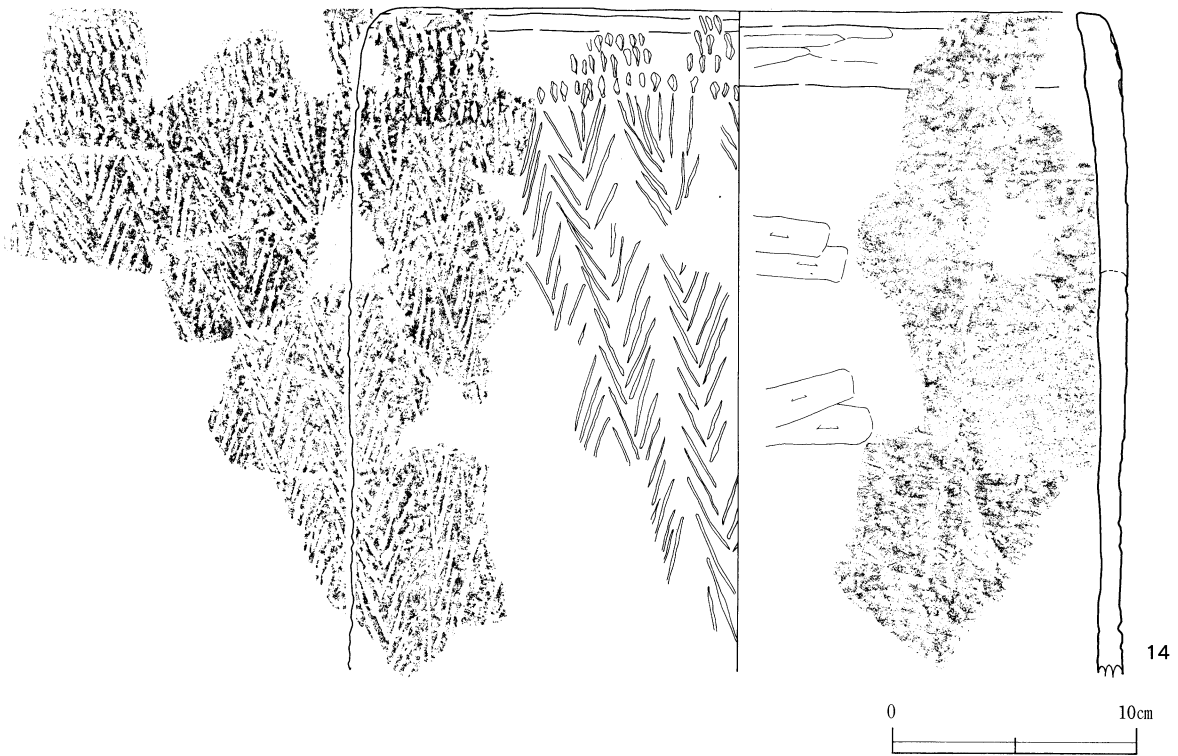
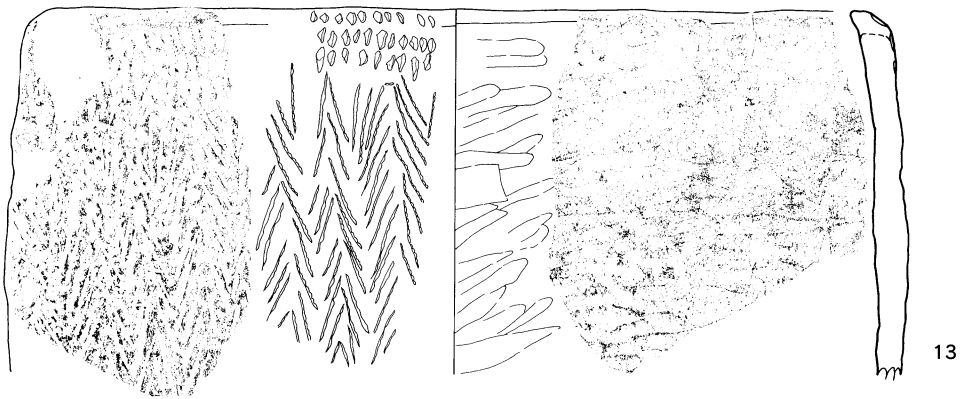
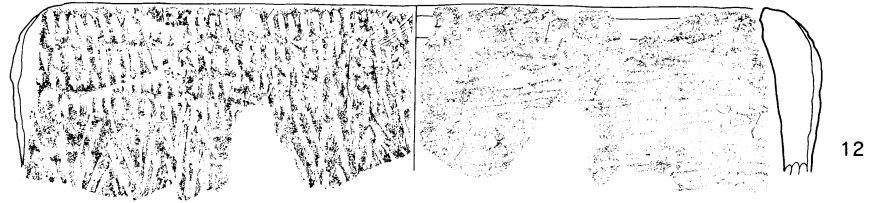
第26図 下剥峯式土器2類出土状況図6 (R・S-11・12区)



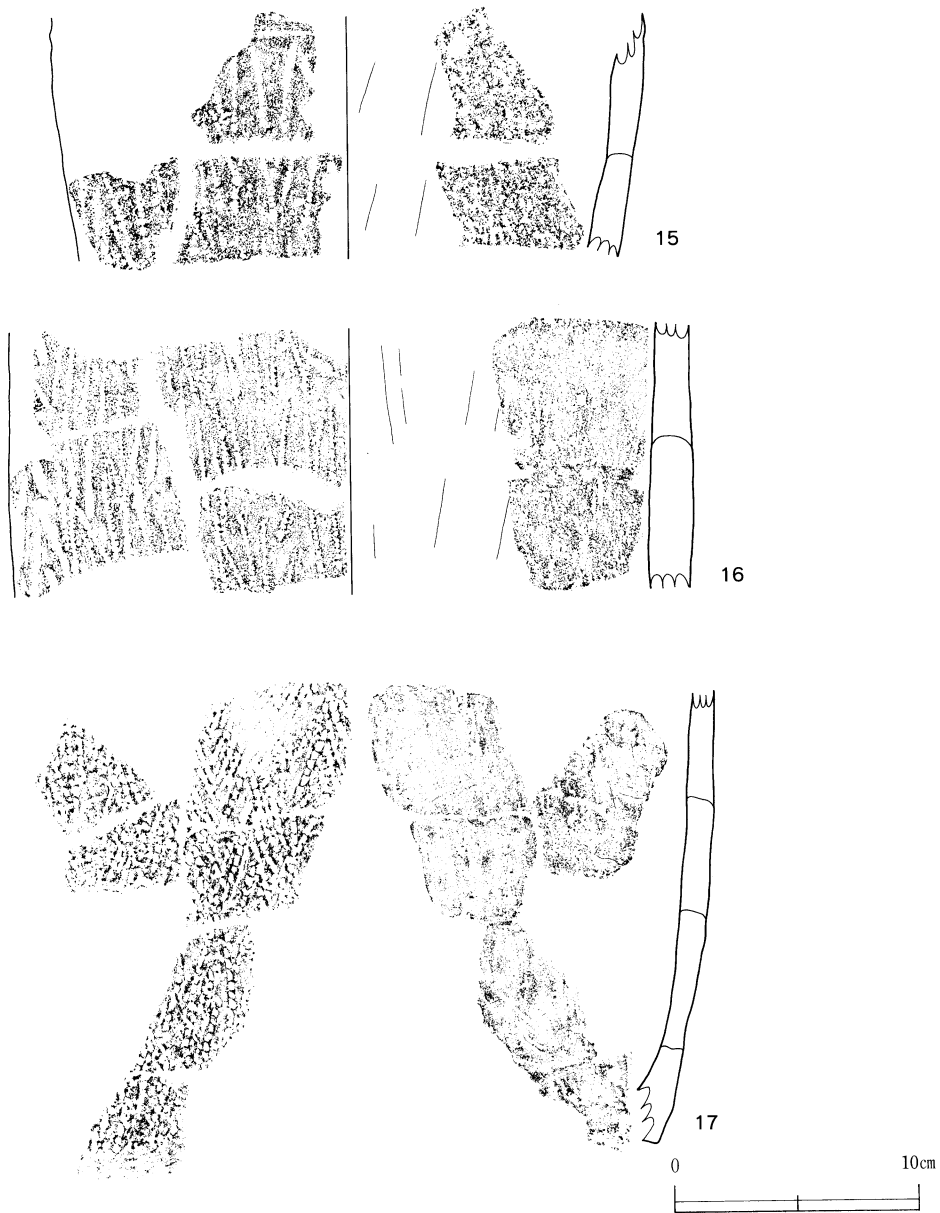
第27図 下剥峯式土器2類出土状況図7 (P・Q・R-13・14区)



第28図 下剥峯式土器2類出土状況図8(O・P・Q-15・16区)



第29図 下剥峯式土器2類実測図(1)



第30図 下剥峯式土器2類実測図(2)

(p.34から続く)

② Q-12区からQ-13区にかけての区域

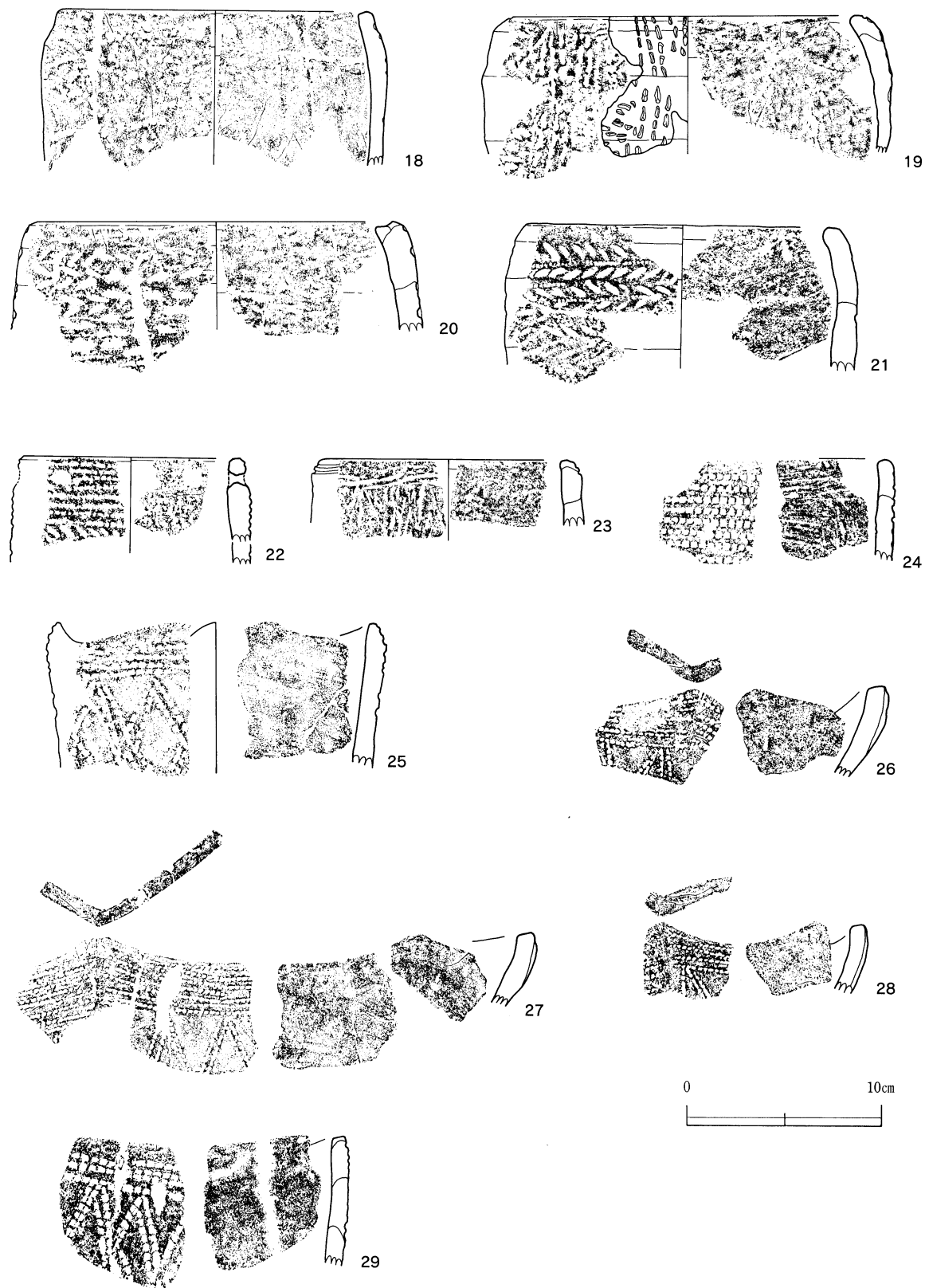
③ Q-9区

の3箇所集中区域があり、その周囲に散布地域がめぐり、概観できる。特に①(R-13・14区)の集中区域に属する土器と、②(Q-12・13区)の集中区域に属する土器とは接合関係にあることから、両集中区域は密接な関係にあったと推察できる。

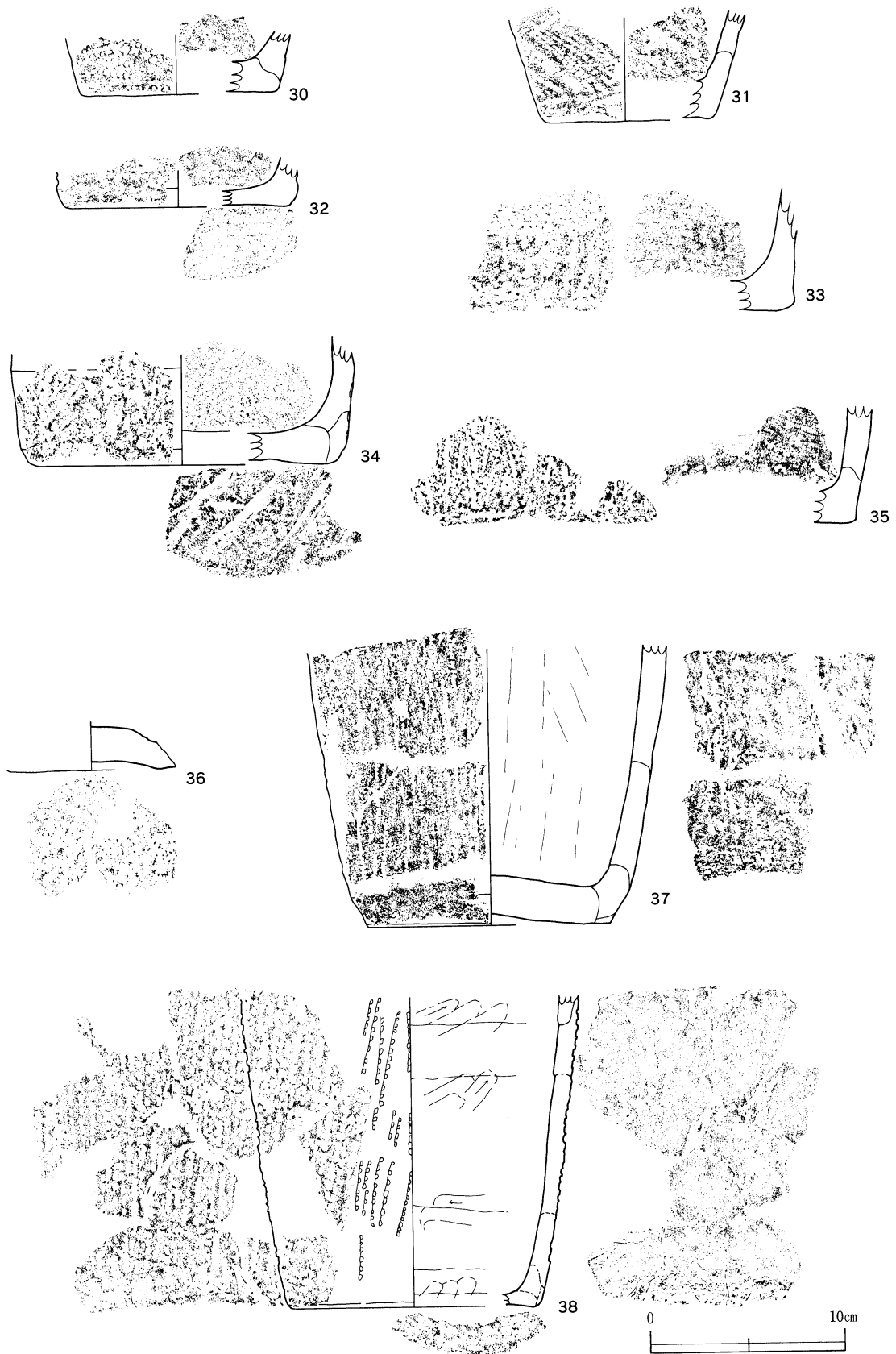
特に②(Q-12・13区)の集中区域に属する土器は、周囲の散布地域に属する多くの土器とも接合関

係にある。このことからこの区域は、当時の人々が生活する場であったと考えられる。

さて最後に、(34)の土器と(36)の土器に注目する。(34)の底部土器は、底面外面に板状工具を用いて切り離した痕跡が観察できる、珍しい土器である。一方、(36)の土器は、底面に穿孔が見られる底部土器である。煮炊きの用途を想定している深鉢形土器の底面に、穿孔してでも土器を使用したことは、土器が本来もつ用途を捨て、異なる用途への転換を意味するものであり、注目できる土器である。



第31図 下剥峯式土器2類実測図(3)



第32図 下剥峯式土器2類実測図(4)



下剥峯式土器 2 類土器観察表

種別 番号	報告 番号	出土 区	注記 番号	発掘 番号	層	器種	部位	胎土					外表面 調整	内表面 調整	色調		備考	備考 2
								石英	長石	角閃石	クワウシモ	砂礫			外表面	内表面		
第 29 類	12	Q-1-2	4313	138	VI	深鉢	口縁-胴部	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ハケ・ミガキ	暗茶褐色-暗褐色	茶褐色-暗茶褐色	口径28.4cm		
		Q-1-2	4556															
		Q-1-2	4561															
		Q-1-2	6461															
		Q-1-2	6465															
		Q-1-2	7777															
	Q-1-3	3533	VI															
	Q-1-3	10446																
	R-1-2	27		140	深鉢	口縁-胴部	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ミガキ	黒褐色-暗褐色	暗茶褐色-暗褐色	口径32.5cm	スス付着		
	R-1-2	428																
	Q-1-1	4438																
	Q-1-2	7778																
Q-1-2	8788																	
R-1-2	27																	
R-1-2	43	142	深鉢	口縁-胴部	○	○	△	○	砂粒を含む			暗茶褐色-暗褐色	茶褐色-暗茶褐色	スス付着				
R-1-2	287																	
R-1-2	570																	
R-1-2	1120																	
R-1-3	896																	
R-1-3	897																	
R-1-3	948																	
第 30 類	15	Q-0-9	4225	123	VI	深鉢	胴部	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	タテハケ・ナデ	茶褐色-暗黄褐色	暗茶褐色-茶褐色	胴部径24.6cm		
		Q-0-9	5473															
		Q-0-9	2794															
		Q-0-9	3345															
	16	Q-0-9	5189	122	VI	深鉢	胴部	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	タテハケ・ナデ	暗褐色-茶褐色	暗茶褐色-暗黄褐色	胴部径28.1cm		
		Q-0-9	5400															
		Q-1-2	7781															
		Q-1-2	9537															
	17	Q-1-2	9898	160	VI	深鉢	胴部-底部	○	○	○	◎	砂粒を含む	ハケ・ナデ	タテハケ・ナデ	茶褐色-暗茶褐色	暗茶褐色-茶褐色		
		Q-1-2	9900															
		Q-1-2	10177															
		Q-1-4	185号集札29															
第 31 類	18	R-1-0	4161	144	VI	深鉢	口縁-胴部	○	○	○	細砂・微砂	タテハケ・ナデ	ナデ	茶褐色-暗褐色	暗茶褐色-茶褐色	口径16.0cm スス付着		
		R-1-0	4162															
		R-1-0	6484															
		R-1-0	10802															
	19	P-1-5	265	147	VI	深鉢	口縁-胴部	○	○	○	細砂・微砂	ナデ	丁寧なナデ	暗黄褐色-黒褐色	黒褐色-暗褐色	口径18.1cm		
		Q-1-2	8681															
		Q-1-3	8681															
		Q-1-4	2009															
	20	Q-0-9	4364	187	VI	深鉢	口縁-胴部	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ヨコハケ・ナデ	黄白色-暗褐色	黄白色-暗黄褐色	補修孔あり		
		R-1-2	1135															
		Q-0-9	4364															
		R-1-2	1135															
21	Q-0-9	4364	187	VI	深鉢	口縁-胴部	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ヨコハケ・ナデ	茶褐色-暗黄褐色	茶褐色-暗黄褐色	口径11.2cm			
	R-1-2	1135																
	P-1-2	3787																
	R-1-3	9193																
22	Q-0-7	72	83	VI	深鉢	口縁	○	○	○	細砂・微砂	ナデ	丁寧なナデ	茶褐色-暗黄褐色	暗茶褐色-暗黄褐色	流状口縁 口径16.4cm	125と同 割体小?		
	Q-0-7	83																
	P-1-4	2024																
	O-1-5	222																
23	P-1-4	2024	85	VI	深鉢	口縁	○	○	△	細砂・微砂	ナデ	丁寧なナデ	暗褐色-暗茶褐色	黒褐色-暗褐色	流状口縁 口径12.5cm			
	O-1-5	222																
	P-1-4	2030																
	P-1-4	2030																
24	P-1-4	1012	86	VI	深鉢	口縁	○	○	○	細砂・微砂	ナデ	ナデ	暗黄褐色	暗黄褐色	流状口縁			
	Q-0-7	73																
	Q-1-4	1413																
	Q-1-4	1413																
25	Q-0-7	73	125	VI	深鉢	口縁	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	丁寧なナデ	茶褐色-暗黄褐色	暗茶褐色-暗黄褐色	流状口縁 口径9.7cm	83と同 割体小?		
	Q-1-4	1413																
	Q-1-4	1413																
	Q-1-4	1413																
26	R-1-3	2143	162	VI	深鉢	底部	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	ハケ・ナデ	茶褐色-暗黄褐色	茶褐色-暗褐色	底部径11.2cm			
	Q-1-2	9506																
	R-1-3	2353																
	R-1-3	2353																
27	R-1-3	4132	145	VI	深鉢	底部	○	○	○	砂粒を多く含む	ナデ	ハケ・ナデ	暗褐色-暗茶褐色	茶褐色-暗褐色	口径14.6cm	板状1只による切り離し痕あり		
	Q-1-2	7668																
	P-1-1	2418																
	Q-1-1	9172																
28	P-1-1	2418	151	VI	深鉢	底部	○	○	○	砂粒を多く含む	ハケ・ナデ	ハケ・ナデ	暗茶褐色	茶褐色	口径9.0cm			
	Q-0-9	1480																
	Q-0-9	4258																
	Q-0-9	5436																
29	Q-0-9	5466	124	VI	深鉢	底部-胴部下半	○	○	○	砂粒を含む	ナデ	タテハケ・ナデ	暗赤褐色-暗黄褐色	暗茶褐色-暗黄褐色	口径12.4cm			
	Q-0-9	6094																
	Q-1-3	9461																
	R-1-3	366																
30	R-1-3	2076	120	VI	深鉢	胴部-底部	○	○	◎	砂粒を含む	ナデ	ナデ	茶褐色-暗黄褐色	暗黄褐色-暗茶褐色	口径12.4cm			
	R-1-3	4737																
	R-1-3	5085																
	R-1-4	308																
31	R-1-4	426	VI	深鉢	胴部-底部	○	○	◎	砂粒を含む	ナデ	ナデ	茶褐色-暗黄褐色	暗黄褐色-暗茶褐色	口径12.4cm				
	R-1-4	1070																
	R-1-4	1070																
	R-1-4	1435																

②-3 第2群(下剥峯式土器)3類

(第33図~第39図)

i) 概要

第2群3類に属すると判断した土器片は、88点出土し、そのうち6個体・37点を資料化した。

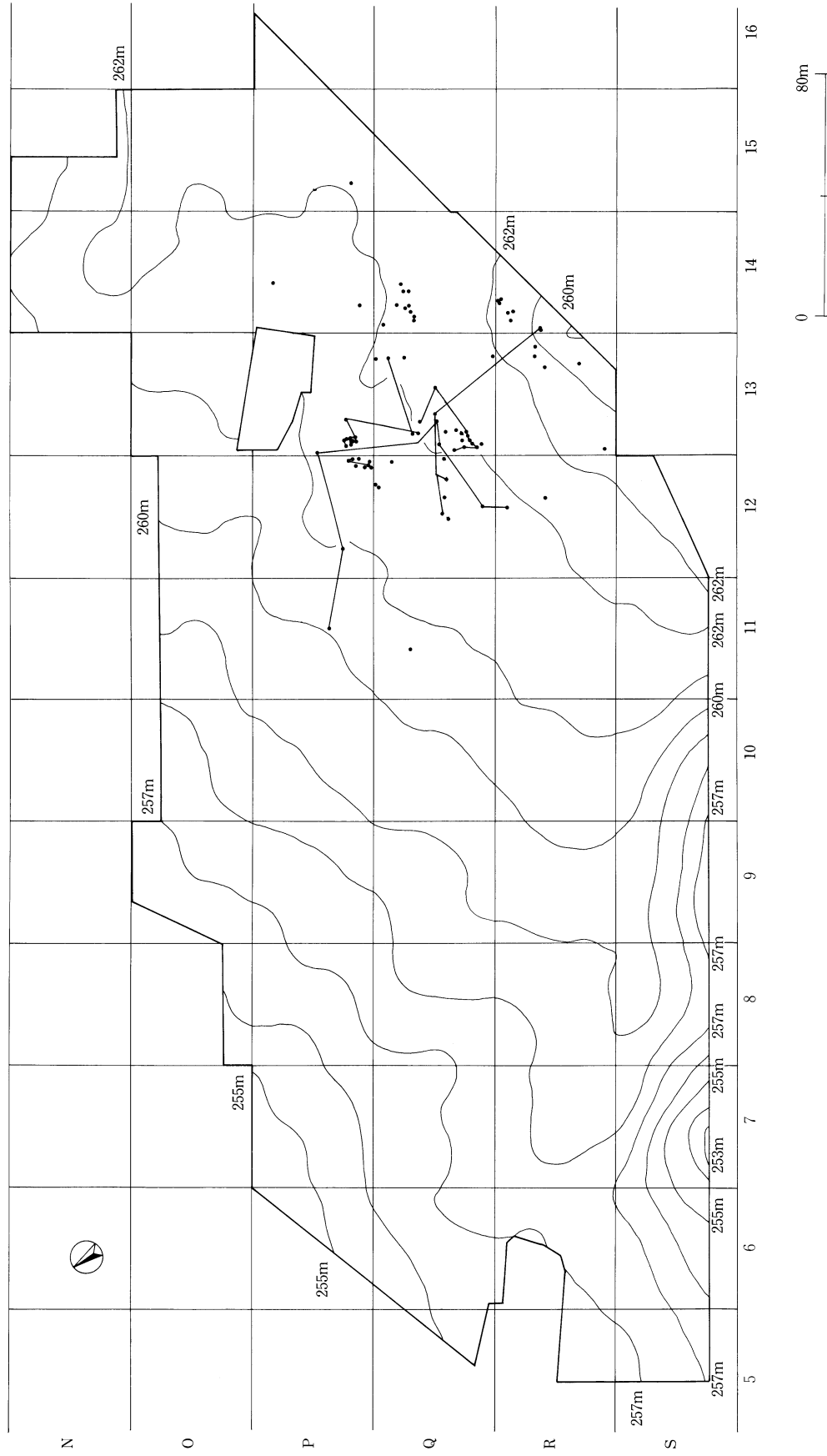
第2群3類に属する土器の器形的特徴は次のとおりである。まず、口縁部については第2群の口縁部の基本的器形と概ね一致する。すなわち口縁形態は平口縁を呈し、口縁部は若干内湾し、口唇部は内傾する平坦面を作出する、という特徴を挙げることができる。次に、胴部形態では直線的にすぼまる土器(41・43・44)と、湾曲しながらすぼまる土器(42)

との2つのタイプに分けることが可能である。さらに底部形態では上野原遺跡第10地点においては、明瞭に第2群3類に属すると判断できる底部は出土しなかったものの、平底を呈すると考えられる。

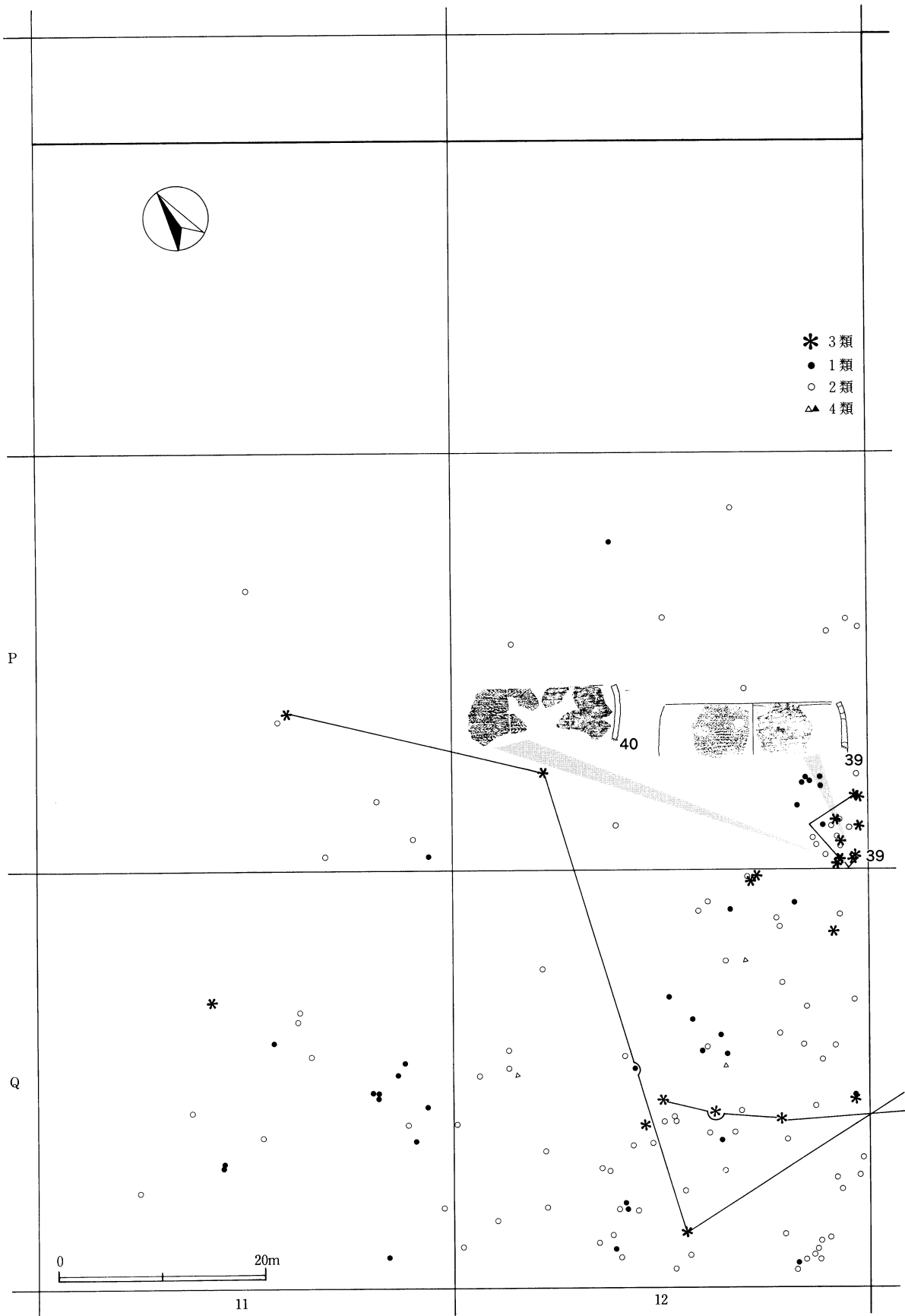
以上のことから第2群3類の土器器形は、下剥峯式土器の基本的器形に近いと考えられる。

さて、第2群3類に属する土器の施文方法の特徴としては、口縁(上端)部から胴部上半には、ヘラ状工具を用いて、横位方向に施す羽状文と横位方向に3~4条巡らした連続押し引き文とを交互に施文する点を挙げることができる(第38図39~41)。

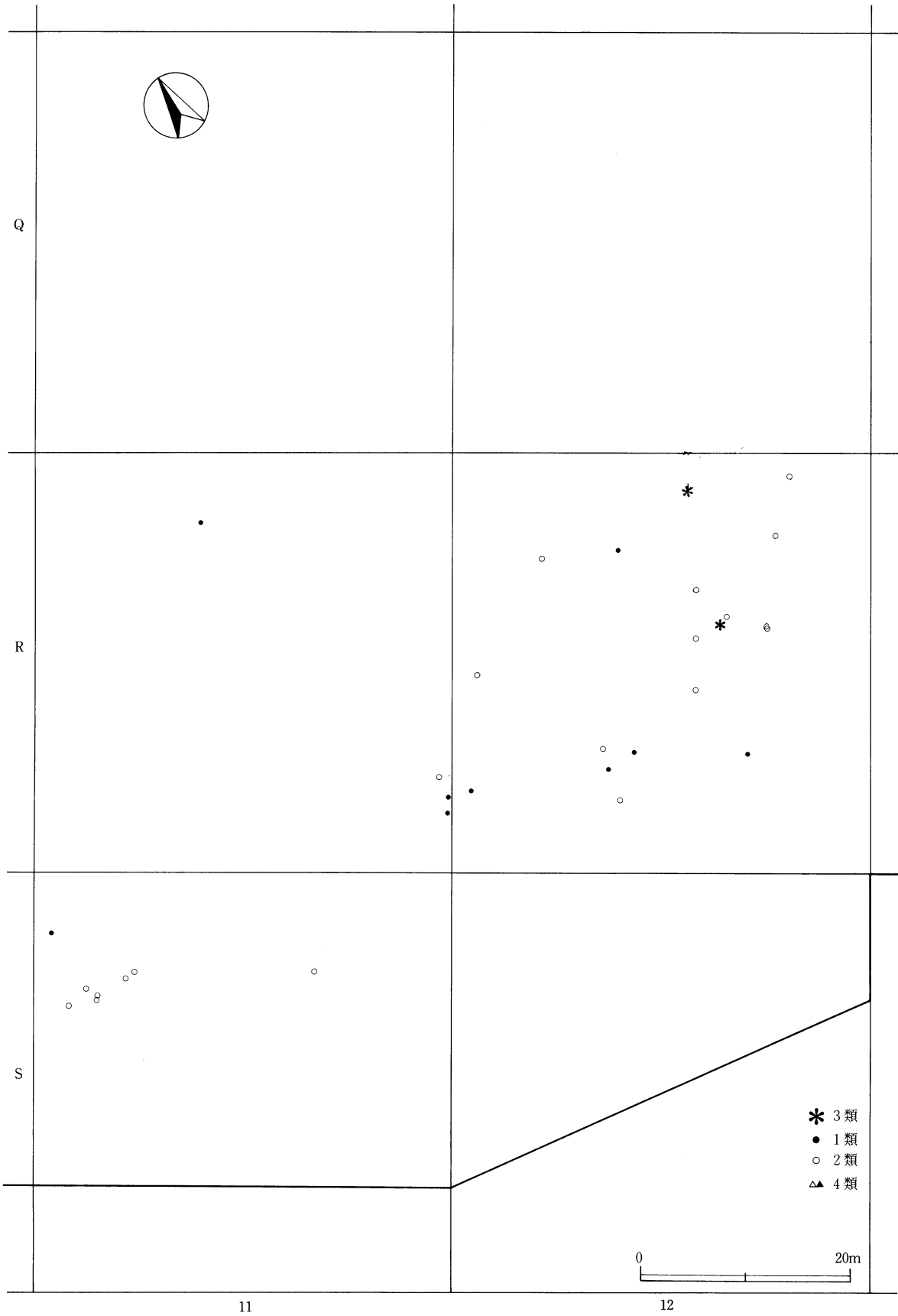
(p.54へ続く)



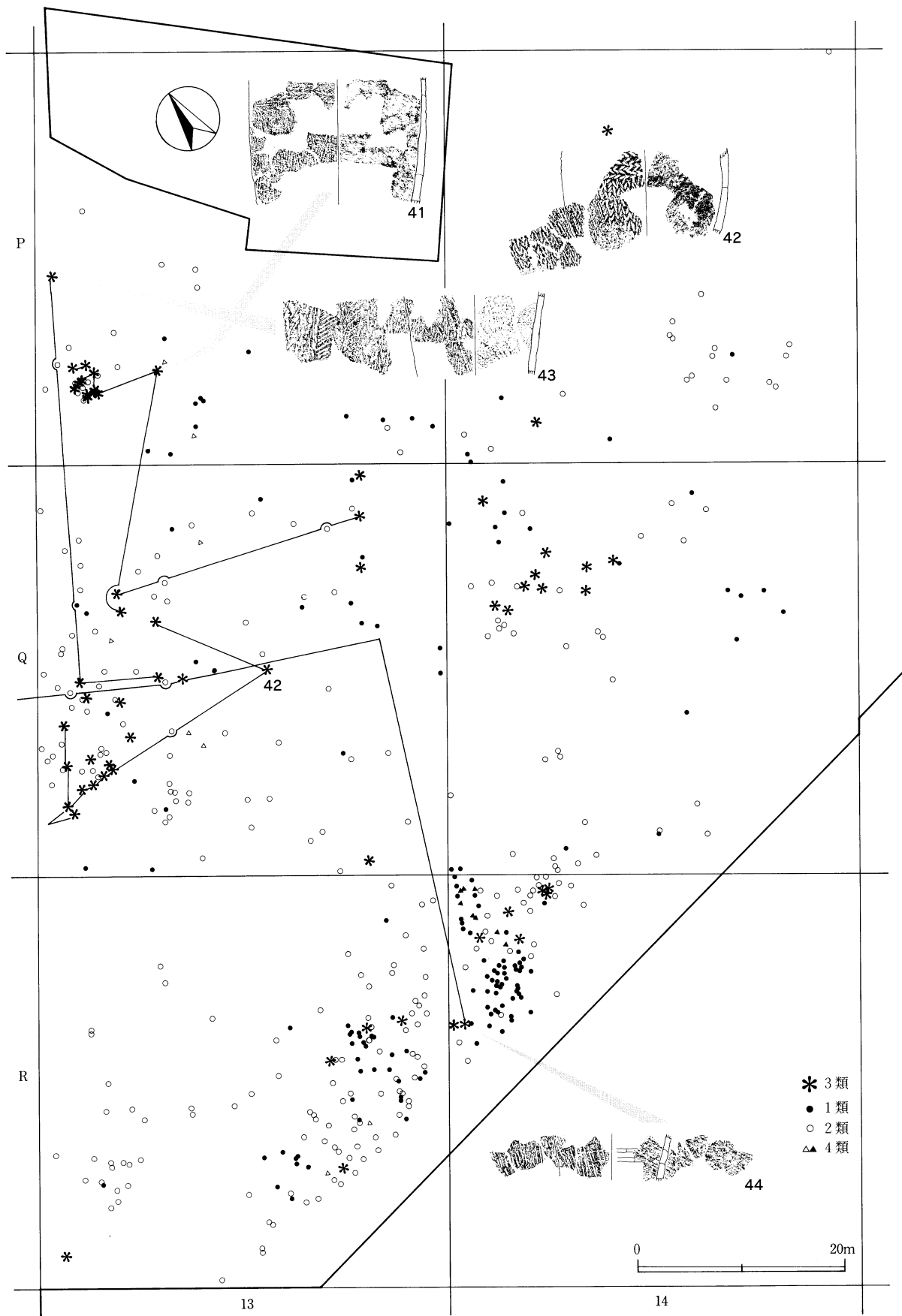
第33図 下剥峯式土器 3 類出土状況全体図



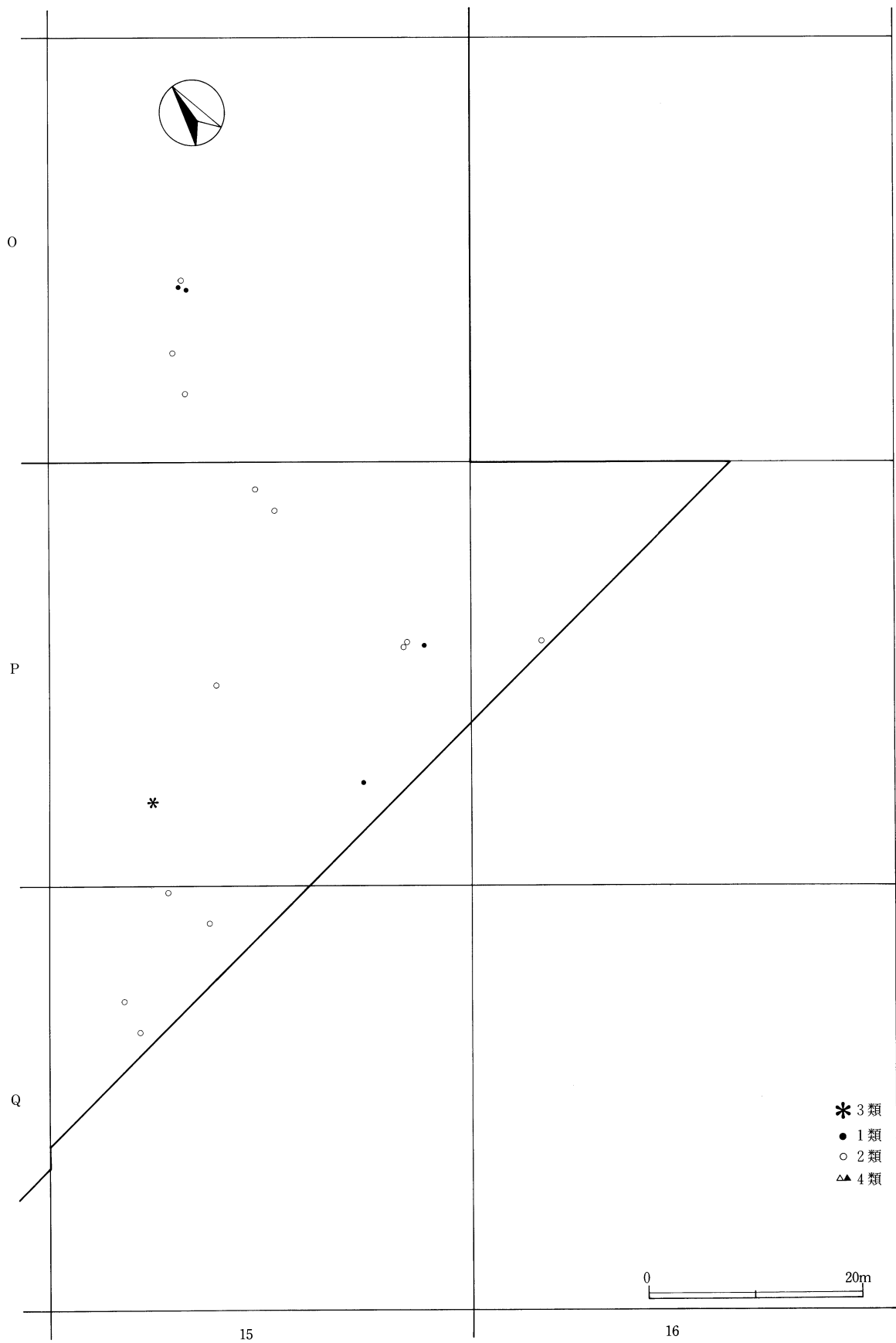
第34図 下剥峯式土器 3類出土状況図1 (O・P・Q-11・12区)



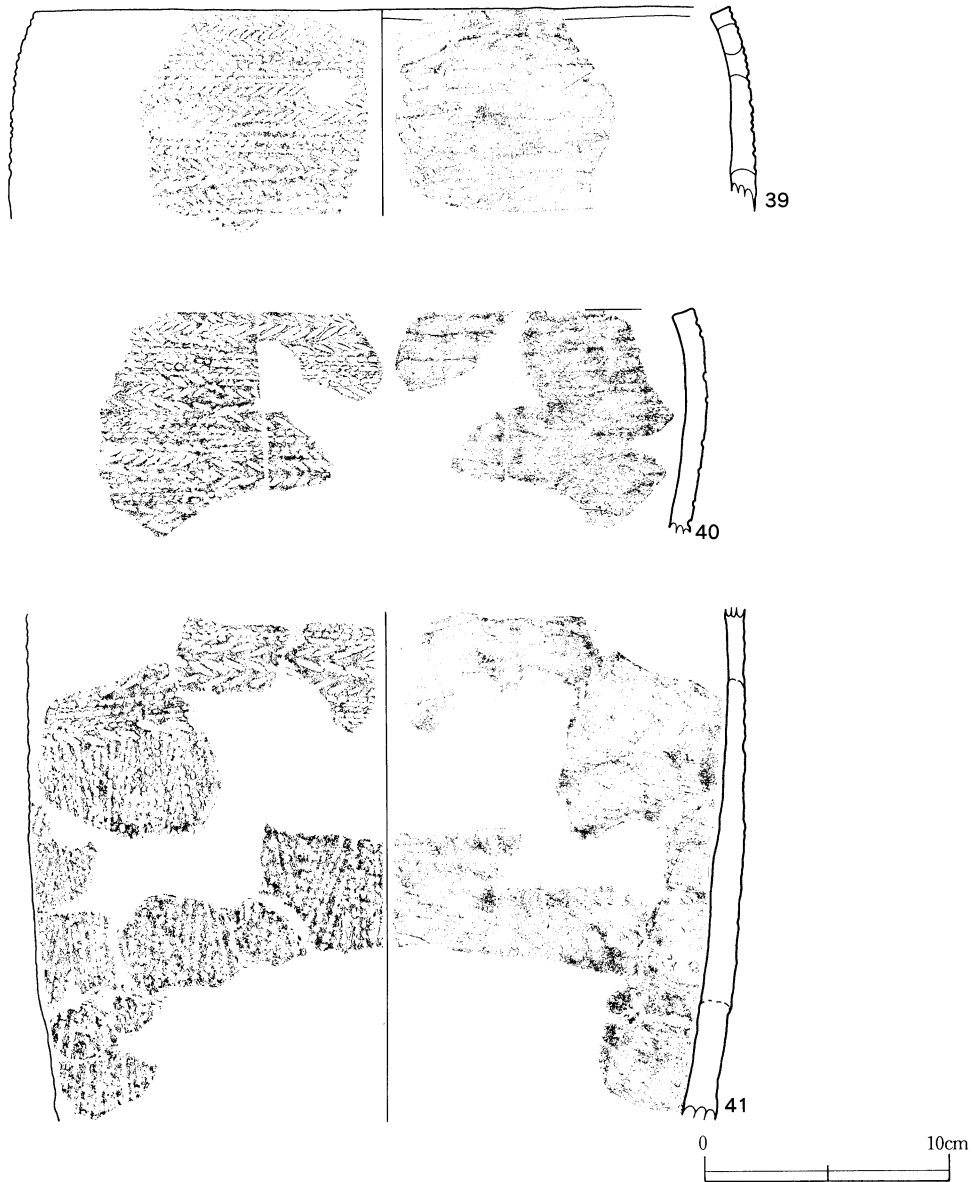
第35図 下剥峯式土器3類出土状況図2 (R·S-11·12区)



第36図 下剥峯式土器 3類出土状況図 3 (P・Q・R-13・14区)



第37図 下剥峯式土器 3類出土状況図 4 (O・P・Q-15・16区)



第38図 下剥峯式土器 3類実測図(1)

(p.48から続く)

さらに胴部下半には、貝殻を用いて連続した刺突文（貝殻刺突文線）により縦位方向に羽状文を施文する部分と、ヘラ状工具を用いて縦位方向に羽状文や連続押し引き文を施文する部分とを、交互に施しながら胴部全面に横位方向に施文している点を挙げることができる（第38図41、第39図42～44）。

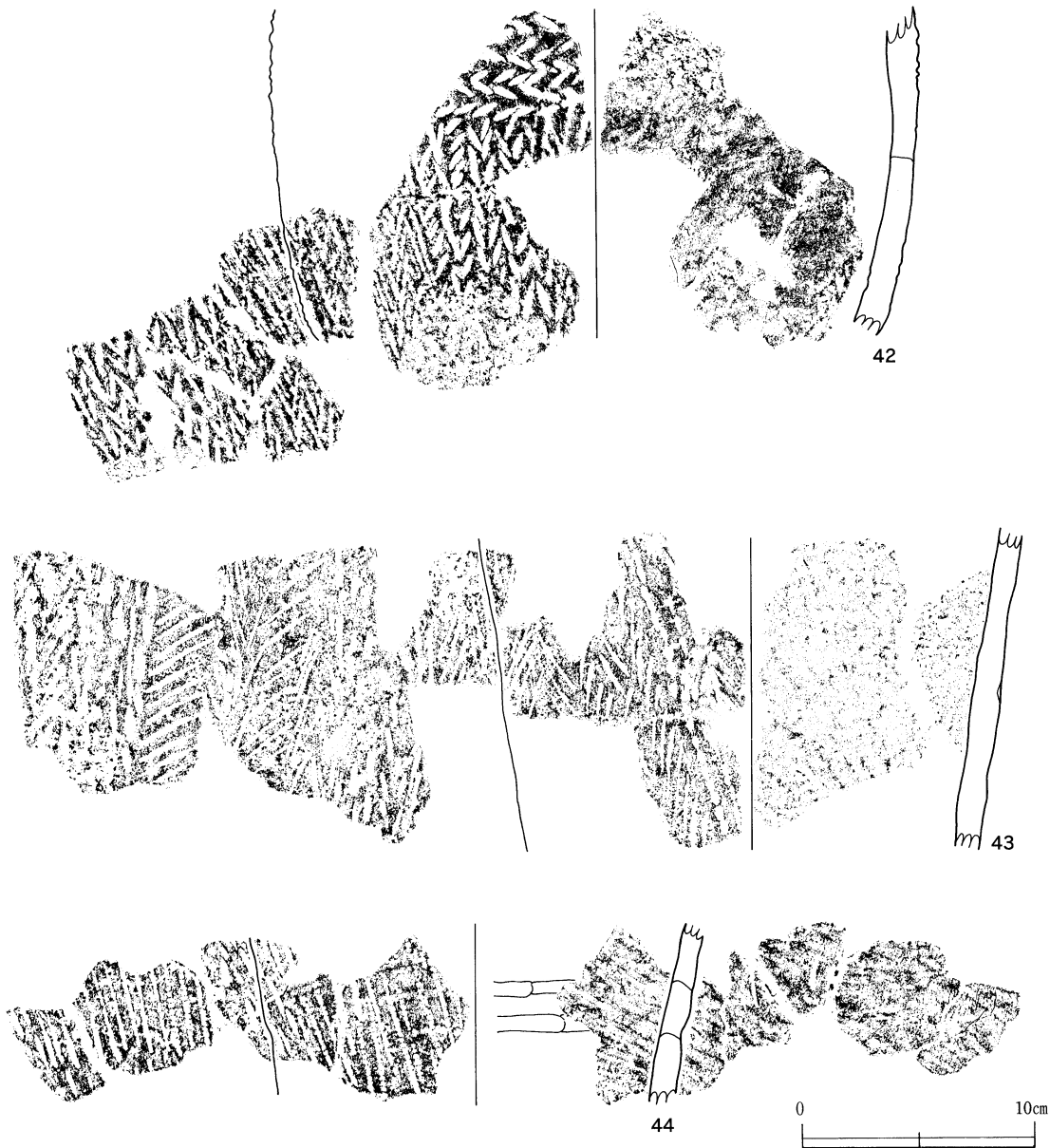
この第2群3類の文様構成は非常に珍しいタイプの土器である。

さて、第2群3類の土器胎土中に含まれる鉱物は、主に石英・長石・角閃石で構成される土器と、主に

石英・長石・クローンモで構成される土器とがあった。しかし、土器胎土による分類と、器形による分類との間には、相関関係は見られなかった。

また、土器の調整方法は外器面ではナデ調整を行うことが主流であるが、中には木製工具を使用したと考えられるハケ目調整の後にナデ調整を行う土器も見られた。内器面ではミガキ調整やケズリ調整を行う土器も見られたが、ハケ目調整の後にナデ調整を行う土器が主流であった。

(p.55へ続く)



第39図 下剥峯式土器3類実測図(2)

(p.54から続く)

さて、土器の色調は外器面、内器面共に茶褐色や暗茶褐色が主流であった。

ところで、第2群3類に属する土器の出土状況全体図(第33図、第36図)を概観すると、

- ① P-13区南側を中心とする区域
- ② Q-13区南側を中心とする区域

の2箇所に集中区域が見られる。この双方の集中区域に属する土器は、その周辺に散布する土器と接合関係にある。このことからこの両集中区域は、当時の人々が生活する場であった、と言えよう。

#### ii) 小結

第2群3類に属する土器は、次の特徴を指摘できる。

- ① 第2群3類に属する土器器形は、ほぼ下剥峯式土器の範疇に属する器形である。
- ② 文様構成では、口縁部から胴部上半部の文様帯には横位方向の施文を、胴部下半の文様帯には全面にわたり縦位方向の施文を、施す点は下剥峯式土器の範疇にはいる。

(p.56へ続く)



下剥峯式土器3類土器観察表

採図 番号	報告 番号	出土 区	注記 番号	実測図 番号	層	器種	部位	岩 土				調整	内器面 調整	色 調		備考																
								石英	長石	角閃石	クローンモ			砂礫	外器面		内器面															
第 38 図	39	P-1-2	3715	152	VI	深鉢	口縁~胴部	○	○	○		砂粒を含む	ヨコハケ→ナデ	ケズリ→ナデ	暗茶褐色~茶褐色	茶褐色~黒褐色	口径28.8cm															
								40	P-1-2	3715	150	VI	深鉢	口縁~胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ミガキ、ハケ→ナデ	茶褐色~黒褐色	茶褐色~黒褐色									
															P-1-2	3716	VI	深鉢	口縁~胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ミガキ、ハケ→ナデ	茶褐色~黒褐色	茶褐色~黒褐色				
	P-1-2	3757	VI	深鉢	口縁~胴部	○	○																							○		砂粒を含む
	41	P-1-3	1331	146	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色~暗茶褐色	暗褐色~暗黄褐色	胴部径29.2cm															
																		P-1-3	1333	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色~暗茶褐色	暗褐色~暗黄褐色	胴部径29.2cm
																		P-1-3	1336	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色~暗茶褐色	暗褐色~暗黄褐色	胴部径29.2cm
																		P-1-3	1337	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色~暗茶褐色	暗褐色~暗黄褐色	胴部径29.2cm
																		P-1-3	1338	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色~暗茶褐色	暗褐色~暗黄褐色	胴部径29.2cm
																		P-1-3	1340	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色~暗茶褐色	暗褐色~暗黄褐色	胴部径29.2cm
																		P-1-3	2652	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色~暗茶褐色	暗褐色~暗黄褐色	胴部径29.2cm
	第 39 図	42	Q-1-3	155	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を多く含む	ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色~黒褐色	茶褐色~暗褐色	胴部径28.4cm															
Q-1-3																		5713	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を多く含む	ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色~黒褐色	茶褐色~暗褐色	胴部径28.4cm	
Q-1-3																		7216	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を多く含む	ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色~黒褐色	茶褐色~暗褐色	胴部径28.4cm	
Q-1-3																		7602	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を多く含む	ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色~黒褐色	茶褐色~暗褐色	胴部径28.4cm	
Q-1-3																		8372	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を多く含む	ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色~黒褐色	茶褐色~暗褐色	胴部径28.4cm	
Q-1-3																		8967	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を多く含む	ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色~黒褐色	茶褐色~暗褐色	胴部径28.4cm	
Q-1-3																		9840	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を多く含む	ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色~黒褐色	茶褐色~暗褐色	胴部径28.4cm	
Q-1-3																		10558	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を多く含む	ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色~黒褐色	茶褐色~暗褐色	胴部径28.4cm	
Q-1-3																		10561	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を多く含む	ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色~黒褐色	茶褐色~暗褐色	胴部径28.4cm	
Q-1-3																		10925	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を多く含む	ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色~黒褐色	茶褐色~暗褐色	胴部径28.4cm	
第 39 図	43	P-1-1	157	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を多く含む	ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色~暗黄褐色	暗茶褐色~暗褐色	胴部径23.6cm																
																	P-1-1	1001	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を多く含む	ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色~暗黄褐色	暗茶褐色~暗褐色	胴部径23.6cm	
																	P-1-2	1253	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を多く含む	ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色~暗黄褐色	暗茶褐色~暗褐色	胴部径23.6cm	
																	P-1-3	109	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を多く含む	ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色~暗黄褐色	暗茶褐色~暗褐色	胴部径23.6cm	
																	Q-1-2	6467	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を多く含む	ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色~暗黄褐色	暗茶褐色~暗褐色	胴部径23.6cm	
																	Q-1-3	7995	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を多く含む	ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色~暗黄褐色	暗茶褐色~暗褐色	胴部径23.6cm	
																	Q-1-3	10099	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を多く含む	ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色~暗黄褐色	暗茶褐色~暗褐色	胴部径23.6cm	
																	R-1-2	1118	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を多く含む	ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色~暗黄褐色	暗茶褐色~暗褐色	胴部径23.6cm	
																	Q-1-2	7145	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色~暗黄褐色	黒褐色~暗褐色	胴部径19.5cm	
																	Q-1-2	7730	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色~暗黄褐色	黒褐色~暗褐色	胴部径19.5cm	
Q-1-3	7295	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色~暗黄褐色	黒褐色~暗褐色	胴部径19.5cm																		
R-1-4	1117	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色~暗黄褐色	黒褐色~暗褐色	胴部径19.5cm																		

(p.55から続く)

以上、2点のことから第2群3類に属する土器群を下剥峯式土器の範疇として分類した。しかし、以下の点は下剥峯式土器の範疇とは異なる。

③ 第2群の基本的施文工具は貝殻を使用するのに対して、第2群3類に属する土器は、ヘラ状工具と貝殻とを使用する。

この点については、①の点と②の点とをより重視した結果、第2群3類の土器群は下剥峯式土器の範疇にはいる、と判断した。

さらにこの③の点は、第2群2類と共通する要素である。しかし、施文具と施文部位との関係に注目すると、第2群2類に属する土器ではヘラ状工具の使用が口縁部文様帯に限られる。それに対して、第2群3類に属する土器ではヘラ状工具の使用が下位の文様帯にまで及んでいる。この違いは重要な違いであると認識する。

## ②-4 第2群(下剥峯式土器)4類

(第40図~第43図)

### i) 概要

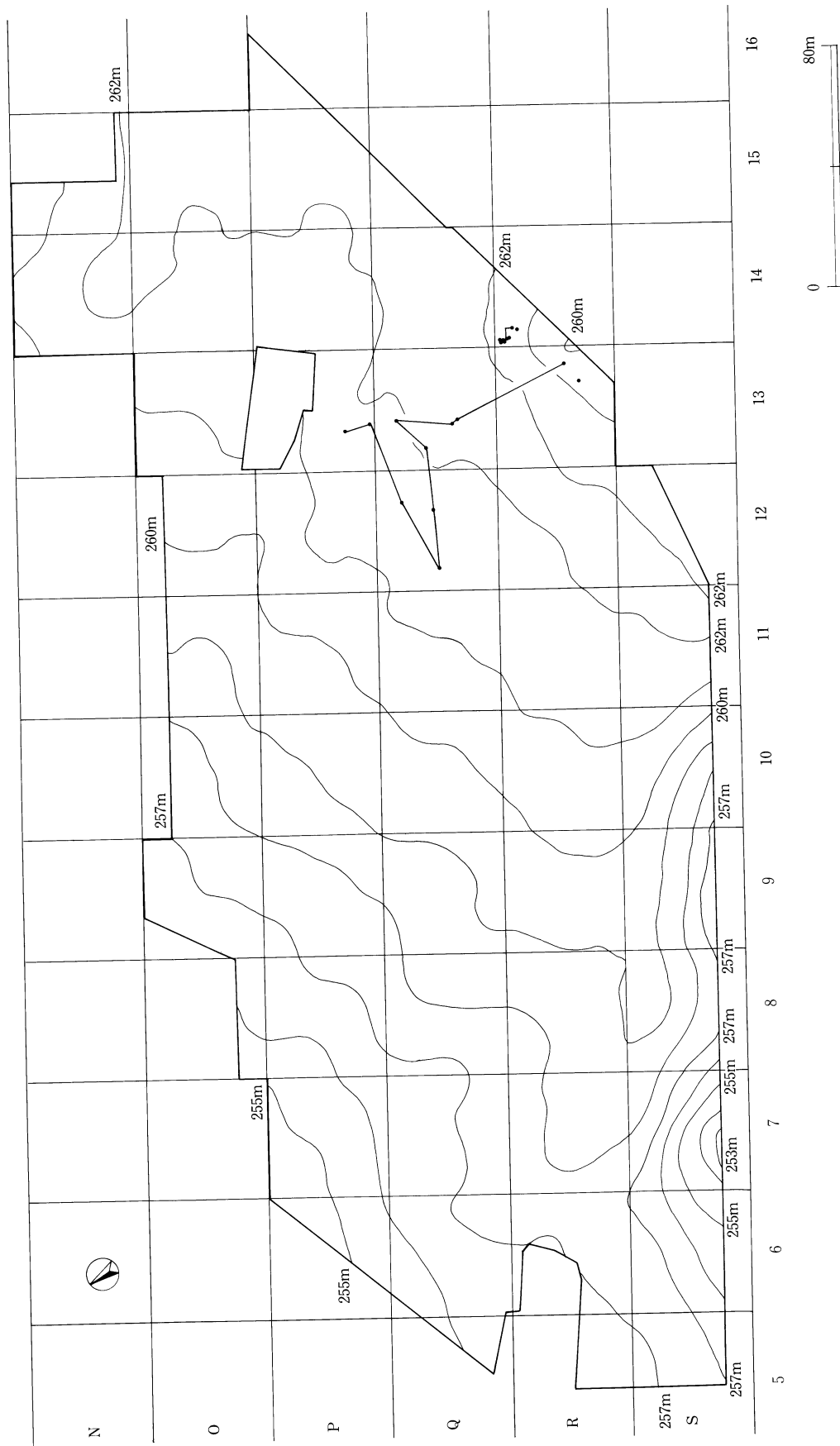
第2群4類に属すると判断した土器片は、20点出土し、そのうち2個体・12点を資料化した。

第2群4類に属する土器の器形的特徴としては、口縁形態は平口縁を呈する。(45)は口縁部が若干内弯し、口縁上端部外面はほぼ45°の角度で丸く削られ、口縁部の内弯形態がさらに強調されている。胴部は直線的にすぼまる器形を呈する。一方、(46)は口縁部はほぼ直行し口唇部は水平な平坦面を作出する。胴部は弯曲しながらすぼまる。

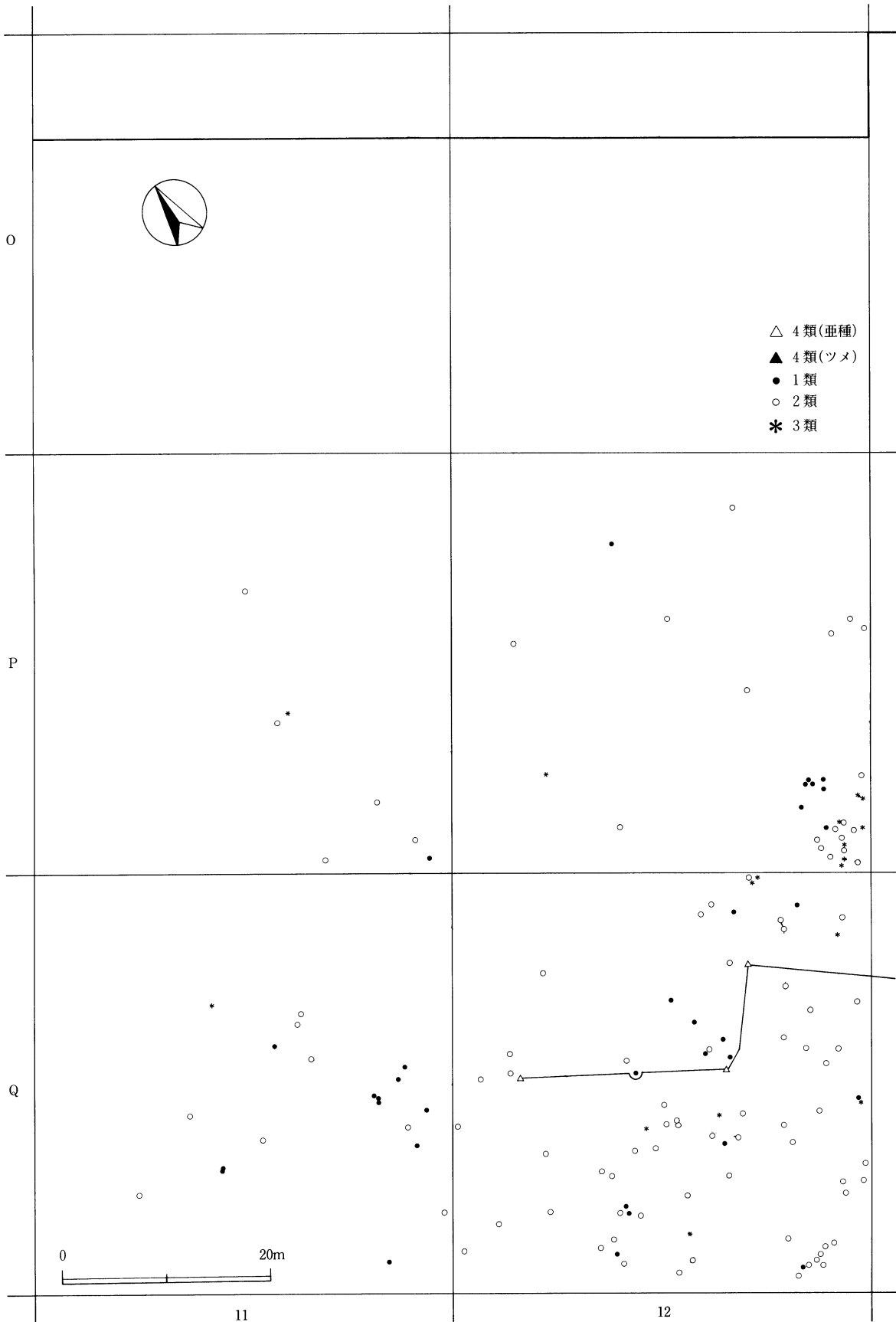
施文の特徴としては、先述したように、ヘラ状工具を用いて口縁(上端)部から胴部全面にかけて、縦位方向に押し引き文を施したり、横位方向に鋸歯文を施す点を挙げることができる。

以上の特徴は、施文具の種類を除いて、第2群1類の特徴と同様の特徴である。従って本類は、第2群1類の亜種と考えることが可能であるが、施文具の違いは属性上大きな違いであり、新たな類をたてた。

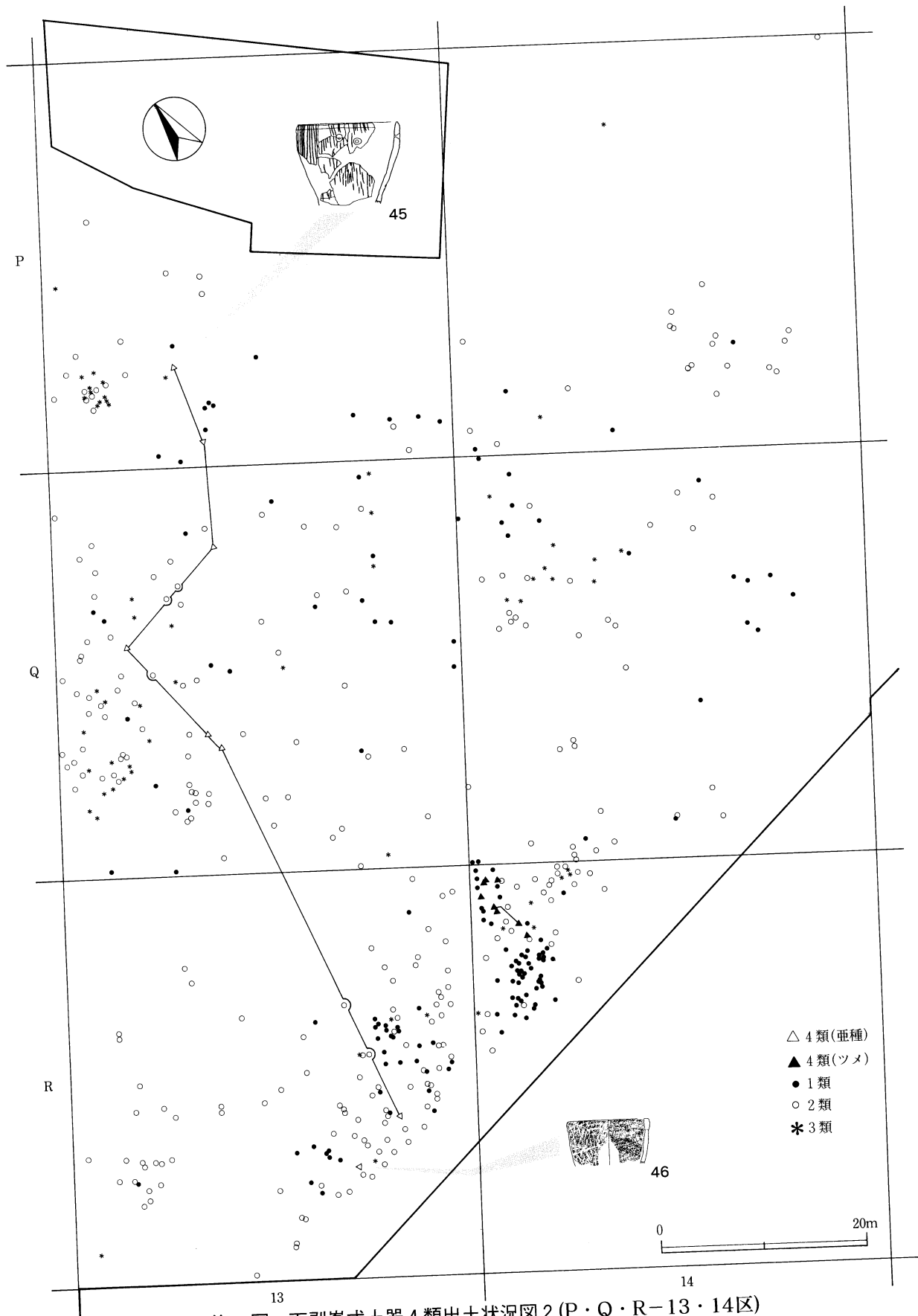
本類については類例の増加を待ちたい。



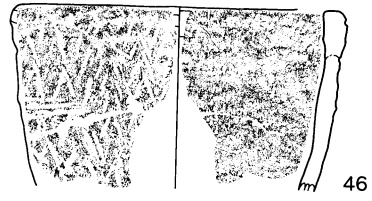
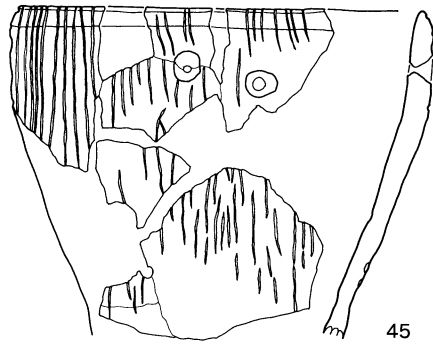
第40図 下剥崖式土器 4 類出土状況全体図



第41図 下剥峯式土器4類出土状況図1 (P・Q-11・12区)



第42図 下剥峯式土器4類出土状況図2 (P・Q・R-13・14区)



第43図 下剥峯式土器 4類実測図

### ③ 第3群 桑ノ丸式土器 (第44図～第56図)

#### i) 概要

第3群に属すると判断した土器片は、196点出土し、そのうち23個体・72点を資料化した。

第3群は、「器形は口縁部が内湾し、口縁形態は平口縁を呈し、口唇部は内傾し、底部は平底を呈し、胴部に移行するにしたがってかなりふくらみをもつ土器である。施文は、貝殻状の施文具で櫛描状に沈線文を施す」と、定義されている、新東晃一氏により設定された土器である。鹿児島県始良郡溝辺町に所在する桑ノ丸遺跡から出土した第3類土器を標識とする土器である。

本類に分類した土器の器形的特徴は、概ね定義した範疇に入る土器群である。一方、本報告では文様構成の違いを種類の豊富さと捉え、特に細分を行わなかった。

しかし、概ね以下の3類に分けることができる。

a：施文的特徴として、口縁部から胴部にかけて全面に施文し、施文具として貝殻腹縁部を使用し、まず口縁端部に右下がりの押し引き文を横位方向にある程度の回数にわたり施文した後に、その直下に左下がりの押し引き文を横位方向に施文することで、見かけ上、羽状文を施す土器である (第53図1～7)

b：施文的特徴として、口縁部から胴部にかけて全面に施文し、施文具として貝殻腹縁部を使用し、施文は底部側から口縁部側へ押し引く土器である (第54図8～13)。この類に属する土器の器形的特徴として、口唇部が内傾するという基本的器形は共通するが、口縁部が内湾する土器の他に、外反する土器や直行する土器などがある。

c：施文的特徴では口縁部から胴部にかけて、貝殻腹縁部を使用して、口縁部側から底部側に向けて流水状に押し引く土器である (第55図14～18)。器形的特徴は、基本的器形の土器である。

以上の3類に分類できた。

さて、第3群の土器胎土中の鉱物は、概ね石英・長石・角閃石で構成されており、クローンモを含む土器はわずかであった。また、土器の調整方法は外器面はナデ調整が主流であった。一方、内器面はミ

ガキ調整に近い丁寧なナデ調整が主流であったが、ケズリ調整を行った後にナデ調整を行う土器や、木製工具を使用した横方向のハケ目調整を行った後に丁寧なナデ調整を行う土器も、見受けられた。また、土器の色調は外器面では茶褐色を、内器面では暗茶褐色を呈する土器が主流であった。

ところで、出土状況全体図を概観すると、第3群土器のうちa類土器とc類土器とは、主に標高260mから258mにかけての、R・S-9区を中心とする発掘区画南側の区域に集中して出土する傾向がある (第44～51図参照)。この区域は、北向きの緩傾斜地の中程の区域で、台地が鹿児島湾 (錦江湾) に落ち込む南側急斜面の、縁辺部にあたる区域である。

一方、b類土器は標高262mの標高が一番高いテラ地西側にあたる、O・P-15区を中心とする区域に集中する傾向が見られた (第52図参照)。

さらに重要なことは、a類土器やc類土器が集中して出土した地域は、第6群の山形押型文土器や第7群の楕円押型文土器などの土器群が集中して出土した地域と重なっていることである。

その一方で、b類土器が集中して出土した地域には早期中葉の時期に属する土器がほとんど出土しておらず、他の土器型式とは分布域を異にしている、特異な土器群であることが指摘できる。

#### ii) 小結

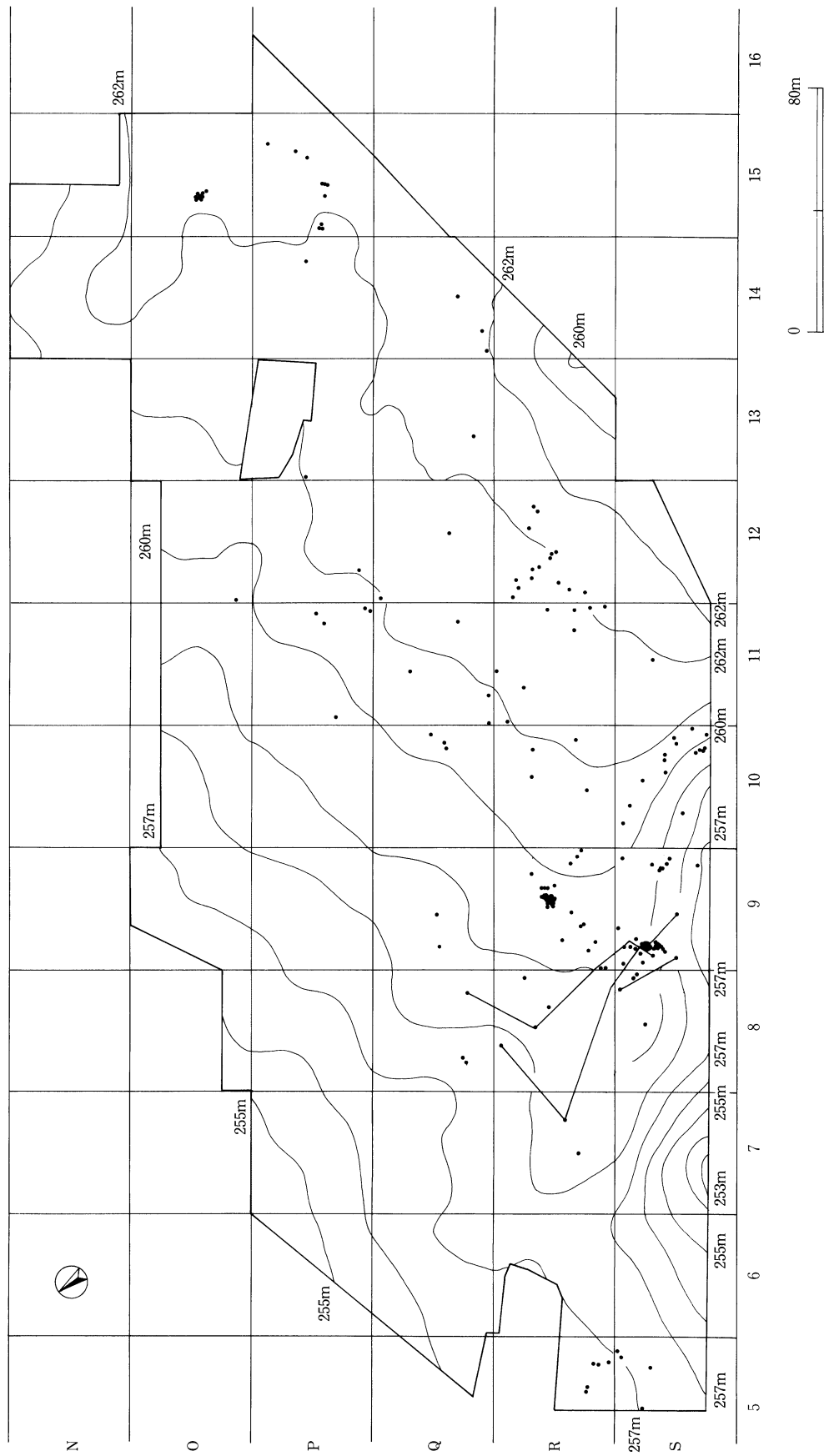
第3群に属する土器は、次の特徴を指摘できる。

① 第3群は、貝殻などの施文具で、櫛歯状に押し引いて施文する土器である。文様構成から羽状文を施すa類土器と、掻き上げによるスタレ状の文様を施すb類土器と、そして流水状の文様を施すc類土器とに、分けられる。

② 第3群土器の出土分布の状況から、

- ・ a類土器やc類土器を使用した人々は、主に発掘区画南側のR・S-9区を中心とする区域に生活の場を設けていたこと、
- ・ b類土器を使用した人々は、主に発掘区画西側のO・P-15区を中心とする区域に生活の場を設けていたこと、

が想定できることをこの項では指摘しておく。

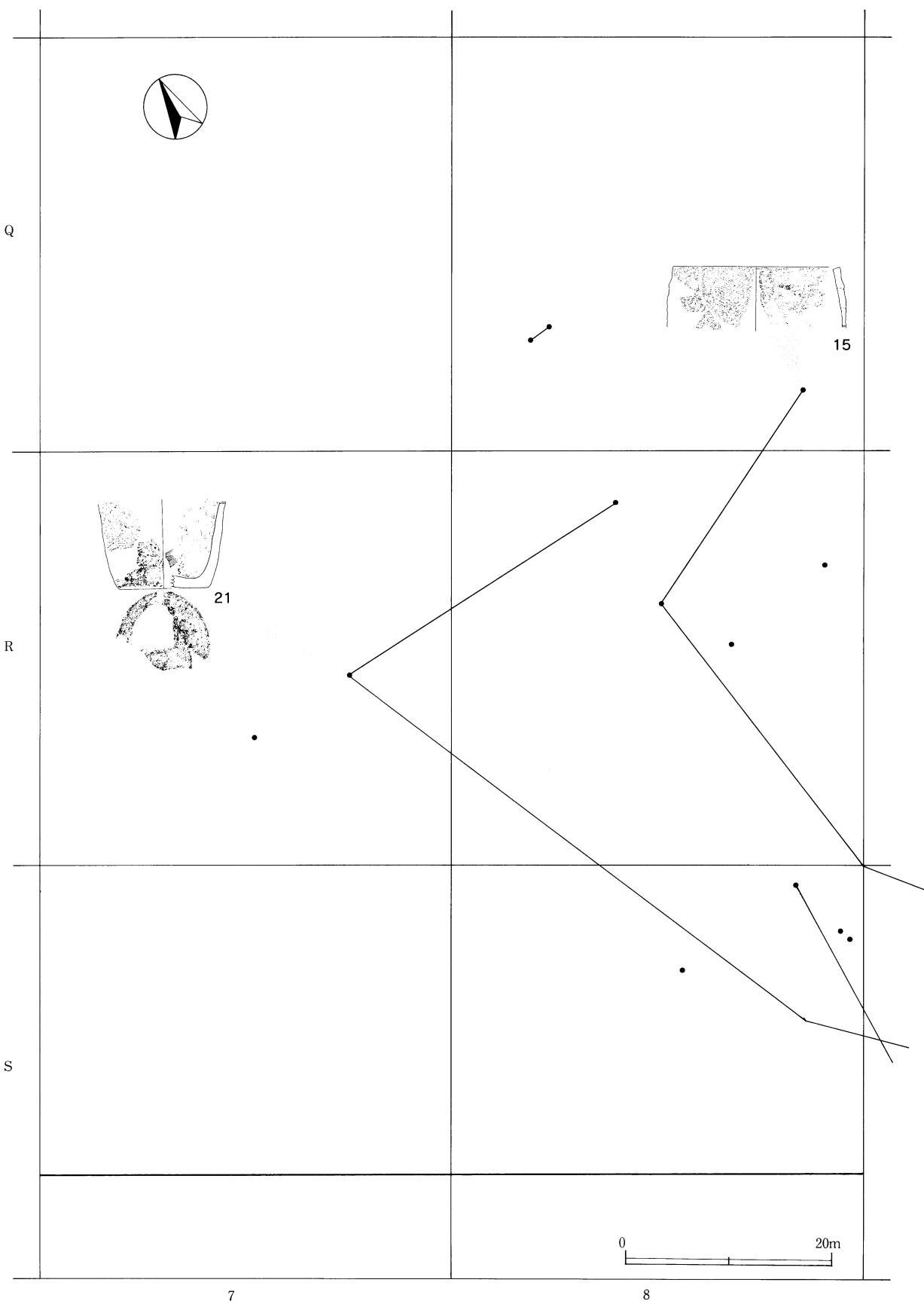


第44図 桑ノ丸式土器出土状況全体図

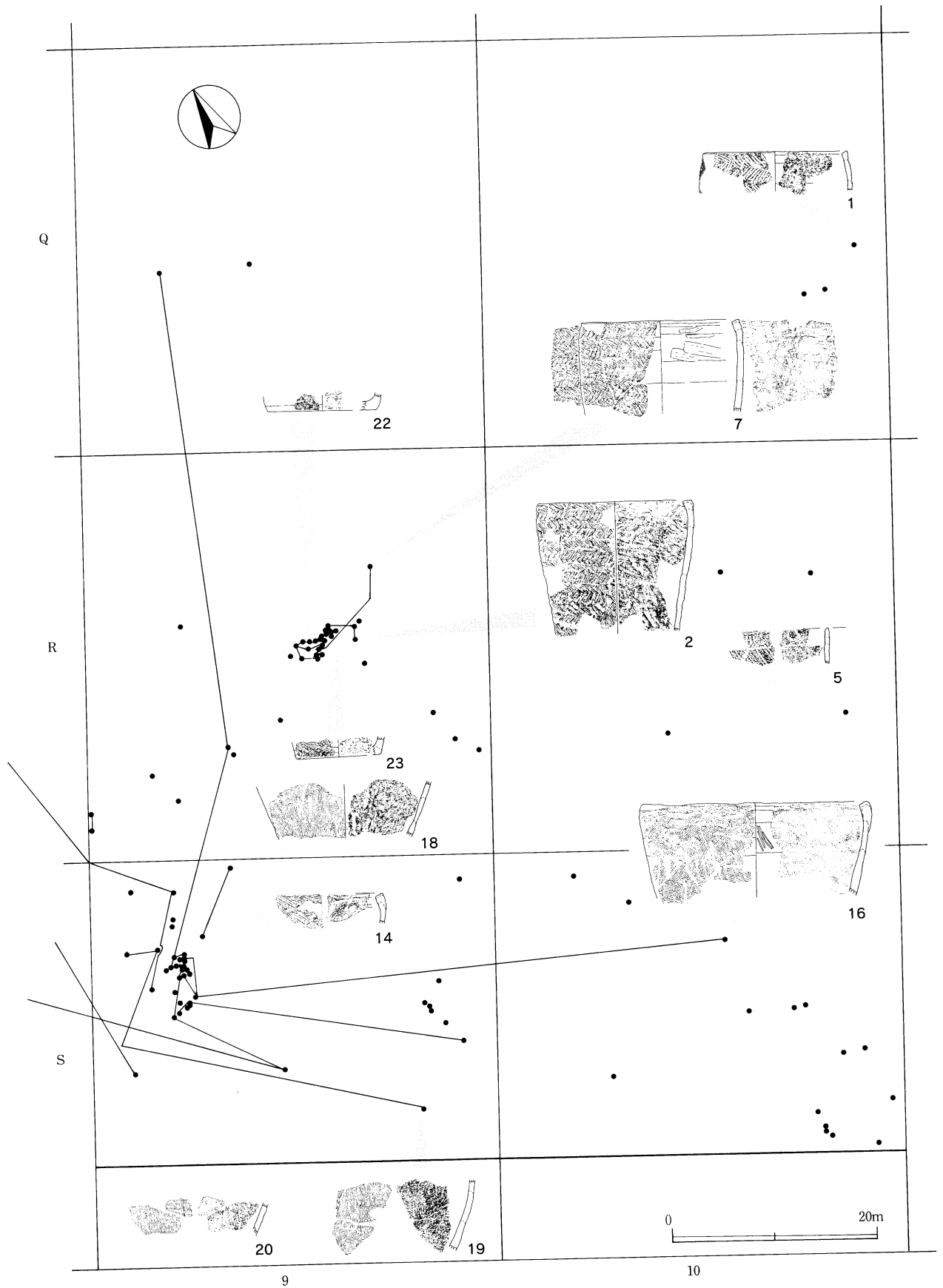


第45図 桑ノ丸式土器出土状況図1 (Q・R・S-5・6区)

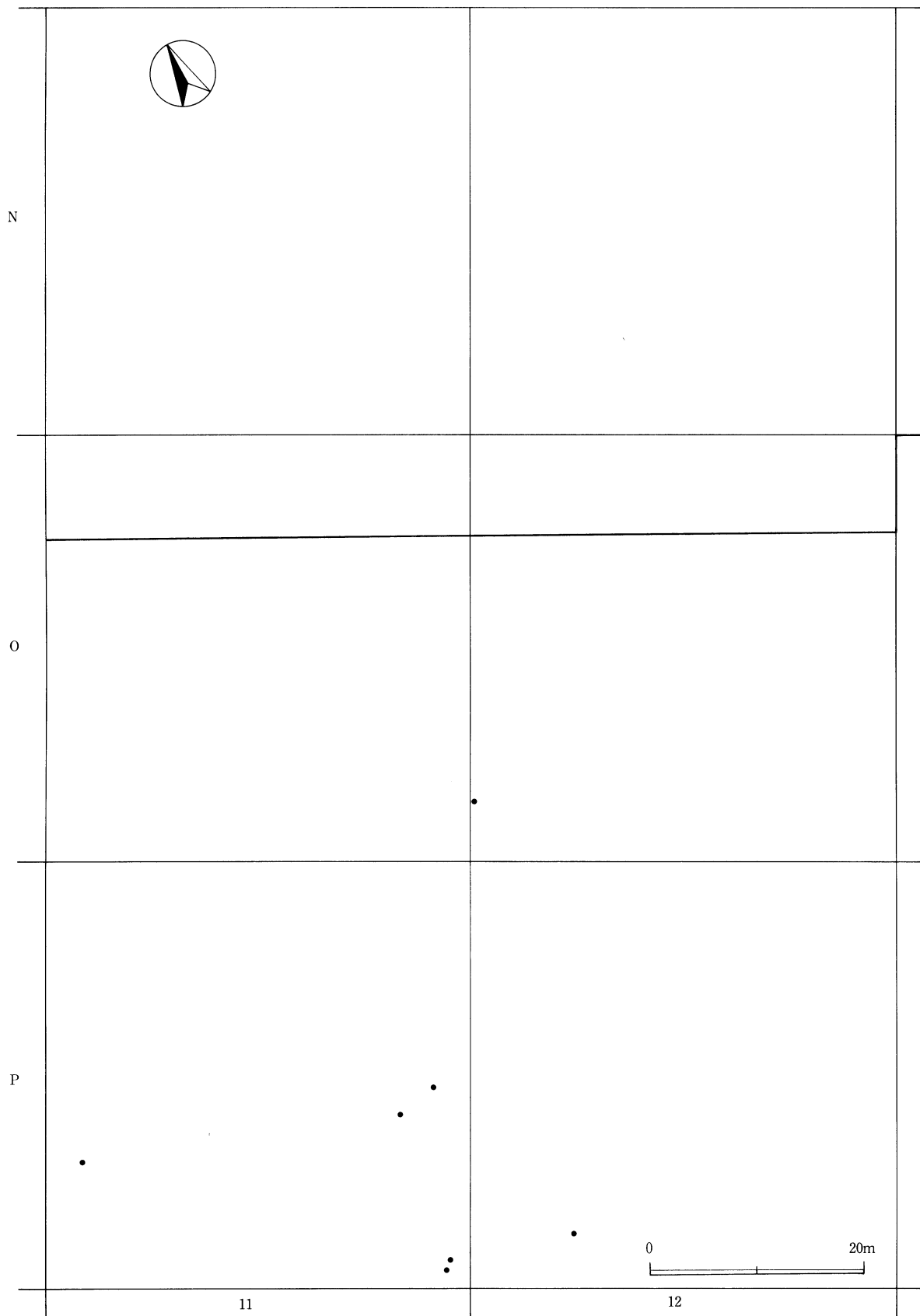




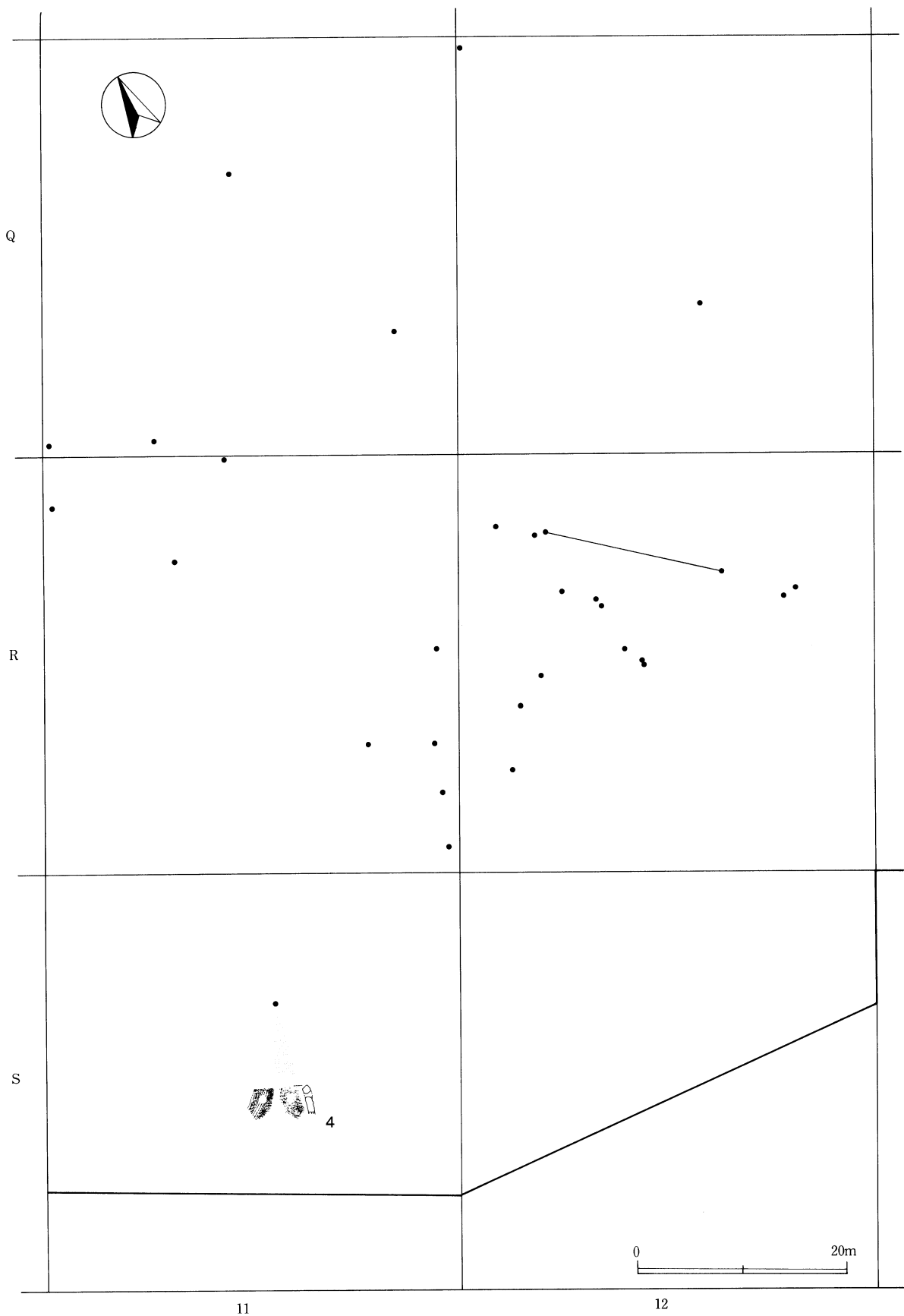
第46図 桑ノ丸式土器出土状況図2 (Q・R・S-7・8区)



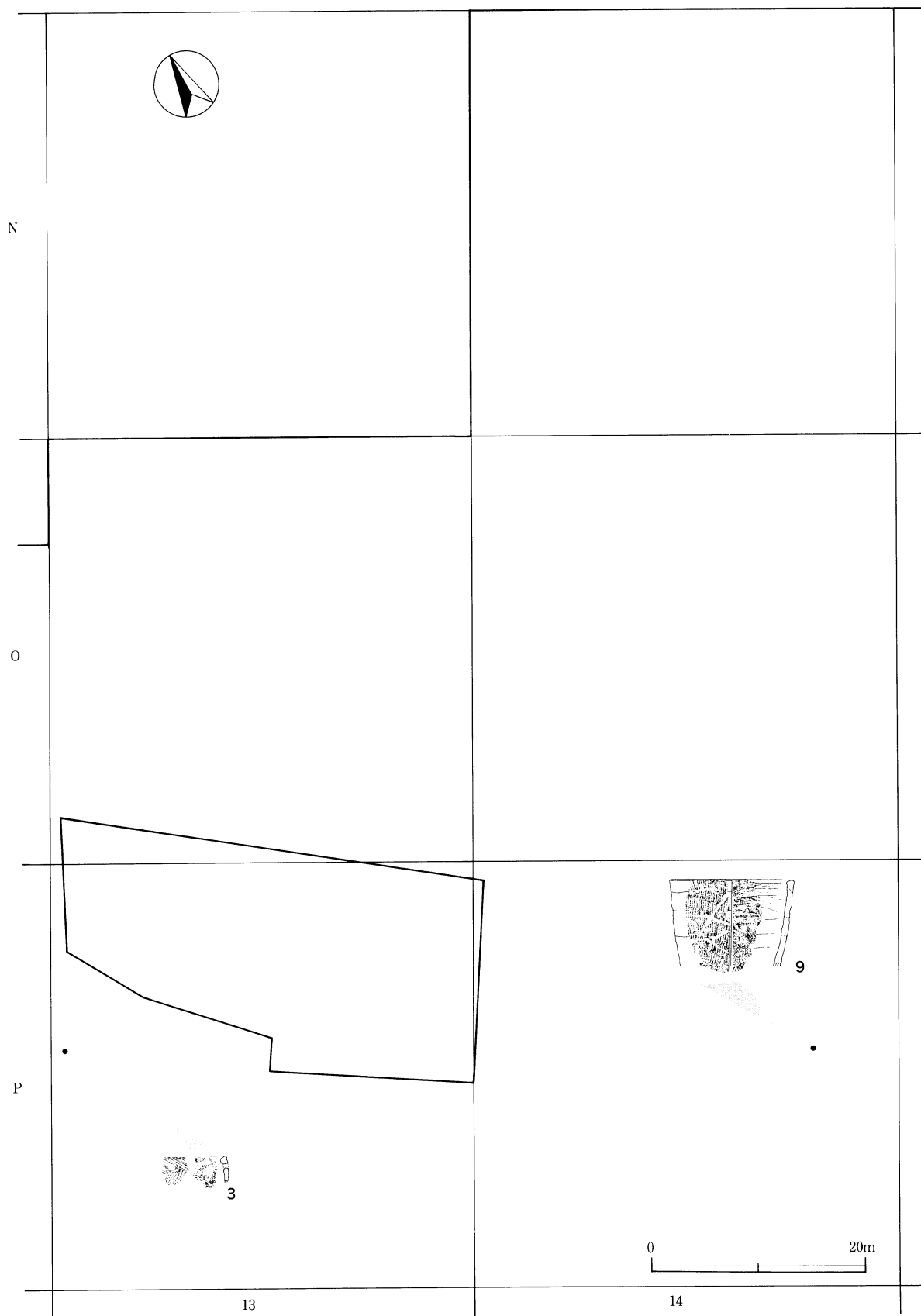
第47図 桑ノ丸式土器出土状況図3(Q・R・S-9・10区)



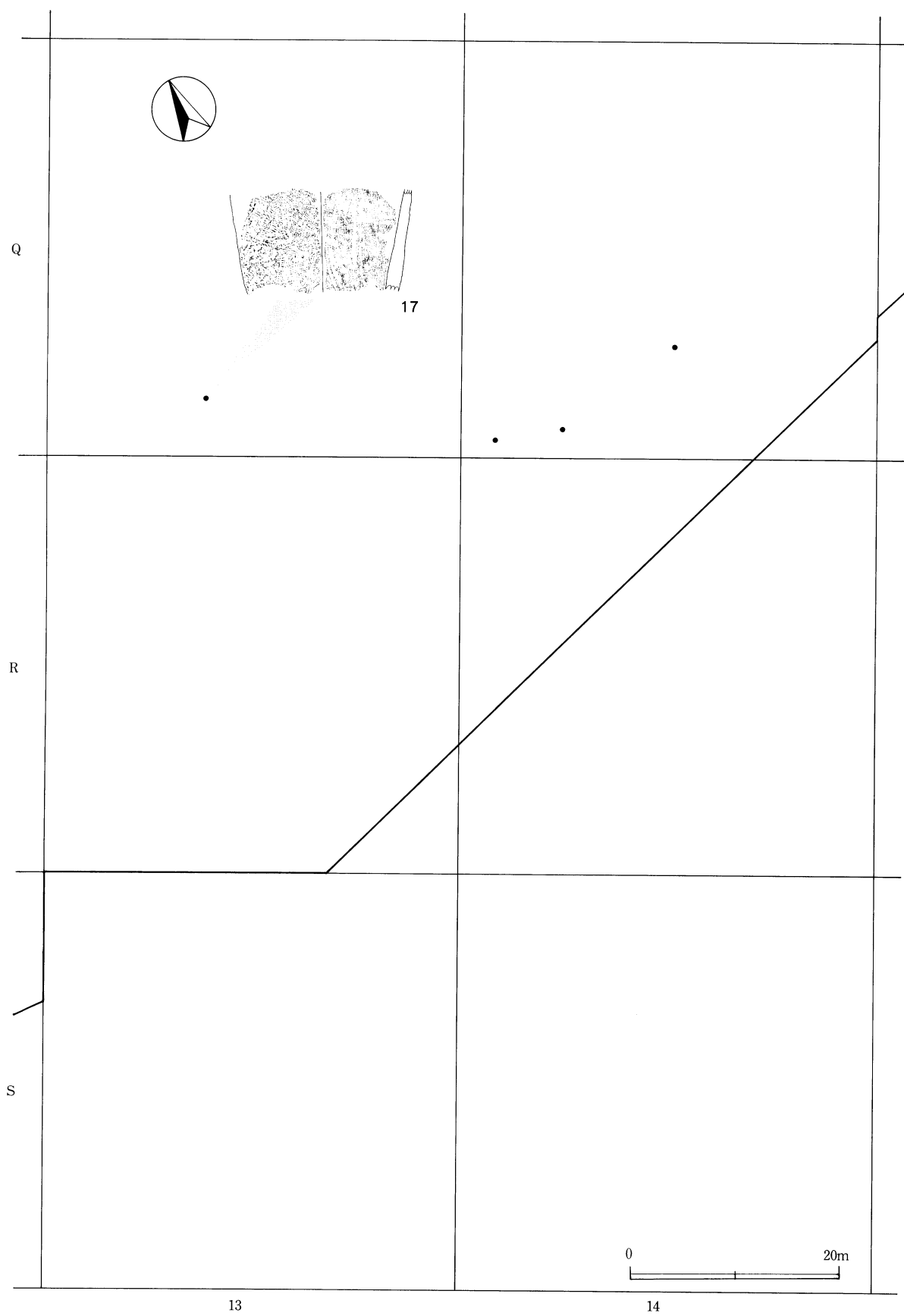
第48図 桑ノ丸式土器出土状況図4 (N・O・P-11・12区)



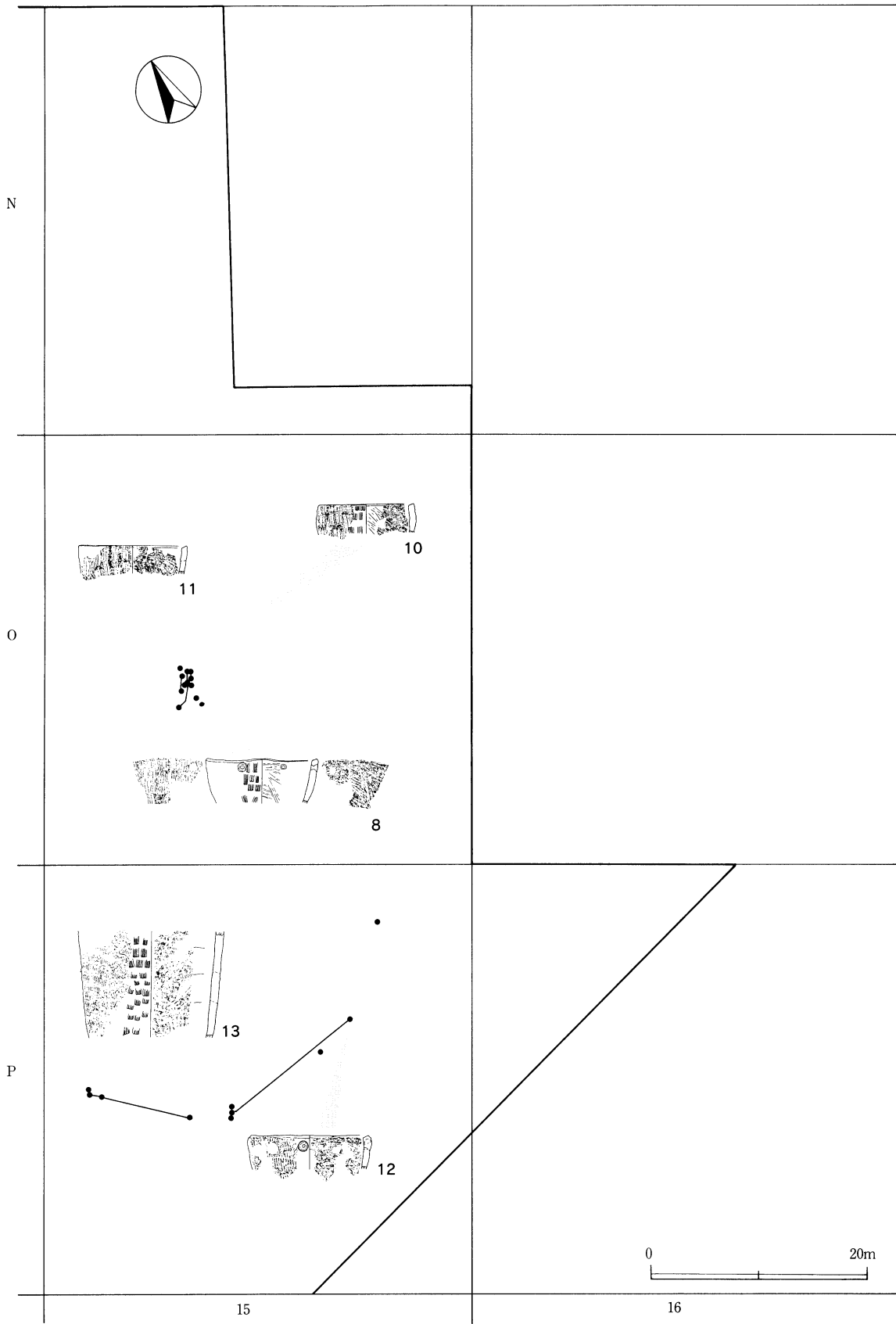
第49図 桑ノ丸式土器出土状況図5 (Q・R・S-11・12区)



第50図 桑ノ丸式土器出土状況図6 (N・O・P-13・14区)



第51図 桑ノ丸式土器出土状況図7 (Q・R・S-13・14区)



第52図 桑ノ丸式土器出土状況図8 (N・O・P-15・16区)

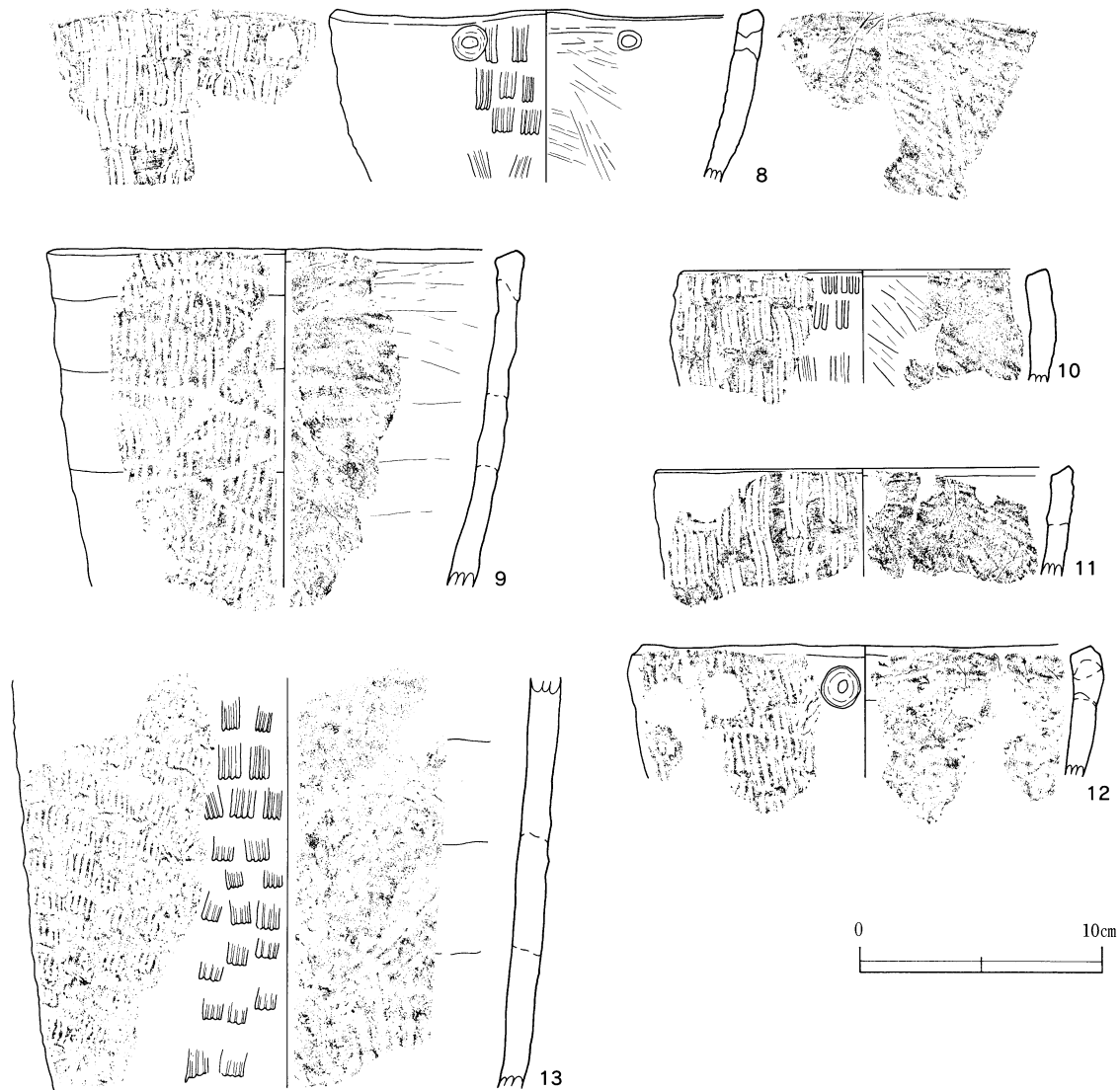


第53図 桑ノ丸式土器実測図（1）

桑ノ丸式土器観察表（1）

種因 番号	報告 番号	出土 区	注記 番号	実測図 番号	層	器種	部位	胎土					外器面 調整	内器面 調整	色調		備考		
								石英	長石	角閃石	クローンモ	砂礫			外器面	内器面			
								○	○	○									
第 53 図	1	Q-10 S-10	3199 332	193	VI VI	深鉢	口縁	○	○	○			砂粒を含む	ナデ	ヨコハケ→丁寧なナデ	茶褐色～暗褐色	暗茶褐色	口径24.0cm	
		R-09 R-09 R-09 R-09 R-09 R-09 R-09 R-09 R-09 R-09 R-09 R-09 R-09 R-09 R-09 R-09 R-09 R-09 R-09	3755 4263 4264 4265 4290 4614 4636 4661 4666 4805 4806 4807 4809 4836 4854 4871	119	VI VI VI VI VI VI VI VI VI VI VI VI VI VI VI VI VI VI VI	深鉢	口縁～胴部	○	○	○			砂粒を含む	ナデ	ヨコハケ→丁寧なナデ	茶褐色～暗黄褐色	暗茶褐色～茶褐色	口径25.9cm スス付着	
		3	P-13	1930	191	VI	深鉢	口縁	○	○	○			砂粒を含む	ヨコハケ→ナデ	ヨコハケ→ナデ	暗茶褐色～暗黄褐色	暗茶褐色～暗褐色	補修孔あり
		4	S-11	757	192	VI	深鉢	口縁	○	○	○	○		砂粒を含む	ハケ→ナデ	ナデ	黒褐色	暗茶褐色	
		5	R-10	5329	27	VI	深鉢	口縁	○	○	○			砂粒を含む	著しい剥落	著しい剥落	暗茶褐色	茶褐色	
		6	S-05	2321	26	VI	深鉢	口縁	○	○	○			砂粒を含む	ナデ	丁寧なナデ	暗黄白色	明黄白色	
			R-09 R-09 R-09	4074 4219 4835	118	VI VI VI	深鉢	口縁～胴部	○	○	○			砂粒を含む	ナデ	丁寧なナデ	茶褐色～暗黄褐色	暗茶褐色～茶褐色	口径26.2cm スス付着

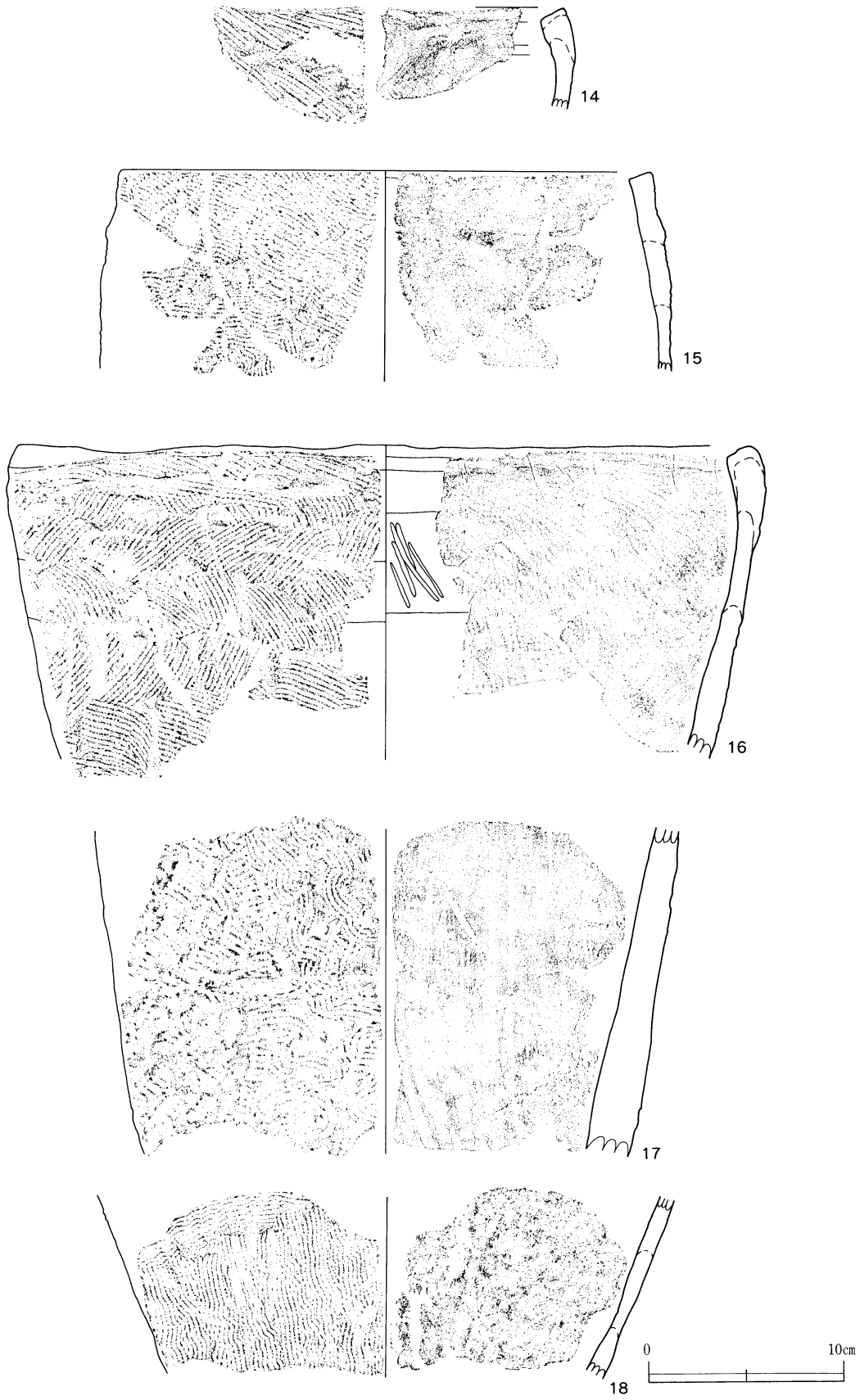




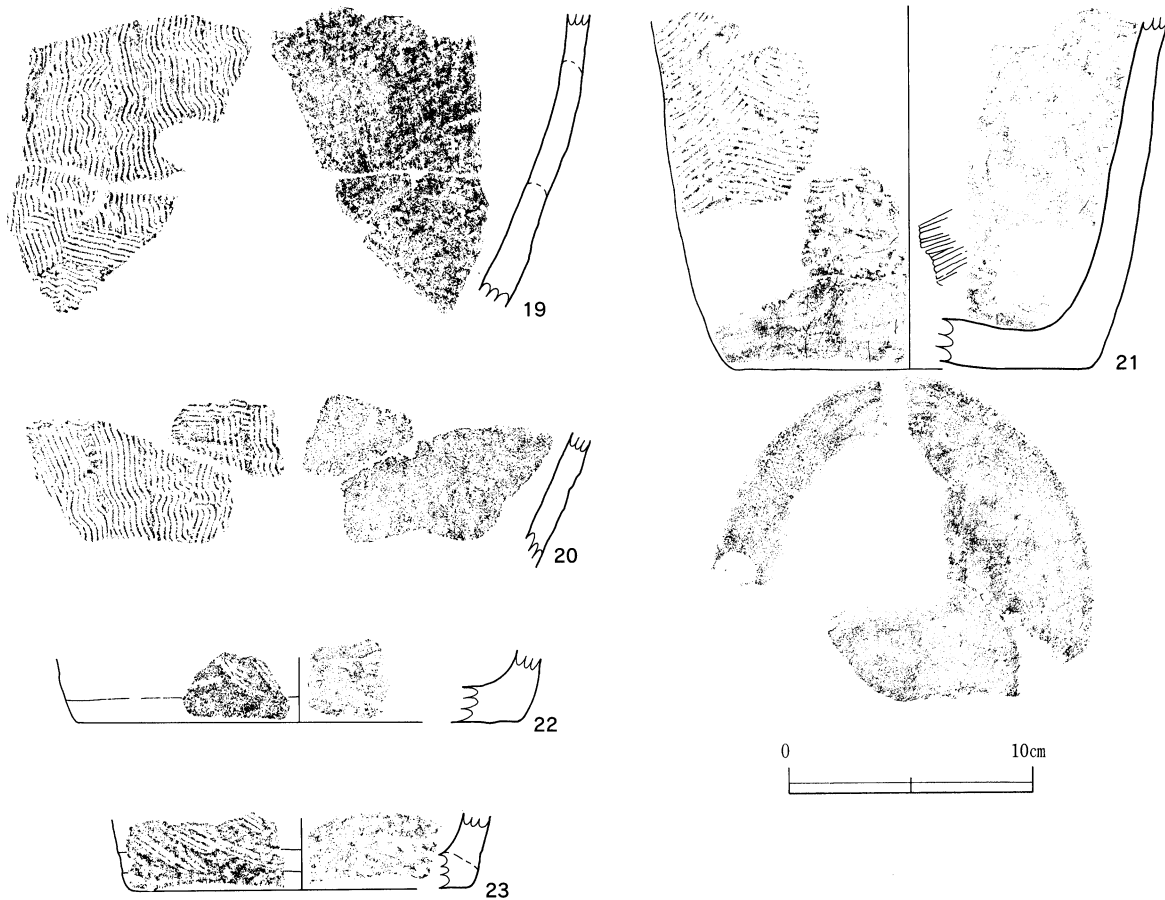
第54図 桑ノ丸式土器実測図（2）

桑ノ丸式土器観察表（2）

種別 番号	報告 番号	出土 区	注記 番号	実測図 番号	解 器種	部位	器 土					外器面 調整	内器面 調整	色 調		備考	
							石英	長石	角閃石	クローンモ	砂礫			外器面	内器面		
54 図	8	O-15	594	186	VI	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ケズリ→丁寧なナデ	暗茶褐色～茶褐色	茶褐色～黒褐色	口径17.5cm 補修孔あり スス付着
		O-15	596		VI	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ケズリ→ナデ	明黄白色～橙褐色	暗茶褐色～黄白色	取上番号220号集石
		Q-15	612		VI	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ケズリ→ナデ	茶褐色	暗茶褐色	口径15.1cm
	9	P-14	233号集石37	184	VI	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ケズリ→ナデ	茶褐色	暗茶褐色	口径17.1cm
		O-15	595	187	VI	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ケズリ→ナデ	茶褐色	黄白色～茶褐色	補修孔あり、スス付着
	10	O-15	596	188	VI	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ケズリ→ナデ	茶褐色	黄白色～茶褐色	口径18.6cm
		O-15	599	188	VI	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ケズリ→ナデ	茶褐色	黄白色～茶褐色	補修孔あり、スス付着
	11	P-15	112	126	VI	深鉢	口縁	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	丁寧なナデ	黄白色～黄褐色	暗黄褐色～暗褐色	口径18.6cm 補修孔あり
		P-15	934	126	VI	深鉢	口縁	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	丁寧なナデ	黄白色～黄褐色	暗黄褐色～暗褐色	口径18.6cm 補修孔あり
	12	P-15	923	185	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	ヨコハケ→ナデ	ナデ	赤褐色～黄褐色	暗茶褐色～暗黄褐色	胴部径23.0cm
		P-15	1000	185	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	ヨコハケ→ナデ	ナデ	赤褐色～黄褐色	暗茶褐色～暗黄褐色	胴部径23.0cm
		P-15	1002	185	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	ヨコハケ→ナデ	ナデ	赤褐色～黄褐色	暗茶褐色～暗黄褐色	胴部径23.0cm



第55図 桑ノ丸式土器実測図（3）



第56図 桑ノ丸式土器実測図（4）

桑ノ丸式土器観察表（3）

挿図 番号	報告 番号	出土 区	注記 番号	実測図 番号	腐	器種	部位	胎土					外器面 調整	内器面 調整	色調		備考												
								石英	長石	角閃石	クローンモ	砂礫			外器面	内器面													
第 55 図	14	S-09	696	1	Ⅶ	深鉢	口縁	○	○	○			砂粒を含む	ナデ	ナデ	暗黄白色	暗黄白色												
	15	Q-08	2103	29	Ⅶ	深鉢	口縁~胴部	○	○	○			砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	暗黄褐色~暗褐色	暗茶褐色	口径27.3cm											
		R-08	1030																										
		S-09	340																										
		S-09	1525																										
	16	Q-09	1795	3	Ⅵ	深鉢	口縁~胴部	○	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ミガキ	暗黄褐色~黄褐色	暗茶褐色~黄白色	口径38.0cm											
		R-09	6086																										
		S-09	371																										
		S-09	682																										
		S-09	1169																										
S-09		1866																											
S-09		2571																											
S-09	2572																												
S-10	6300																												
17	Q-13	2008	24	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○			砂粒を含む	ナデ	ナデ	茶褐色	暗茶褐色~暗褐色	胴部径30.2cm												
18	S-09	1154	4	Ⅶ	深鉢	胴部	○	○				砂粒を含む	丁寧なナデ	丁寧なナデ	茶褐色	暗褐色~黒褐色	胴部径29.8cm												
	S-09	1163																											
第 56 図	19	S-09	693	25	Ⅶ	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	丁寧なナデ	茶褐色	暗褐色~黒褐色													
	19	S-09	1531	25																									
	19	S-09	1597	25																									
	20	S-08	1493	28	Ⅶ													深鉢	胴部	○	○			砂粒を含む	ナデ	ナデ	茶褐色	暗茶褐色~暗褐色	
	20	S-09	1875	28																									
	21	R-07	324	2	Ⅶ													深鉢	底部~胴部	○	○	△		砂粒を含む	ナデ・ミガキ	ハケ→ナデ	茶褐色~暗黄褐色	暗茶褐色~暗褐色	底径15.0cm
	21	R-08	1078	2																									
	21	S-09	135	2																									
	21	S-09	675	2																									
	21	S-09	677	2																									
21	S-09	680	2																										
21	S-09	683	2																										
21	S-09	1865	2																										
21	S-09	1872	2																										
21	S-09	2570	2																										
22	R-09	4286	190	Ⅶ	深鉢	底部	○	○	○			砂粒を含む	ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色	暗茶褐色	底径18.2cm												
23	R-09	4833	189	Ⅶ	深鉢	底部	○	○	○			砂粒を含む	ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色	暗茶褐色	底径13.8cm												

#### ④ 第4群 円筒形条痕文土器(第57図～第64図)

##### i) 概要

第4群に属すると判断した土器片は107点出土し、そのうち18個体・48点を資料化した。

第4群は、土器の全体器形が、底部から口縁部にかけてほぼ直線的に立ち上がる円筒形で、底部は平底を呈する厚手土器である。施文は口縁部から胴部にかけて貝殻腹縁部を使用して、横位方向に十数条巡らす土器である。なお、横位方向の貝殻押し引き文を施す以前に、縦位方向の貝殻条痕を施していたことが窺える。本類に属する土器は、水ノ江和同氏が「一野式」として、さらに木崎康弘氏が「中原式」として、提唱している土器群である。

本類に分類した土器は、器形的特徴から概ね以下の3類に分けることができる。すなわち、

- a：口縁形態が平口縁を呈し、口縁部が外反し、胴部はわずかに膨らむ土器(1, 2)。
- b：口縁形態が平口縁を呈し、口縁部から胴部にかけて直行する土器(3～13)。
- c：口縁形態は平口縁を呈し、口縁部が内湾し、口唇部は内傾する土器(19, 20, 21)。

さらに、b類に分類した土器は、口唇部を水平な平坦面にする土器(3, 9, 10)と、口唇部を外傾させた平坦面にする土器(5～8, 11)とに、分類することができる。

一方、施文の特徴からは、概ね以下のように分けることができる。すなわち、

- A)：二枚貝の腹縁部を使用して、まず縦位方向に条痕文を施した後に、横位方向に条痕文を巡らした土器(1, 2, 13～16)。
- B)：二枚貝の腹縁部を使用して、まず縦位方向に条痕文を施した後に、横位方向に押し引き文を施した土器(4～11, 19～21)。
- C)：叉状工具を使用して、横位方向あるいは斜位方向に押し引いた土器(3, 12)。

さて、第4群の土器胎土中の鉱物は、概ね石英・長石・角閃石で構成されていた。特に角閃石を多く含む土器が主流であったのに対して、クローンモを含む土器はわずかであった。また、土器の調整方法は外器面はナデ調整が主流であった。一方、内器面

は丁寧なナデ調整を行う土器が多かった。また、木製工具を使用したハケ目調整を行った後にナデ調整を行う土器も見受けられた。また、土器の色調は外器面では暗黄褐色～暗褐色を、内器面では暗黄褐色～茶褐色を、呈する土器が主流であった。

さて、出土状況全体図から第4群は、主にP・Q-13・14区を中心とする、標高262mから260mにかけての、発掘区画東側の区域に集中して出土している(第57図参照)。この区域は、第10地点のなかで標高が一番高い262m付近のデラ地から南側への緩やかな傾斜地にあたる区域である。

したがって第4群の出土分布の状況から、これらの土器を使用した人々はこの区域に生活の場を設けていたことが想定できる。

さらに重要なことは、第4群が集中して出土した地域は、下剥峯式土器や微細山形押型文土器、変形撚糸文土器、手向山式土器が集中して出土した地域と重なっている。その一方で、桑ノ丸式土器や山形押型文土器、楕円押型文土器が集中して出土した、R・S-9区などの区域とは分布域を異にしていることが指摘できる。

##### ii) 小結

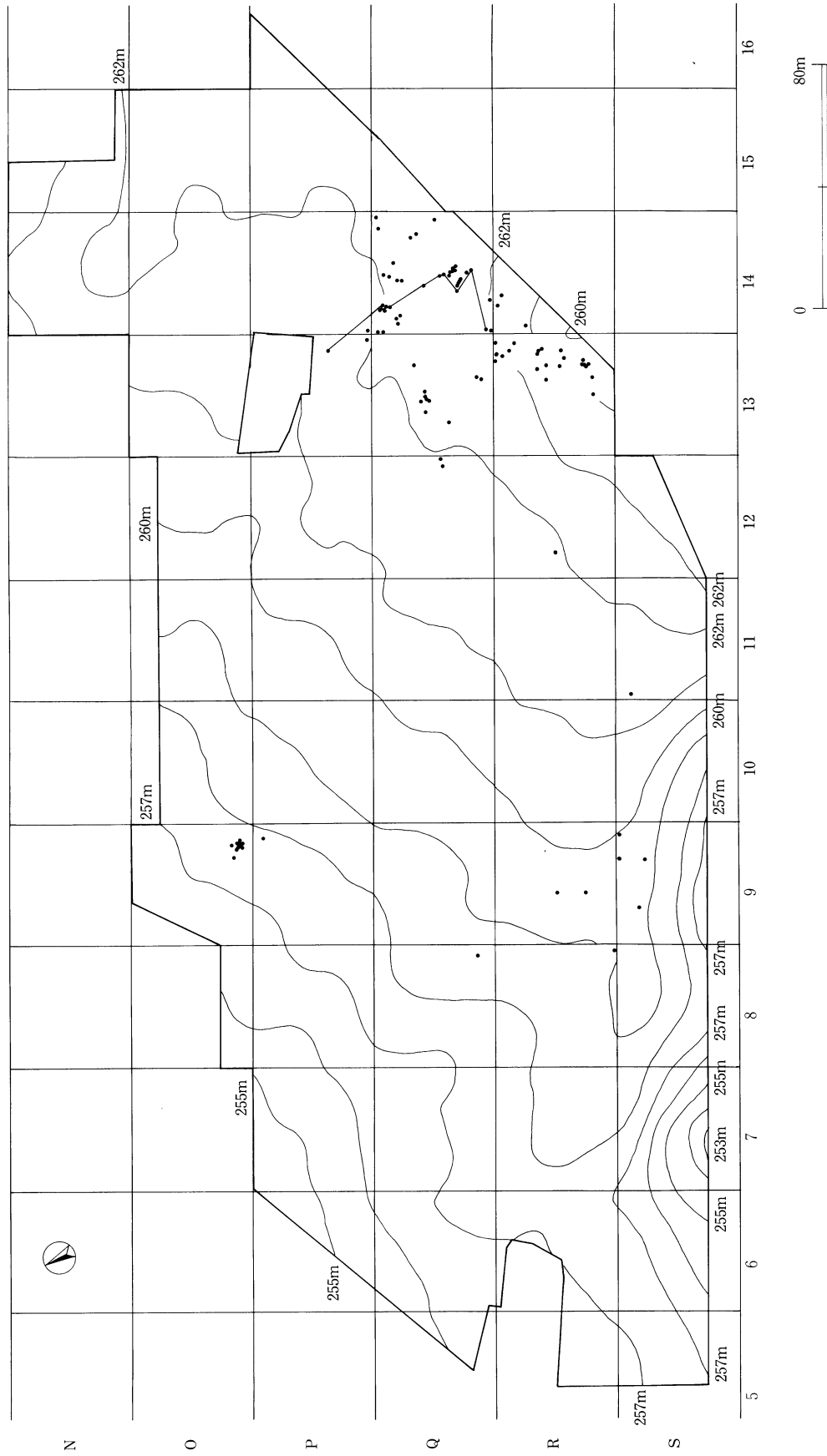
第4群に属する土器は、器形的特徴のうち口縁部の形態から、

- ①口縁部が外反する土器(a類土器)。
- ②口縁部が直行する土器(b類土器)。
- ③口縁部が内湾し、口唇部が内傾する土器(c類土器)。

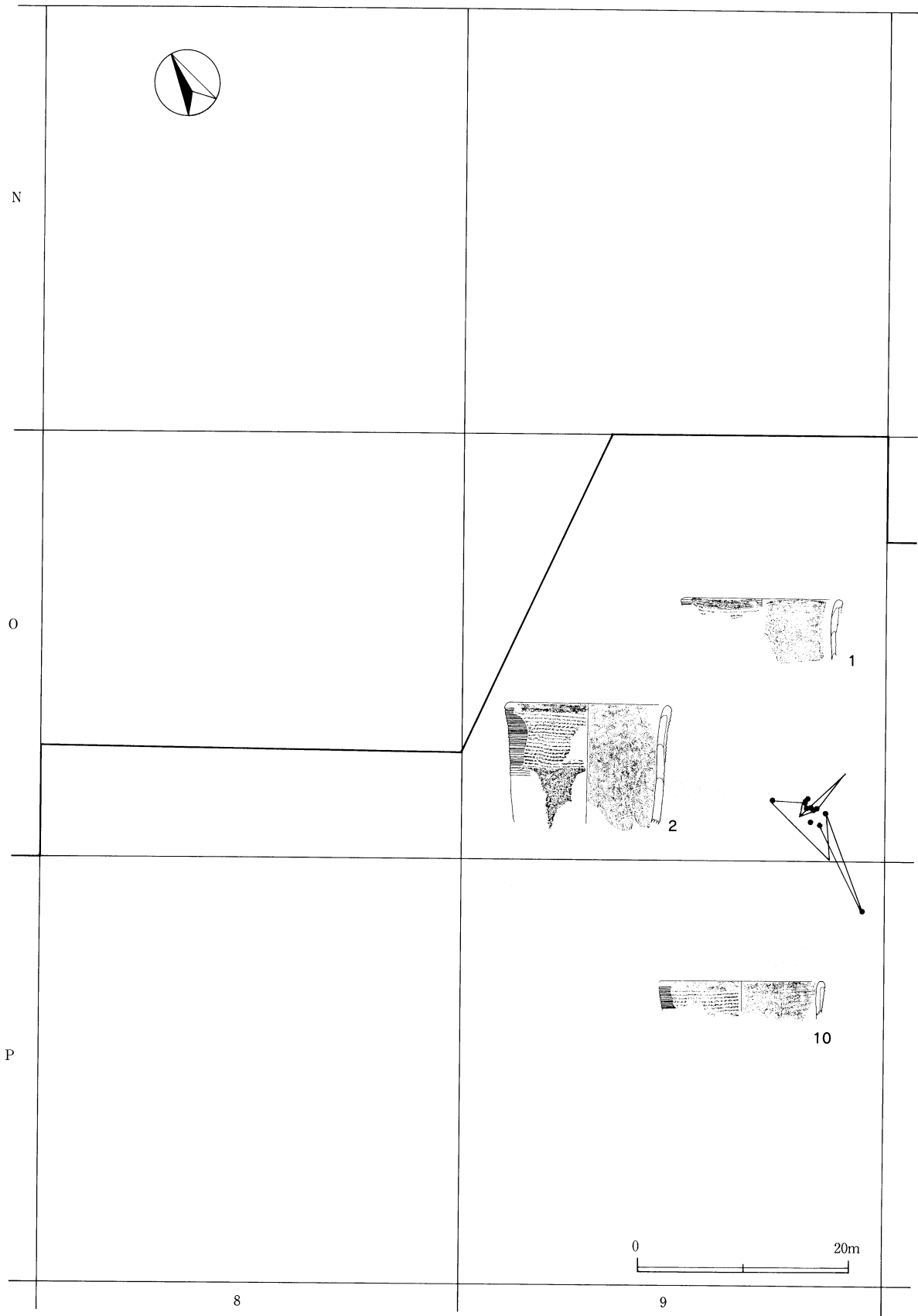
の3類に分類できた。

先行研究と比較すると、②に属する土器が水ノ江氏の「一野式」土器に、木崎氏の「中原Ⅲ式」土器に、①に属する土器が木崎氏の「中原Ⅳ式」土器におおむね比定できる。

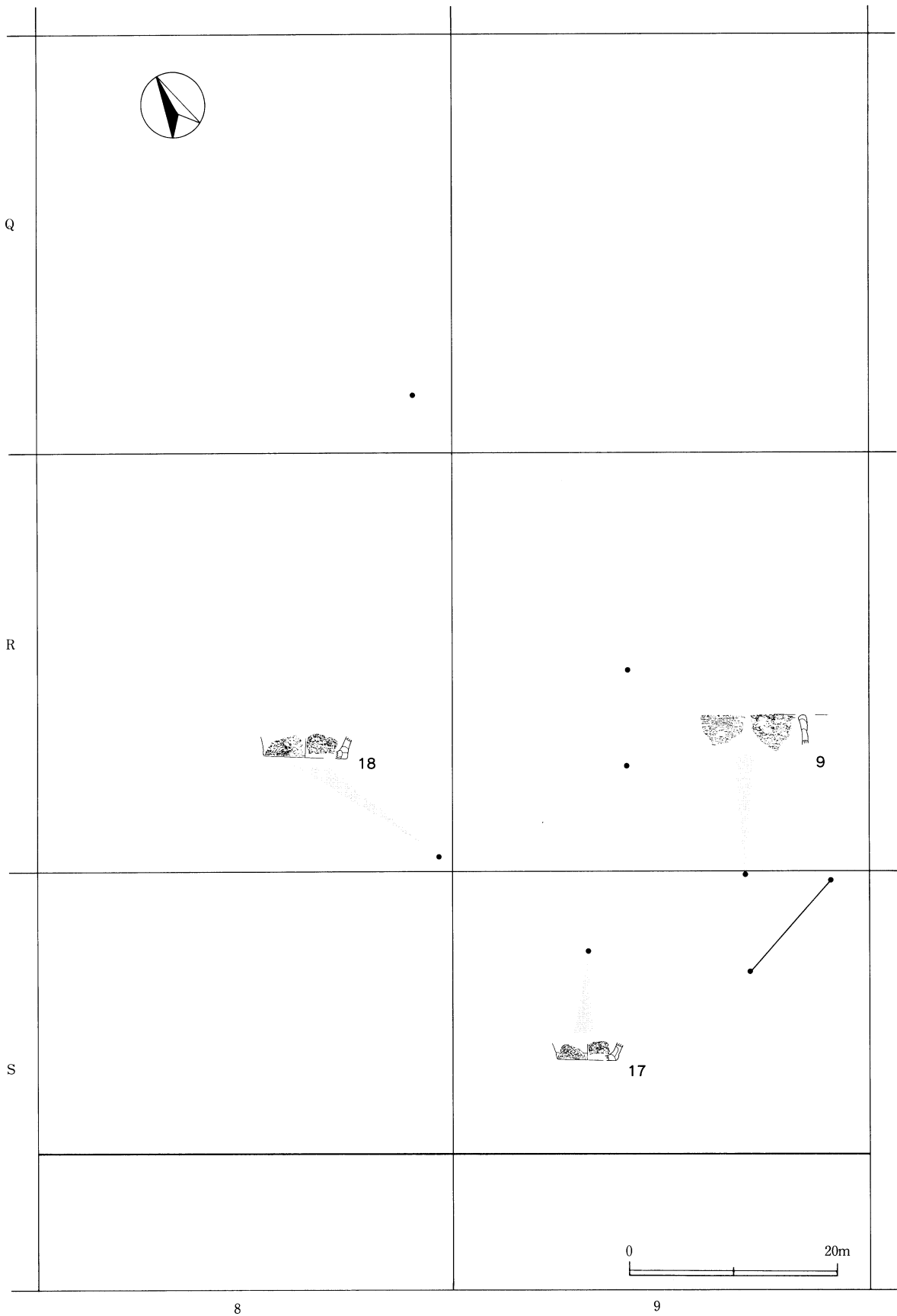
また、出土した土器片の点数が少ないことから、第4群土器は本遺跡では客体的な存在であったことが指摘できる。



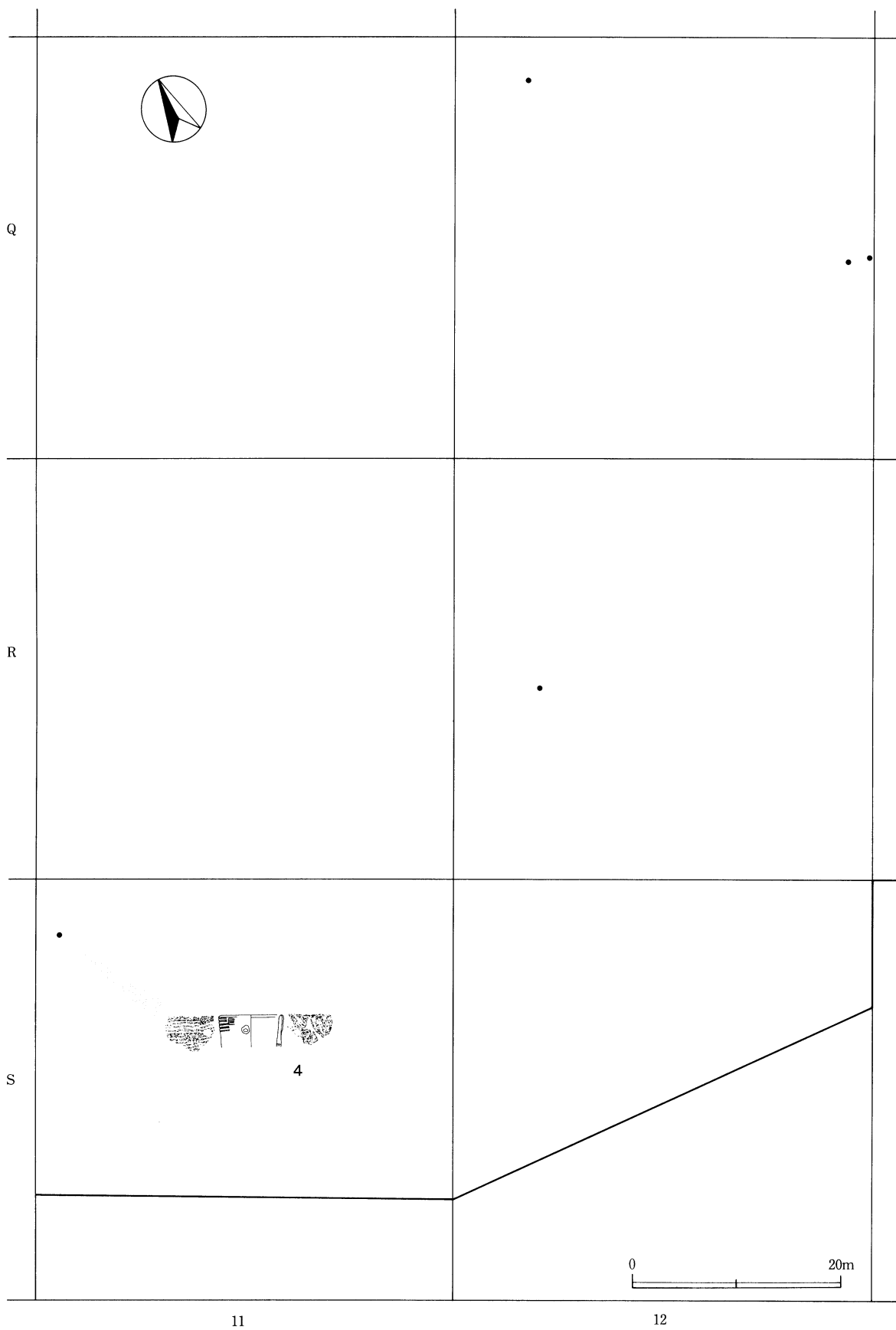
第57図 円筒形条痕文土器出土状況全体図



第58図 円筒形条痕文土器出土状況図1 (O・P-8・9区)

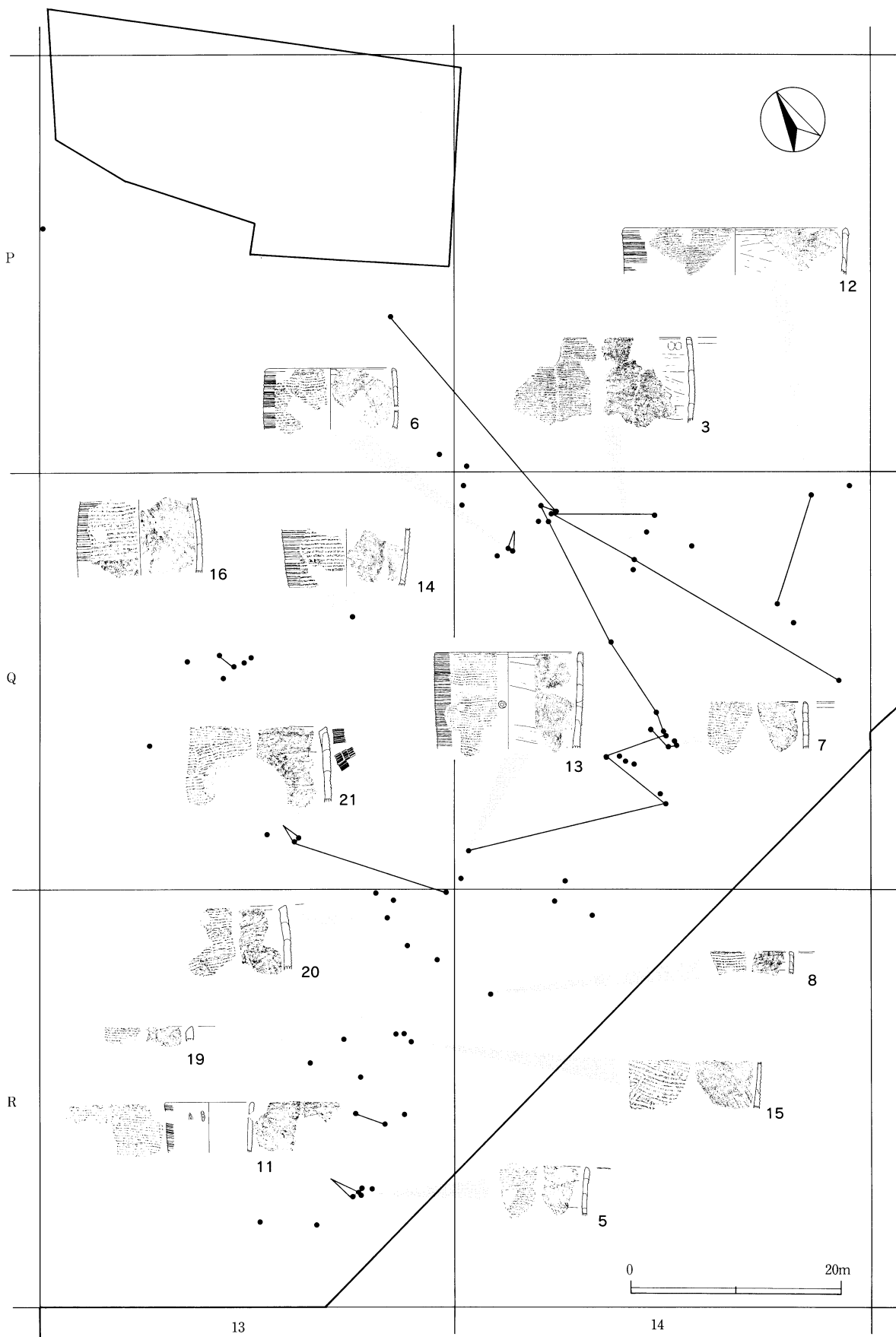


第59図 円筒形条痕文土器出土状況図2 (Q・R・S-8・9区)

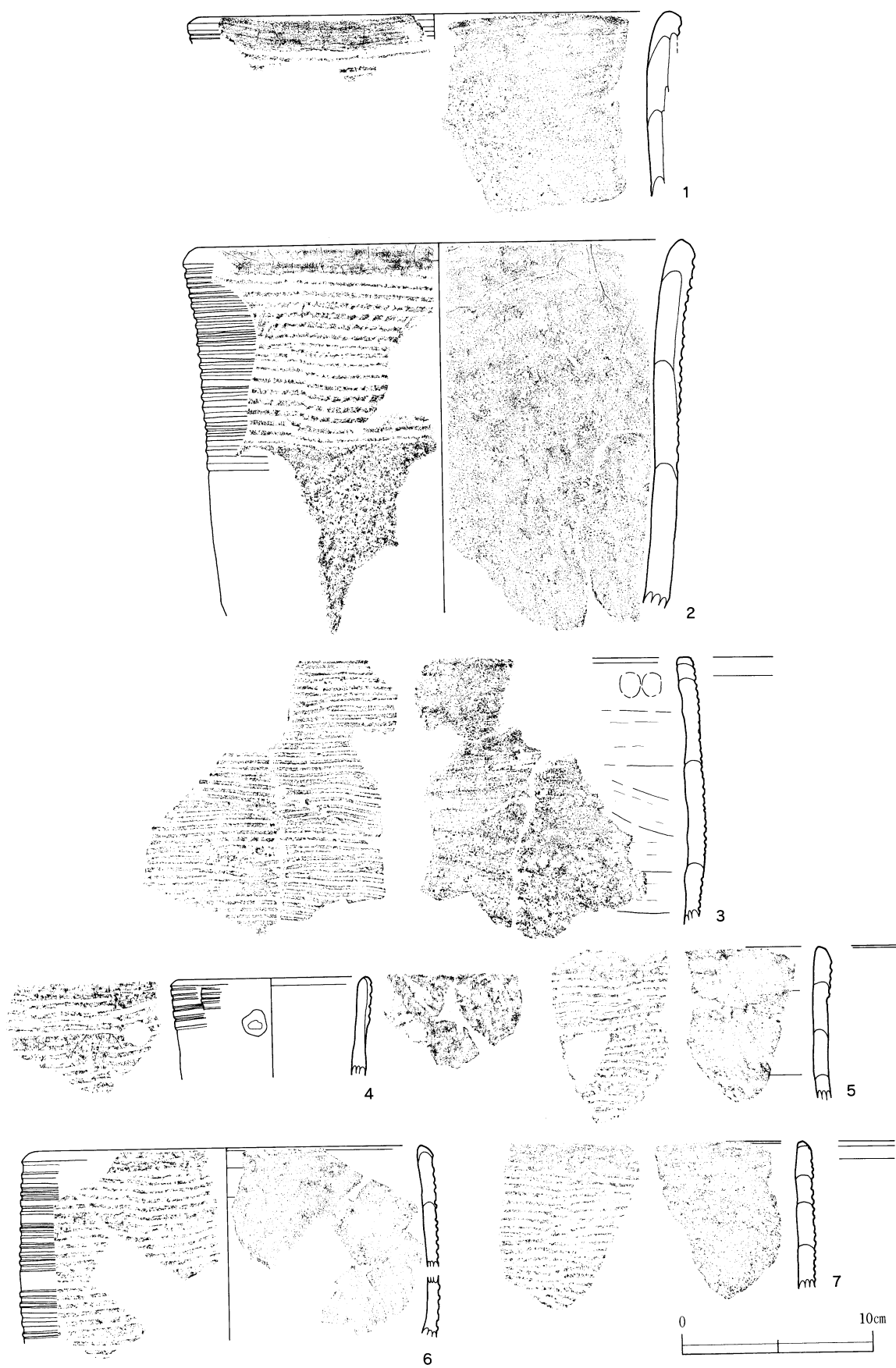


第60図 円筒形条痕文土器出土状況図3(Q・R・S-11・12区)

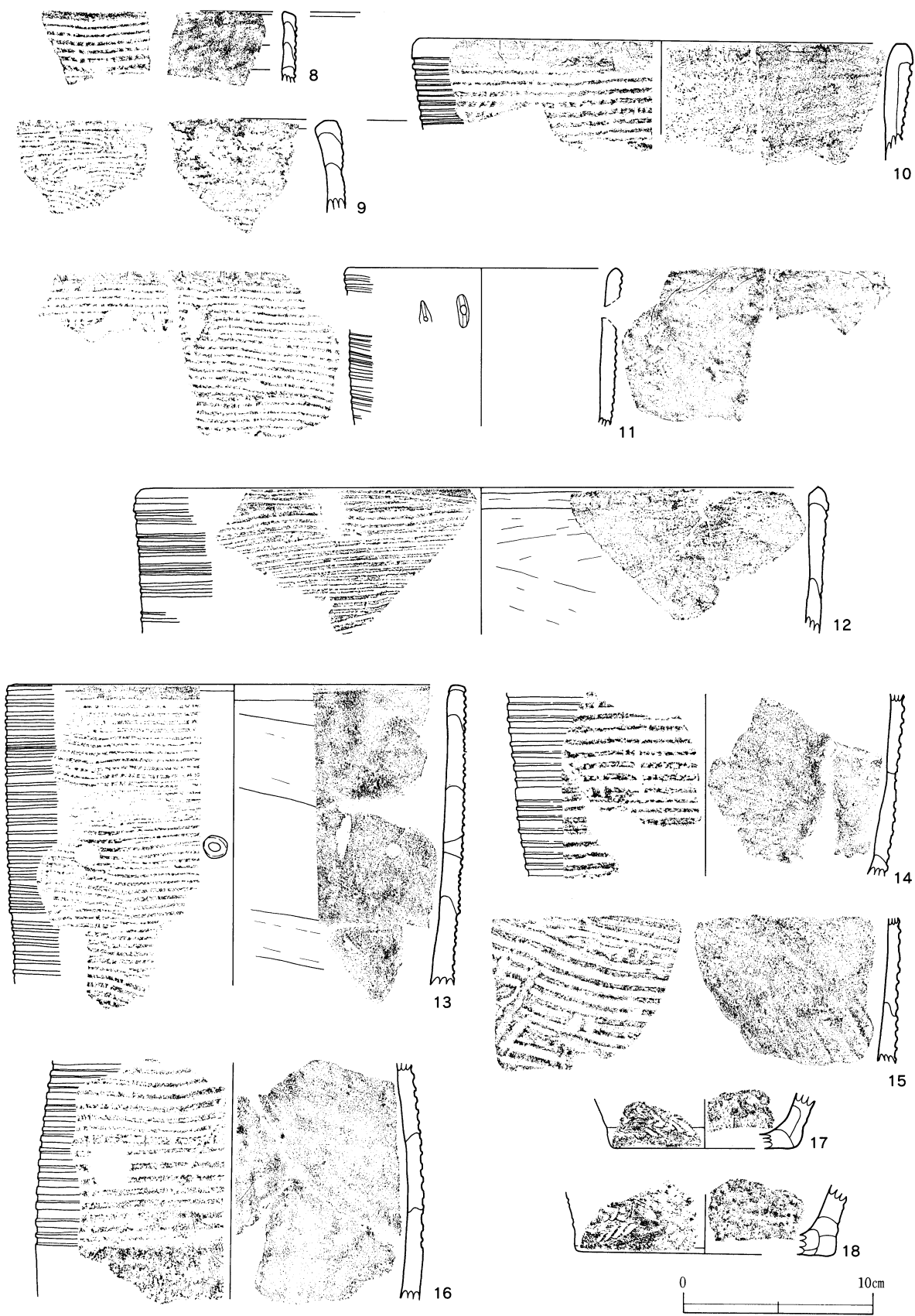




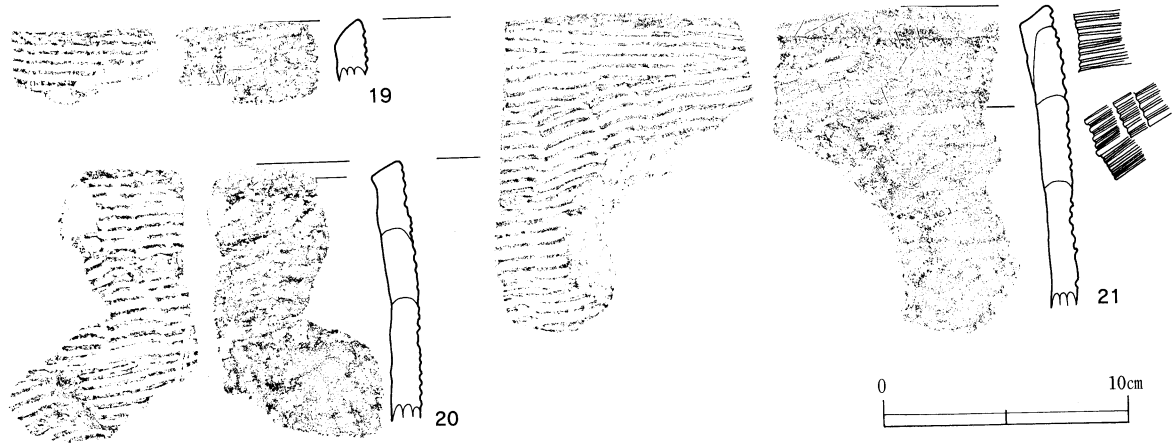
第61図 円筒形条痕文土器出土状況図4 (P・Q・R-13・14区)



第62図 円筒形条痕文土器実測図（1）



第63図 円筒形条痕文土器実測図(2)



第64図 円筒形条痕文土器実測図（3）

円筒形条痕文土器観察表

検出 番号	報告 番号	出土 区	注記 番号	実測図 番号	層	器種	部位	胎 土					調整	内器面 調整	色 調		備 考
								石英	長石	角閃石	クローンモ	砂礫			外器面	内器面	
第 62 図	1	O-09	10	110	Ⅴ	深鉢	口縁~胴部	○	○	◎		砂粒を含む	ナデ	ナデ	暗黄褐色~暗褐色	暗黄褐色	口径24.9cm
	2	O-09	8	111	Ⅴ	深鉢	口縁~胴部	○	○	◎		砂粒を含む	ナデ	ナデ	暗黄褐色~暗褐色	暗黄褐色	口径26.0cm
		O-09	9														
		O-09	11														
		O-09	13														
		O-09	16														
		O-09	23														
	3	Q-14	970	113	Ⅵ	深鉢	口縁~胴部	○	○	◎		細砂・微砂	ナデ	ハケ→ナデ	暗茶褐色~茶褐色	茶褐色~暗茶褐色	
		Q-14	2011														
		Q-14	2075														
		Q-14	2338														
	4	S-11	569	9	Ⅴ	深鉢	口縁	○	○		○	砂粒を含む	ナデ	丁寧なナデ	暗褐色	暗茶褐色	口径10.0cm, 補修孔あり, スス付着
5	R-13	9173	10	Ⅴ	深鉢	口縁	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ナデ	暗茶褐色~暗黄褐色	暗黄褐色		
6	Q-14	2096	12	Ⅴ	深鉢	口縁	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	丁寧なナデ	暗茶褐色~黒褐色	暗茶褐色~茶褐色	口径20.5cm 口径20.5cm	
	Q-14	2453															
7	Q-14	1143	114	Ⅴ	深鉢	口縁~胴部	○	○	◎		砂粒を含む	ナデ	ナデ	茶褐色~暗黄褐色	茶褐色~暗黄褐色		
8	R-14	1142	11	Ⅴ	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ハケ→ナデ	暗黄褐色	暗黄褐色~暗褐色		
9	S-09	1178	7	Ⅴ	深鉢	口縁	○	○	◎		砂粒を含む	ナデ	丁寧なナデ				
第 63 図	10	O-09	13	22	Ⅴ	深鉢	口縁	○	○	◎		砂粒を含む	ハケ→ナデ	丁寧なナデ	暗黄褐色~暗褐色		口径26.0cm
		O-09	15														
		P-09	923														
	11	R-13	4837	13	Ⅴ	深鉢	口縁						ナデ	丁寧なナデ			口径14.4cm 口径14.4cm
		R-13	5159														
	12	Q-14	1697	112	Ⅴ	深鉢	口縁~胴部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ハケ→ナデ	黒褐色~暗褐色	暗茶褐色~茶褐色	口径36.4cm
		Q-14	2561														
		P-13	2458														
		Q-14	330														
		Q-14	333														
		Q-14	573														
		Q-14	647														
		Q-14	694														
		Q-14	1788														
		Q-14	2003														
	Q-14	2014															
	Q-14	2429															
	Q-14	192号集石12															
13	Q-13	5473	182	Ⅴ	深鉢	胴部	○	○	◎		砂粒を含む			暗茶褐色~暗黄褐色	暗黄褐色~茶褐色	口径23.8cm	
	Q-13	5500															
	R-13	8955															
	Q-13	9663															
	S-09	1165															
	R-08	3022															
	R-13	2002															
	R-13	584															
	Q-13	2340															
	Q-13	2341															
第 64 図	19				Ⅴ	深鉢	口縁	○	○	◎		砂粒を含む	ナデ	ナデ	暗茶褐色~茶褐色	茶褐色	口径24.9cm
	20				Ⅴ	深鉢	口縁	○	○	◎		砂粒を含む	ナデ	ナデ	暗茶褐色~茶褐色	暗黄褐色~暗褐色	口径26.0cm
21				Ⅴ	深鉢	口縁	○	○	◎		砂粒を含む	ナデ	ナデ	暗茶褐色~茶褐色	茶褐色	口径26.0cm	

## ⑤ 第5群 微細山形押型文土器 (第65～68図)

### i) 概要

第5群に属する土器は、28点の土器片が出土し、その内の10点、9個体を資料化した。

第5群は、土器全体の器形が不明であるものの、「帯状施文」と呼ばれる文様構成で施文した土器の一群であり、特徴は以下のとおりである。

まず、口縁部形態は平口縁で、口唇部上端は舌状形を呈する。口縁は直行し、胴部下半部はすぼまる器形である。胴部上半部と底部の器形は不明であるが、ほぼ砲弾形が想定できる。

土器の焼きは堅くて緻密で、器壁の厚さは0.8cmあり、押型文土器群の中では特に薄めである。

文様が施される部位は、出土している口縁部と胴部下半部との器外面であり、器内面は出土している範囲内では施されておらず無文である。そのうち器外面の文様は、原体を横位にころがしてつけたもので、原体の幅は広めである。その下位に相対的に幅が狭い無文部を設けて、再び微細な山形押型文を施し、下位に向けて有文部と無文部とを繰り返し施文している。この特徴が本類の指標である。

土器胎土中の鉱物は石英・長石・角閃石で構成されており、クローンモは確認できなかった。一方、土器の調整方法は器外面、器内面共にナデ調整が主流である。土器の色調は器外面が茶褐色から暗茶褐色、器内面が黒褐色から茶褐色・暗茶褐色であった。

さて、出土状況全体図から第5群は、主に標高262mから260mにかけての、R-13区を中心とする発掘区画東側の区域に集中して出土している(第65図参照)。この区域は、発掘区画の境界近くであるため詳細な地形は不明であるが、第10地点のなかで標高が一番高い262m付近のデラ地から南側への緩やかな傾斜地にあたる地域である。

さらに重要なことは、第5群が集中して出土した地域は、下剥峯式土器や円筒形条痕文土器が集中して出土した地域と重なっている一方で、桑ノ丸式土器や第6群に分類した山形押型文土器、第7群に分類した楕円押型文土器が集中して出土した地域とは分布域を異にしていることが指摘できる。

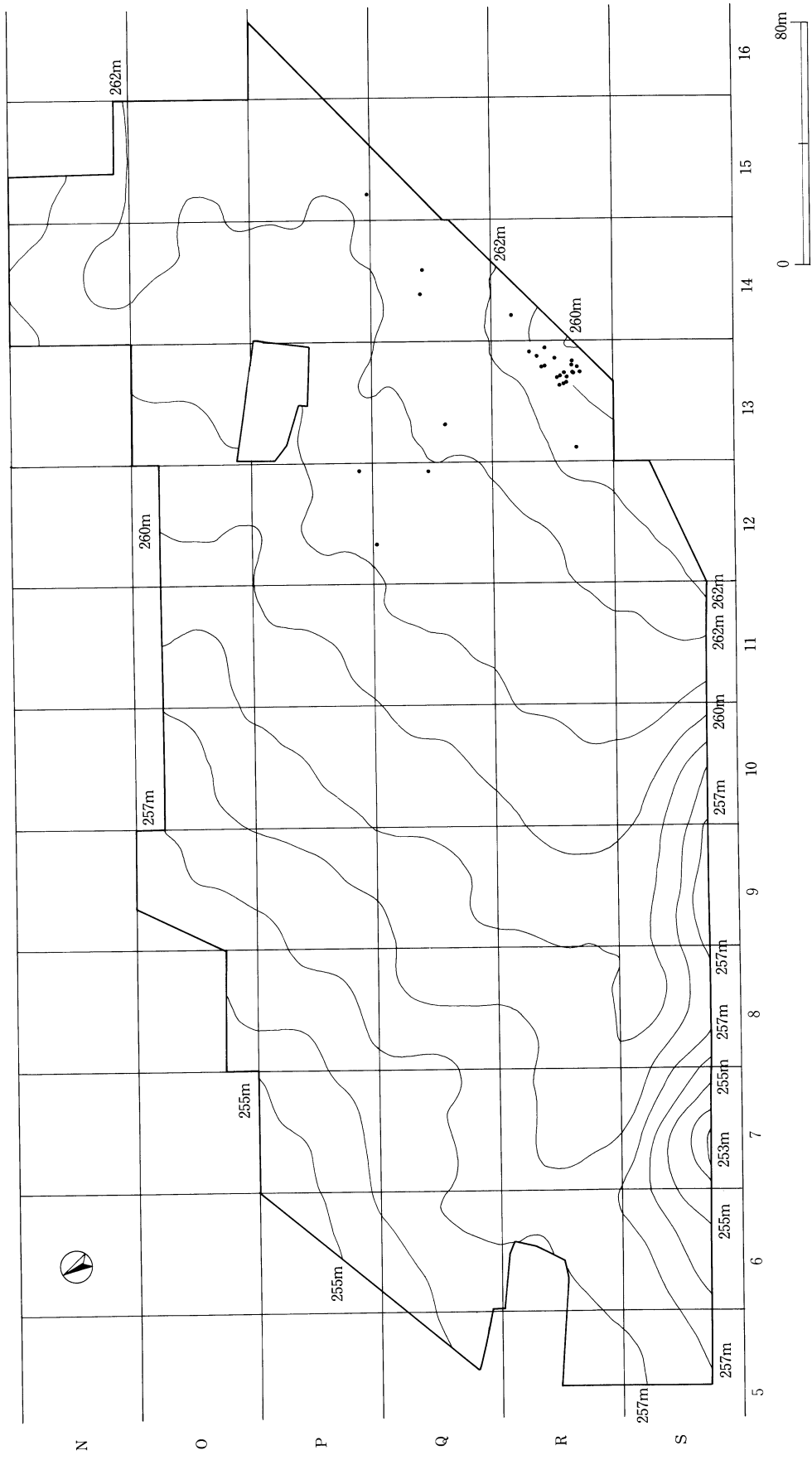
### ii) 小結

この第5群の主な特徴を挙げると、

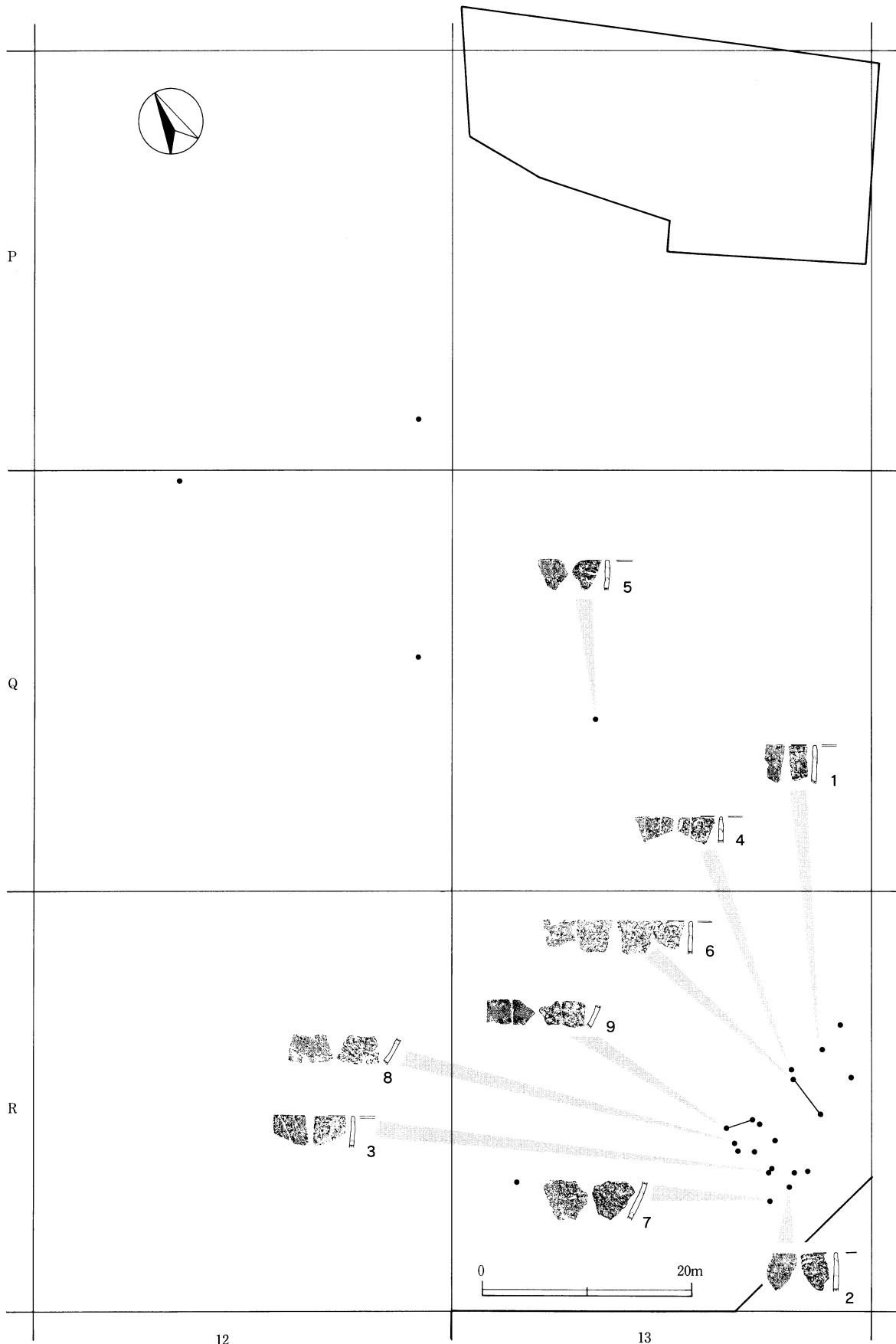
- ① 口縁が直行すること。
- ② 帯状施文が行われていること。
- ③ 器内面に原体条痕が施されていないこと。

の3点を指摘できる。これらの土器の特徴だけを、東九州を含めた北部九州の押型文土器編年と比較すると、第5群は稲荷山式・川原田式土器段階の中でも無文部が狭くなる、より新しい段階に比定できるようである。

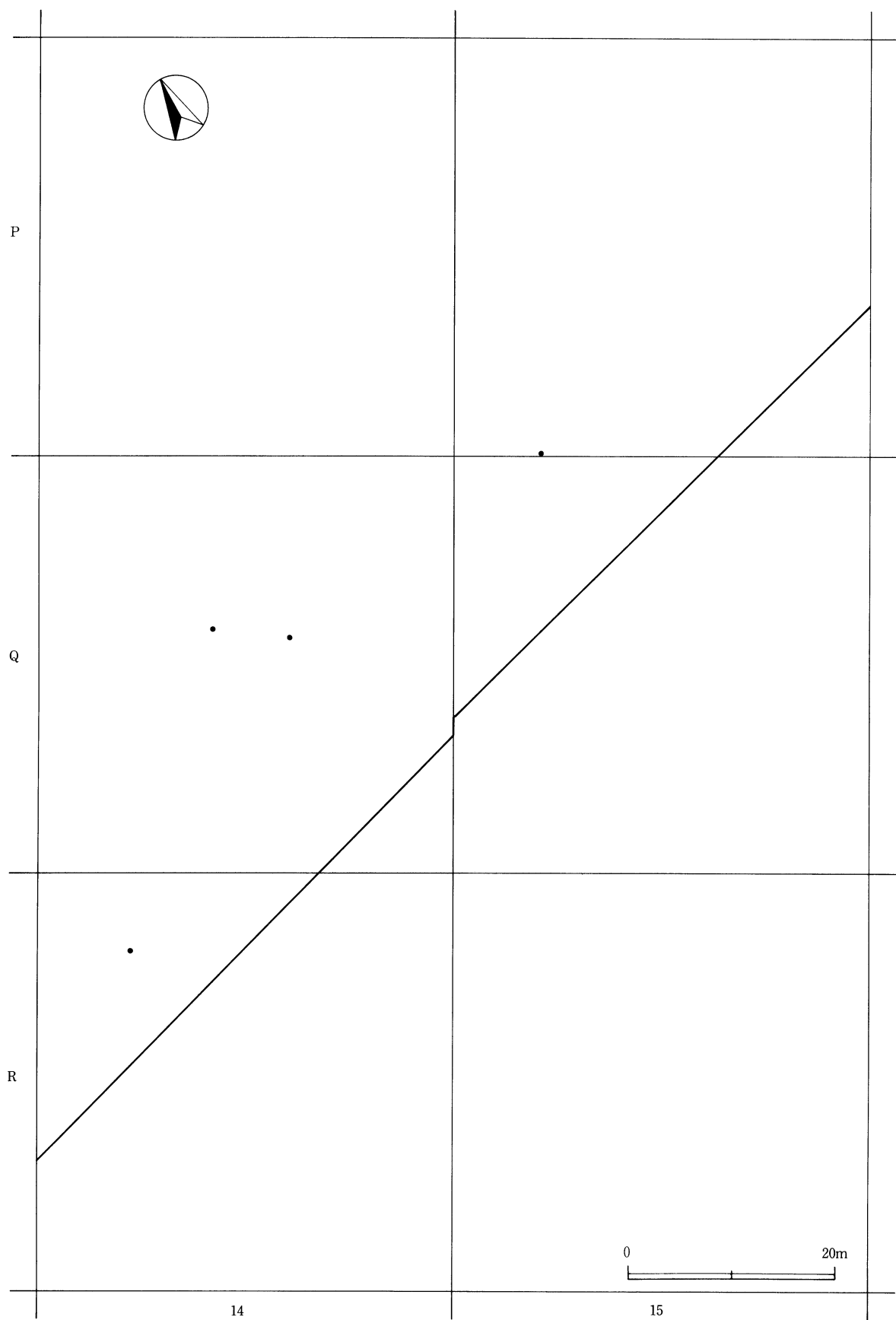
しかしながら、北部九州では稲荷山式・川原田式土器段階では無文土器の存在が卓越しているのに対して、上野原遺跡第10地点では同じ器形をした無文土器は1点も出土しておらず、その内容には較差があることが指摘できる。また、出土した土器片の点数が28点と極めて少ないことから、第5群は本遺跡では客体的な存在であり、土器としては一過性の存在であったことが指摘できる。



第65図 微細山形押型文土器出土状況全体図

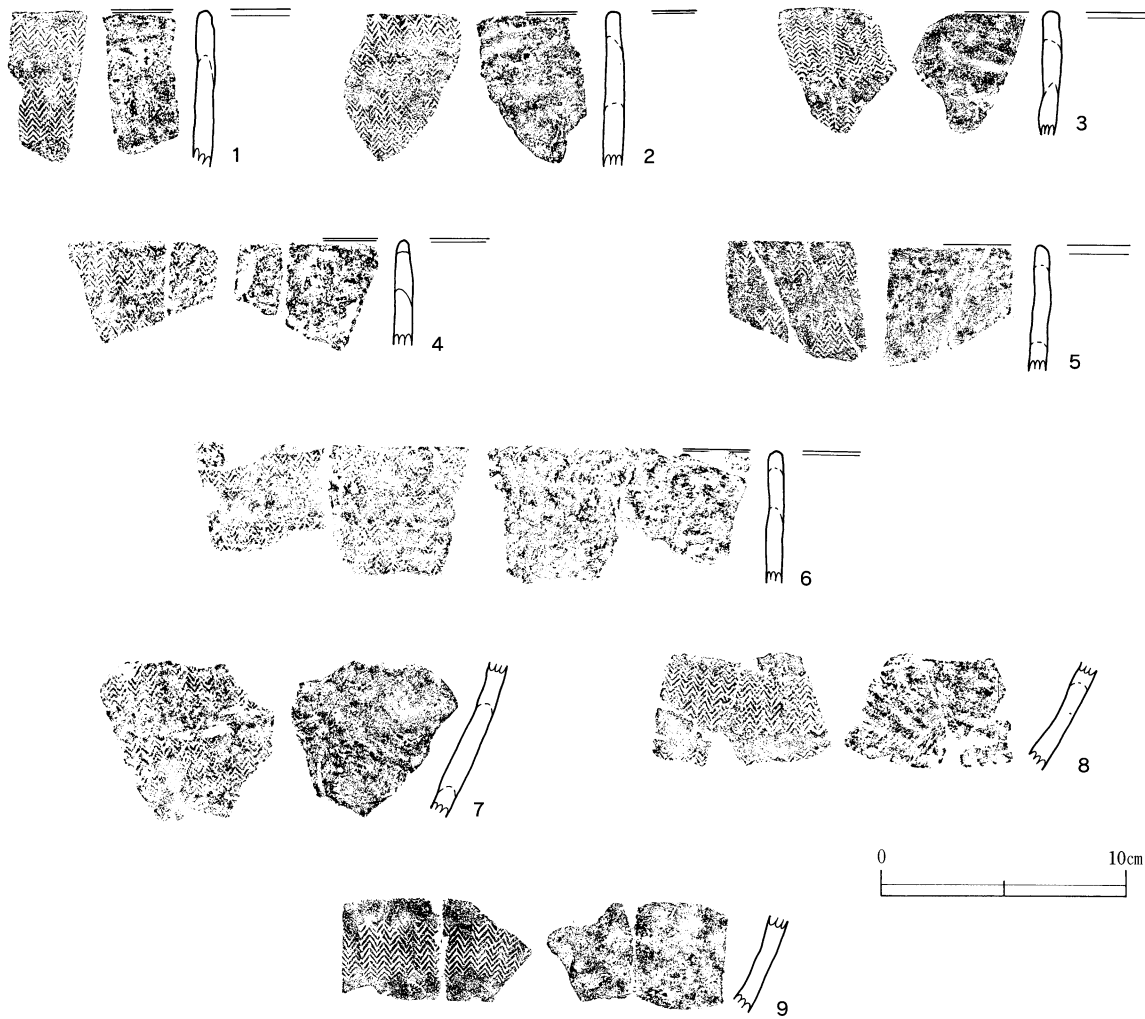


第66図 微細山形押型文土器出土状況図1 (P・Q・R-12・13区)



第67図 微細山形押型文土器出土状況図2 (P・Q・R-14・15区)





第68図 微細山形押型文土器実測図

微細山形押型文土器観察表

挿図 番号	報告 番号	出土 区	注記 番号	実測図 番号	層	器種	部位	胎土				砂礫	外器面 調整	内器面 調整	色調		備考
								石英	長石	角閃石	クローンモ				外器面	内器面	
第 68 図	1	R-13	8958	40	VI	深鉢	口縁	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ナデ	暗茶褐色	黒褐色	
	2	R-13	9424	39	VI	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	
	3	R-13	7176	34	VI	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ナデ	茶褐色	暗茶褐色	
	4	R-13	9752	36	VI	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ナデ	茶褐色	暗茶褐色	
	5	Q-13	4996	33	VI	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	丁寧なナデ	丁寧なナデ	暗褐色	暗黄褐色	
	6	R-13	6732	35	VI	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ナデ	茶褐色	暗茶褐色	
	R-13	9937															
	7	R-13	8381	37	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色	
	8	R-13	2359	38	VI	深鉢	胴部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ナデ	茶褐色	暗茶褐色	
9	R-13	2290	41	VI	深鉢	胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ナデ	茶褐色	茶褐色		
R-13	4727																

## ⑥ 第6群 山形押型文土器 (第69～76図)

### i) 概要

第6群に属する土器は、47点の土器片が出土し、その内の34点、20個体を資料化した。

第6群は、器表面に山形押型文を施す土器である。器形と施文方法から2類に分けられる。

第1類に属する土器器形の特徴は以下のとおりである(第74図1～10)。

まず、口縁部形態は平口縁を呈し、口縁部は外反し、胴部下半部はすぼまり、底部は直径約4～8cmの平底となる器形である。ところで、口縁部内面の形態には稜を形成するタイプ(1～3)と形成しないタイプ(4)とがある。胴部上半部の器形は不明であるが、ほぼ直線的に立ち上がる器形が想定できる。土器の焼きは堅くて緻密で、器壁の厚さは約1cmである。

第1類土器で文様が施される部位は、出土している口縁部と胴部下半部との外器面と口縁部内面とである。そのうち外器面の文様は、原体を横位にころがしてつけたもので、本類の指標である。口縁部内面の文様は、上段に刺突連点文を、下段に山形押型文を施すもの(1～3)と、上段に原体条痕を、下段に山形押型文を施すもの(4)とに分けられる。

土器胎土中の鉱物は石英・長石・角閃石およびクローンモで構成されている。一方、土器の調整方法は外器面、内器面共にナデ調整が主流である。土器の色調は外器面が暗茶褐色から暗黄褐色、内器面が暗黄褐色が主流であった。

次に第2類に属する土器の器形的特徴は以下のとおりである(第75・76図11～20)。

まず、口縁部形態は平口縁で、口唇部上端は平坦面を作り出す。口縁部は外側に開き、胴部は直線的にすぼまり、底径は直径約27cmを測る大きめの平底となる器形である。ところで、口縁部内面の形態には、第1類と同様に稜を形成するタイプ(15～18)と稜を形成しないタイプ(11, 19, 20)とがある。

土器の焼きは堅くて緻密で、器壁の厚さは約1cmである。

第2類土器の文様が施される部位は、口縁部上端から胴部下端までの外器面全面で、内器面は無文で

ある。そのうち外器面の文様は、原体を縦位にころがしてつけたもので、本類の指標である。

土器胎土中の鉱物は石英・長石で構成されており、口縁部内面に稜を形成するタイプの土器にはさらに角閃石が含まれている。しかしクローンモは確認できなかった。一方、土器の調整方法は外器面、内器面共にナデ調整が主流であるが、内器面調整では工具によるハケ調整が観察できる土器がある。土器の色調は外器面が暗茶褐色から暗赤褐色、内器面が暗褐色から暗茶褐色・暗黄褐色であった。

さて、出土状況全体図から第6群土器は、主に標高262mから259mにかけての、R・S-9区からS-11区を中心とする発掘区画南側の区域に集中して出土している(第69図参照)。この区域は、上野原台地が鹿児島湾に向かう南側急斜面の落ち際にあたる区域である。

さらに重要なことは、第6群土器が集中して出土した地域は、第3群に分類した桑ノ丸式土器などが集中して出土した地域と重なっている一方で、第2群に分類した下剥峯式土器や第4群に分類した円筒形条痕文土器が集中して出土した地域とは分布域を異にしていることが指摘できる。

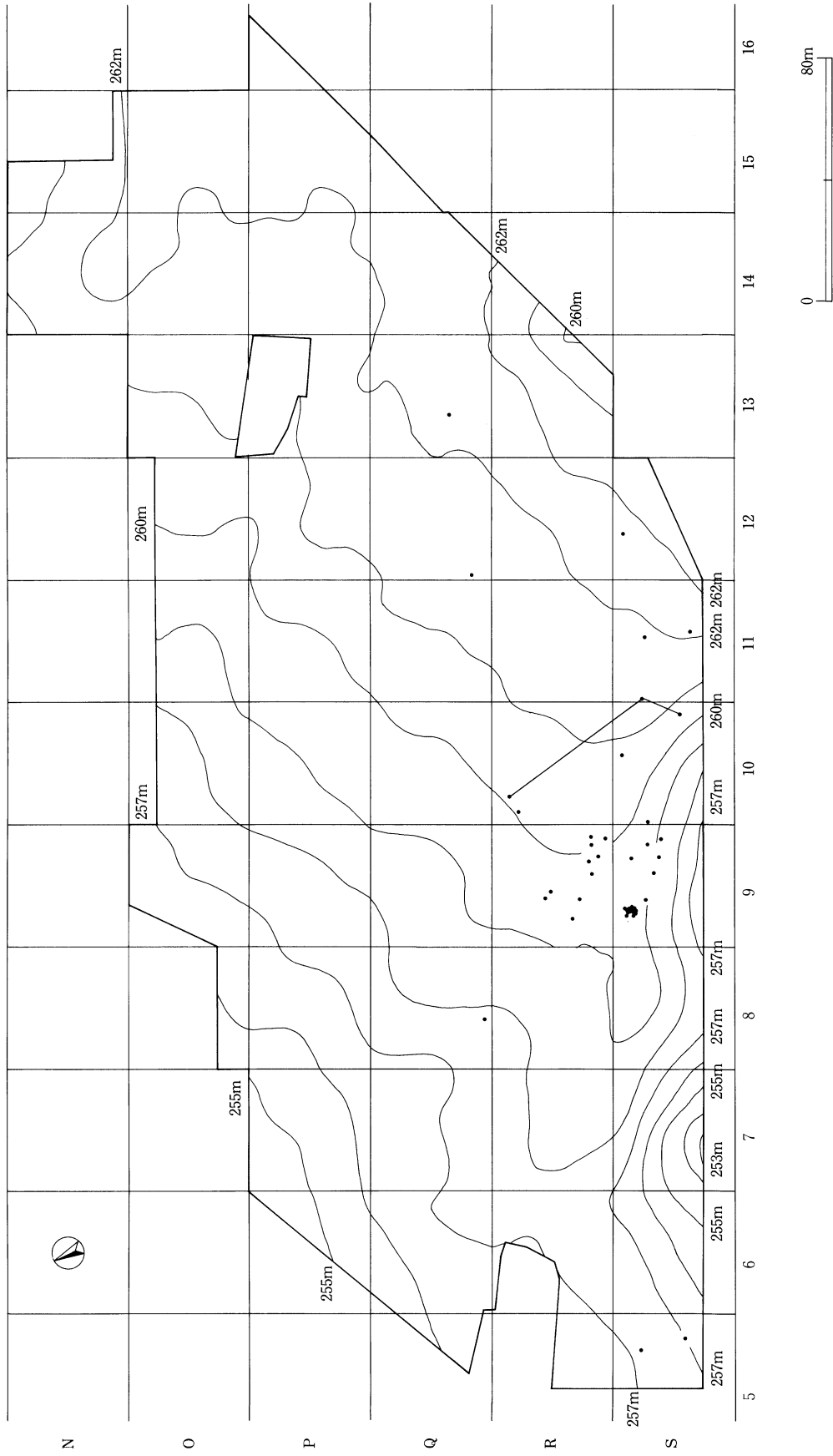
### ii) 小結

この第6群の特徴を挙げると、

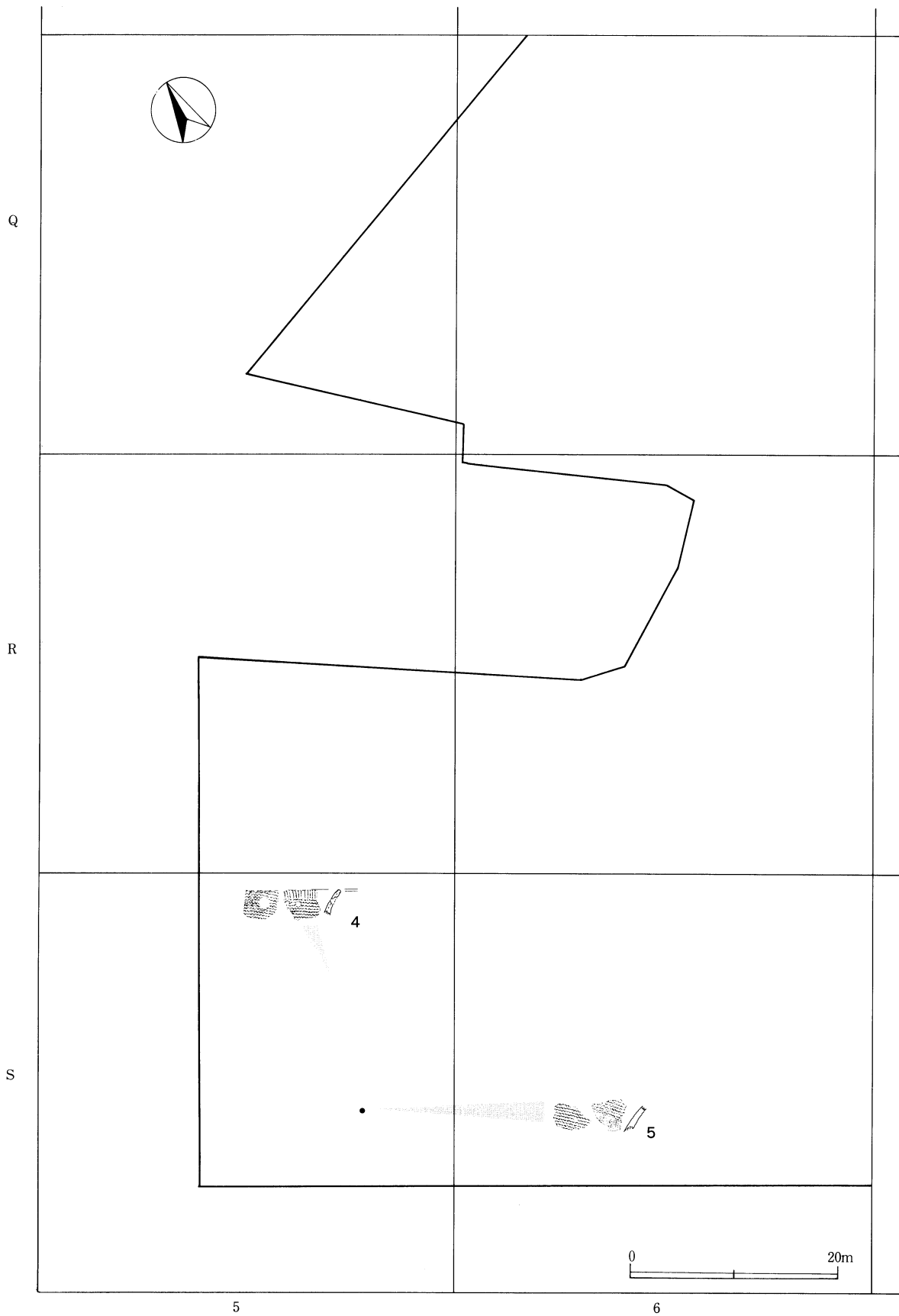
- ① 外器面に横走する山形押型文を施し、稜を形成しない口縁部内面には上段に原体条痕を下段に横走する山形押型文を施すタイプの土器(4)。
- ② 外器面に横走する山形押型文を施し、稜を形成する口縁部内面には上段に刺突連点文を下段に横走する山形押型文を施すタイプの土器(1～3)。
- ③ 外器面に縦走する山形押型文を施し、稜を形成する口縁部内面および胴部内面には文様を施さないタイプの土器(15～18)。
- ④ 外器面に縦走する山形押型文を施し、稜を形成しない口縁部内面および胴部内面には文様を施さずに、口唇部に平坦面を形成するタイプの土器。

(11～14, 19, 20)

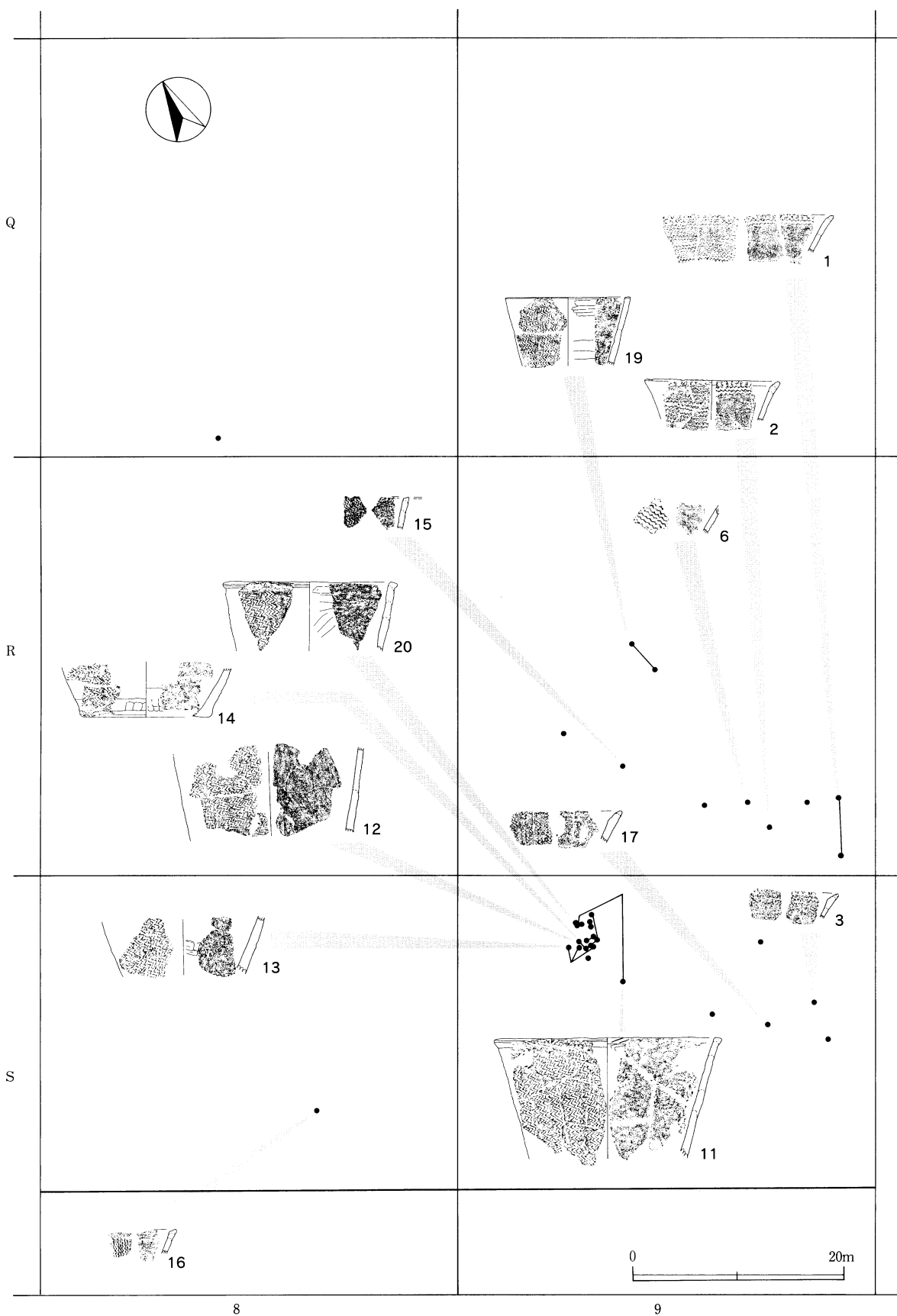
に分けることができそうであることをこの項では指摘しておく。



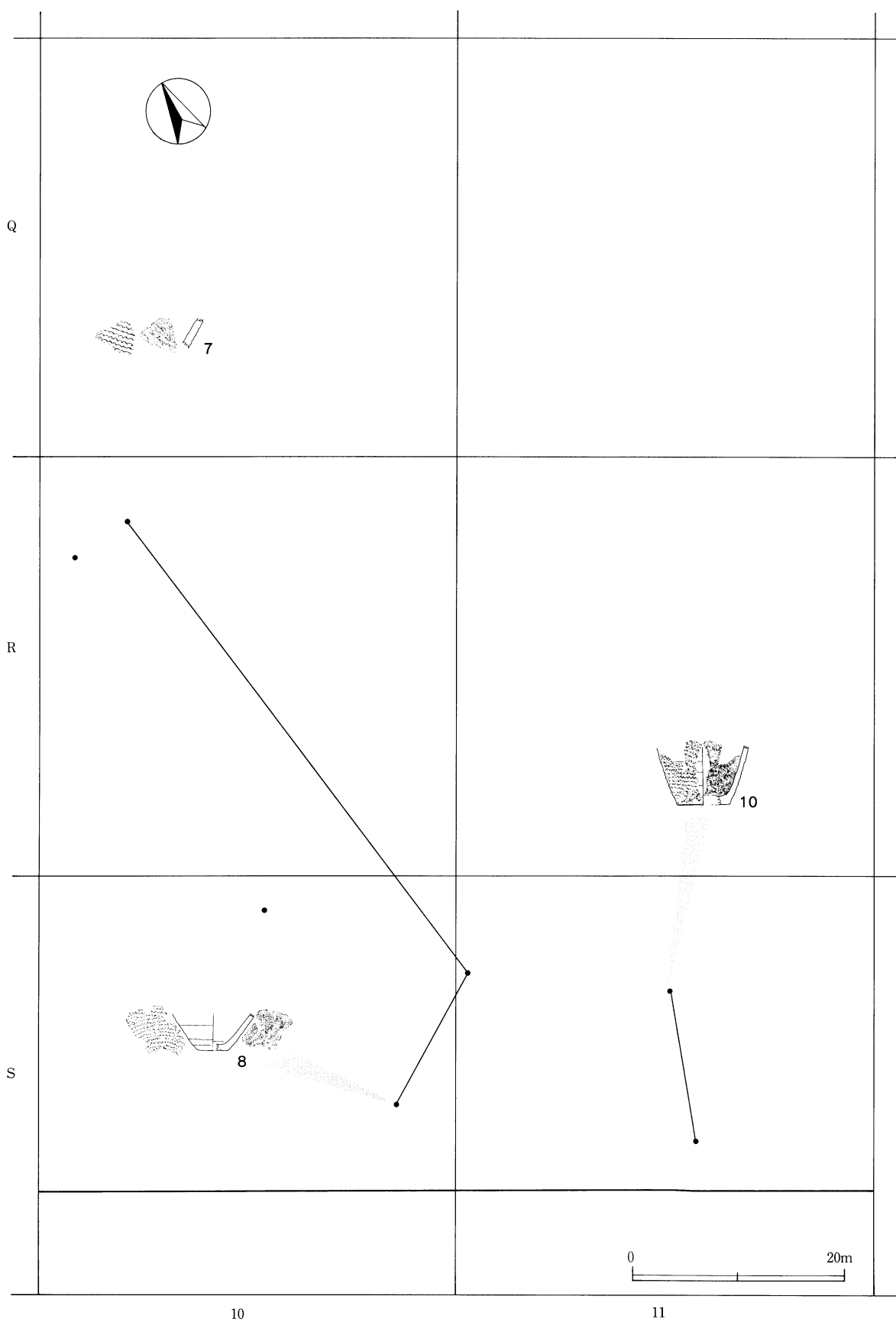
第69図 山形押型文土器出土状況全体図



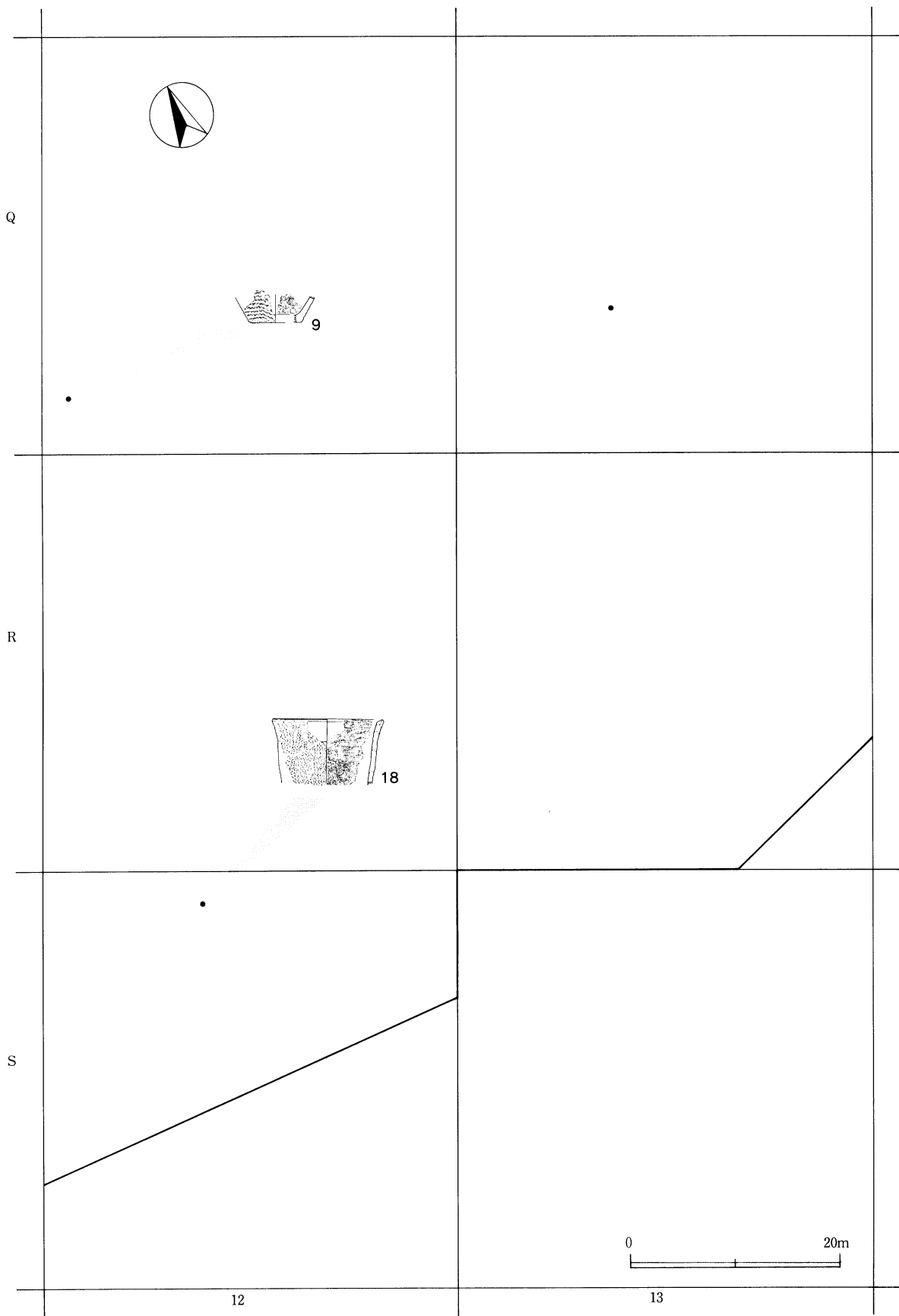
第70図 山形押型文土器出土状況図1 (Q・R・S-5・6区)



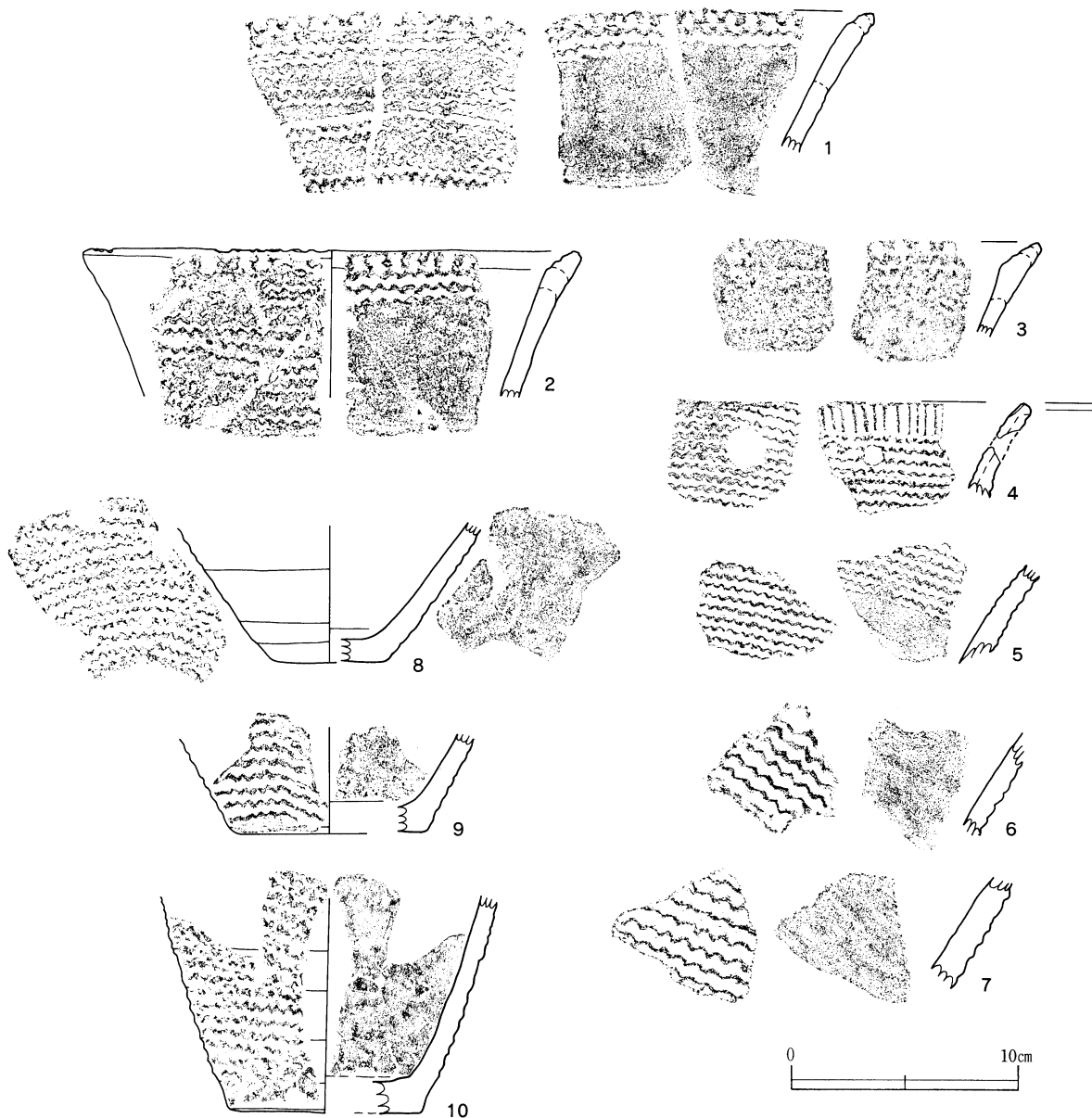
第71図 山形押型文土器出土状況図2 (Q・R・S-8・9区)



第72図 山形押型文土器出土状況図3 (Q・R・S-10・11区)



第73図 山形押型文土器出土状況図4 (Q・R・S-12・13区)

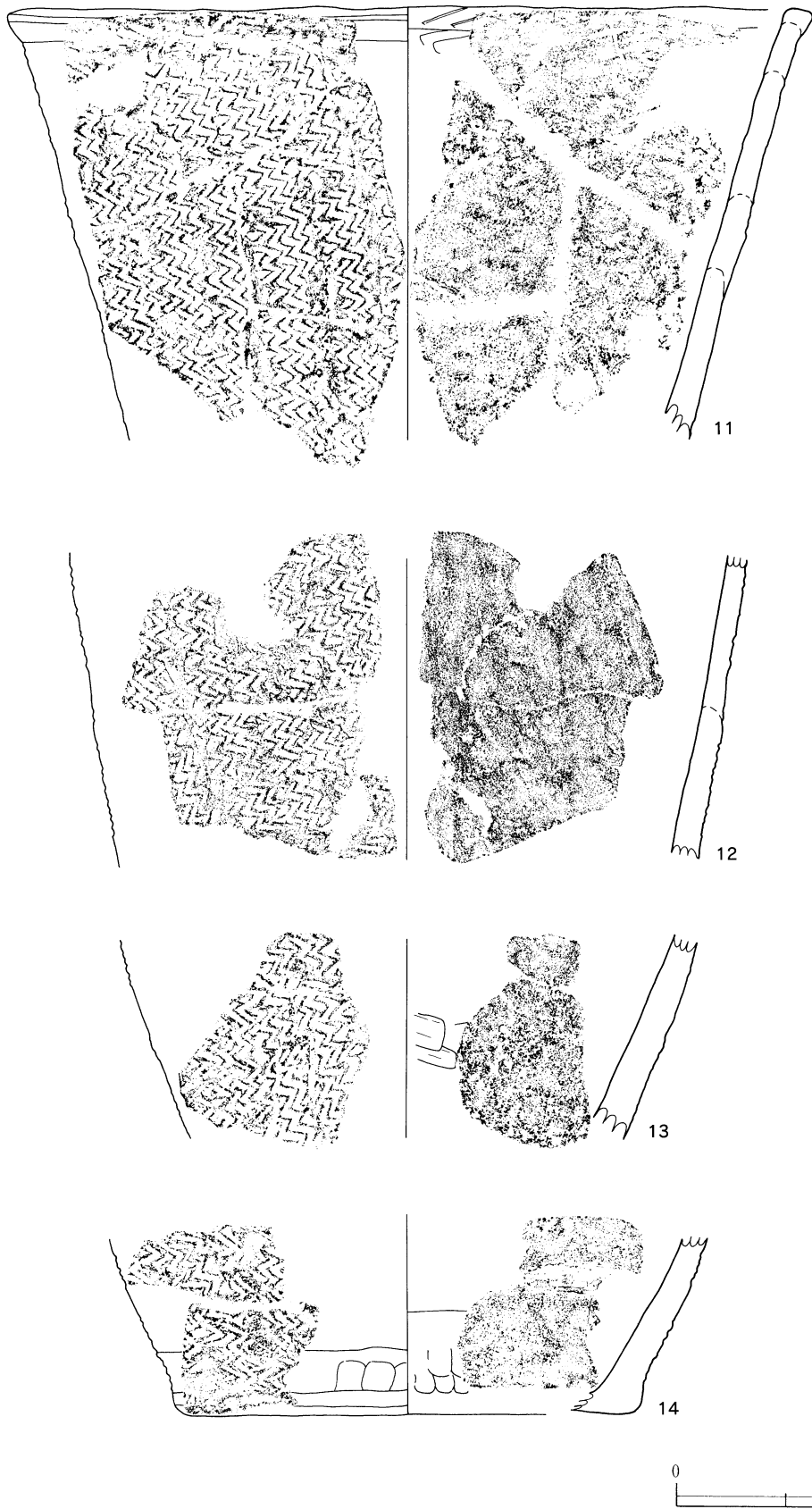


第74図 山形押型文土器実測図（1）

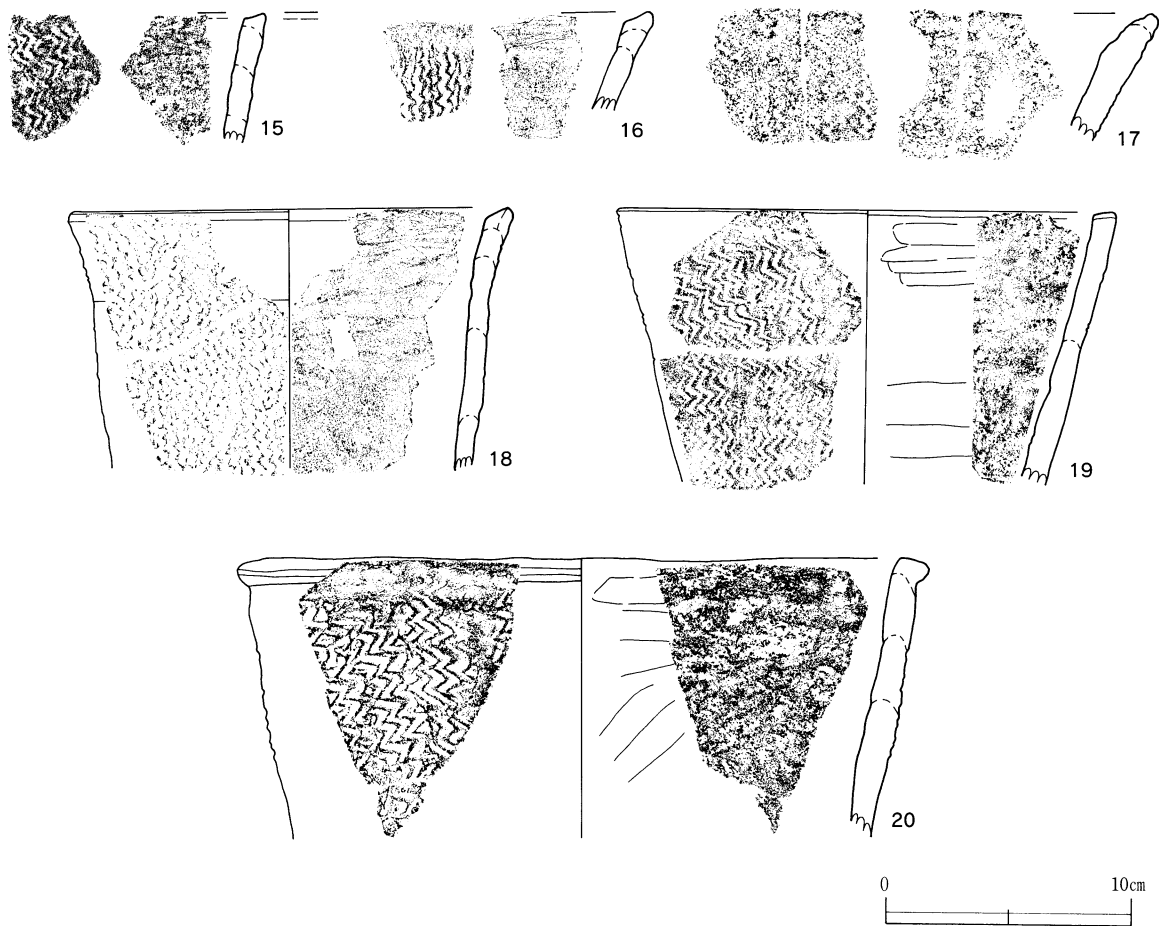
山形押型文土器観察表（1）

挿図 番号	報告 番号	出土 区	注記 番号	実測図 番号	層	器種	部位	胎土					外器面 調整	内器面 調整	色調		備考
								石英	長石	角閃石	クローンモ	砂礫			外器面	内器面	
第 74 図	1	R-0.9	4549	62	Ⅶ	深鉢	口縁	○	○	○	○	砂粒を含む	剥落	ナデ	暗茶褐色	暗黄褐色	
	2	R-0.9	5864	80	Ⅶ	深鉢	口縁	○	○	○	○	細砂・微砂	ナデ	ナデ	暗茶褐色	暗黄褐色	口径21.5cm
	3	S-0.9	5681	63	Ⅶ	深鉢	口縁	○	○	○	○	砂粒を含む	剥落	ハケ→ナデ	暗茶褐色	暗黄褐色	
	4	S-0.5	2441	68	Ⅶ	深鉢	口縁	○	○	○	○	細砂・微砂	ナデ	ナデ	暗黄褐色	暗赤褐色	
	5	S-0.5	2167	58	Ⅶ	深鉢	胴部	○	○	○	○	細砂・微砂	ナデ	ナデ	暗茶褐色	暗赤褐色	
	6	R-0.9	5341	60	Ⅵ	深鉢	胴部	○	○	○	○	細砂・微砂	ナデ	ナデ	暗茶褐色	暗黄褐色	
	7	R-1.0	12935	59	Ⅶ	深鉢	胴部	○	○	◎	○	細砂・微砂	ナデ	ナデ	暗茶褐色	暗黄褐色	
	8	R-1.0	8635	14	Ⅵ	深鉢	底部～胴部下半	○	○			砂粒を含む	ナデ	ナデ	明黄褐色	黄褐色	底径4.8cm
	9	S-1.1	9028	72	Ⅵ	深鉢	底部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ナデ	暗黄褐色	暗茶褐色	底径8.4cm
	10	S-1.1	283	15	Ⅵ	深鉢	底部～胴部下半	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	丁寧なナデ	暗茶褐色	暗赤褐色	底径8.0cm





第75図 山形押型文土器実測図（2）



第76図 山形押型文土器実測図（3）

山形押型文土器観察表（2）

挿図 番号	報告 番号	出土 区	注記 番号	実測図 番号	層	器種	部位	胎土					外器面 調整	内器面 調整	色調		備考	
								石英	長石	角閃石	ク라운モ	砂礫			外器面	内器面		
第 75 図	11	S-09	581	103	VII	深鉢	口縁	○	○		○	砂粒を含む	ナデ	ハケ→雑なナデ	暗赤褐色	暗黄褐色	口径25.6cm	
		S-09	68号集石 1															
		S-09	69号集石 26															
	12	S-09	653	109	VII	深鉢	胴部	○	○			砂粒を含む	ナデ	ナデ	暗赤褐色	暗黄褐色		
		S-09	658															
		S-09	1144															
		S-09	1153															
		S-09	1159															
	13	S-09	1143	105	VII	深鉢	胴部	○	○			砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	暗茶褐色	暗褐色		
		S-09	1160															
S-09		2569																
14	S-09	656	104	VII	深鉢	胴部下半	○	○			砂粒を含む	ナデ	ナデ	暗茶褐色	暗褐色	底径22.8cm		
	S-09	1145																
第 76 図	15	R-09	2685	195	VII	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ハケ→ナデ	暗黄褐色	暗褐色		
	16	S-08	1529	61	VII	深鉢	口縁	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ナデ	茶褐色	暗茶褐色		
	17	S-09	1846	64	VII	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	剥落	ナデ	暗赤褐色	暗黄褐色	補修孔あり	
	18	S-12	81	17	VII	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ナデ	暗赤褐色	黒褐色	口径18.1cm, スス付着	
19	R-09	2080	2091	107	VI	深鉢	胴部下半	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	暗茶褐色	暗褐色	口径20.4cm	
	R-09	2091																
20	S-09	69号集石 26	108		VII	深鉢	口縁	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	暗赤褐色	暗赤褐色	口径26.4cm	

## ⑦ 第7群 楕円押型文土器 (第77～88図)

### i) 概要

第7群に属する土器は、264点の土器片が出土し、その内の65点、35個体を資料化した。

第7群は、器表面に楕円押型文を施す土器である。器形と施文方法から3類に分けられる。

第1類に属する土器の特徴は以下のとおりである(第88図29～35)。まず、口縁部形態は平口縁で、口唇部上端は舌状形を呈する。口縁は直行し、胴部下半部はすぼまる器形である。以上のことから胴部上半部と底部の器形は不明であるが、ほぼ平底の砲弾形が想定できる。また、土器の器壁の厚さは約1cmである。以上が本類の指標である。

一方、文様が施される部位は出土している口縁部と胴部下半部との外器面であり、内器面は出土している範囲内では施されておらず無文である。そのうち外器面の文様は、微細な楕円押型文の原体を横位にころがしてつけたものである。

さらに土器胎土中の鉱物は石英・長石・クrownモで構成されており、角閃石が確認できたのは35の土器だけであった。

ところで土器の調整方法は外器面はナデ調整が、内器面は木製工具によるハケ目調整が主流である。土器の色調は外器面が明黄褐色、内器面が明黄白色が主流であった。

第2類に属する土器の特徴は以下のとおりである(第85～87図2～20, 26・27)。まず、口縁部形態は平口縁で、口縁は外反し、胴部中央部で若干膨らむが、胴部下半部ではすぼまり、底部は平底を呈する器形である。また、土器の器壁の厚さは約1.5cmである。

第2類土器の文様が施される部位は、口縁部から胴部下端部までの外器面と口縁部内面とである。そのうち外器面の文様は、粗大な楕円押型文の原体を横位にころがしたもので、本類の指標である。

また、口縁部内面の文様には3種類ある。第1種は、上段に短い原体条痕を下段に横走する楕円押型文を施す土器(2～6, 8)で、このタイプの土器には口唇上端部に刺突連点文が施されている。次の第2種は、長めの原体条痕を1段のみ施す土器(9

～11)で、このタイプの土器は口唇上端部に文様が施されず無文である。さらに第3種は口縁部内面に文様を施さず無文にする土器で(7)、このタイプの土器は口唇上端部や口縁部上段外面(外反部分)にも文様を施さず無文である。ただし、口縁部下段には横走する楕円押型文を施している。

さて多くの第2類土器では、胎土中に含まれる鉱物は石英・長石・角閃石で構成されており、特に角閃石の含有が顕著であるのが注目できる。ところが、上記の口縁部内面施文において第2種に分類した土器の一群ではクrownモの含有は確認できたものの、角閃石の含有は確認できなかった。一方、土器の調整方法は外器面、内器面共にナデ調整が主流である。土器の色調は外器面が黄褐色や暗黄褐色が、内器面が暗黄褐色や暗茶褐色が主流である。

第3類に属する土器の特徴は以下のとおりである(第85～87図1, 21～25・28)。まず、口縁部形態は平口縁で、口縁は外反し、胴部下半部は直線的にすぼまり、底部は直径約8～13cmの平底を呈する器形である。また、土器の器壁の厚さは約1cmである。

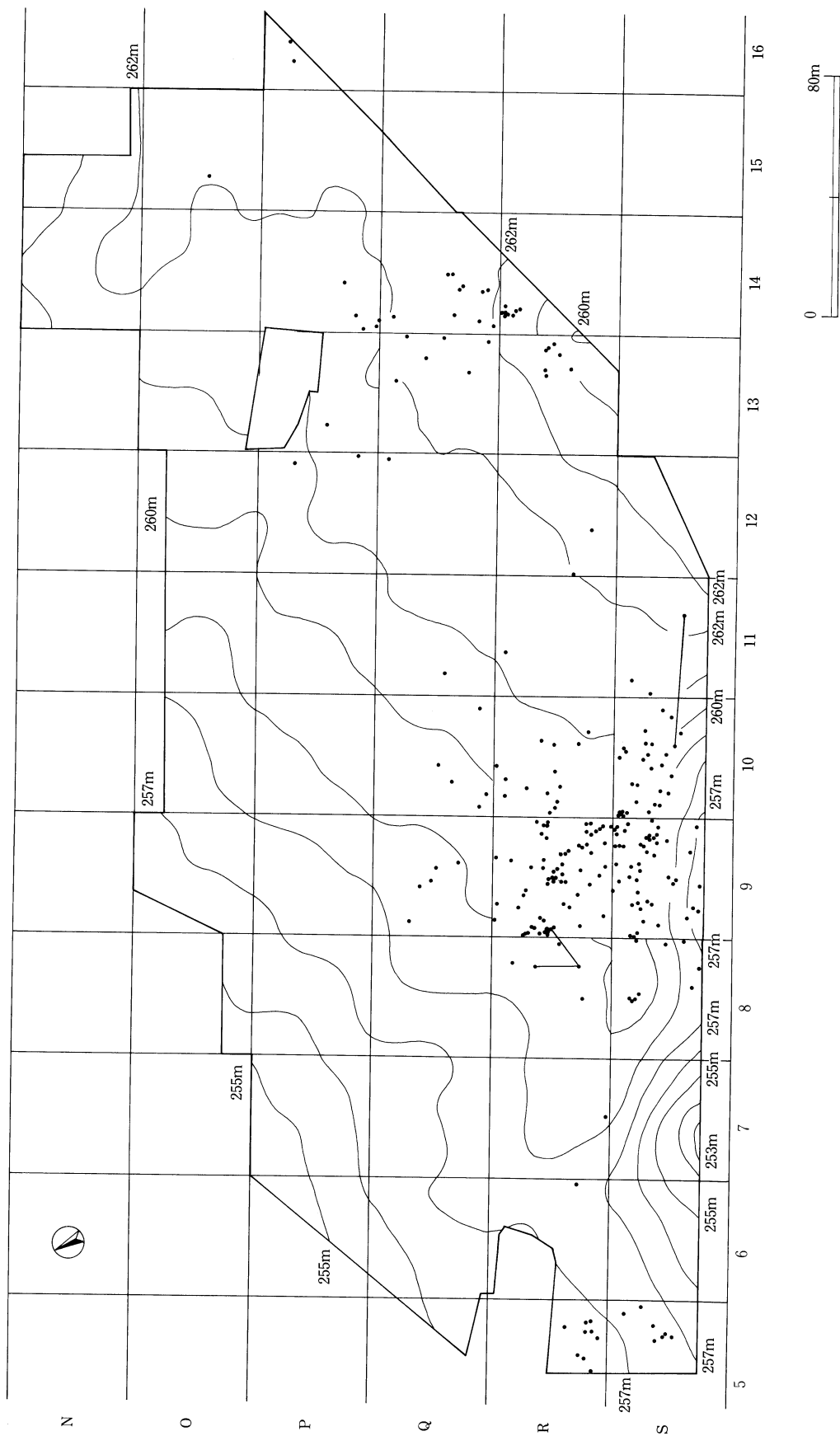
第3類土器の文様が施される部位は、出土している口唇部から口縁部にかけての内外器面と胴部下半部の外器面とである。そのうち外器面の文様は、粗大な楕円押型文の原体を縦位あるいは斜位にころがしたもので、本類の指標である。

また、出土した口縁部は1点だけで口縁部内器面に施される文様の詳細は不明であるが、1の土器は上段に刺突連点文を、下段に横走する楕円押型文を施す土器である。一方、口縁部外器面には連珠状の楕円押型文を縦位にころがして文様を付けた土器である。

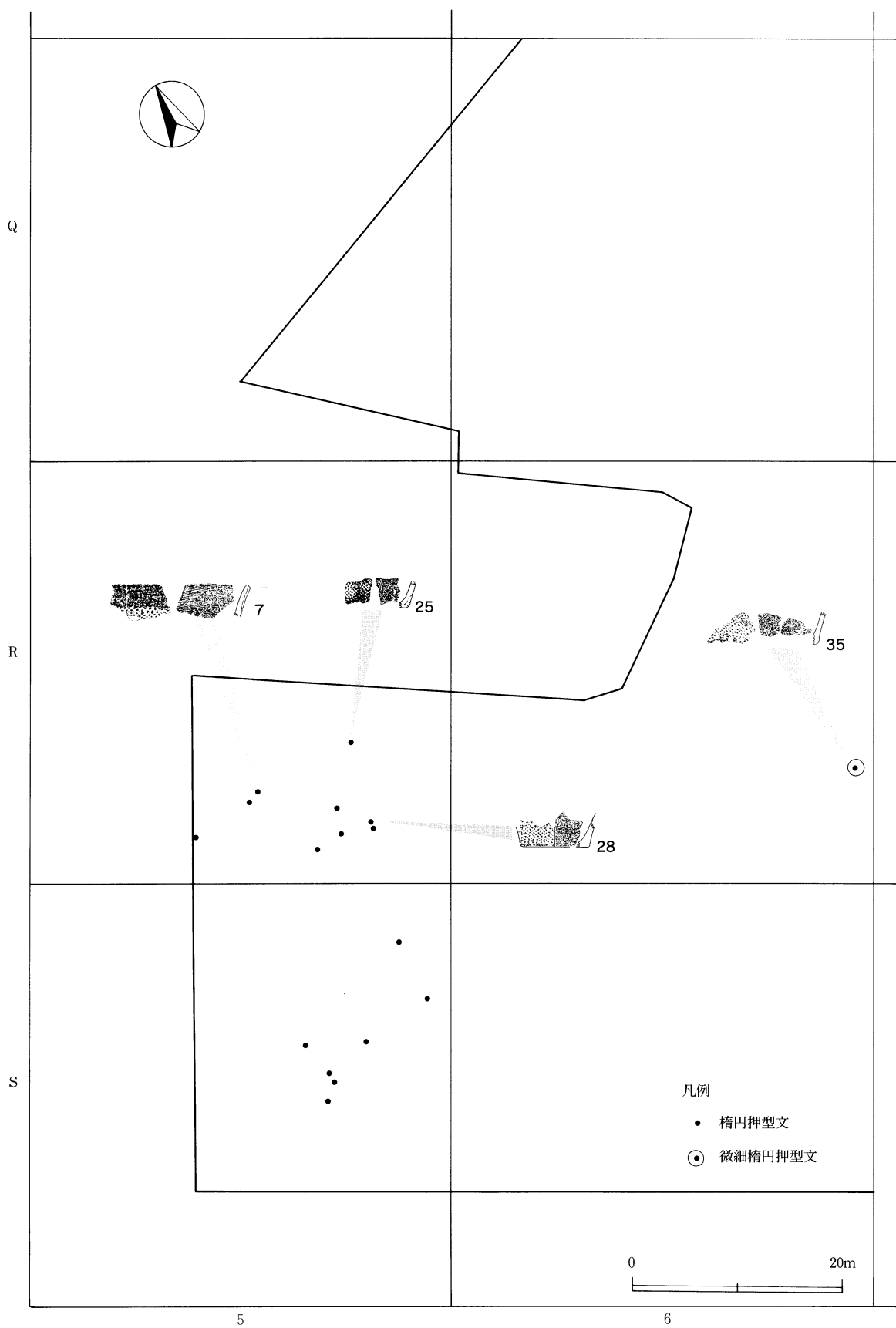
さて、土器胎土中の鉱物は石英・長石の他に、クrownモや角閃石が含まれる土器があり、有意な差は確認できなかった。

ところで、土器の調整方法は外器面、内器面共にナデ調整が主流である。土器の色調は暗赤褐色から黄褐色までかなりばらつきが観察できた。

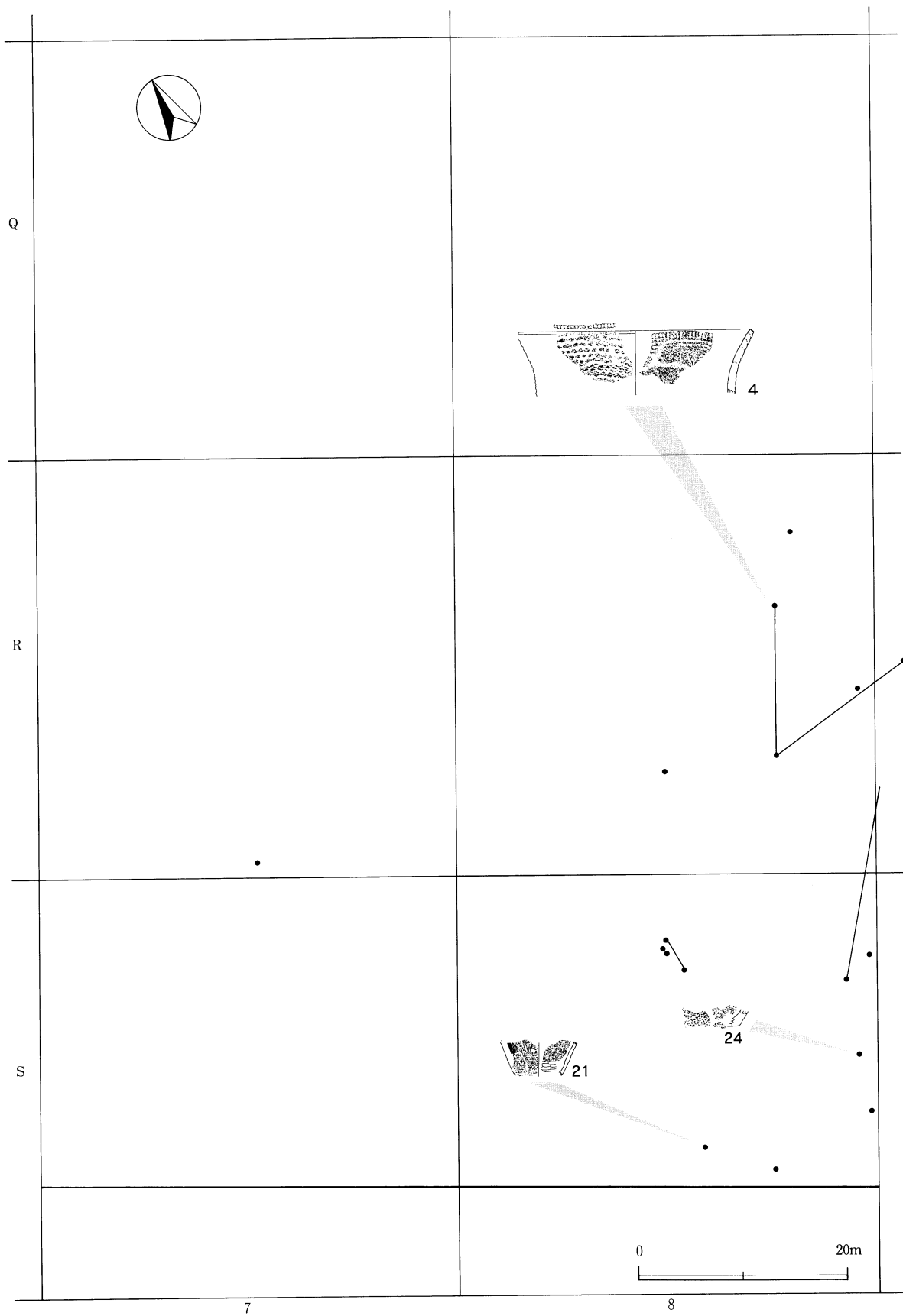
(p.110へ続く)



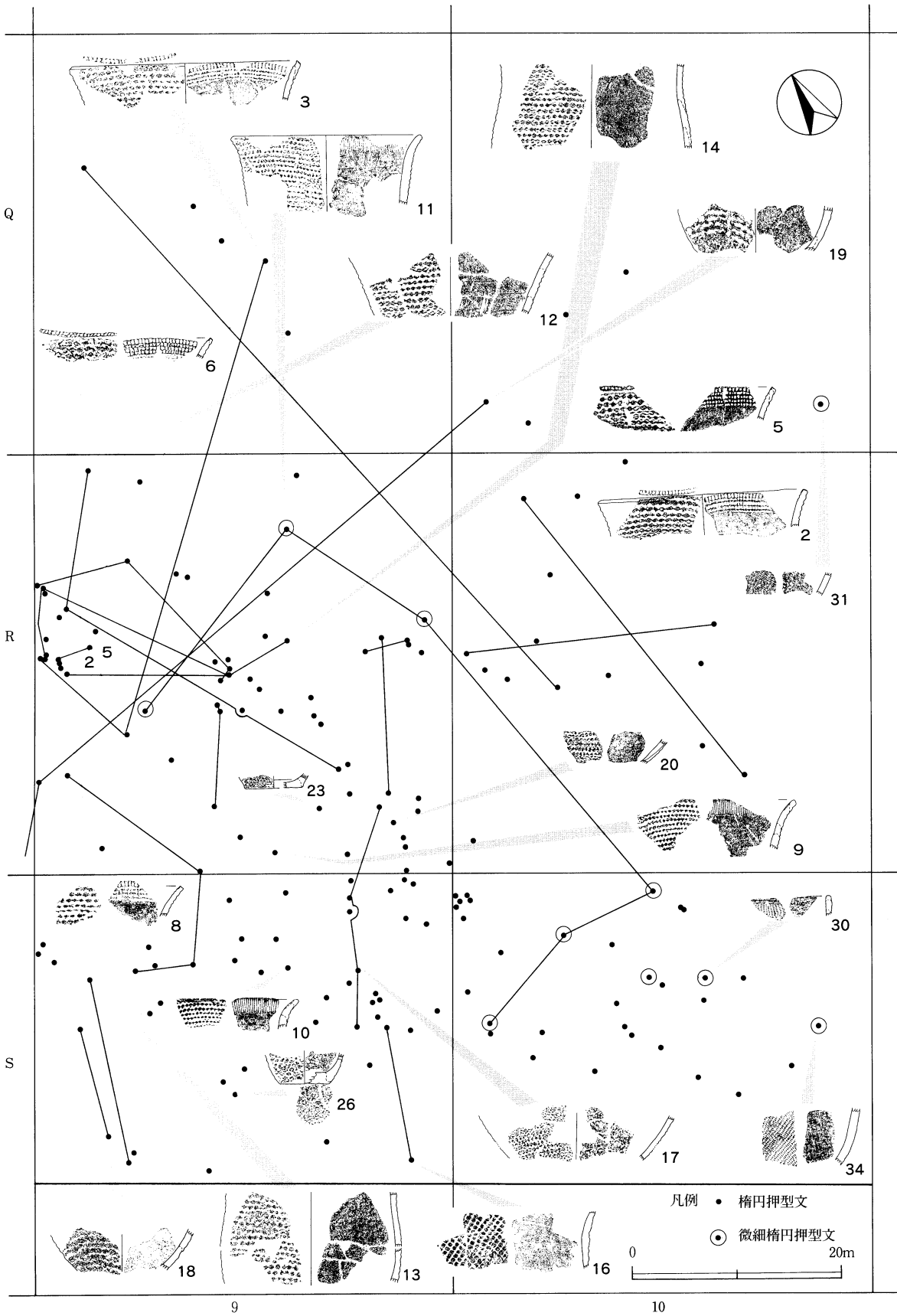
第77図 楕円押型文土器出土状況全体図



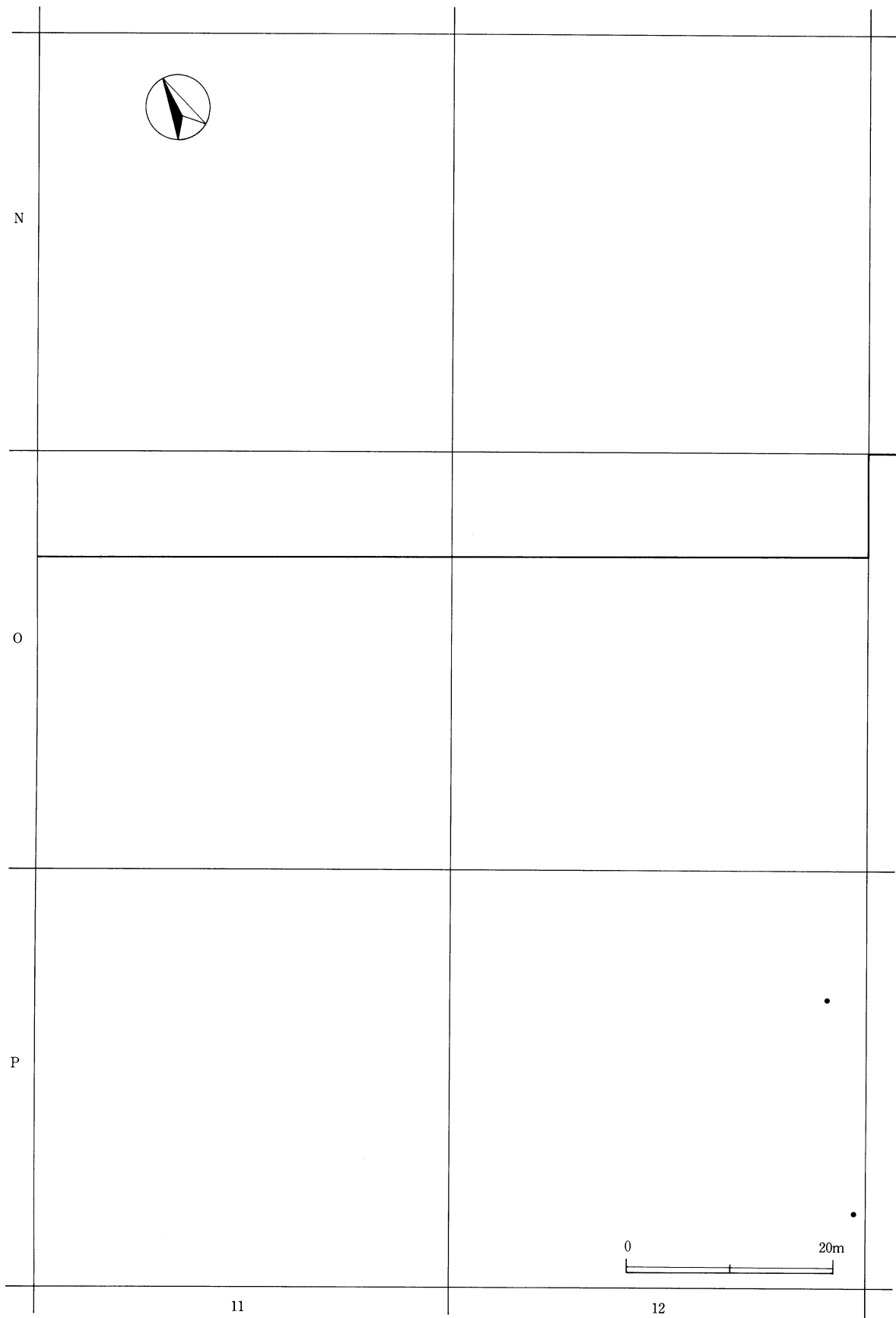
第78図 橢円押型文土器出土状況図1 (R・S-5・6区)



第79図 楕円押型文土器出土状況図2 (R・S-7・8区)

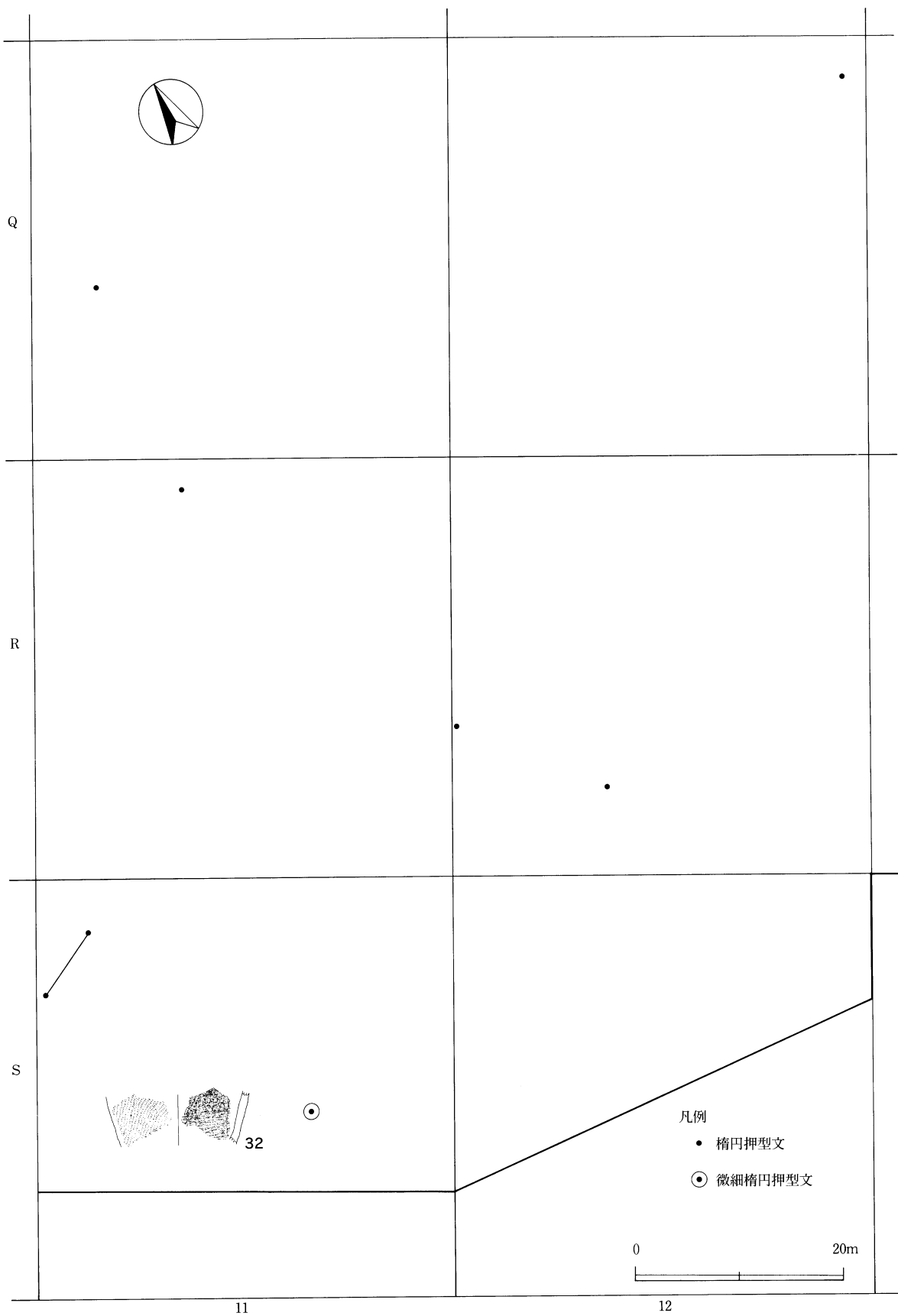


第80図 楕円押型文土器出土状況図3 (Q・R・S-9・10区)

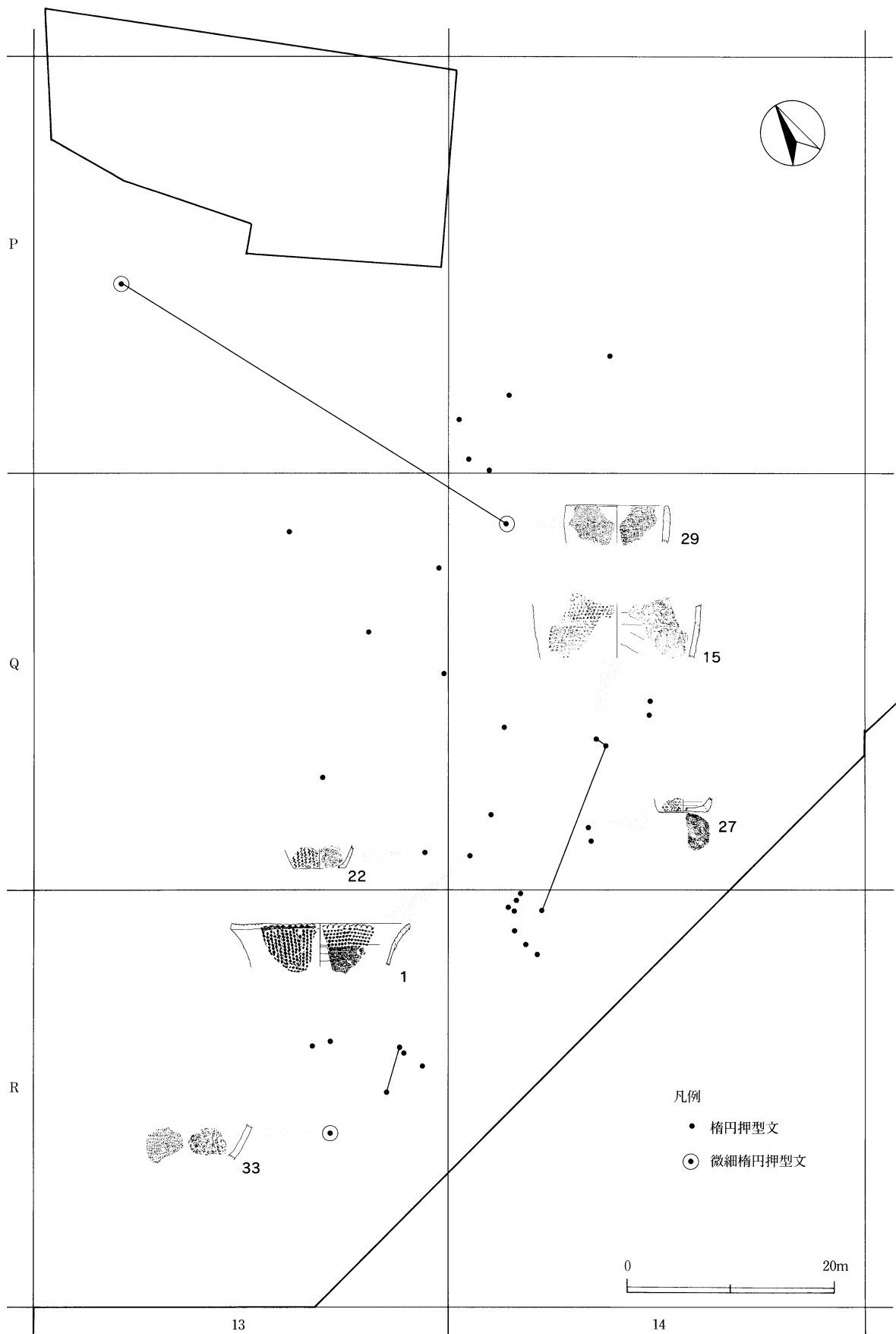


第81図 楕円押型文土器出土状況図4 (O・P-11・12区)

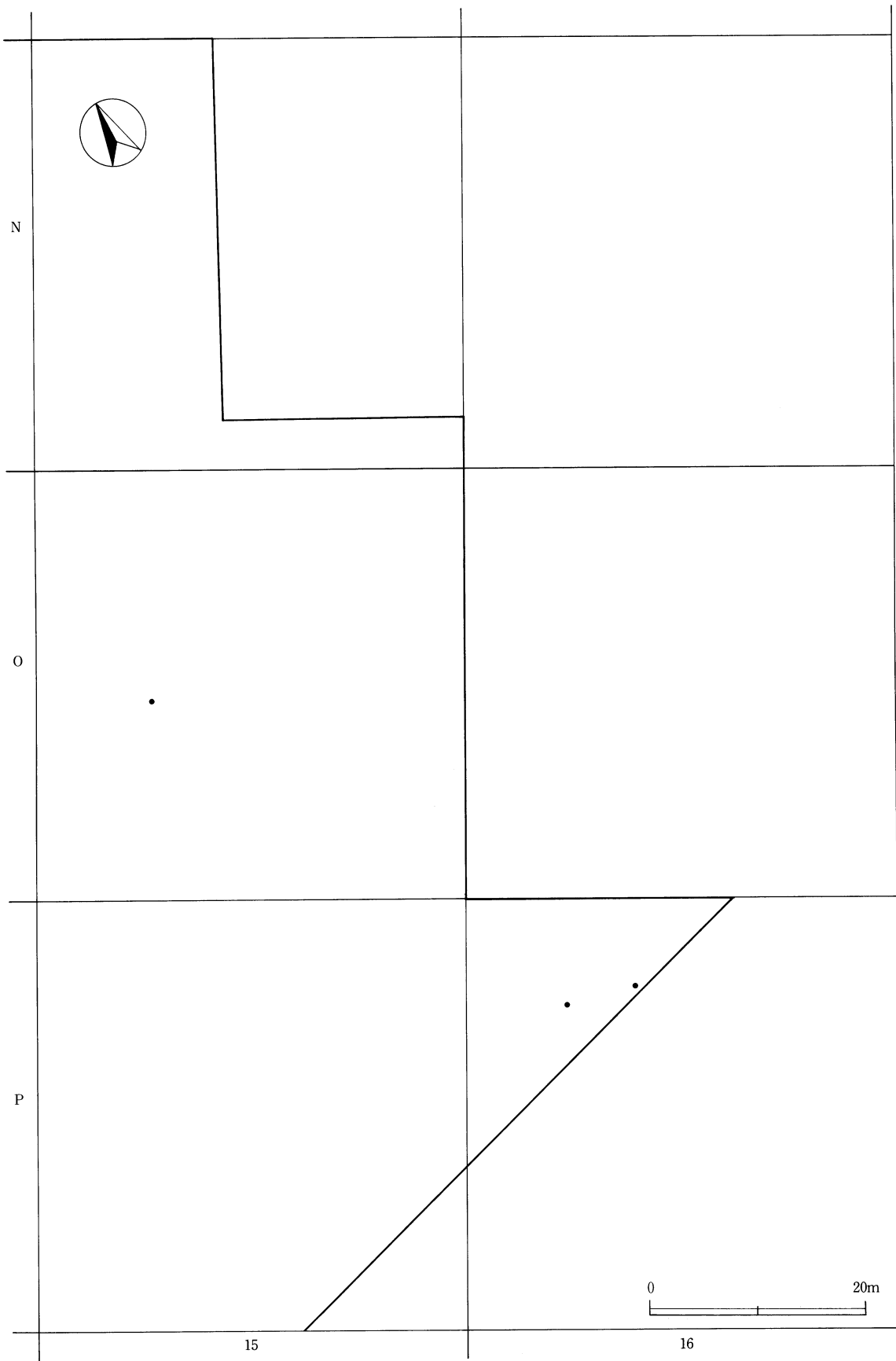




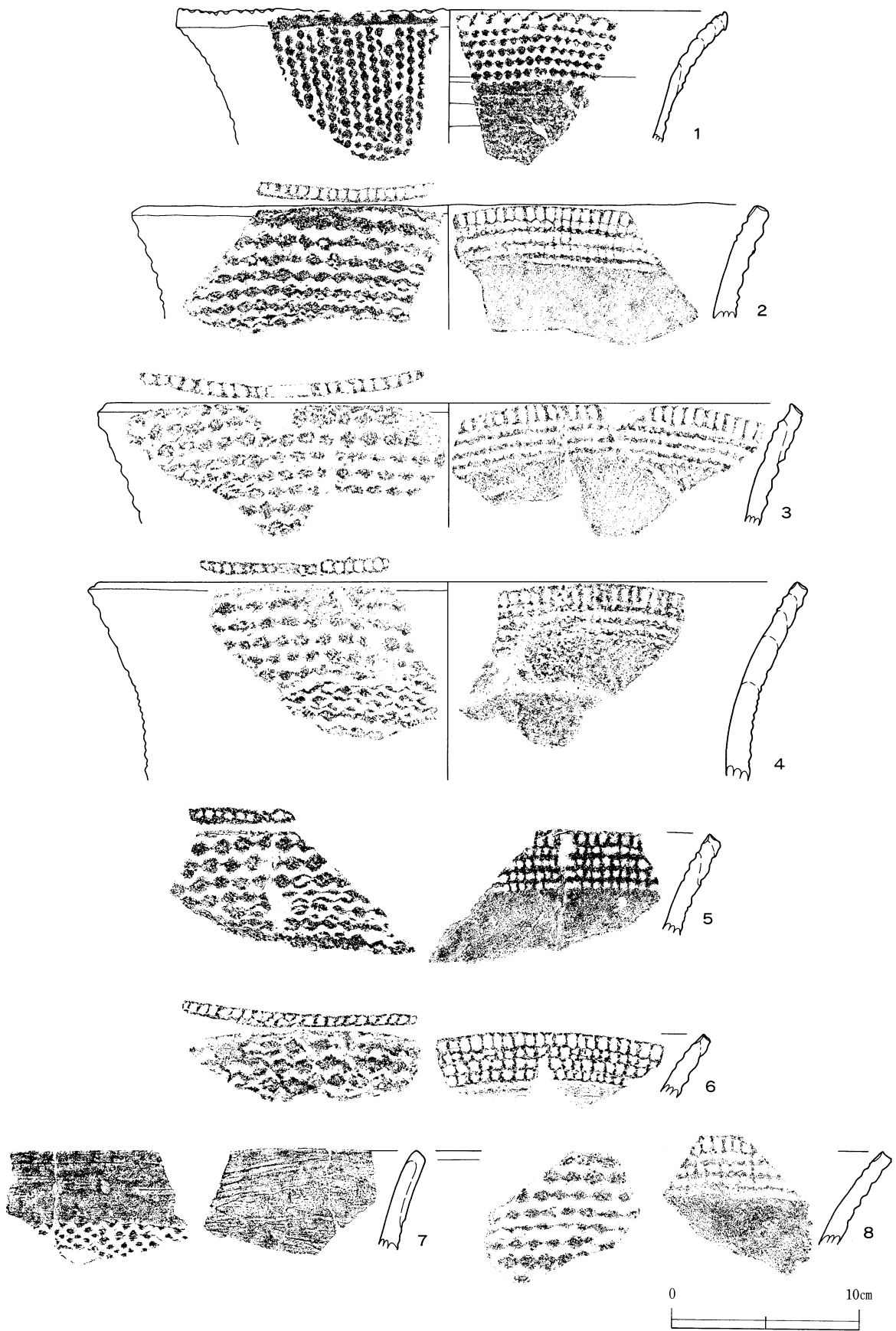
第82図 橢円押型文土器出土状況図5 (Q・R・S-11・12区)



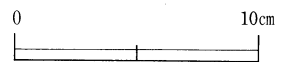
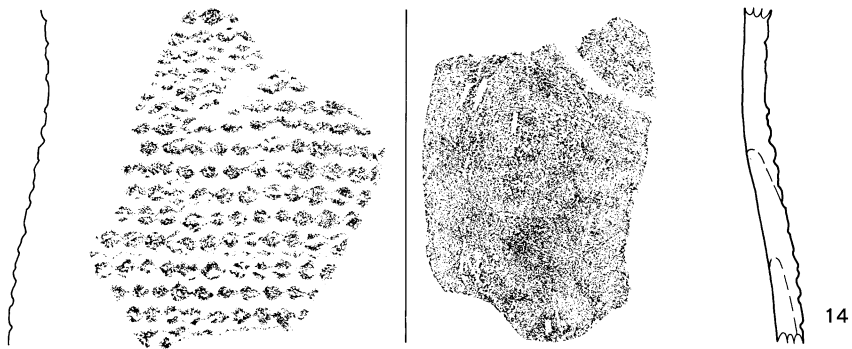
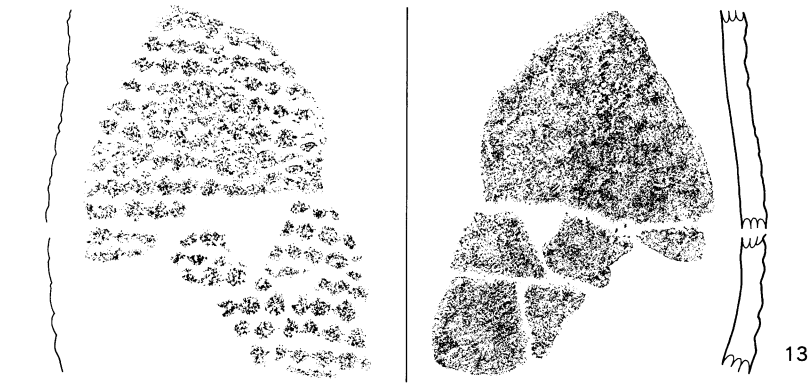
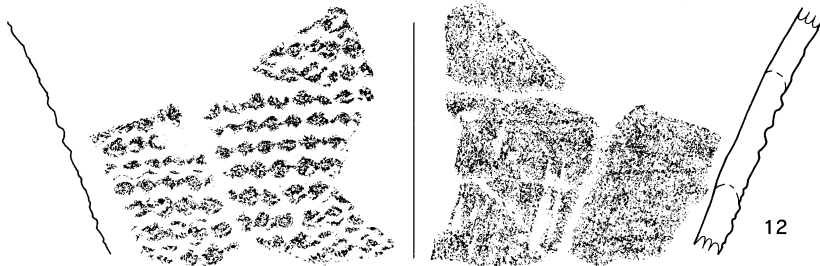
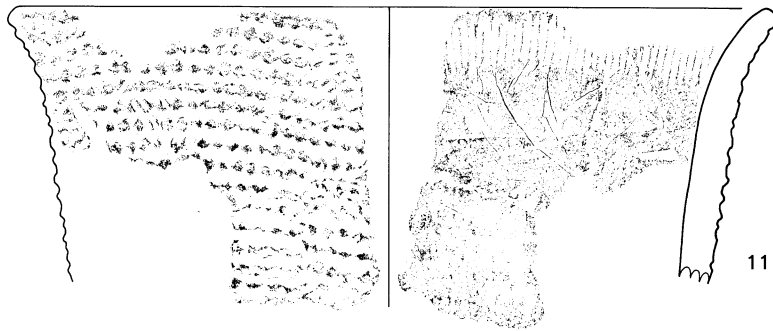
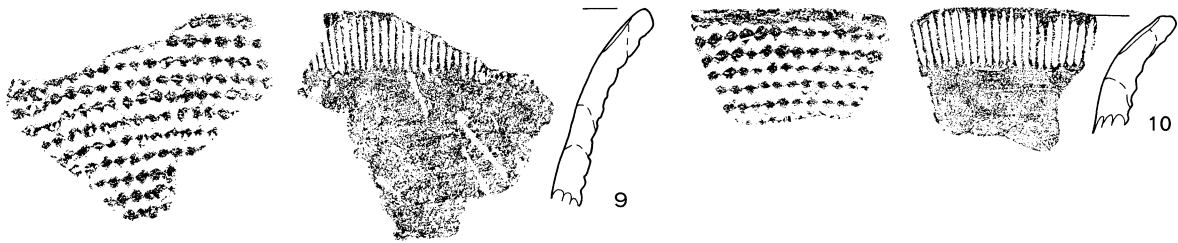
第83図 楕円押型文土器出土状況図6 (P・Q・R-13・14区)



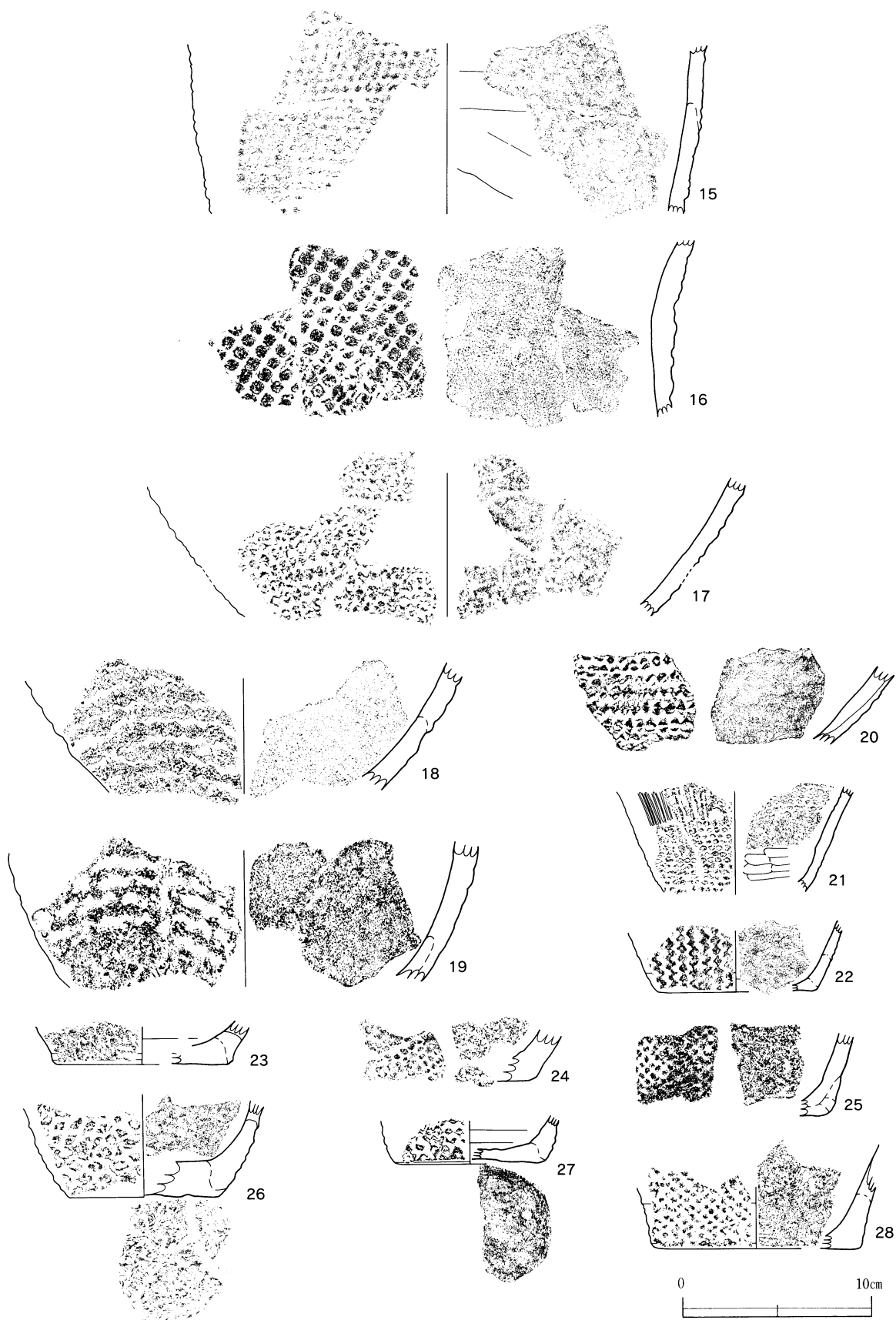
第84図 楕円押型文土器出土状況図7 (O・P-15・16区)



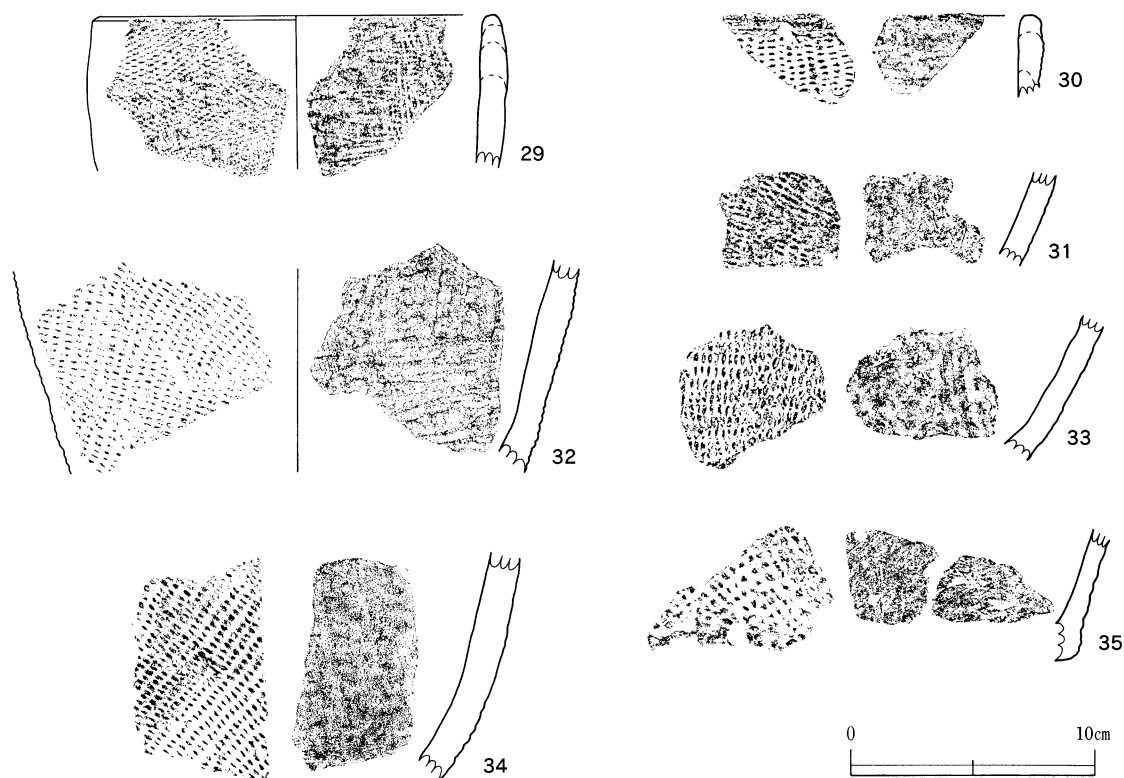
第85図 楕円押型文土器実測図（1）



第86图 楕円押型文土器実測图（2）



第87图 楕円押型文土器実測图 (3)



第88図 橢円押型文土器実測図（4）

一方、出土状況全体図から第7群は、主に標高262mから259mにかけての、R・S-9区からS-10区を中心とする発掘区画南側の区域に集中して出土している（第77図参照）。この区域は、第3群に分類した桑ノ丸式土器や第6群に分類した山形押型文が集中して出土した地域と重なっているのに対して、第2群に分類した下剥峯式土器や第4群に分類した円筒形条痕文土器が集中して出土した地域とは分布域を異にしていることが指摘できる。

## ii) 小結

この第7群の特徴を挙げると、

- ① 直行口縁の器形で、外器面に横走する橢円押型文を施すが、内器面には文様を施さないタイプの土器（第1類土器）。
- ② 外反口縁の器形で、外器面には横走する橢円押型文を施し、内器面には口縁部内面上段に短い原体条痕を、下段に横走する橢円押型文を施すタイプの土器（第2類第1種土器）。

- ③ 外反口縁の器形で、外器面には横走する橢円押型文を施し、口縁部内面には長めの原体条痕を1段のみ施すタイプの土器（第2類第2種）。
- ④ 外反口縁の器形で、外器面には口縁部上段に無文帯を設け、下段に横走する橢円押型文を施し、口唇部上端や内器面には文様を施さないタイプの土器（第2類第3種）。
- ⑤ 外反口縁の器形で、外器面には縦走する橢円押型文を施し、口縁部内面には上段に横位の刺突連点文を施し、下段に横走する橢円押型文を施すタイプの土器（第3類）

に分けることができそうであることを、この項では指摘しておく。

楕円押型文土器観察表

挿入 番号	報告 番号	出土 区	注記 番号	実測図 番号	層	器種	部 位	胎 土					外器面 調整	内器面 調整	色 調		備 考
								石英	長石	角閃石	クローンモ	砂礫			外器面	内器面	
第 85 図	1	Q-14	2211	77	VI	深鉢	口縁~胴部	○	○		◎	細砂・微砂	ナデ	ナデ	暗赤褐色	暗赤褐色	口径29.6cm
	2	R-09	1220	30	VI	深鉢	口縁	○	○	◎		砂粒を含む	ナデ	ナデ	黄褐色	暗黄褐色	
	3	Q-09	4558	94	VI	深鉢	口縁~胴部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ナデ	黄褐色	暗黄褐色	口径37.1cm
		R-09	451														
	4	R-08	694	96	VII	深鉢	口縁	○	○	◎		砂粒を含む	ナデ	ナデ	黄褐色	暗黄褐色	口径38.0cm
		R-09	1220														
	5	R-09	1222	95	VI	深鉢	口縁	○	○	◎		砂粒を含む	ナデ	ナデ	黄褐色	暗黄褐色	胴部径33.6cm
		R-09	1295														
6	R-09	1223	98	VI	深鉢	口縁	○	○	◎		砂粒を含む	ナデ	ナデ	黄褐色	暗黄褐色		
	R-09	1545															
7	R-05	50	69	VI	深鉢	口縁	○	○	◎		細砂・微砂	ハケ→丁寧なナデ	ハケ→丁寧なナデ	暗赤褐色	茶褐色		
8	R-09	2008	102	VI	深鉢	口縁	○	○	◎		砂粒を含む	ナデ	ナデ	暗赤褐色	暗黄褐色		
9	R-09	5699	92	VI	深鉢	口縁	○	○		○	砂粒を含む	ナデ	ナデ	暗赤褐色	暗黄褐色		
10	S-09	1106	91	VI	深鉢	口縁	○	○		○	砂粒を含む	ナデ	ナデ	暗赤褐色	暗茶褐色		
第 86 図	11	R-09	543	31	VI	深鉢	口縁	○	○		○	砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	暗赤褐色	暗茶褐色	口径33.0cm
		R-09	4236														
		R-09	4523														
		S-10	845														
		S-10	2058														
	S-10	5787															
	12	R-09	268	99	VII	深鉢	胴部	○	○	◎		砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	黄褐色	暗黄褐色	
		R-09	305														
R-09	3812																
13	R-09	5833	100	VII	深鉢	胴部	○	○	◎		砂粒を含む	ナデ	丁寧なナデ	黄褐色	暗茶褐色	胴部最大径29.8cm	
	S-09	1137															
	S-09	1156															
S-09	1168																
14	R-09	1217	93	VI	深鉢	胴部	○	○	◎		砂粒を含む	ナデ	丁寧なナデ	暗黄褐色	暗褐色	胴部径33.0cm	
	R-09	1333															
	R-09	1545															
R-09	4870																
第 87 図	15	Q-14	711	106	VI	深鉢	胴部	○	○		◎	細砂・微砂	ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色~暗茶褐色	黒褐色	胴部径27.6cm
		Q-14	2198														
	R-14	575															
	16	S-09	541	32	VII	深鉢	胴部	○	○	◎		細砂・微砂	ナデ	ナデ	暗黄褐色	明黄褐色	口径31.0cm
		S-09	1591														
	17	R-09	5659	71	VI	深鉢	胴部	○	○		○	砂粒を含む	ナデ	ハケ→丁寧なナデ	暗黄褐色	暗茶褐色	
		S-09	15														
		S-09	990														
S-09		990															
S-09	1198																
18	S-09	695	97	VII	深鉢	胴部	○	○	◎		砂粒を含む	ナデ	ナデ	黄褐色	暗黄褐色	胴部径23.6cm	
	S-09	1748															
19	Q-10	2209	101	VI	深鉢	胴部	○	○	◎		砂粒を含む	ナデ	ナデ	暗黄褐色	暗褐色	胴部径25.2cm	
	R-09	5830															
	S-08	51															
20	R-09	5323	70	VI	深鉢	口縁	○	○			砂粒を含む	ナデ	ナデ	暗赤褐色	暗黄褐色		
21	S-08	1624	76	VI	鉢	胴部下半	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ナデ	暗赤褐色	暗褐色	胴部径12.8cm	
22	Q-13	94	16	VI	深鉢	底部~胴部下半	○	○	○	○	細砂・微砂	ナデ	丁寧なナデ	明黄白色	暗褐色	底径8.0cm	
23	R-09	5344	66	VI	深鉢	底部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ナデ	明黄褐色	明黄褐色	底径9.8cm	
24	S-09	1853	90	VI	深鉢	底部	○	○			砂粒を含む	ナデ	ナデ	暗茶褐色	暗褐色		
25	R-05	2	88	VI	深鉢	底部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ナデ	明黄褐色	明黄褐色		
26	S-09	2615	89	VI	深鉢	底部	○	○			砂粒を含む	丁寧なナデ	丁寧なナデ	明黄褐色	明黄白色	底径8.0cm	
27	Q-14	2132	65	VI	深鉢	底部	○	○		◎	砂粒を含む	ナデ	丁寧なナデ	暗茶褐色	黒褐色	底径7.4cm	
28	R-05	47	67	VI	深鉢	底部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ナデ	明黄褐色	明黄褐色	底径10.0cm	
第 88 図	29	P-13	238	81	VI	深鉢	口縁	○	○			砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	茶褐色	茶褐色	口径16.2cm
		Q-14	2443														
	30	S-10	2850	75	VI	深鉢	口縁	○	○		○	砂粒を含む	丁寧なナデ	丁寧なナデ	暗褐色	明黄白色	
	31	Q-10	5307	78	VI	深鉢	胴部下半	○	○			砂粒を含む	ナデ	ナデ	明黄褐色	明黄褐色	
	32	S-11	193	73	VI	深鉢	胴部下半	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ハケ→ナデ	明黄白色	明黄白色	胴部径23.4cm
	33	R-13	2336	79	VI	深鉢	胴部下半	○	○		○	砂粒を含む	ナデ	ナデ	明黄褐色	黒褐色	
	34	S-10	6983	74	VI	深鉢	胴部	○	○		○	砂粒を含む	ナデ	丁寧なナデ	明黄白色	明黄白色	
35	R-06	92	87	VI	深鉢	底部	○	○	◎		砂粒を含む	ナデ	ナデ	明黄褐色	明黄褐色		



## ⑧ 第8群 条線押型文土器 (第89～94図)

### i) 概要

第8群に属する土器は、33点の土器片が出土し、その内の22点、3個体を資料化した。

第8群は、器表面に条線状の押型文を施す土器である。第10地点からは2個体分が出土した。

第8群に属する土器形態の特徴は以下のとおりである(第94図1～3)。まず、口縁部形態は平口縁で、口唇部上端は平坦面を作り出す。口縁部は外側に開き、胴部はほぼ直線的にすぼまる。底部は接合例がないため不明であるが、丸底的な尖底である3を同一個体と判断して、掲載した。ところで、口縁部内面の形態は、不明瞭ながらも稜を形成するタイプである。さて、土器の焼きは堅くて緻密で、器壁の厚さは約1cmである。

ところで第8群の文様が施される部位は、外器面では出土している口縁部上端から胴部上半にかけて部分で、内器面では口縁部内面である。そのうち外器面の文様は、棒状工具に螺旋状の条線を施したものを原体として横位にころがしてつけたもので、本類の指標である。また、口縁部内面の文様は、上段に短い原体条痕を下段に横走する楕円押型文を施す土器で、口唇上端部は無文である。

さて土器の胎土は、石英・長石・角閃石で構成されている。一方、土器の調整方法は外器面はナデ調整が、内器面は木製工具によるハケ目調整の後にナデ調整を行っている。土器の色調は、外器面が茶褐色で、内器面が暗茶褐色から茶褐色であった。

ここで出土状況全体図を注目すると、第8群土器はR・S-9区を中心として出土するものの、集中域はなく分散して出土していることが分かる。また、最長約220m離れて出土した土器が接合していることや、約150m離れて出土したほぼ同じ標高地の土器が接合していることも注目できる(第89図参照)。

### ii) 小結

この第8群の特徴を挙げると、外器面に横走する押型文を施し、口縁部内面には上段に原体条痕を、下段に横走する楕円押型文を施すタイプの土器である、と指摘できる。

## ⑨ 第9群 変形撚糸文土器 (第95～101図)

### i) 概要

第9群に属する土器は、90点の土器片が出土し、その内の16点、11個体を資料化した。

第9群は、器表面に撚糸文を施す土器である。

第9群に属する土器形態の特徴は以下のとおりである(第101図1～11)。まず、口縁部形態は平口縁である。口縁部は外側に大きく開き、頸部はすぼまり、胴部上半で膨らみ、胴部下半で再びすぼまる器形である。さて、土器の焼きは堅くて緻密で、器壁の厚さは約0.6cmである。

一方、文様が施される部位は、出土している口縁部から胴部下半までの外器面と、口縁部内面とである。そのうち外器面の文様は、4条から5条の撚糸を縦位あるいは横位にころがしてつけたものである。口縁部内面には横走する撚糸文を施した土器である。これが、本類の指標である。

さらに土器胎土中の鉱物は石英・長石・角閃石・クrownモで構成されており、中にクrownモが特に多く含まれる土器が見受けられた。

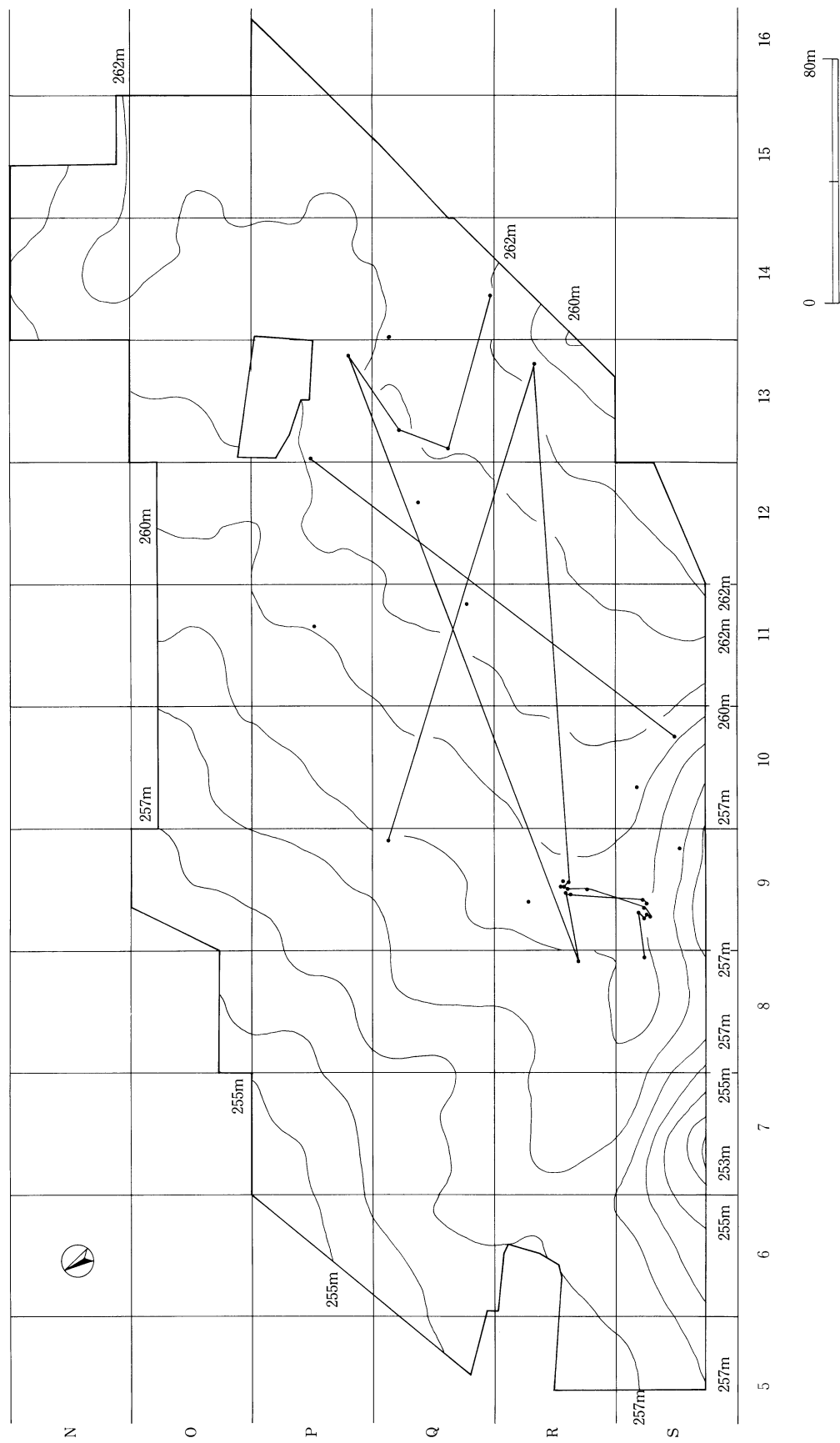
ところで土器の調整方法は外器面はナデ調整が、内器面は木製工具による横方向のハケ目調整の後にナデ調整を行っているのが主流である。土器の色調は外器面が暗茶褐色あるいは明黄褐色、内器面が暗黄褐色や茶褐色そして暗赤褐色が主流であった。

さて出土状況全体図から第9群は、主にQ・R-13区を中心とする、第10地点のなかで標高が一番高い262m付近のテラ地から南側への緩傾斜地に集中して出土している(第95図参照)。

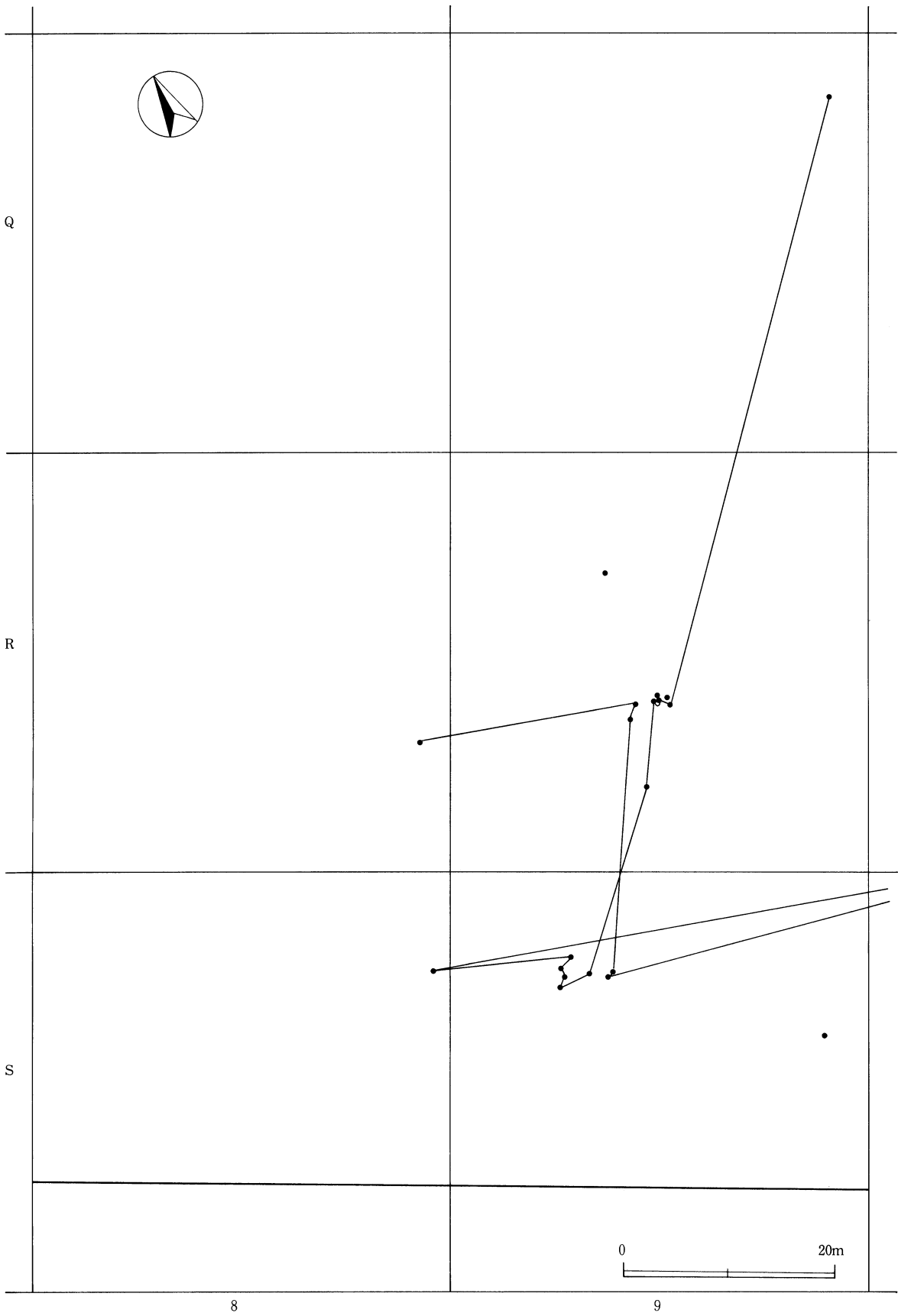
この地域は、第2群や第4群そして第5群が集中して出土した地域と重なっている一方で、第3群や第6群そして第7群が集中して出土した地域とは分布域を異にしていることが指摘できる。

### ii) 小結

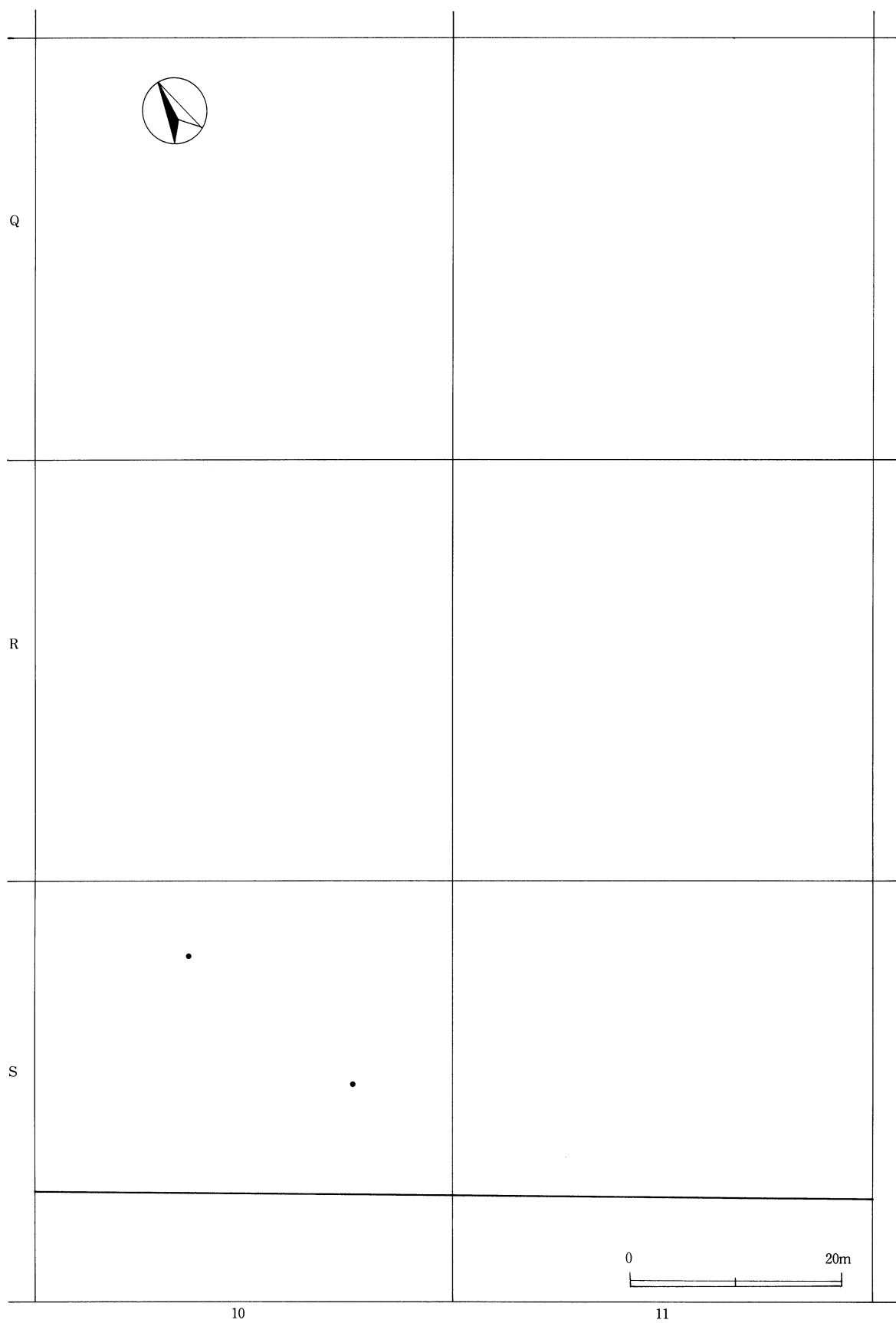
この第9群の特徴を挙げると、口縁部が大きく開く器形で、文様は外器面に横走、あるいは縦走する撚糸文を施し、口縁部内面には横走する撚糸文を施している、と指摘できる。



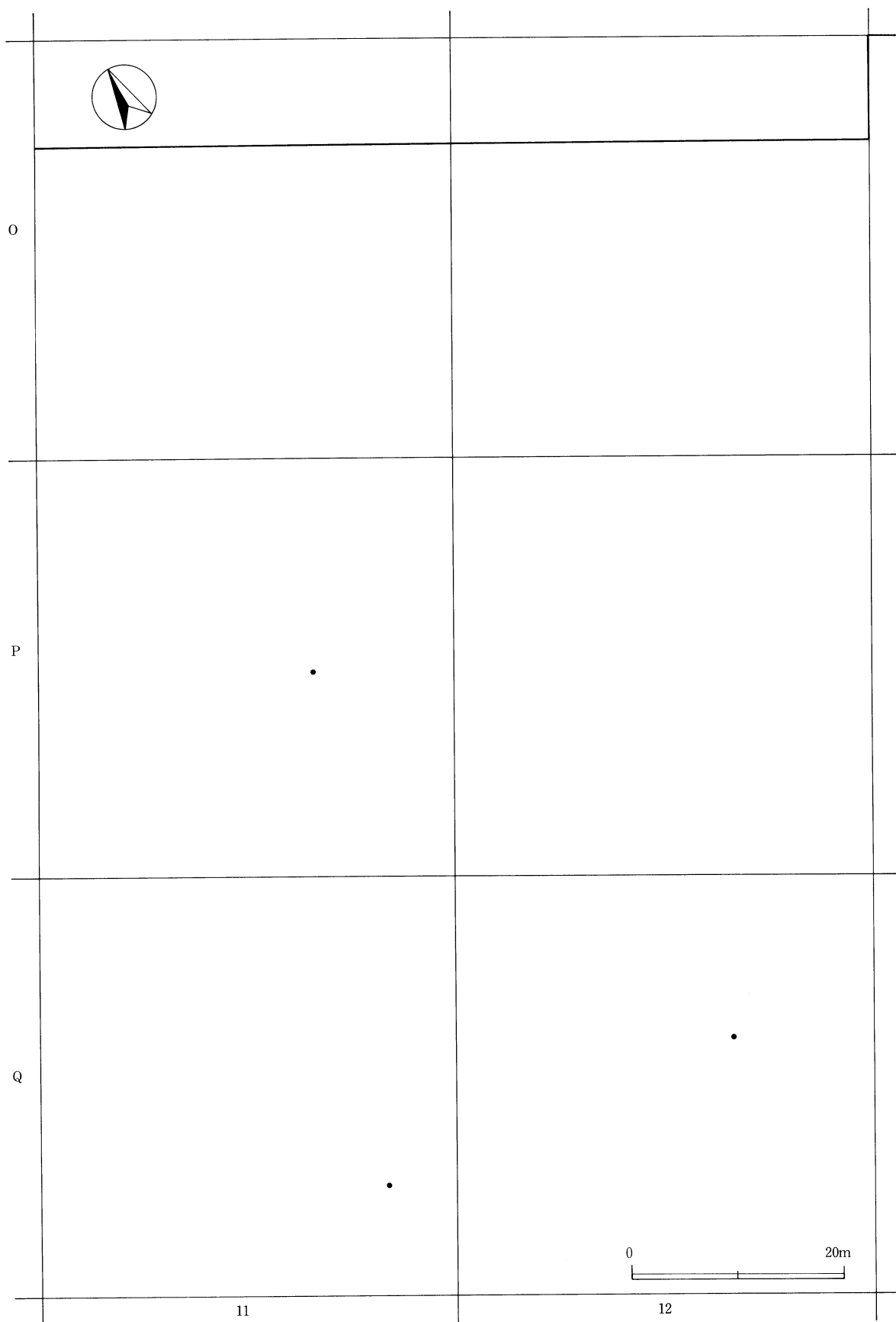
第89図 条線押型文土器出土状況全体図



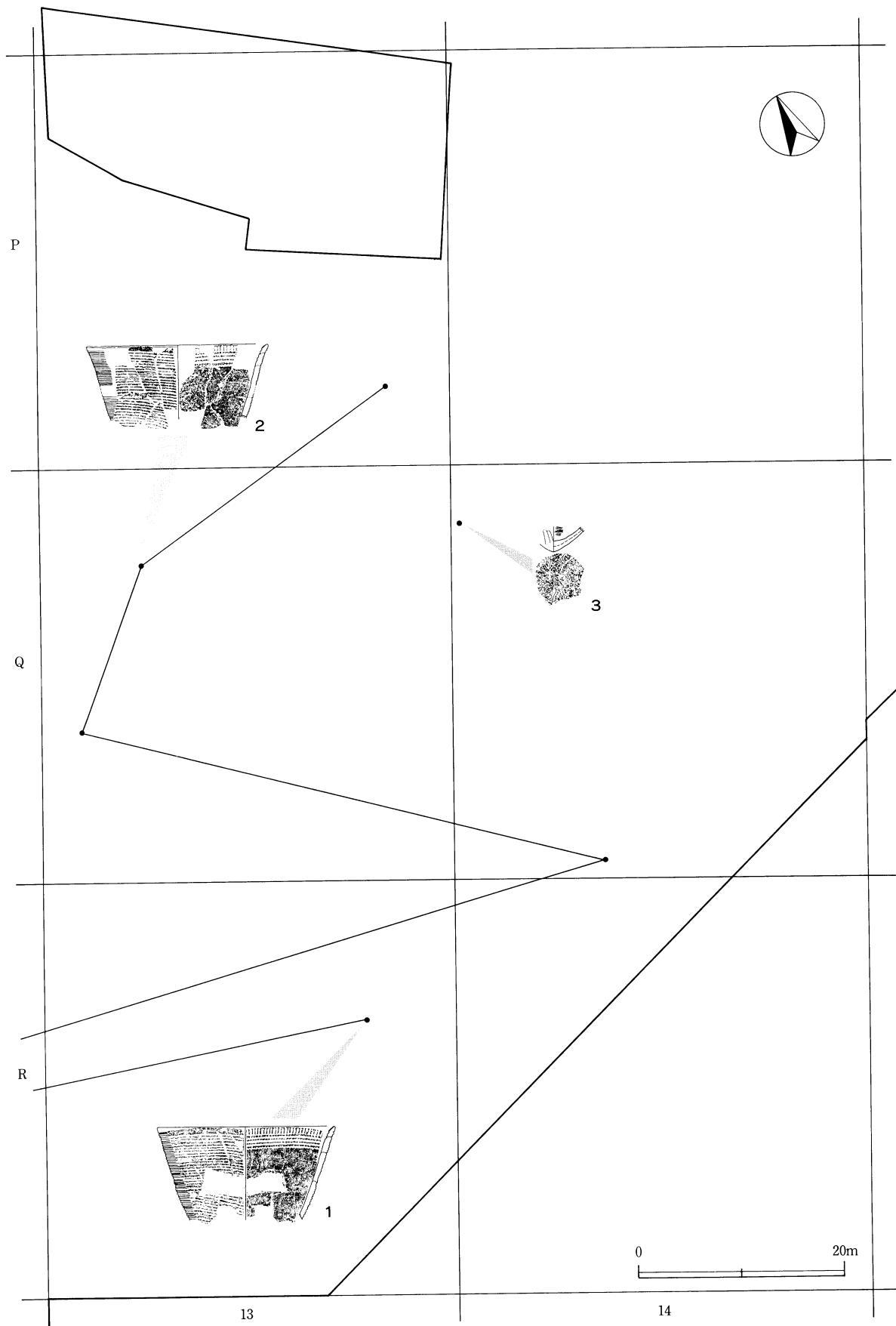
第90図 条線押型文土器出土状況1 (Q・R・S-8・9区)



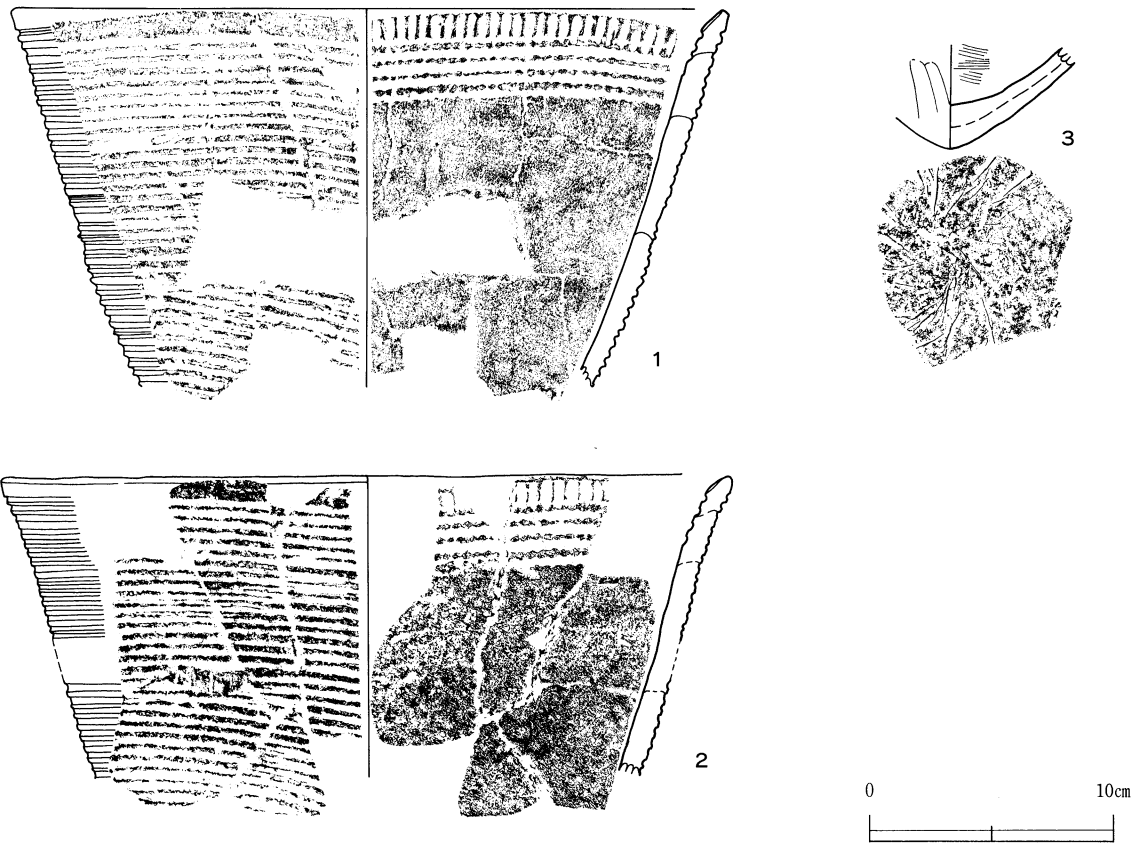
第91図 条線押型文土器出土状況 2 (Q・R・S-10・11区)



第92図 条線押型文土器出土状況 3 (O・P・Q-11・12区)



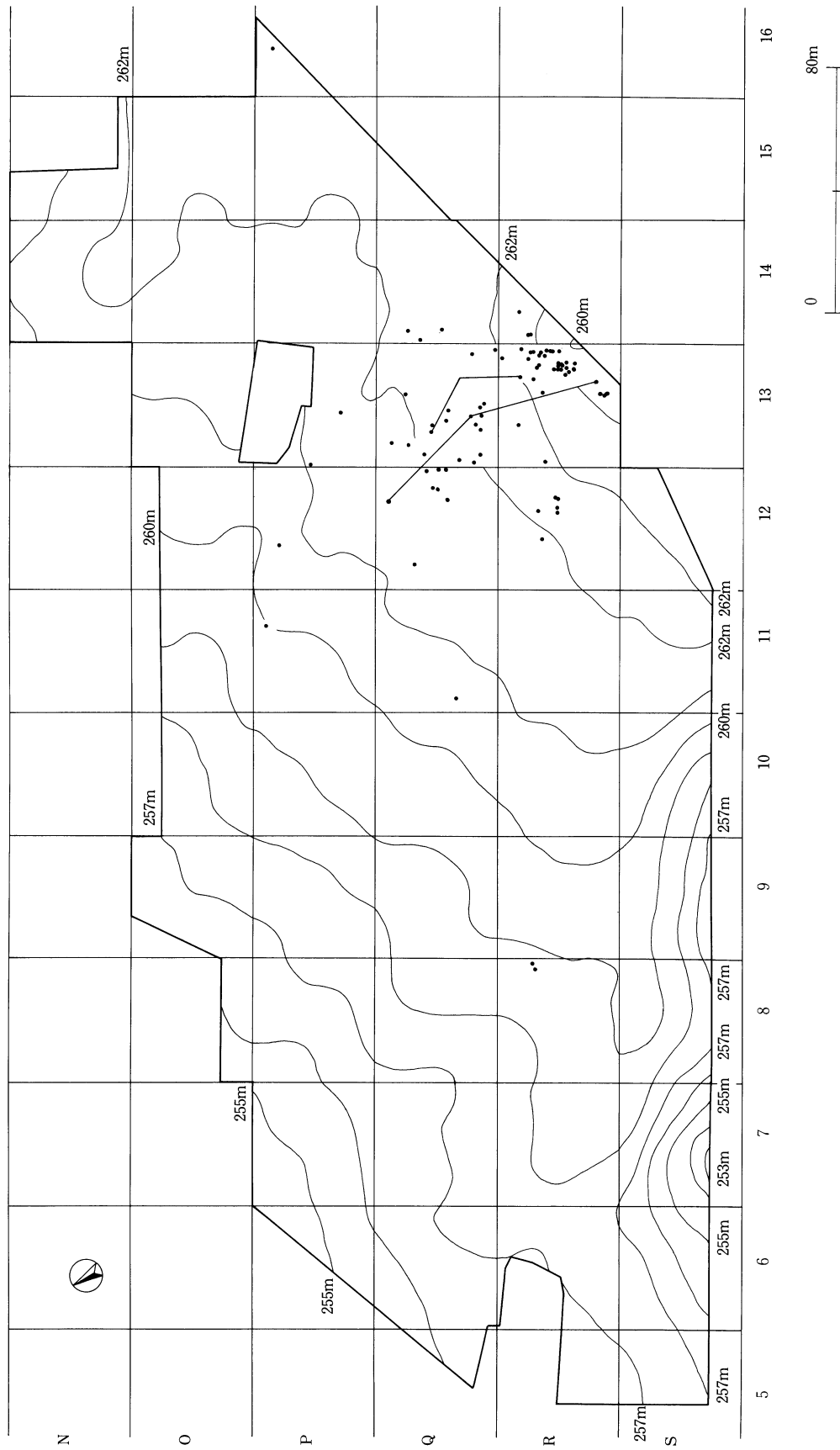
第93図 条線押型文土器出土状況4 (P・Q・R-13・14区)



第94図 条線押型文土器実測図

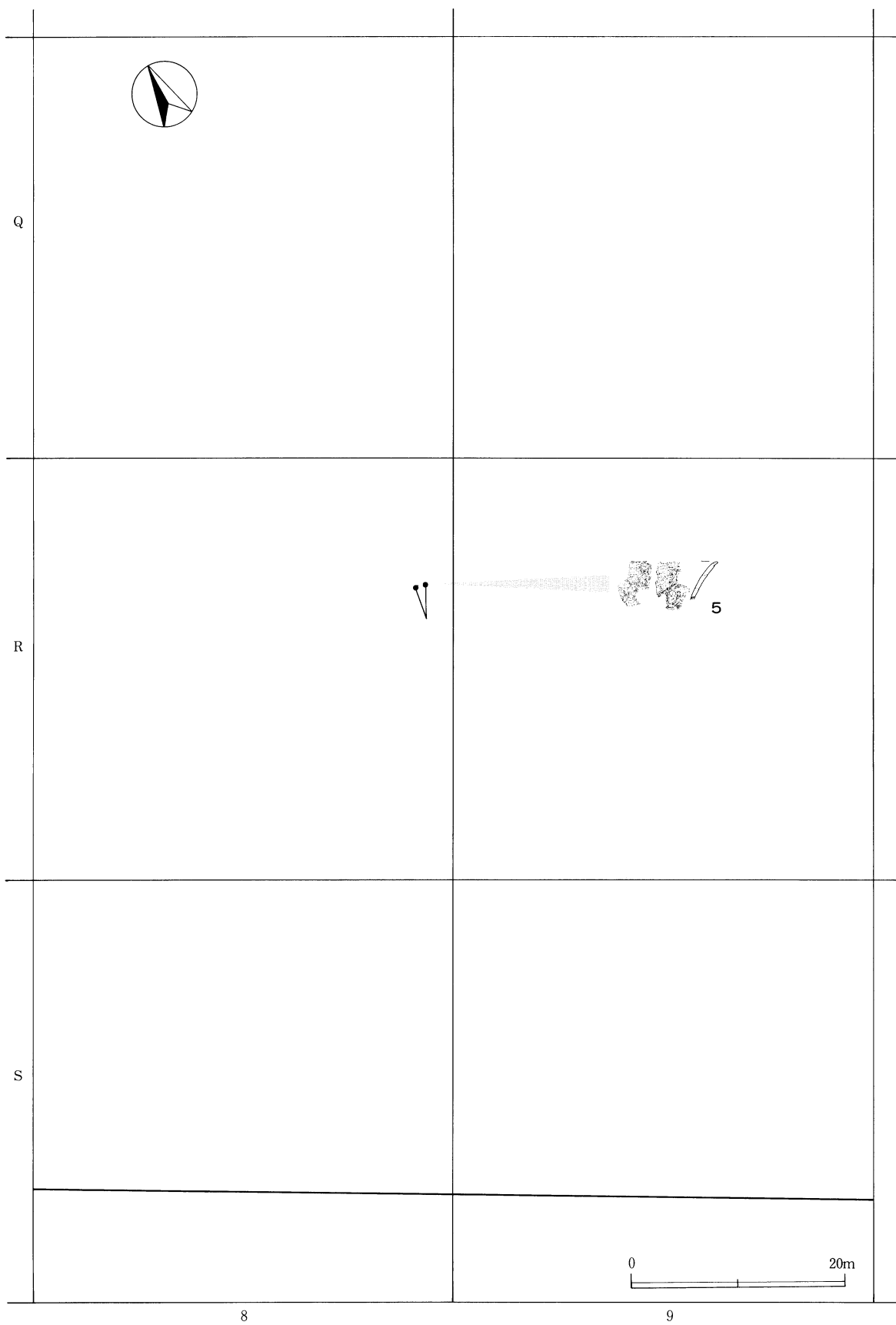
条線押型文土器観察表

挿図 番号	報告 番号	出土 区	注記 番号	実測図 番号	層	器種	部位	胎土					外器面 調整	内器面 調整	色調		備考
								石英	長石	角閃石	クワンモ	砂礫			外器面	内器面	
第 94 図	1	Q-09	6415	122	VI	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色	暗茶褐色～茶褐色	口径29.4cm
		R-09	4810		VI												
		R-09	4861		VI												
		R-09	4863		VI												
		R-09	5488		VI												
		R-13	4030		VI												
		S-09	290		VI												
		S-09	662		VI												
		S-09	663		VI												
		S-09	1164		VI												
	S-09	1855	VI														
	S-09	1864	VI														
	2	P-13	452	123	VI	深鉢	口縁～胴部	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色	暗茶褐色～茶褐色	口径29.6cm
		Q-13	10252		VI												
		Q-13	10375		VI												
		Q-14	2883		VI												
		R-08	103		VI												
		R-09	760		VI												
		R-09	780		VI												
	3	Q-14	2089	124	VI	深鉢	底部	○	○	◎	○	細砂・微砂	ハケ→タテナデ	ヨコハケ→ナデ	茶褐色	暗赤褐色	

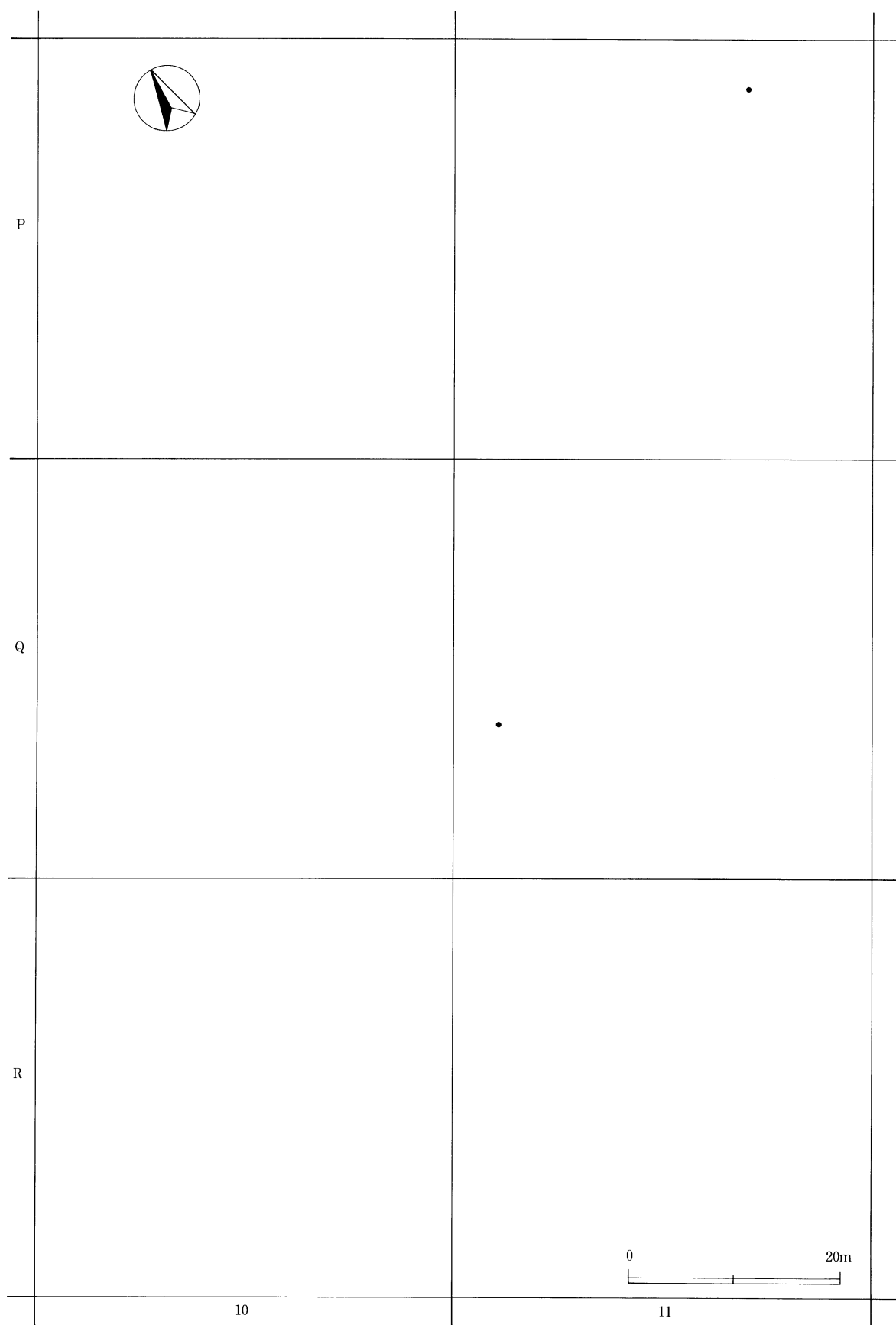


第95図 変形燃系文土器出土状況全体図

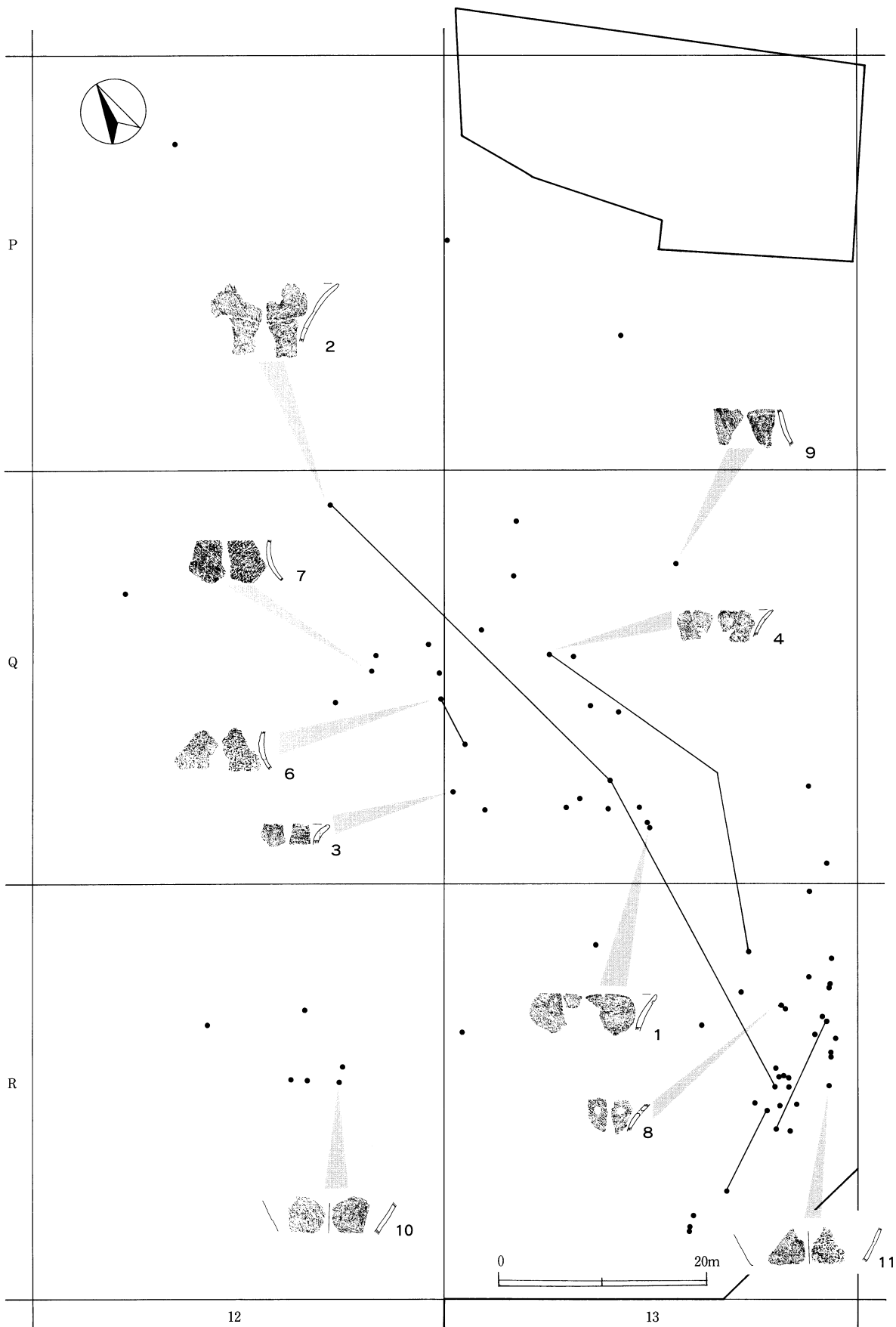




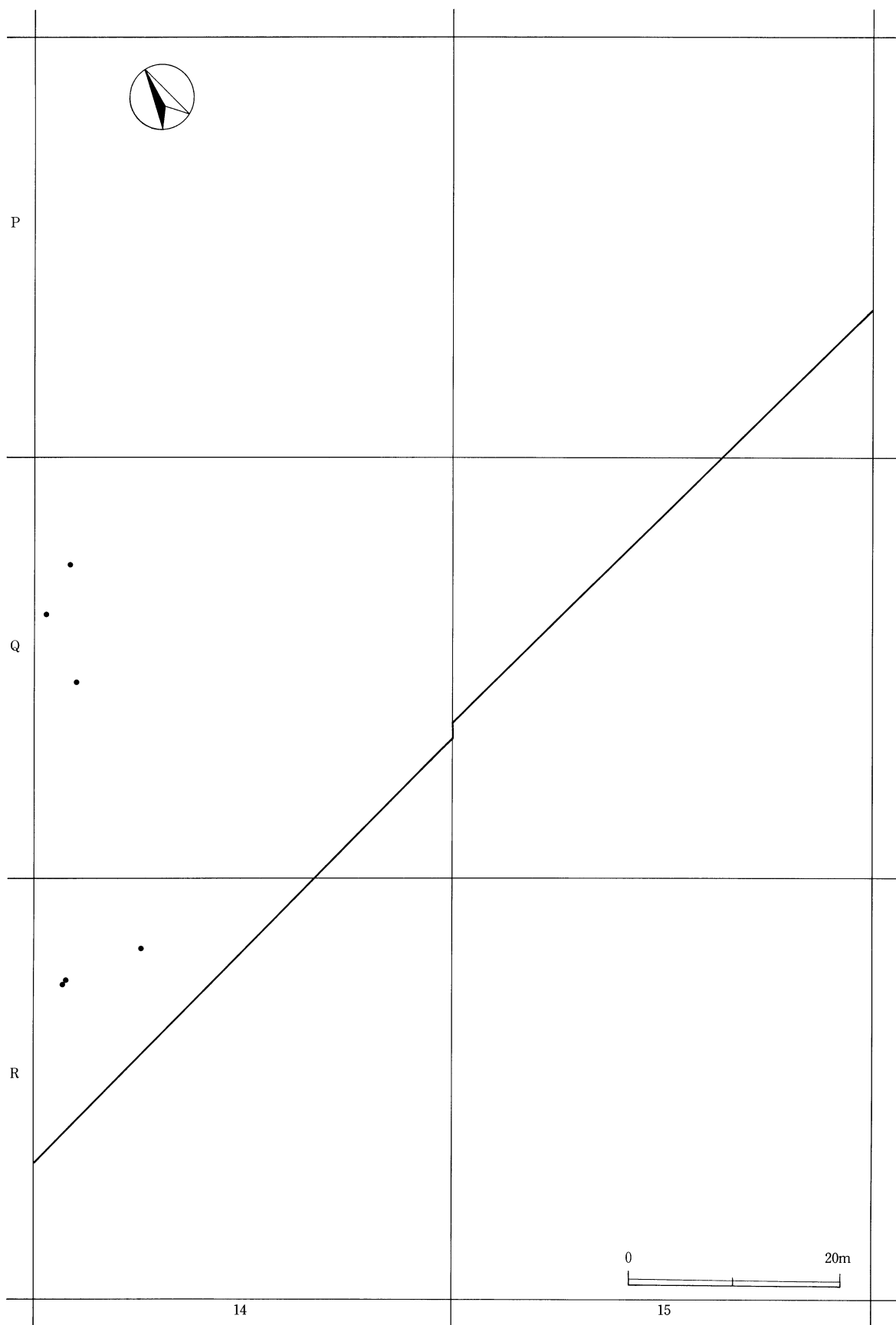
第96図 変形燃系文土器出土状況 1 (Q・R・S-8・9区)



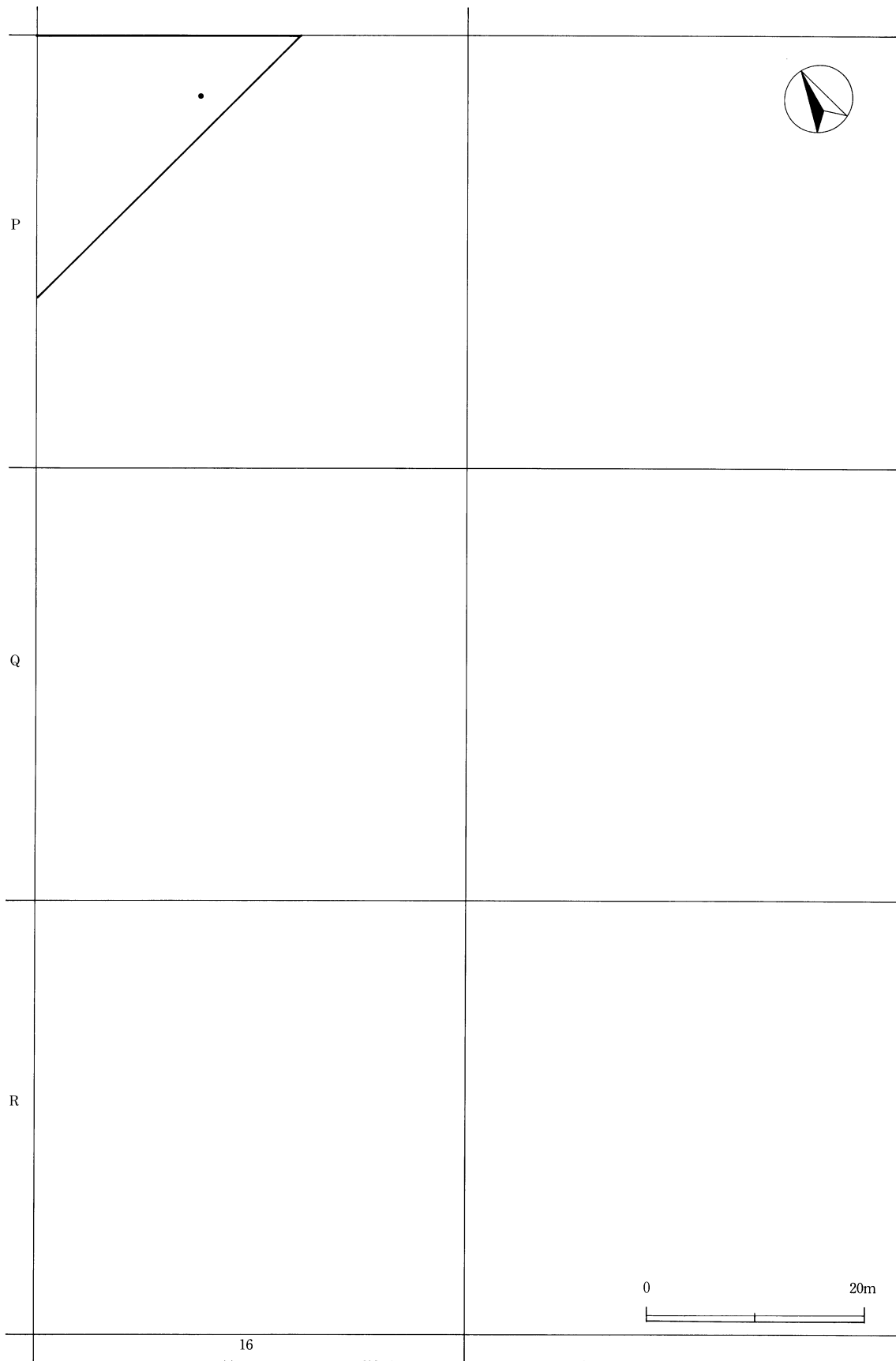
第97図 変形燃系文土器出土状況 2 (P・Q・R-10・11区)



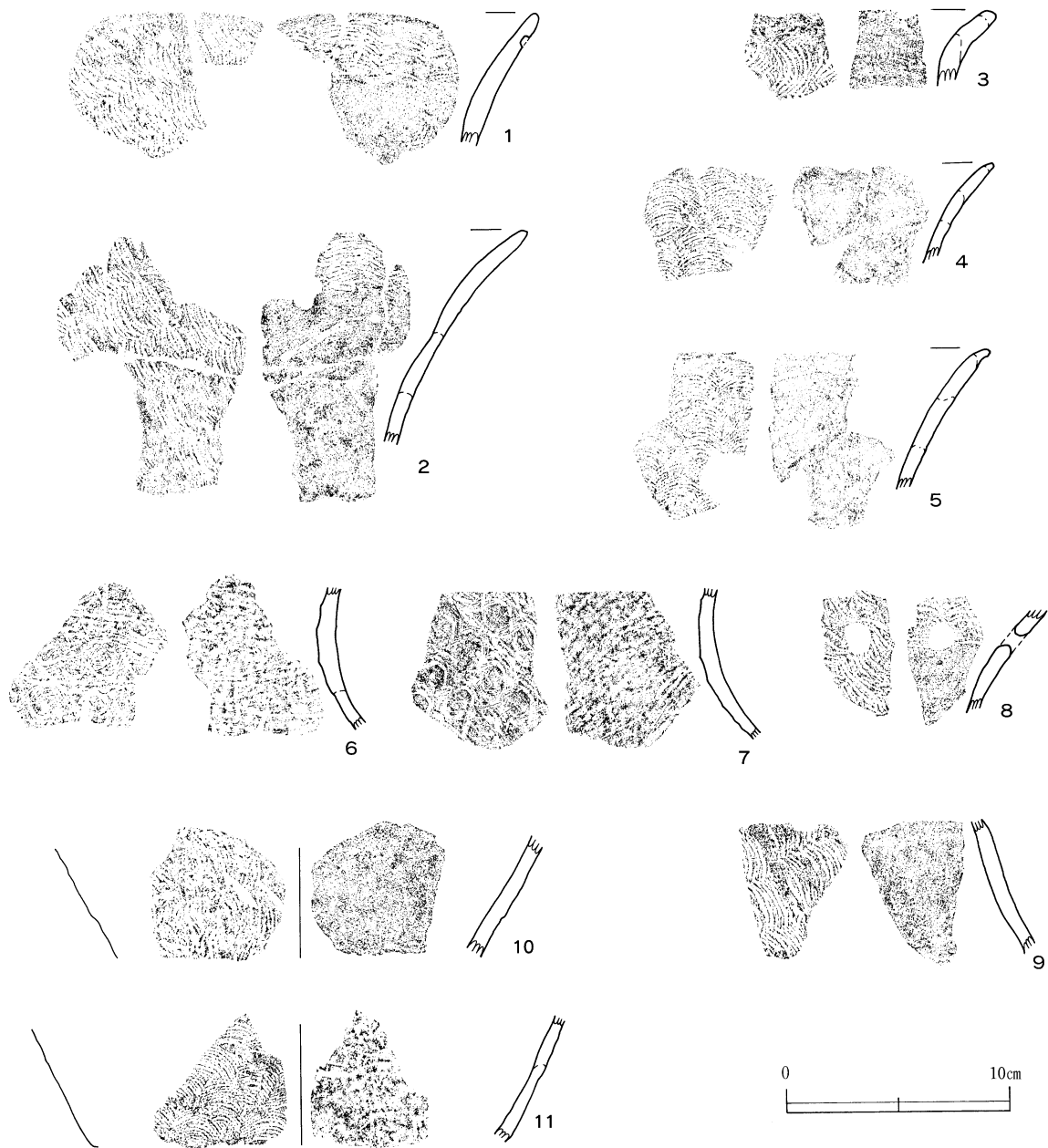
第98図 変形燃系文土器出土状況 3 (P・Q・R-12・13区)



第99図 変形燃糸文土器出土状況 4 (P・Q・R-14・15区)



16  
 第 100 図 变形燃系文土器出土状況 5 (P-16区)



第 101 図 変形撚糸文土器実測図

変形撚糸文土器観察表

種 類 番 号	報 告 番 号	出 土 区	注 記 番 号	実測 番 号	層	器 種	部 位	胎 土					外 器 面 調 整	内 器 面 調 整	色 調		備 考
								石 英	長 石	角 閃 石	ク ロ ウ モ	砂 礫			外 器 面	内 器 面	
第 101 図	1	Q-1-3	3152	170	VI	深鉢	口縁	○	○	○	◎	細砂・微砂	ナデ	ヨコハケ→ナデ	暗茶褐色	暗黄褐色~暗赤褐色	
	2	Q-1-2 Q-1-3 R-1-3	4658 1495 8087	178	VI	深鉢	口縁~頸部	○	○	○	◎	砂粒を含む	ナデ	ヨコハケ→ナデ	暗茶褐色	茶褐色	補修孔あり
	3	Q-1-3	11134	175	VI	深鉢	口縁	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ヨコハケ→ナデ	暗黄褐色	茶褐色	
	4	Q-1-3 R-1-3	6319 276	177	VI	深鉢	口縁	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	丁寧なナデ	暗黄褐色	暗褐色~茶褐色	
	5	R-0-8 R-0-8	1895 2418	174	VI	深鉢	口縁	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	丁寧なナデ	暗茶褐色	暗黄褐色~暗赤褐色	
	6	Q-1-2 Q-1-3	9020 10721	172	VI	深鉢	頸部~肩部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ケズリ→ナデ	暗黄白色	暗黄褐色	
	7	Q-1-2	1311	171	VI	深鉢	頸部~肩部	○	○	○		砂粒を含む	丁寧なナデ	ケズリ→粗いナデ	暗黄白色	暗黄褐色	
	8	R-1-3	1587	176	VI	深鉢	頸部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	ヨコハケ→ナデ	暗黄褐色	茶褐色	補修孔あり
	9	Q-1-3	5653	173	VI	深鉢	頸部~肩部	○	○	○	◎	ナデ	ナデ	ナデ	暗茶褐色	茶褐色	
	10	R-1-2	25	179	VI	深鉢	胴部	○	○	○	◎	砂粒を含む	ナデ	丁寧なナデ	暗茶褐色	黒褐色	胴部径22.2cm
	11	R-1-3	9739	180	VI	深鉢	胴部下半~底部	○	○	○		砂粒を含む	ナデ	丁寧なナデ	暗茶褐色	暗黄褐色	底径18.4cm

## ⑩ 第10群 手向山式土器 (第110～112図)

### i) 概要

第10群に属する土器は、215点の土器片が出土し、その内の53点、20個体を資料化した。

手向山式土器は、「口縁部が大きく外反し、頸部でくびれ、胴部中央よりやや下方で張り出し屈曲し、上げ底気味の小さな平底にいたる」と定義されている寺師見國氏により設定された、土器である。鹿児島県大口市羽月に所在する手向山遺跡から出土した土器を標識とする土器である。

1から16は深鉢形土器である(第110・111図)。定義の範疇に入る土器は6～15である。そのうち6～10は、深鉢形土器である。屈曲部より口縁部側が大きく外反する器形的特徴を呈する。6の口縁部外面には縦位方向に、口縁部内面には横位方向に山形押型文を施す土器である。口唇部上端部には横位方向に沈線文を施している。7・8は、外器面に縦位方向に山形押型文を施す胴部である。7には突帯が横位方向に巡り、突帯上には刺突連点文が施される。9・10は屈曲部上位の胴部片である。外器面には、縦位方向に沈線文が施されている。一方11～16は、小型深鉢形土器の胴部である。13には屈曲部下位に縦位方向の山形押型文土器を施す。11と15は、屈曲部に刺突連点文を施す突帯を横位方向に巡らす。また、外器面には沈線による菱形文を施している。16は、縦位方向に押し引き沈線文を施す土器である。

注目できるのは、1～5の土器である。いずれも内傾する口縁部であり、手向山式土器の器形的特徴からはずれる土器である。しかし、屈曲部の製作技法や内器面の調整方法から、手向山式土器の範疇に入る土器であると判断した。外器面には右下がりの沈線文を施し、口唇上端部には刻みを施す土器である。

さて、17～20の土器は壺形土器である(第112図)。器形的特徴から、以下の2タイプに分類できる。

まずa類土器は、17～19のように口縁部が強く外反するタイプの壺形土器である。このタイプに属する土器には、口縁形態がしっかりした波状口縁を呈する土器と、口縁形態が緩やかな波状口縁を呈する土器と、ほぼ平口縁を呈する土器とがある。波状口

縁を呈する土器は、4か所の波頂部には瘤状の突起を設け、口縁部外面にはこの突起にかぶせるようにして、刻み目を施した2条の突帯を横位に巡らしている。いずれの土器も、頸部はすぼまり、肩部はしっかり張る器形を呈する。このa類土器の施文的特徴としては、先が細い棒状工具を使用して、頸部に菱形文を順次重ねていく文様構成を施す土器である(17・18)。

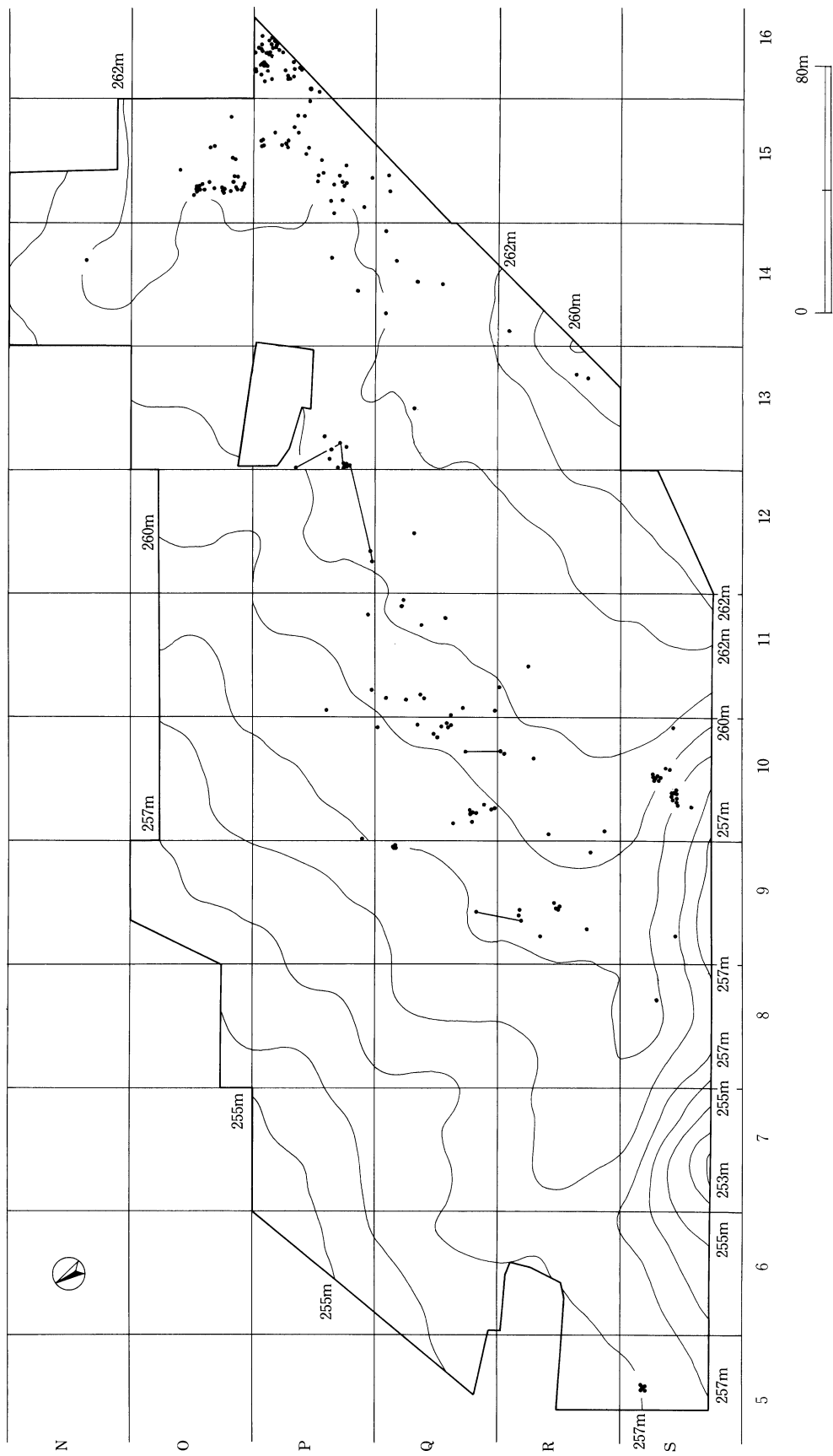
一方b類土器は、口縁部がほぼ直行する、無頸壺に近いタイプの壺形土器である。肩部はなで肩を呈する土器である。このb類土器の施文的特徴としては、先が細い棒状工具を使用して、頸部に同心円状の文様を施す土器である(20)。

このように、手向山式土器の段階には既に壺形土器に多種類の器形が認められることは、注目できる。

さて、手向山式土器の土器胎土中の鉱物は石英・長石で構成され、角閃石を含む土器とクローンモを含む土器とがあった。深鉢形土器の内6～14の土器はクローンモが特に多く含有していた。これに対して、1～5の土器や11・13・15・16の土器は、クローンモは確認できなかったものの、角閃石の含有は認められた土器である。また、土器の調整方法は、外器面、内器面共にハケ目調整の後にナデ調整を行うことが主流である。中には丁寧なナデ調整を行う土器も見受けられた。なお、土器の色調は外器面が暗茶褐色や茶褐色を、内器面は茶褐色を呈す土器が主流であった。

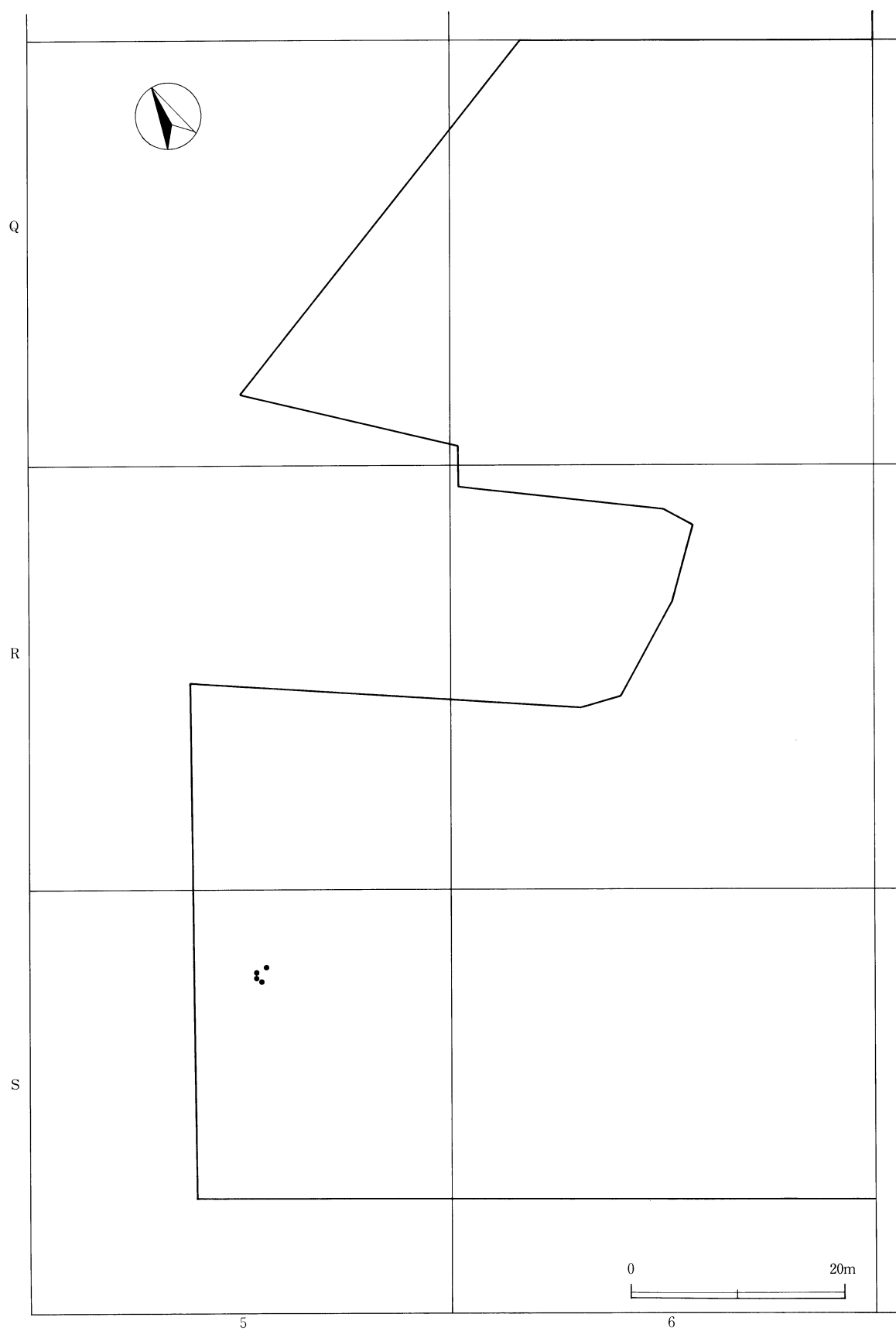
ところで、出土状況全体図から第10群は、広範囲に分布していることが看取できるが、特に、O-15区やP-15・16区を中心とする、第10地点のなかで標高が一番高い262m付近のテラ地にあたる、区域に集中して出土している(第102図参照)。

したがって第10群の出土分布の状況から、これらの土器を使用した人々は、P-16区より東側の発掘区域外にかけて、生活の場を設けていたことが想定できる。また壺形土器は、出土状況図(第103図～第109図)から深鉢形土器と同様に広範囲にわたり出土している。

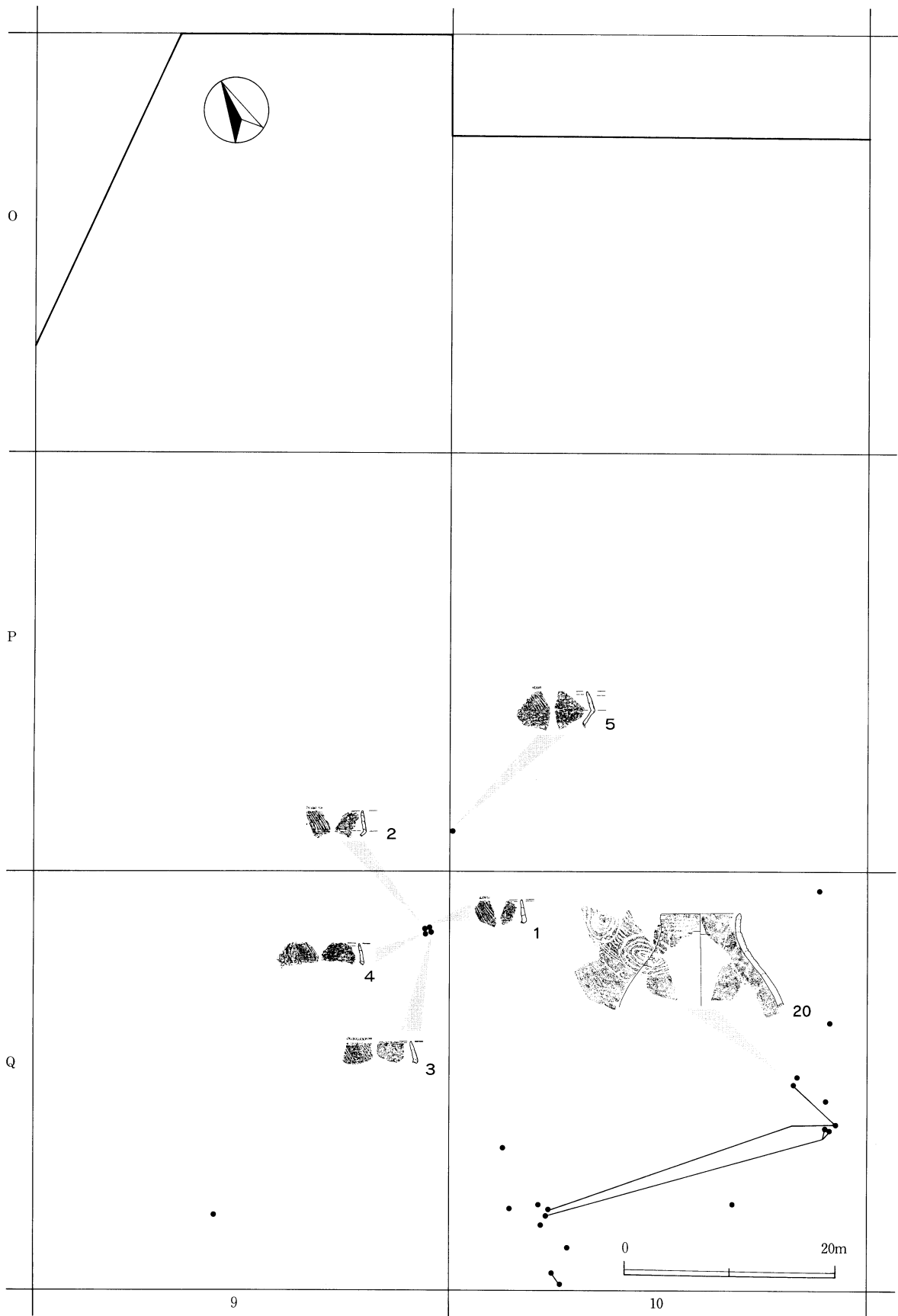


第 102 図 手向山式土器出土状況全体図

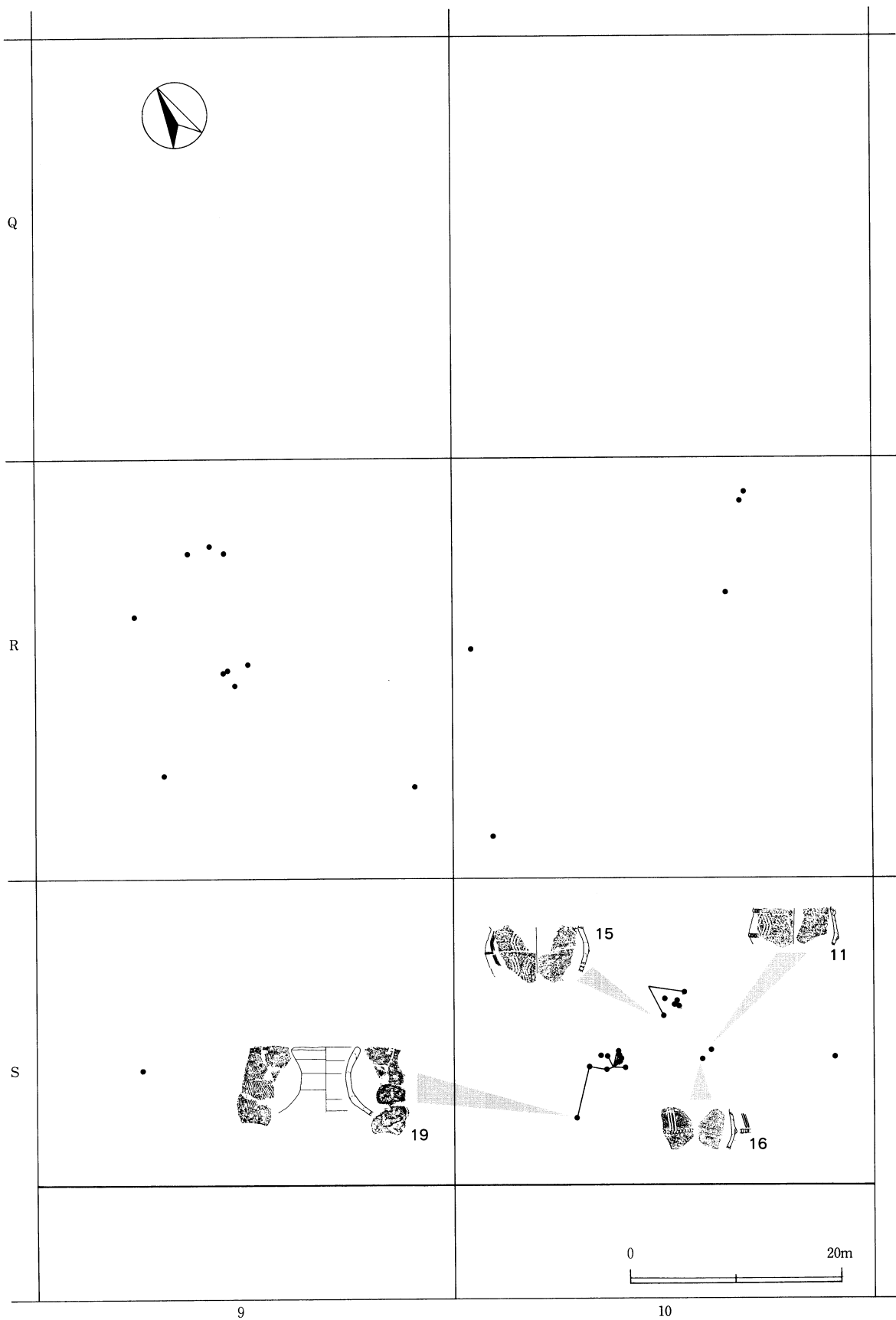




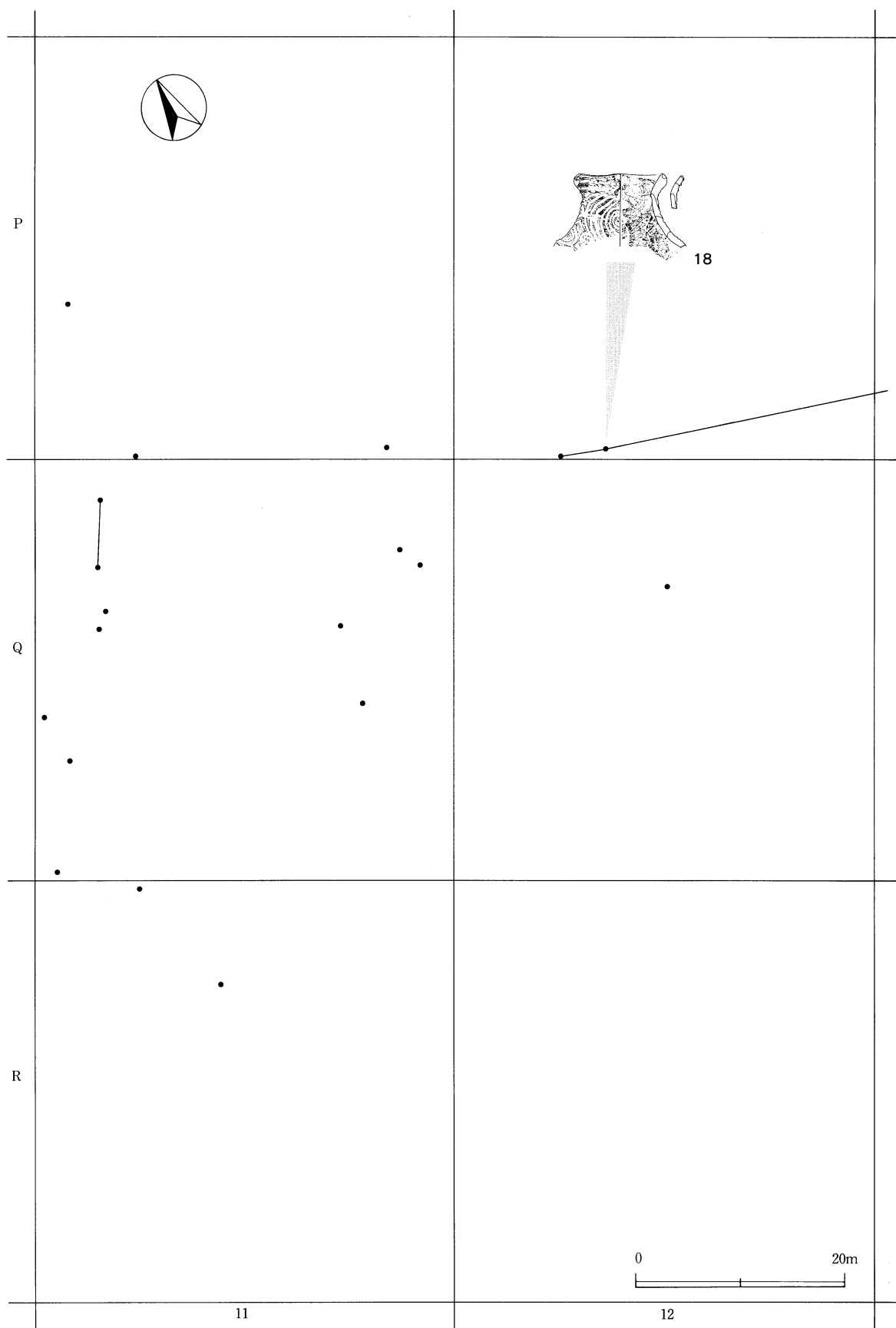
第 103 図 手向山式土器出土状況 1 (Q・R・S-5・6区)



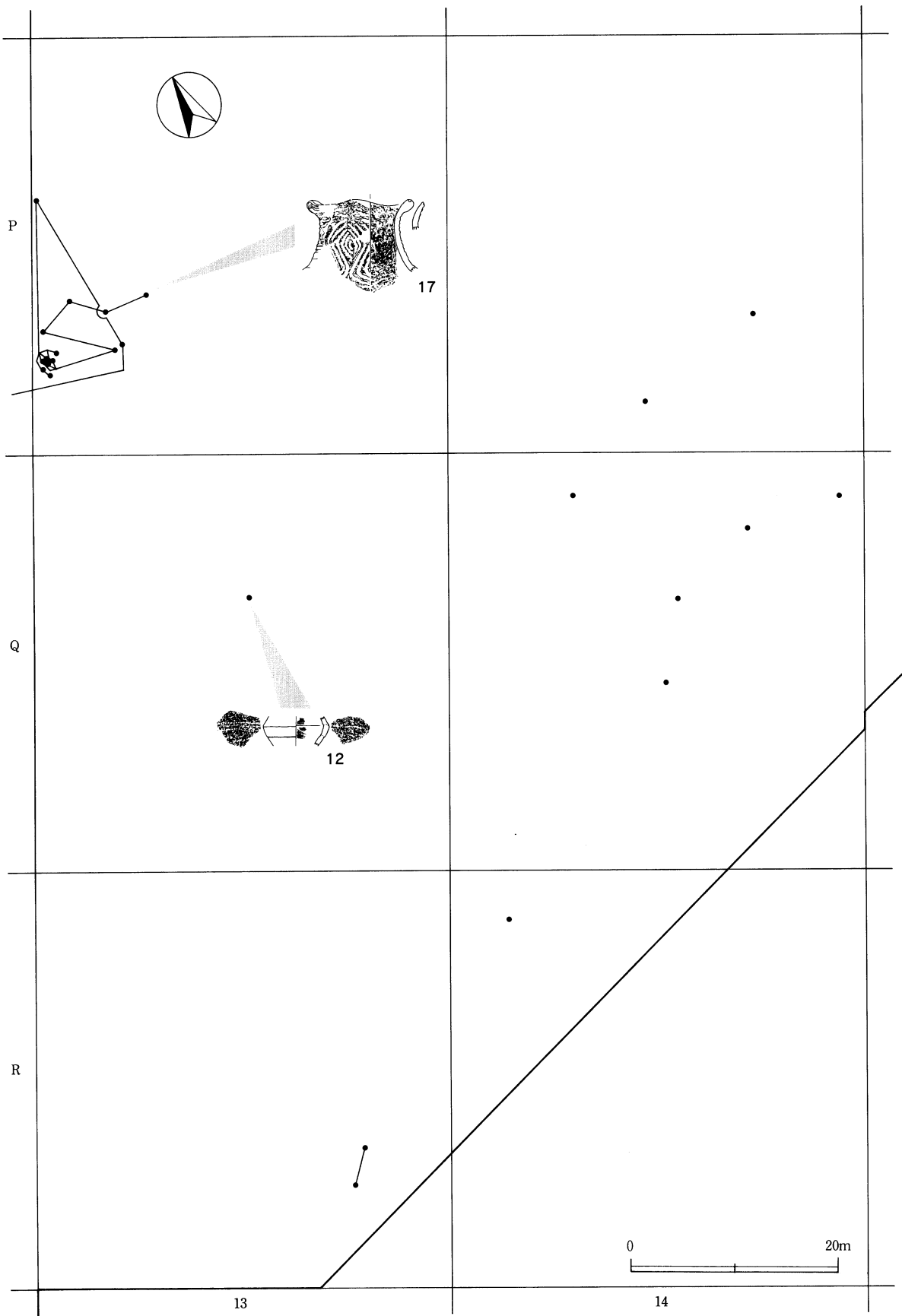
第 104 図 手向山式土器出土状況 2 (P・Q-9・10区)



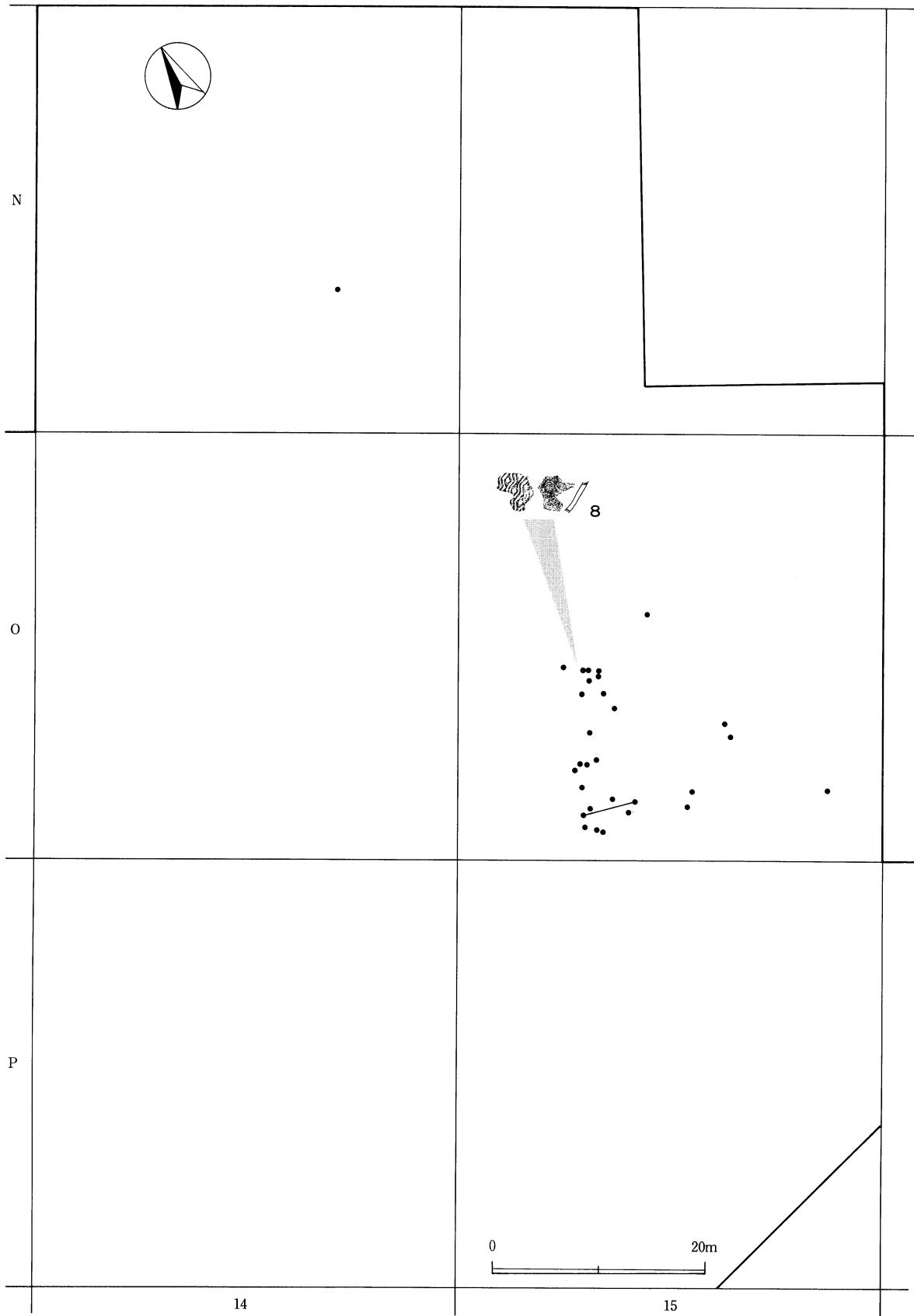
第 105 図 手向山式土器出土状況 3 (R・S-9・10区)



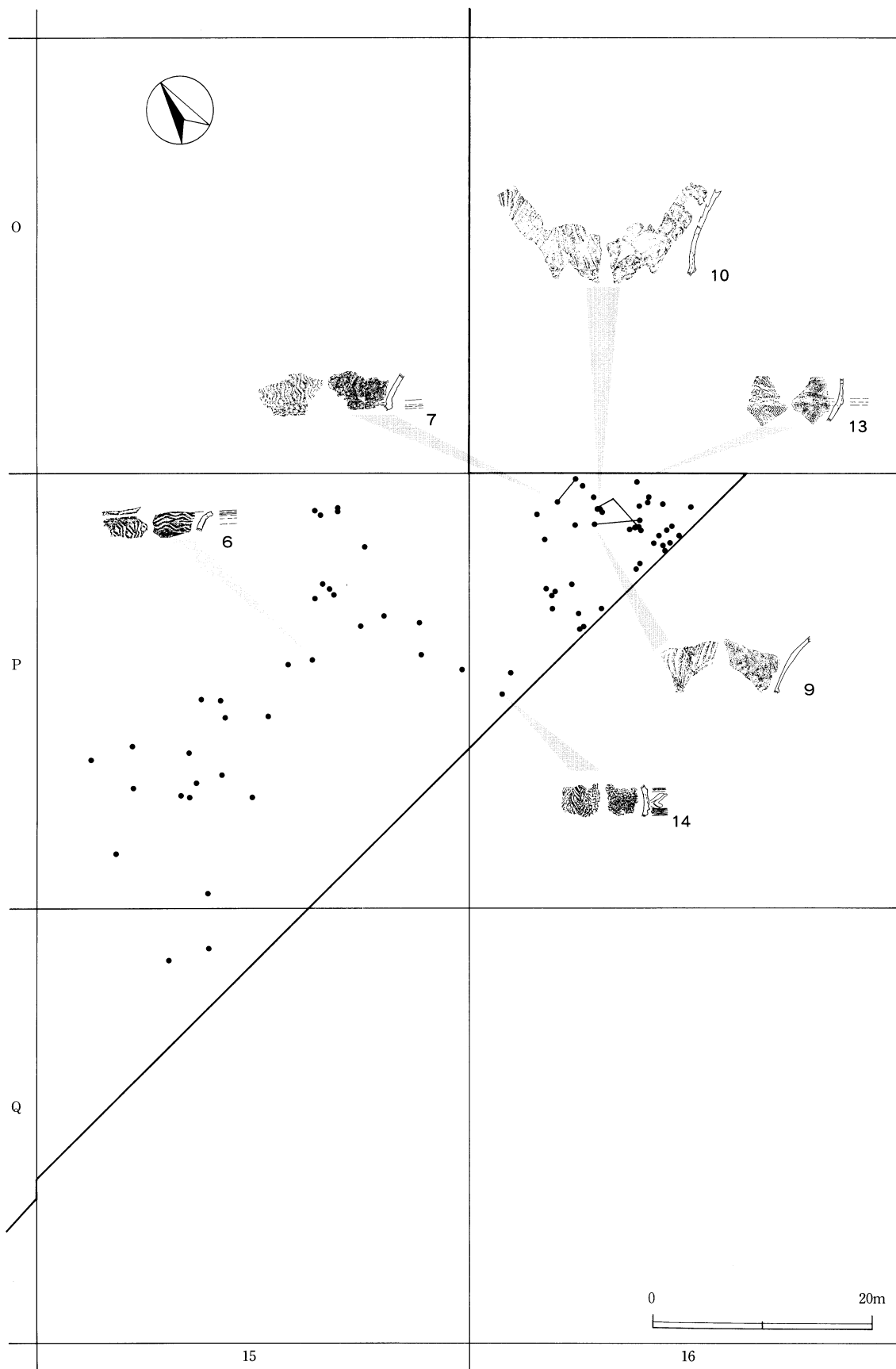
第 106 図 手向山式土器出土状況 4 (P・Q・R-11・12区)



第 107 図 手向山式土器出土状況 5 (P・Q・R-13・14区)



第 108 図 手向山式土器出土状況 6 (N・O・P-14・15区)

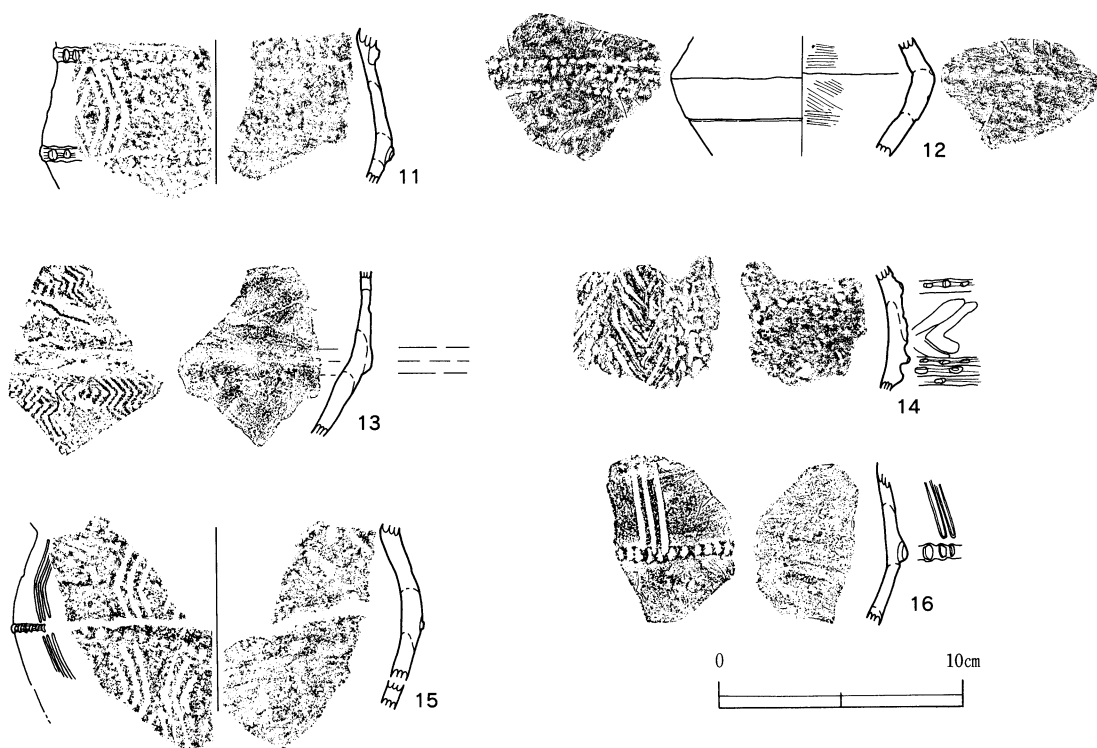


第 109 図 手向山式土器出土状況 7 (O・P・Q-15・16区)

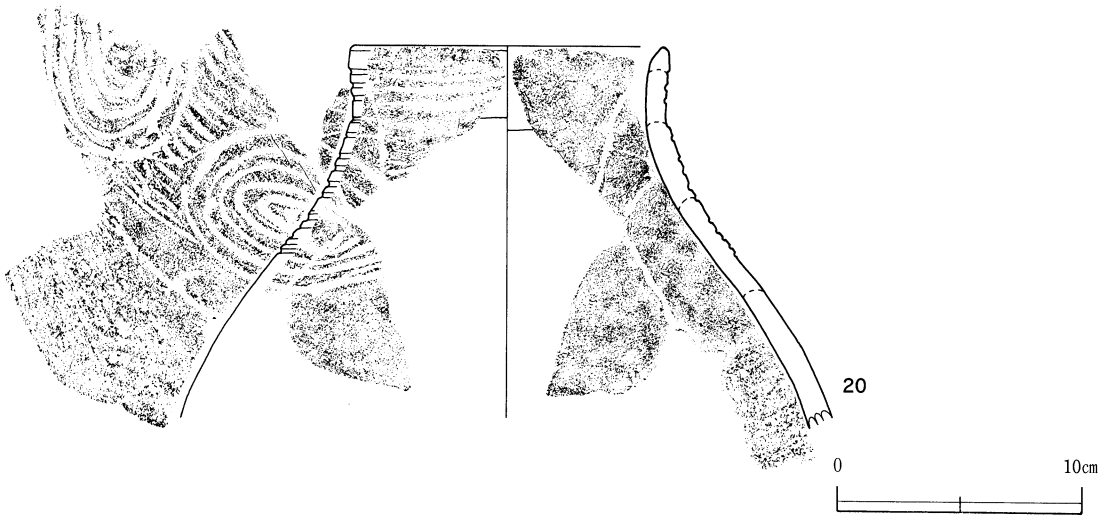
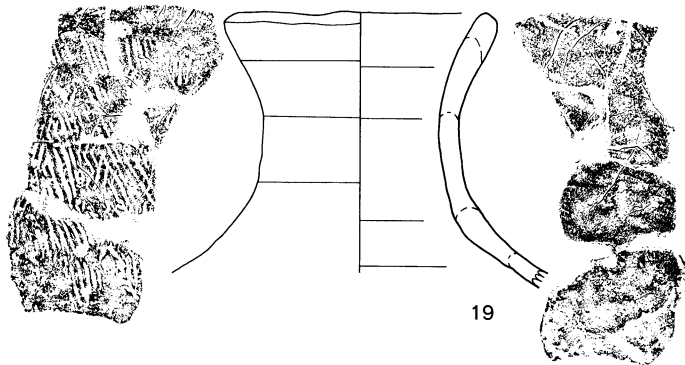
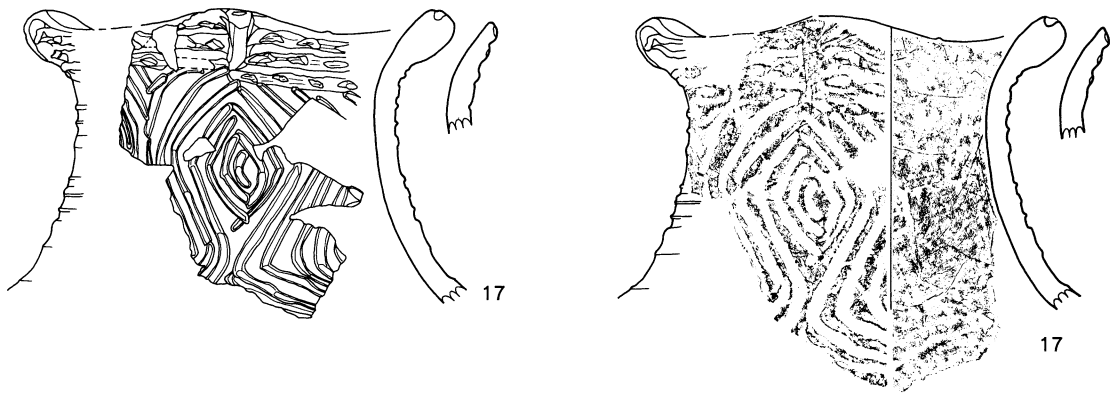


第 110 图 手向山式土器实测图 (1)





第 111 图 手向山式土器实测图 (2)



第 112 图 手向山式土器実測图 (3)

手向山式土器観察表

採掘 番号	報告 番号	出土 区	注記 番号	実測図 番号	層	器種	部位	胎土					調整	調整	色調		備考			
								石英	長石	角閃石	クローンモ	砂礫			調整	調整		外器面	内器面	
第 110 図	1	Q-0-9	6400	194	VI	深鉢	口縁~胴部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	2	Q-0-9	6404	198	VI	深鉢	口縁~胴部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	3	Q-0-9	6402	196	VI	深鉢	口縁~胴部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	4	Q-0-9	6789	161	VI	深鉢	口縁~胴部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	5	P-1-0	495	199	VI	深鉢	口縁~胴部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	6	P-1-5	397	54	VI	深鉢	口縁	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	7	P-1-6	11	52	VI	深鉢	胴部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	8	O-1-5	245	47	VI	深鉢	胴部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	9	P-1-6	49	46	VI	深鉢	胴部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	10	P-1-6	43	56	VI	深鉢	胴部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
第 111 図	11	S-1-0	4492	50	VI	深鉢	胴部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	胴部最大径14.8cm
	12	Q-1-3	5674	197	VI	深鉢	胴部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	13	P-1-6	54	53	VI	深鉢	胴部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	14	P-1-6	163	55	VI	深鉢	胴部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	15	S-1-0	4547	51	VI	深鉢	胴部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	胴部最大径17.0cm
	16	S-1-0	4491	49	VI	深鉢	胴部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
第 112 図	17	P-1-3	35	489	VI	壺	口縁~頸部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		P-1-3	81		VI															
		P-1-3	1377		VI															
		P-1-3	1453		VI															
		P-1-3	1471		VI															
		P-1-3	1835		VI															
		P-1-3	1839		VI															
		P-1-3	1862		VI															
	18	P-1-2	3579	488	VI	壺	口縁~頸部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
		P-1-2	3913		VI															
		P-1-3	18		VI															
		P-1-3	37		VI															
		P-1-3	1834		VI															
	P-1-3	1838		VI																
	P-1-3	1841		VI																
	P-1-3	1845		VI																
	P-1-3	2030		VI																
	P-1-3	2134		VI																
19	S-1-0	719	57	VI	壺	口縁~頸部	○	○	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○	口径10.2cm	
	S-1-0	2411		VI																
	S-1-0	2585		VI																
	S-1-0	4132		VI																
	S-1-0	6042		VI																
	S-1-0	8324		VI																
	S-1-0	8328		VI																
	S-1-0	8331		VI																
	S-1-0	8333		VI																
20	Q-1-0	1696	490	VI	壺	口縁~頸部	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	Q-1-0	3443		VI																
	Q-1-0	5690		VI																

⑪ 第11群 手向山式類似土器 (第116図1~5)

i) 概要

第11群に属する土器は、14点の土器片が出土し、その内の8点、3個体を資料化した。

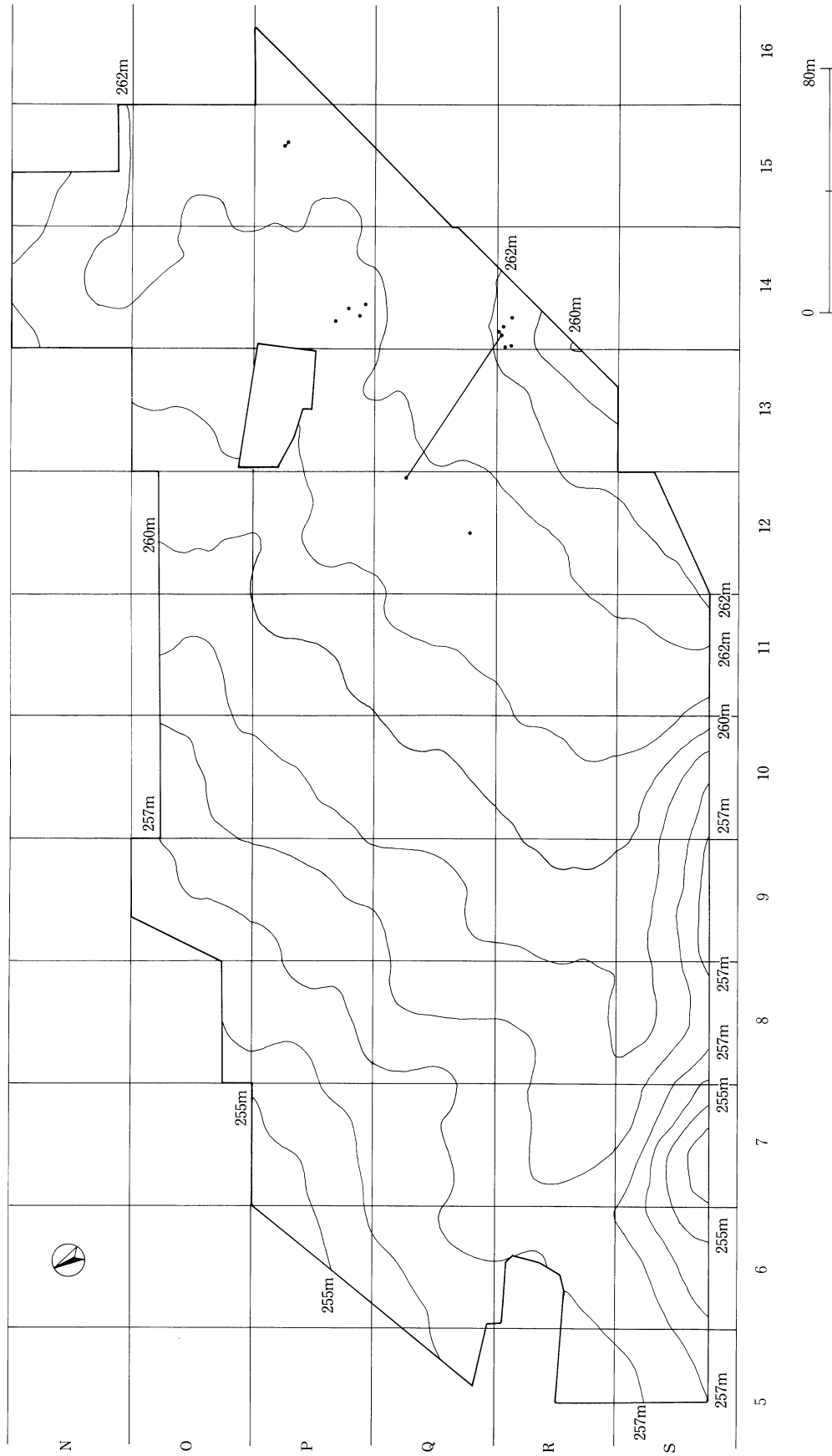
第11群は、次に述べるように器形的にも、施文的にも様々な要素が見られる土器を集めた類である。

1は、口縁形態が平口縁を呈し、口縁部が若干内弯して、口唇部が内傾する平坦面を作出する、という土器である。外器面には、貝殻腹縁部を使用して、縦位方向に押し引き波状文を施文をする。この土器は、器形的には桑ノ丸式土器の範疇に属する土器である。しかし、縦位方向に貝殻を押し引いて施文する方法は、厳密には桑ノ丸式土器の定義の中にはない。しかも、縦位方向に波状文を施す文様構成がもつイメージは、手向山式土器の屈曲部位より上の部分に施される「間延びした山形押型文」を意識したものであると判断して、本類に含めた。

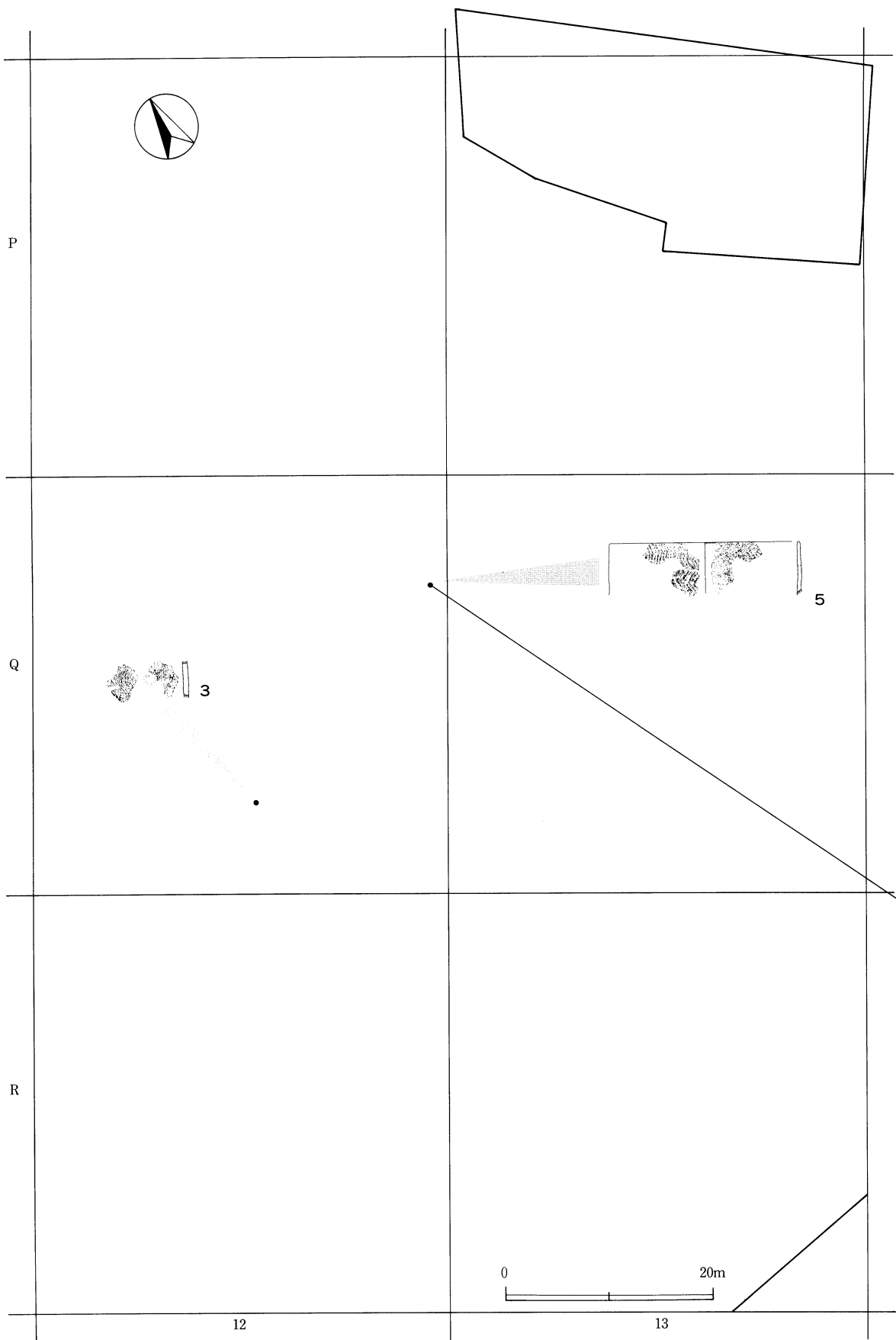
2から5の土器の器形的特徴としては、口縁形態は平口縁を呈し、口縁部は直行して、口唇部は舌状をなす点が挙げられる。施文的特徴としては、外器面には、先が尖った棒状工具を使用して、縦走する押し引き羽状文あるいは、垂下する沈線文を施すことが指摘できる。一方、内器面には口縁部内面に縦走する押し引き羽状文を施す点が挙げられる。

これらの土器は、器形的には微細山形押型文土器などの範疇に属する土器である。しかし、口縁部内面に山形押型文を意識した施文を施すことや、外器面に縦走する山形押型文-間延びした山形押型文-をイメージしている文様構成を施す点は、押型文土器様式の中でも新しい時期に現れる文様構成要素である。この点に注目してこれらの土器を本類に含めた。

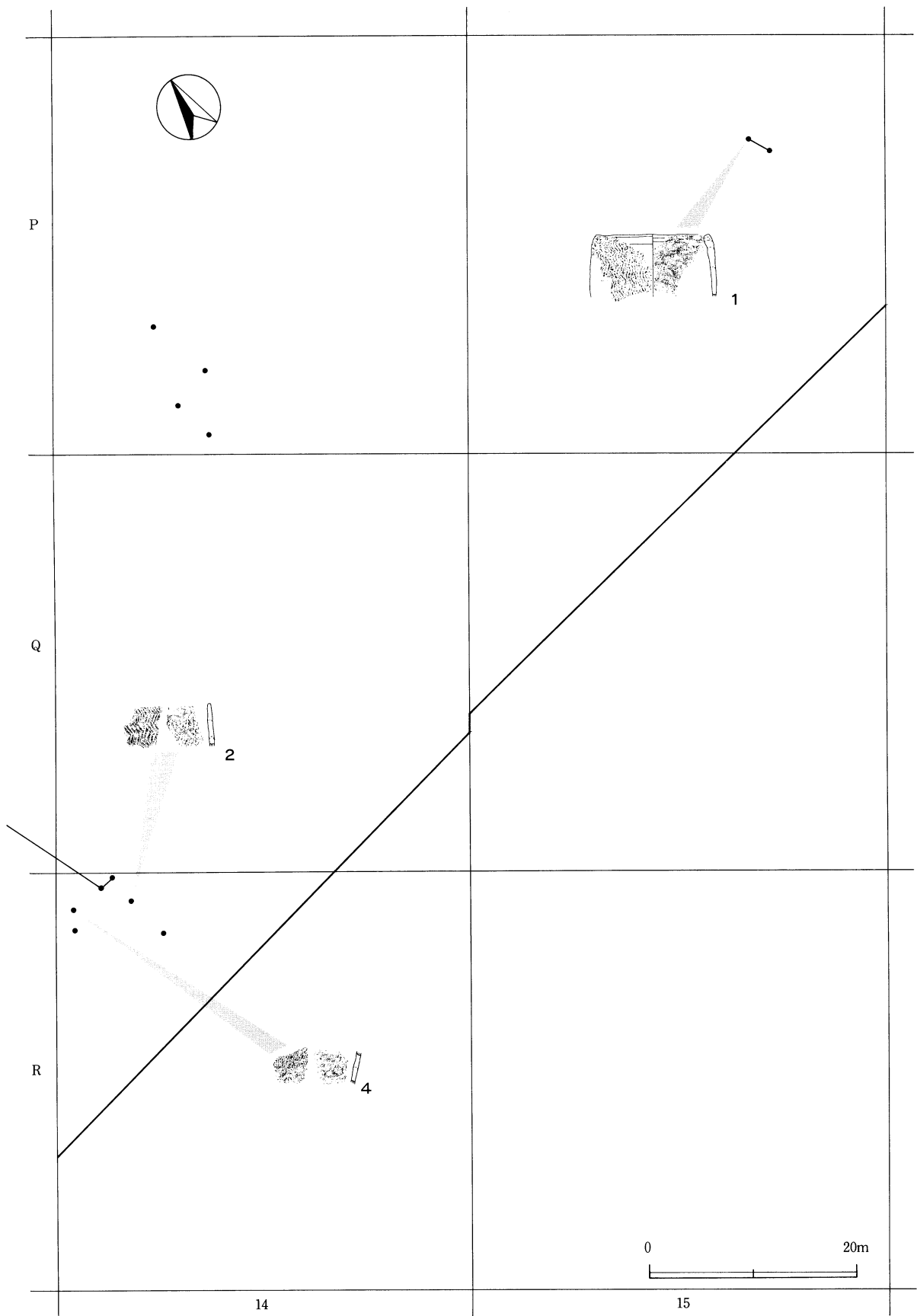
(p.142へ続く)



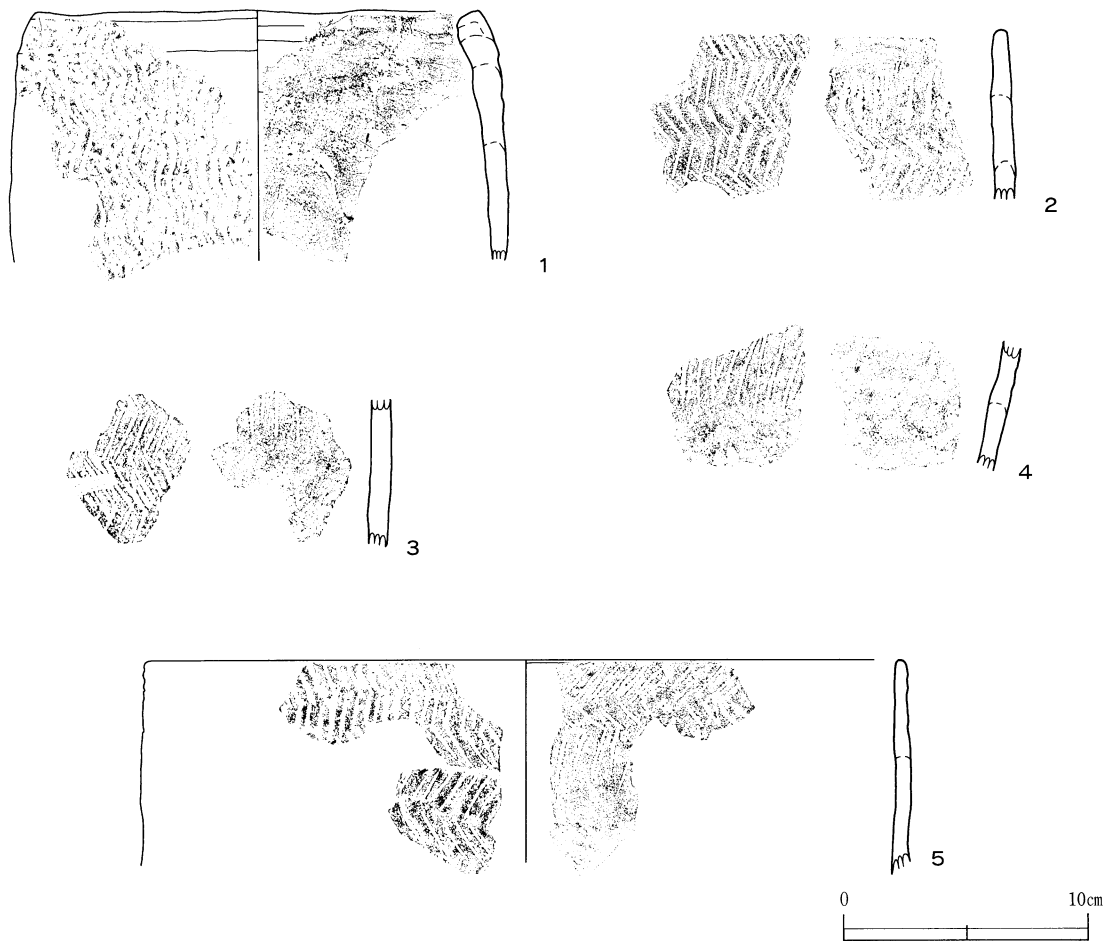
第 113 図 手向山式類似土器出土状況全体図



第 114 図 手向山式類似土器出土状況図 1 (Q・R-12・13区)



第 115 図 手向山式類似土器出土状況図 2 (P・Q・R-14・15区)



第 116 図 手向山式類似土器実測図

手向山式類似土器観察表

挿図 番号	報告 番号	出土 区	注記 番号	実測図 番号	層	器種	部位	胎 土				砂礫	外器面 調整	内器面 調整	色 調		備考
								石英	長石	角閃石	クrownモ				外器面	内器面	
第 116 図	1	P-15	127	48	VI	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	ナデ	ハケ	暗赤褐色	暗褐色	口径18.1cm
	2	P-15	209	42	VI	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	丁寧なナデ	丁寧なナデ	暗赤褐色	暗赤褐色	
	3	Q-12	7846	43	VI	深鉢	胴部	○	○	○		細砂・微砂	丁寧なナデ	丁寧なナデ	茶褐色	暗茶褐色	
	4	R-14	149	44	VI	深鉢	胴部	○	○	○		細砂・微砂	丁寧なナデ	丁寧なナデ	茶褐色	暗茶褐色	
	5	Q-12 R-14 R-14	10788 433 955	45	VI VI VI	深鉢	口縁	○	○	○		細砂・微砂	丁寧なナデ	丁寧なナデ	暗茶褐色	黒褐色	

(p.138から続く)

さて、第11群の土器胎土中の鉱物は、石英・長石・角閃石で構成されていた。クrownモの含有が認められなかったのは、注目できる。また、土器の調整方法は外器面・内器面共に丁寧なナデ調整を行うのが主流である。また土器の色調は、外器面が暗赤褐色から茶褐色、内器面が暗茶褐色から暗褐色が主流であった。

## ii) 小結

本類に属する土器は、施文の特徴から手向山式土器と比べると、型式学的には時間軸では近い距離にあると、判断できた土器である。

## ⑫ 小結

上野原遺跡第10地点の発掘調査では、縄文時代早期の時期に属する土器は、層位的に把握することは

できなかった。したがって、特に土器型式内の差が時間差を示す事柄なのか、種類の豊富さを示す事柄なのか、層位的には明らかにはできなかった。

しかしながら先に述べたように、各型式間には器形的特徴にも施文的特徴にも違いがある。さらには第2群土器と第3群土器との間にも、第3群a類土器やc類土器とb類土器との間にも、出土分布の状況に明瞭な差が認められる。これらのことから、ここまで分類した土器型式内の差が時間差を示すと仮定して、型式組列を考えることにする。

### ⑫-1 第2群について

南九州縄文早期土器編年において、第1群の石坂式土器より新しく、第3群の桑ノ丸式土器より古く位置づけられている第2群の下剥峯式土器に属する土器について若干の考察を記す。

さて、第2群の器形的特徴と本報告の土器分類とを比較すると、次のように、

- 1) 口縁形態は波状口縁を呈する土器である。口唇部は水平平坦面を作出している。口縁部は弯曲しながら外反するタイプの土器(2類b)。
- 2) 口縁形態は平口縁を呈し、口縁上端部のみが若干内湾する以外は、口縁部はほぼ直行する。特に口縁上端部外面は、ほぼ45°の角度でまろく削られ、見かけ上、口縁部の内湾形態が強調される。胴部は円筒形で、胴部下半で心持ちすぼまる。底部は平底となるタイプの土器(1類b, 2類a)。
- 3) 口縁形態は平口縁を呈し、口縁部は若干内湾して、口唇部は水平な平坦面あるいは内傾する平坦面を作出する。胴部は直線的にすぼまる。底部は平底を呈するタイプの土器。(1類a, 3類)

という3タイプに分類することができた。

さて次に、第2群の施文具の種類と文様帯との関係については次のように、

- A) 横位施文の口縁部文様帯(上位文様帯)にも、縦位施文の胴部文様帯(下位文様帯)にも、貝殻を使用するタイプの土器(1類a, 1類b, 2類b)。
- B) 口縁部文様帯(上位文様帯)にはヘラ状工具を、胴部文様帯(下位文様帯)には貝殻を、施文具として使用するタイプの土器(2類a)。

C) 口縁部文様帯(上位文様帯)にはヘラ状工具を、胴部文様帯(下位文様帯)にはヘラ状工具と貝殻とを、施文具として併用するタイプの土器(3類)。

という3タイプに分けることができた。

さて南九州縄文早期土器編年から、「第1群→第2群→第3群」という編年観を基本とすると、器形的特徴からは1)タイプ→2)タイプ→3)タイプとなる。そこで上記の様相をまとめると、

(1A:2類b)→(2A:1類b)→(2B:2類a, 3A:1類a)→(3C:3類)

という型式組列を考えることができる。

### ⑫-2 第3群について

南九州縄文早期土器編年において、第2群の下剥峯式土器より新しく位置づけられている、第3群の桑ノ丸式土器に属する土器について若干の考察を記す。

さて、第3群の器形的特徴と本報告の土器分類とを比較すると、次のように、

- 4) 口縁形態は平口縁を呈し、口縁部が内湾し、口唇部は内傾する平坦面を作出し、底部は平底を呈し、胴部に移行するにしたがってかなりふくらみをもつタイプの土器(a類, c類)。
- 5) 口縁形態は平口縁を呈し、口唇部が内傾する平坦面を作出する、という基本的器形は共通するが、口縁部が内湾する土器の他に、外反する土器や直行する土器(b類)。

という2タイプに分類することができた。

さて次に、第3群の土器文様帯は口縁部から胴部にかけて単一文様帯である。

さらに、第3群の施文的特徴と本報告の土器分類とを比較すると、次のように、

D) 櫛歯状の羽状文や、流水状の文様を施す土器。

(a類, c類)

E) スタレ状の文様を施す土器(b類)。

という2タイプに分類することができた。

さらに、内器面調整の変化と本報告の土器分類とを比較すると、次のように、

- i) ミガキ調整あるいは、丁寧なナデ調整もしくは、ナデ調整が主流である土器(a類, c類)。



ii) ケズリ調整が主流である土器(b類)。  
という2タイプに分類することができた。

さて南九州縄文早期土器編年から、「第1群→第2群→第3群」という編年観を基本とし、さらに先に述べた第2群の様相と合わせると、5)タイプの土器が4)タイプの土器より古いとは考えにくく、器形的特徴からは4)タイプ→5)タイプとなる。そこで上記の様相をまとめると、

(4D i : a類, c類)→(5E ii : b類)  
という型式組列を考えることができる。

### ⑫-3 第4群について

中九州西部地域を中心に分布している円筒形条痕文土器の器形的特徴と本報告の土器分類とを比較すると、次のように、

- 1) 口縁部が外反し、胴部はわずかに膨らむ土器。  
(a類)
- 2) 口縁部から胴部にかけて直行する土器 (b類)。
- 3) 口縁部が内湾し、口唇部は内傾する土器(c類)。  
という3タイプに分類することができた。

さて次に、第4群の施文的特徴と本報告の土器分類とを比較すると、次のように、

- A) : 貝殻腹縁部で、まず縦位方向に条痕文を施した後に、横位方向に条痕文を巡らした土器 (a類)。
- B) : 貝腹腹縁部で、まず縦位方向に条痕文を施した後に、横位方向に押し引き文を施した土器。  
(b類, c類)。
- C) : 叉状工具を使用して、横位方向あるいは斜位方向に押し引いた土器 (b類)。  
という3タイプに分けることができた。

さて南九州縄文早期土器編年から、「第1群→第2群→第3群」という編年観を基本とすると、器形的特徴からは1)タイプ→2)タイプ→3)タイプとなる。そこで上記の様相をまとめると、  
(1A : a類)→(2B, 2C : b類)→(3B : c類)  
という型式組列を考えることができる。

### ⑫-4 押型土器様式について

さてこの項では、押型土器様式のうち、第5群(微細山形押型土器)、第6群(山形押型土器)、

第7群(楕円押型土器)に属する土器について若干の考察を記す。

まず、押型土器様式に属する土器型式と、貝殻文系円筒形土器様式に属する土器型式との間には、出土分布域に相関関係がある、ことが指摘できる。

すなわち、微細山形押型土器が集中して出土した地域は、下剥峯式土器や円筒形条痕文土器が集中して出土した地域と重なっていることが指摘できる。その一方で、山形押型土器や楕円押型土器が集中して出土した地域は、桑ノ丸式土器が集中して出土した地域と重なっている、ことが指摘できる。

ところで、この項で対象にしている押型土器の出土点数は、楕円押型土器を除くといずれも少ない。このことから、本遺跡の押型土器様式は客体的な存在であり、一過性の存在であったと、考えられる。楕円押型土器についても既に指摘したように5分類を行うことが可能である。とすると、1分類の出土点数は少なく、やはり客体的で一過性の存在であったと、考えられる。

そして先述したように、下剥峯式土器から桑ノ丸式土器へは、時間軸上で先後関係がある。

これらのことから、次の2点が指摘できる。

第1に、下剥峯式土器・微細押型土器の出土分布域が、桑ノ丸式土器・山形押型土器・楕円押型土器の出土分布域と異なる。このことは、下剥峯式土器と桑ノ丸式土器との間に先後関係があるように、押型土器の間にも第5群から第6・7群へという先後関係があることを示している。そして、当時の人々が生活した「場」が変遷したことがいえる。

第2に、本遺跡では主体的な存在である貝殻文系円筒形土器様式に属する土器型式に、客体的な存在である押型土器様式に属する土器型式が共伴していることがいえる。

さて、それでは押型土器様式に属する各土器型式の器形的特徴と施文的特徴を比較すると、以下のようになる。

まず、第5群に分類した微細山形押型土器の主な特徴を挙げると、

- ① 口縁が直行すること。
- ② 帯状施文が行われていること。
- ③ 内器面に原体条痕が施されていない

こと。の3点を指摘できる。

つぎに、第7群に分類した楕円押型文土器の主な特徴を挙げると、

- ① 直行口縁の器形で、外器面に横走する楕円押型文を施すが、器内面には文様を施さないタイプの土器（第7群1類）。
- ② 外反口縁の器形で、外器面には横走する楕円押型文を施し、内器面には口縁部内面上段に短い原体条痕を、下段に横走する楕円押型文を施すタイプの土器（第7群2類第1種土器）。
- ③ 外反口縁の器形で、外器面には横走する楕円押型文を施し、口縁部内面には長めの原体条痕を1段のみ施すタイプの土器（第7群2類第2種）。
- ④ 外反口縁の器形で、外器面には口縁部上段に無文帯を設け、下段に横走する楕円押型文を施し、口唇部上端や内器面には文様を施さないタイプの土器（第7群2類第3種）。
- ⑤ 外反口縁の器形で、外器面には縦走する楕円押型文を施し、口縁部内面には上段に横位の刺突連点文を施し、下段に横走する楕円押型文を施すタイプの土器（第7群3類）

という5タイプの土器群に分けることができた。

最後に、第6群土器に分類した山形押型文土器の主な特徴を挙げると、

- ① 外器面に横走の山形押型文を施し、稜を形成しない口縁部内面には上段に原体条痕を下段に横走の山形押型文を施すタイプの土器(第6群1類)。
- ② 外器面に横走の山形押型文を施し、稜を形成する口縁部内面には上段に刺突連点文を下段に横走の山形押型文を施すタイプの土器（第6群2類）。
- ③ 外器面に縦走の山形押型文を施し、稜を形成する口縁部内面および胴部内面には文様を施さないタイプの土器（第6群3類）。
- ④ 外器面に縦走の山形押型文を施し、稜を形成し

ない口縁部内面および胴部内面には文様を施さずに、口唇部に平坦面を形成するタイプの土器（第6群4類）。

という4タイプの土器群に分けることができた。

さて、本遺跡で出土した押型文土器の特徴を列挙したところ、器形的にも、施文方法的にも、較差が見られる。先述したようにこの較差は時間軸上の差である可能性が高い。

そこで、「第5群から第6・7群へ」の原則に従い、属性の変遷を考えると次の4点が考えられる。

- ① 口縁部の形態は、「直行口縁から外反口縁へ」
- ② 外反口縁の形態は、「外反度が低い土器から外反度が高い土器へ」
- ③ 外反口縁の内面形態は、「稜を形成しない土器から稜を形成する土器へ」
- ④ 外器面施文は、「横走から縦走へ」
- ⑤ 内器面施文は、「原体条痕が短い土器から原体条痕が長い土器へ」




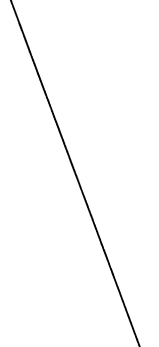

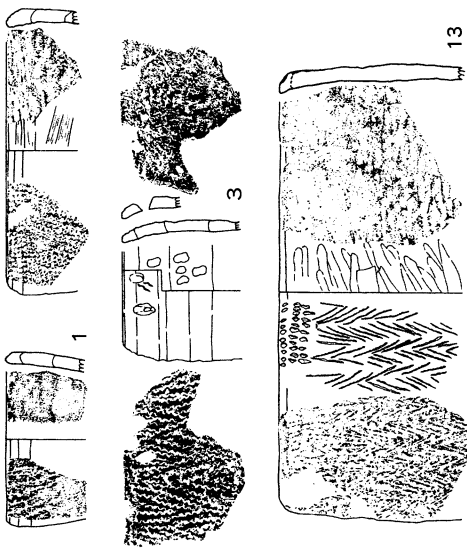
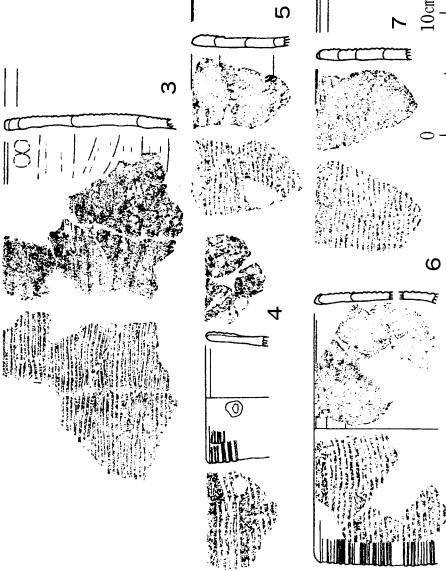
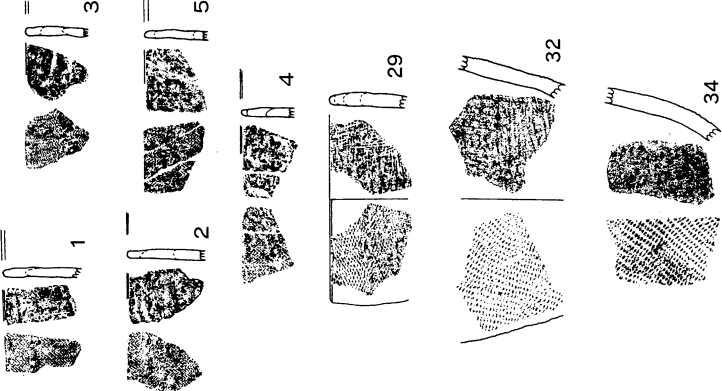
以上、①から⑤までの条件を満たすと次の⑥と⑦の条件が加えられる。

- ⑥ 内器面施文は、「施されない土器から施される土器へ、そして施されない土器へ」
  - ⑦ 内器面施文は、「原体条痕から刺突連点文へ」
- 上記の①から⑦までの条件を満たす変遷は次のようなA) からH) への変遷が考えられる。

- A) 第5群, 第7群1類
- B) 第6群1類, 第7群2類第1種
- C) 第7群2類第2種
- D) 第7群2類第3種
- E) 第6群2類
- F) 第7群3類
- G) 第6群3類
- H) 第6群4類

表化したものが下記の表である。

	口縁部形態			口縁部内面 稜の有無		外器面施文の方向		内面施文の有無			
	直行	外反(弱い)	外反(強い)	無	有	横走	縦走	無	有(短い原体条痕)	有(長い原体条痕)	有(刺突連点文)
A) タイプ	○			○		○		○			
B) タイプ		○		○		○			○		
C) タイプ		○		○		○				○	
D) タイプ			○	○		○		○			
E) タイプ			○		○	○					○
F) タイプ			○		○		○				○
G) タイプ			○		○		○	○			
H) タイプ		○		○			○	○			

	貝殼文系凹筒形土器樣式	凹筒形条痕文土器	押型文土器樣式
I 期	<p>(石版式土器)</p> 		
II 期			
III 期	<p>(下剥落式土器)</p> 		

第 117 図 上野原遺跡第 10 地点縄文早期中葉土器編年案 (1)

IV 期				押型文土器様式
V 期				押型文土器様式
	貝殻文系円筒形土器様式	円筒形条痕文土器		押型文土器様式

第 118 図 上野原遺跡第 10 地点縄文早期中葉土器編年案 (2)

## ⑫-5 まとめ (第117・118図)

この小結では、第2群・第3群・第4群・第5群・第6群・第7群に属する土器の器形的特徴や施文の特徴などを検討することで、各群の型式組列を考え、それぞれ試案を提出することができた。

それらをまとめたのが、上野原遺跡第10地点縄文早期中葉土器編年案 (第117図, 第118図) である。

各時期を概観すると次のようになる。

### 【I期】

貝殻文系円筒形土器様式では、第1群石坂式土器 (ないしは石坂式新段階) に分類した土器を基準とする時期である。器形的特徴の類似性から、口縁部が外反する円筒形条痕文土器が相伴したと考える。しかし、両型式の土器とも出土点数は少なく、本遺跡での生活は非常に小規模であったと思われる。

### 【II期】

第2群 (下剥峯式土器) 2類bに分類した、波状口縁を呈する土器を基準とする時期である。他の系列には該当する土器が無く、I期と同様に非常に小規模な生活が行われていたようである。

### 【III期】

貝殻文系円筒形土器様式では、第2群1類bや第2群2類aに分類した土器を基準とする時期である。これらの土器は、口縁上端部のみが若干内湾する以外は、口縁部はほぼ直行する土器である。この器形的特徴に注目すると、円筒形条痕文土器では第4群b類が該当する。施文の特徴においても縦位方向の施文と横位方向の施文とを意識している点も共通している。また、押型文土器様式ではA) タイプに属する土器を位置づけることができる。

第2群1類bや第2群2類aなどに分類した土器は、上野原遺跡第10地点で出土した下剥峯式土器の範疇では主体となる時期である。このことから上野原遺跡第10地点におけるIII期は、縄文早期中葉の時期ではピークをなす時期といえる。

### 【IV期】

貝殻文系円筒形土器様式では、第2群1類aや第2群3類に分類した土器から、第3群 (桑ノ丸式土器) a類, c類に分類した土器にかけてを基準とする時期である。これらの土器は、口縁部が若干内湾

して、口唇部は水平な平坦面あるいは内傾する平坦面を作出する土器である。下剥峯式土器に属する土器をIV期前半に、桑ノ丸式土器に属する土器をIV期後半に分けることができる。この器形的特徴の類似性から

円筒形条痕文土器では第4群c類が該当する。

さてこの時期に属すると考えられる押型文土器は、⑫-4で考察したように

B) タイプ (第6群1類, 第7群2類第1種)

→C) タイプ (第7群2類第2種)

→D) タイプ (第7群2類第3種)

→E) タイプ (第6群2類)

→F) タイプ (第7群3類)

→G) タイプ (第6群3類)

というタイプの変遷を位置づけることができる。

早期中葉の時期全体から見るとこれらの土器の出土量は中程度であり、上野原遺跡第10地点での生活も、中規模であったと言える。

なお上野原遺跡では、他地点でこの時期の遺物が多数出土している。したがって、上野原遺跡において当該期の人々がどのような生活を営んだかは、他地点の報告を待つて再度考察を行う必要がある。

### 【V期】

貝殻文系円筒形土器様式では、第3群b類に分類した土器を基準とする時期である。これらの土器は、口唇部が内傾する平坦面を作出する土器で、口縁部が内湾する土器の他に、外反する土器や直行する土器が見られる。施文の特徴ではスダレ状の文様を施す土器である。また内器面調整はケズリ調整が主流であった。この器形的特徴および施文の特徴に注目すると、押型文土器様式では第6群4類が該当する。

両型式の土器とも出土点数は少なく、本遺跡での生活は非常に小規模であったと思われる。

ここまで上野原遺跡第10地点における土器の編年観に基づいて、人々の生活がどのように変遷したかを概観した。最後に今後の問題点を指摘してまとめとする。

最大の問題点は、土器編年上で次の時期に位置づ

けられている「手向山式土器」と【V期】との関係である。本遺跡でV期に位置づけた第6群4類土器や第3群b類土器と、手向山式土器との間には、器形的特徴からも、施文の特徴からも、型式学的な距離が有りすぎるのである。

ところが、第5分冊で指摘していくことではあるが、縄文早期中葉末から早期後葉の時期にあたる、手向山式土器から妙見・天道ヶ尾式土器そして平楯式土器へという、土器型式学的に非常に滑らかな変遷が、上野原遺跡第10地点では観察できる状況にある。つまり、この時期に上野原遺跡第10地点において人々は、連綿と繁栄した大規模な生活を送っていたことを明らかにできる。

その中で、前段階とでも言うような「手向山式土器前夜」の時期に、上野原遺跡第10地点では全くの空白期間を迎えるのである。その理由は何か。

このことは、「手向山式土器」成立の問題と含め、将来的な課題として提起して、本分冊を閉じることとする。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(28)

国分上野原テクノパーク第3工区造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(II)

## 上野原遺跡(第10地点)(第4分冊)

発行日 平成13年3月31日

発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
〒899-5652 鹿児島県始良郡始良町平松6252番地  
☎(0995) 65-8787

印刷所 濱島印刷株式会社  
〒890-0052 鹿児島市上之園町17-2  
☎(代) (099) 255-6121

